

幻のバージョン

『鳥からのごとくして(完全編)』

安溪遊地・安溪貴子編

目次

はじめに

一、ある日本の島で

される側の声 聞き書き・調査地被害

対談1 はるかな島へ

二、南島の人と自然

カシの木に救われる 西表島祖納・新盛浪さん

木にもいのちがある 西表島祖納・松山忠夫さん

南のはて波照間島から 西表島崎山・川平永美さん

対談2 フィールドワークのスタイル

三、橋をかける

お金がいらなかったあの頃 沖縄県宮古郡多良間島と水納島の方々

木のない島の家づくり 与論島麦屋・佐藤為宜志さん

屋久島へ魚を捕りに 南種子町下立石・立石助也さん

種子島への魚の行商 上屋久町一湊・斉藤熊彦さん

小さい時から牛や馬が好き 上屋久町楯川・日高長八さんと日高甚七さん

対談3 アフリカへ、そして再び南島へ

四、海をこえる絆

屋久島の白川山に住まないか トカラ列島中之島・松田武彦さん

島々を結ぶオヤコ トカラ列島中之島・日高貞矩さん

嫁にいくなら島間の町に 南種子町島間の方々

対談4 島からこそ世界が見える

五、地の者として

おじいちゃんの民宿 南種子町平野・日高留哉さん

探しあてた縄文杉 上屋久町宮之浦・岩川貞次さん

心の深いところをたずねれば 屋久町原・日高光志さん

屋久島の地名に思う 屋久町原・日高光志さん

対談5 「建設を続けよ」 伊谷純一郎先生の言葉

六、手わざの世界

屋久島最後の鍛冶屋として 上屋久町宮之浦・永野憲一さん
今日の仕事に満足するな 上屋久町宮之浦・永野憲一さん
屋久島の木で種子島の舟をつくる 上屋久町楠川・河野胤重さん
食べ物は何でも自分でつくっていた 上屋久町永田・牧一徳さんとハル工さん
対談6 経験の広がり

七、見えない世界

おはなしがごちそう 上屋久町宮之浦・中島キヨさんと本溜ケサさん
野も山も海も川も神々の住い 上屋久町宮之浦・中島キヨさんと本溜ケサさん
小さい花に生まれない 上屋久町楠川・大石浩さん
「欲ではありませんが」 屋久島の祈りのことば
対談7 未来へ

あとがき

初出一覧

引用文献

事項索引

はじめに

一九七四年に初めて沖縄県・西表（いりおもて）島を訪問して以来、私たちは機会あることに台湾と九州の間につらなる島々を訪問し続けてきました。この本は、そんな旅の中でめぐりあった方々が、これだけは伝えたいという気持ちで語ってくださいましたお話の聞き書きです。尋ねたいことが先にあって「聞き出す」のではなく、世間話のようにしてなげなく語られた言葉。それがしだいに暮らしの中で重みを増してくる……。その時、あれは島から私たちへのことづてだったのだと気づきます。そんな経験を読者のみなさんと共有できたらと願っています。現場でメモしたフィールドノート（野帖）からの抜粋もあり、カセットに録音したものもあります。ほとんどの聞き書きは屋久島からの情報発信をめざして発刊されている雑誌『季刊生命（せいめい）の島』に連載したものです。文化人類学の学会誌『民族学研究』と東北発の木の雑誌『季刊シルバン』に掲載したのからそれぞれ一篇ずつを加えました。

お話の内容は、話し手ごとにまとまっていますから、どなたの記事から読んでいただいても差し支えありません。章ごとに、掲載記事の内容に関して、あるいはそれに触発されて、いま私たちが考えていることを紹介する言葉を対談の形で付け加えました。対談は、私たちが伊谷純一郎先生（当時京都大学）という希有の師匠に導かれて、フィールドワーク（野外調査）と地域研究を進めていった道

筋がたどれるように展開しました。私たちがいかにしてこういっ話を共感をもって聞くようになり、それによって深い影響を受けてきたかを汲み取っていただければ幸いです。

はじめに

宮本常一先生が「調査地被害」(一九七二)を発表されて以来、長い歳月が流れている。しかし、残念なことに としかいいようはないが いまだにその内容は色あせたものにはなっていないようである。

そして、宮本先生の書かれたものを含めて、調査をされる側の生の声が、そのまま紹介されているものとしては、泉(一九六九)などがあるが、それほど多くないようだ。おそらく、筆をとるためには、被害者の生の声を投げかけられたという痛みに直面しなければならぬからではあるまいか。

私も、最近、日本のある島で自分の研究のありかた というより生き方そのもの、といった方が正確だろう について激しく叱られるという経験をもった。その出あいのもたらした衝撃を「聞き書き」という形でフィールドワークに関心を寄せる皆さんにもお届けしたい。私が聞いたことは、この島だけの特殊事情ではなく、日本の各地のどこでも、昔も今も起こっていることなのではあるまいか。これが、この聞き書きを発表するにあたって島の名前を伏せても充分公表する意義があると判断した理由である。

家族とともに出かけたその短い旅でP夫さんとP子さんに会った(Pはプライバシーの略である)。P夫さんは、研究や調査に島を訪れる人たちの世話を長年にわたってしてこられた。P夫さんの親戚だというP子さんは、島の民俗などを調べようという意欲をもつ方である。年齢はお二人とも不惑にはまだ間があるとお見受けした。

言うまでもないことであるが、小文の目的は、この島に数々の調査地被害を与えてきた特定の研究者たちを糾弾・追及することにはない。この島に調査地被害を与えたとして登場する研究者はいったい誰であるのかと詮索を試みるような読み方がなされるならば、それは、聞き書きの公表を承諾されたお二人の願いから遠くはずれた読み方となるであろう。お二人は、過去と現在の過ちが今後は繰り返されないことを願って話されたのであるから。

人間が人間を「調査する」ことが産み出す悲しい現実。そのわびしい風景と、そのかなたにあるものについて、これからフィールド・ワークをめざす方々に少しでも認識を深めていただくことを願って、あえて筆をとった。ひとりひとりのフィールド・ワーカーがいかにしてこのような調査地被害という現実を乗り越えられるのかを真剣に自問し、模索することができる否か。そこに目をつむれば、輝かしい成果は、多くの場合、同時にきわめて恥かしい成果とならざるを得ないし、今、大きな危機に直面している、人間を研究の対象とする野外諸科学の再生は不可能であろう。

歯に衣をきせず率直な意見をお聞かせ下さったお二人を始め、島に滞在中にお世話になった多くの方々に深く感謝するしだいである。

とっても非常識な大学の先生がいる

P夫　とっても非常識なことをやる大学の先生がいるんだ。ある日、大学の先生を案内して、あるじいちゃんの家に入った。「今、「都合よろしいですか？こついう仕事できたんですが、話を聞かせてもらえませんか」とあいさつしたわけよ。そしたらちゃんが、僕に「P夫、おまえ、目が見えないのか！？」って言ったわけさ。その時、じいちゃんは、一生懸命竹かごを編んでたわけよ。仕方がないから「はい、見えます」と返事した（笑い）。「それじゃあ、今自分は何をしているか？」と畳みかけられたので「かごを編んでいますね」と言ったよ。そしたら「これを編み終わるまで、あんたたちは、そこに立つておくのか？」というから、「手を休めてちよっと相手してくれませんか？」と聞いてみた。ところが「いや、今日はこれを間に合わせんといかんから、駄目だ。明日ならいくらでも相手してあげるから、明日いらっしやい」といわれたわけさ。

僕は、「先生、じいちゃんがそう言ってますから、明日出直しましょう」といって帰ろうとしたんだけどさ、この先生ときたら「はいはい」といいながら、つかつかつかと家の中に入っていて、床の間の額の写真をパチパチ撮り出すんだよ。それを見たじいちゃんは怒りだし、僕も頭に来た。

それで、「私はあなたとはおつきあいできません。あなたはあなたなりに調査してください。明日からいっさい私と私の勤務先の名前を騙らんでください」といって別れた。それっきりつきあいがないうよ、あの人とは。

P子　私も、この時たまたま大学の先生の調査の仕方を勉強しようとしていっていたのよ。それがとんでもない人だったのね。だいたい仕事だったら、何やってもいいというのかしらねえ？

P夫　そうそう、この間、考古学の発掘のアルバイトに来ていた学生が、仕事を終わって、「宿題やらせてください」というんだよ。すごく、あたふたと聞き取りをしてみた。きいて見たら、あの非常識な先生の授業のレポートだって。学生にそうやって集めさせた資料をつづり合わせたものを、自分の論文として発表してるらしいね、あの人は。

P子　そんなのが、学者先生の御研究としてまかり通っていくんだからねえ。

先生は地元の人間として恥かしくないですか

P夫　それから、あのグループもひどかったな。

P子　何の研究？文化の調査の？

P夫　Q先生。ほら、国の金で方言調査するってスクラムくんに来てたあれさ。

P子　ウエツ！ヘドが出るっ。

P夫　まず、調査の依頼の仕方がおかしいわけ。こんな調査のやり方でやりたいとQ先生が言っているという電話が昔から知り合いの別の若い先生から来た。聞いてみるとお年寄りをひとところに集めて長時間の聞き取り調査をしたいという。そんな調査の仕方はひどいんじゃないの、といって僕はお世話をすることは断った。

そしたら、こんどは、町長によばれた。知事部局から電話があって、話をまとめてくれときている

という。さっきの若い先生に「私が断ったらあなたは困った立場になるの」と聞いてたら、「いや、あなたのいいようにして下さい」といわれたけれども、断ったら、その先生の立場どころか、町長の立場までおかしくなりそうだった。

それで仕方なくひきつけたんだけど、その調査法ときたら、大勢のお年寄りを朝の八時から夕方六時まで、体育館に缶詰めにして聞き取りをやるわけさ。

P子 もう、気違い沙汰よ。だってね、ばあちゃんが、方言の単語を聞かれて、緊張もしているし、すぐには出てこないの、「うちの小さい時は」と話しはじめた。年寄りが自分の心の整理をしながら話すわけよ。そしたら「あなたの小さい時の事はいいから、このことはなんていうんですか?」って。私は言ってやったわ。「そういう質問するなんて、本当にバカだなあ、あなたは」もう腹がたつて、この日一日協力しただけで、すぐやめたの。

P夫 僕は、仕事だから、がまんして調査につきあった。やっと終わって、僕はQ先生に頼んだよ。「報告書ができたら、どうか地域の学校に一冊ずつ寄贈してください」とね。そしたら、「とても高くなるから、教育委員会に一冊だけ」という返事だった。まったくあの人は、顔も見たくないな。調査の終わりが、調査隊員のうち、県出身の先生がたは、いい人たちだったんで一緒に飲みに行つた。そこで、したたか文句いったよ。「先生なんかは、地元の人間として恥かしくないですか、こういうふうな非人間的な扱いを受けて。それで調査は成功したと思っっていますか」といって。

P子 返事はどうだったの?

P夫 「はいはい。わかりました」としかいわんよ。

P子 きのうの晩、せつかくの私の説教を酔っ払って聞いてたアンケイ先生と同じよ。みんな口だけよ。翌日になったら一番肝心のことを忘れたなんていう、うそつきよ。

P夫 アンケイさん、風向きが悪くなってきたみたいよ。そろそろマイクのスイッチ切った方がいいんじゃない。

私は、言われるままに録音機のスイッチを切り、昨晚のP子さんのお説教を二日酔いの頭のかから呼び起こそうと努めてみた。

もし人が滅びるならば学問で滅びる

あなたは何をやる人?学問する人みたいだけど……。

私は、人としての気持をもっている人間とは、初対面でもえんえんと話をするのよ。

これは、私(P子)のばあちゃんの口癖だったんだけど、「学問というのは尊いもの。これからの世の中は、もし人が救われるなら学問で救われる。滅びるならば、学問で滅びる。だから正しい学問を子供にさせなさい」と、いつも繰り返かえし言われたわ。

この島に来る学者、研究者というものは、どうしてこうなのかしら。私が、本格的に自分の島の民俗や方言の勉強をするようになってもう二〇年以上たつわ。学者先生がたの調査というものについて

は、二〇年来のぐちがたくさんあるのよ。どうお、聞いてみる気はある？……そう、聞く気があるのなら言わせてもらおうわね。私の心のあらわれの言葉だから、じっくり聞いてちょうだい。

学生や学者が島から物を取って行く

かりに三〇年つきあっても、この人はだめ、という人もいる。学者でも、写真家でも、画家にしたって、記者にしたって、身を取らせて骨を抜いて行くという人がいっぱいいるわけ。そういう類の人いっぱいいるのよ。この島にくるなかで。

もつとはつきりしてるのは、物を取って行くこと。墓荒しが一番ひどかったけれども、学生や学者がきて、墓を荒して中にある物を取って行く。古い墓には、鎧や兜などの武士の装束があったけれども、それも、いつのまにかみんななくなっている。役所につとめている人が、あるグループの大きな手荷物を見て、これはあやしいとらんだことがあった。職権で開けさせたら、案の定、つばなんかの盗んだ骨董品がぎっしり入っていた、ということも実際にあったわね。

借用・盗用・しらんぷり

しさんという先生がいたわ。あの人、覚えてるかな。私がまとめた、祭のレポートや、島の精神構造なんかについて私が書いたものを、コピーするからちょっと貸してくださいといって、風呂敷包み一杯ほど、もって行ったつきり。もし、まとめられたら島に返してくれるともいっていたなあ。あれから、もう一五年くらいになるかしら。何年か前に遠いところへ転動したらしいけど、しらせてもよこさないわ。

子供の話を書いたことがあったわ。これのある研究者に見せたら、貸してくれというのよ。そのかわり、私にも勉強させてくださいな、と頼んでみたの。そしたら、文章のくみたて方を教えてあげるというから、原稿を渡した。結局は何も教えてくれないでそのまんまよ。

ある時、友達から、私の書いたレポートがほとんどそのまま、無断で雑誌に載せられていると教えられたこともあったわ。でも、そんなのは見るのもいやだから、忘れることにしているの。

ほとんどそっくり持っていて、こっちに一番帰ってきてほしいな、と思ってるのは、Xさんの資料よね。丸一日ホテルでかんづめ状態になって、びっちりしゃべった。主に心のことについて、自分のプライベートのことまでみんなしゃべったのよ。他人のことは、迷惑がかからないように、名前を伏せてしゃべったわ。

実は、それまで書いたものを、私のミスからすべて失った直後だったので、思い出してしゃべれるだけしゃべり、なんとか記録してもらおうという気になったのよ。家族は、あんなものに協力してなんになるの、と私を非難したわ。

あの人、とても喜んで、文字化したときには私に送ると言ったのよ、このXさんという人は。ところが、その後、この人から来たのは、住所なし、あいさつだけの葉書一枚。卑怯なことに自分の連絡先を一切教えない。私たちはとても悲しくてくやししい気持ですごしているよ。せめて、あのテープだ

けでもダビングして返してほしい。今の私には、あれだけのことを話す力がないんだから。

写真家でV子さんという人もいたわ。祭の時に、あるばあちゃんの家であった。当時、知らない人には、お膳をつけてくれなかった。私がついていくと、待遇が違う。私は、祭の記録をとるために、写真を撮りながら、集音マイクで音をとろうとしたの。とてもひとりではできないので、V子さんを連れてきて、長いお祭りの中で意味のある部分を合図して写真とってもらったの。これは、初めての人にはなかなか分からないことなんで、V子さんとても喜んでたわ。

当時、カラー写真の保存は大変だったでしょう。私が撮った写真を見て、V子さんが、外に置いておいてはいけない、保管する専用の入れ物があるというのよ。二、三年の猶予をもらえれば、ネガから整理しなおしてあげる、と親切にいわれたので、みかん箱ひとつ分ほどのネガを預けたわ。その後なしのついでで、それっきりなんにもない。私もうかつだったわよ。住所も聞いてないし、姓さえ書き留めてない。あのV子さん、そんなに悪い人じゃなかったけどなあ。急病にでもなつて亡くなつたんじゃないかな。

こんなことを話していると、おかしくなるでしょう。私って資料なくすのが上手だと思つたなあ。今から、あれだけのことを調べろっていても、もう私は、とてもやり切れないと思うの。どうして次々にこうなるのかしら。念には念を入れて、「じゃあ、あなたの言葉を信じましょう」といって、原稿や資料を渡すけど、誰ひとりやつてくれなかった。連絡もくれなかった。

いきなり「調査」といわれても困る

物とりや嘘つきでなくて、堂々と胸はつて来る先生方も多い。

これこれの調査に来ました、とりっぱな肩書の名刺を出されるわね。自己紹介することも大事でしょうけど、なんとか研究所の調査について、そもそもそのなんとか研究所を知らないし、その調査がいったい何になるのかを島の人間がわかるように前もって言ってもらわないと……。学問的すぎて島の人間には説明しきれないこともあるかもしれない。人間のやっつてることだから、やむにやまれずやっつていることもあるかもしれない。でも、納得いかないのに協力せえ、と言われても、それは無理よ。

島の人間は、特にお年寄りというものは、あらたまつて話すことに慣れていないでしょ。標準語で話すことにも慣れていないわね。そして、テープレコーダなんかの機械にも慣れていない。だから、そのへんのことをよく考えてつきあってほしい。少なくとも、前の日から心の準備ができるような形で、ゆとりをもつてやつてくれないと困る。

人としての心をもつて聞いて

それから、だれでもそうでしょうけど、お年寄りというのは、聞かれたときに、聞かれたことだけでなく、自分の感想、気持ちを付け加えていくというのが、必ずつきまのなわけよね。その時に、「ああ、そうですか、ばあちゃん痛かったですよねー！」とそついつぶつに相槌をうつて、人としての心

をもって聞いてくれるといいんだけど……。実際には、そうじゃなくて、「いや、それはどうでもいいので、質問に答えなさい」というようなものの言い方をする人がいる。これは大きな問題。話手の心のあらわれの言葉というものをちゃんと聞いてほしい。そしてうまくしゃべれるようにしてほしい。こういう点への配慮がない研究者がいるのは本当に困りもの。

先生方に話せば話すほど徳が下がっていく

神職の女の方が、こういわれたそうよ。「島の外からいらっしやる先生方に、問われるままにいろいろお話しをします。質問のために協力すべきだとは思っているんだけど、話せば話すほど、なんだか自分の『徳』というものが下がっていくような気がして仕方がないんです。」

これは、神女のばあちゃんの徳が下がっているのではないのよ。私たち島の間人は行事の時に神女が神様の着物を身につけていらしやるときには、面とむかって顔をまっすぐ見るといつようなことはありません。平生の時でもまちがっても暴力を振るうなどということはけっしてしない。どんなときでも、自然に敬いの気持をこめて接しているということなんですよ。ところが、他所から来た学者先生は、神女といってもただの「情報提供者」としてしか見ないことが多い。それで、こういう先生方と接することが増えるほど、なんだか徳が下がっていくような気持になる、ということだと思っの。結局は、地元の神様に対する敬いの気持のある人となない人の違いということになっていくでしょうけど、お互いに人として敬いあわない人に出くわしたときには、いつでもどこでも起こることじゃないの。

こんなふうに、調査の弊害というのは、ただ「持ち出された」というだけじゃない。知らないうちに蝕まれたものが、私たちの心の中にできているわけよ。

ここに今生きている人の暮らしを大切に

まとめ方の問題だけど、話し手が一部についてあてはまる話をしているのに、それを全体に通用することだとして書いてしまう研究者がいるのよね。それと、話し手が話している範囲をちゃんと捉えてほしい。例えばこの種類の特別の織物は、「ずうっと昔から作っていますよ」とお年寄りが言ったとしても、それが六〇〇年も以前からの話であるはずはないので、せいぜい一〇〇年程度のものにするにすぎない、という当たり前のことがわからない。そういうことがちゃんとしていない調査者がいることは大問題ね。結局は、何度も来て、よく確かめてそれを書くという基本が守られれば、こんな馬鹿なことは起きないはずだと思うわ。

それから、「ここは、とっても大切なことなので、落とさないでくださいよ」とたのんでも、そこを落としてしまう。何回言っても、そこが落ちてしまう。それが不思議なの。ここに今生きている人の暮らしを大切に調査する、という立場にたてば、そんなこと起こりっこないわよ。そういうふうにとりくんでくれる研究者も、少ないけれどもいいわけじゃないのね。

調査隊にお願いしたいことは、人として関わった以上は、人として関わり続けてほしいということ。

人としての好意を示してほしい。それがないから、話した人としては何か寂しくなるのよのね。繰返しになるけれど、人としての心がほしい。

研究結果の値打ちを教える努力を

調査が終わったら、必ず報告したものを送ってほしい。これは、最低限のことよ。まあ、最近は何と違ってだいぶよくなってきたわね。でも、とくに、話してる人が高齢者の場合、でき上がった資料を、「はい、できあがりしました、お送りします」という、これだけでは、寂しいとおもう。本当は、「あなたにきいた話は、こういうふうに変換してまとまりました。これには、こういう大事な意味があるんですよ。ご協力ありがとうございました」とそういう形でもって来てくれるのであれば、本をもらって試してみてもいいわね。だから、大きな報告書ももらっても、島の人にそれをひとつひとつ全部読む気力は、まずないわよ。だから、そこまでの努力をしてくれないといけないと思う。だけど、そこまでちゃんとやれている例はほとんどない。そこまで言われちゃ、もう手が回らない、というかもしれないけれど、話した側に見れば、訳わからんよ。

あの人は私たちを実験台にしている

でも、研究の結果が実用に結びつくと、怖いことになることがあるわねえ。今、この町が実現へ向けて取り組んでいるZ先生の青写真には、私は真つ向つから反対。あの膨大な都市計画、膨大な経済計画というのはちゃんとした研究から出てきたのかもしれないけれど、あの人は私たちを実験台にしている。地域を自分の学説を実証する手段に使っていると思う。これは、あくまでも私の見方だけども……。

学者のいうことを鵜のみにして、「ごもつと」と乗っかっちゃいけないって私は言いたい。私たち、同じ島にすむ人たちに、「もうちょっと私たち賢くなるべきよ」といいたいの。失敗したってあの人は責任とらないんだから。研究の費用はどこから出てくる。国とか県とか。やってる人にとって、あれは学問という名の単なる趣味だと思ふの。責任ないもの。でも私たちここに住んでる人には責任を感じてほしい。人生八〇年になっただけ、あと八〇年後を考えて進めてほしい。

あなたも、最近、どこかの島で、「無農薬米の産直で地域おこし」とか言ってるらしいけど、島の間が独力でできるように育てていかなきゃだめだよ。今みたいな、船をひっぱって岩の間の山道を通すようなやり方が長続きすると思ふのは、あなたの思い上がりじゃないかしら。無理に無理を重ねて家族を泣かすような学問が何になるの。

よく考えてね。よそから持ってきた知恵や文化で、地域が本当に生き延びられるわけがないのだということ。

勉強を助けてくれる研究者もいる

私が始めのころに提供した資料は、ひとつも来ていないけれども、最近はずっと連続して調査し

てくれている大学や研究所があるの。そういう場合は、そこに次々に納めるといふかたちで整理されていくだろうから、島の人間だっていざとなれば、そこに見に行くということも理屈の上ではできないわけではないわね。

研究者のなかには、調査としては事実はかなり接近している人もいる。とてもいい調査してたカッブルもあるわよ。それから、島の人間が勉強することを励まして、助けてくれる先生も数は少ないけどいるわ。

島の人間としての反省

これは、島の人間としての反省。今から一八年前に、伝統芸能の研究にいらしゃった人がいて、どうしてもその芸能を復活してやってみせてほしい、としつこく頼まれたことがあったの。それで、すでに出演の全員はそろわない状態になっていたのを、若いひとをかき集めて教え込んで、それを再現して、フィルムに取ったのよ。先生は、大変喜ばれて「この足の踏み方というものは、六〇〇年前の足の踏み方と共通するものがあって、非常に古風をよく残しています。大変学術的な価値が高いものです」とおっしゃったわ。しばらくして、報告書といっしょにその撮ったフィルムを送ってくださったんだけど、島に帰ってきたフィルムを受け取った人が、それがどれだけ大切なものかわからないうちに、今ではどこへ行ったかわからなくなってしまっているわけ。こういうことは、地元側の大きな反省点だと思う。

私自身も、子供の世話しながらではビデオが撮れないっていうので、人を頼んで撮ってきてもらったことがあるの。それなのに、一度もちゃんと見ないうちにビデオテープにかびを生やしてしまった。ドジな話。

それから、これはこの島に限った話じゃなくて、まあ一般論だけれど、地元の人間にも問題のある人もいないわけじゃない。いろいろ調査されたり、それに協力したりするうちに、しつたかぶりの語り部というのがでてくるのね。中途はんばにしか知らないのに、もう全部知っているようなつもりで話す人がいるわけ。「私は、この部分は知りません」と言うことを知らない語り手。これは自分しか知らないことなんだ、という伝承の私物化みたいな意識さえ生ずることがあるのよ。こういう人の存在が、時として誠実な調査を妨げる場合もある。それを正しく見分けるのが学問の目だと思うの。だからといって、「あなたは、物を知らない」というようなことを言って、相手を傷つける接し方だけは絶対にして欲しくない。

人であることを忘れるなよ

だれにも、思わずやったことが、はたから見るとすごいわがままになってるってことは、こりゃあるわ、人間だもの。だけど、冷静によく考えた上でやっているわがまま、こんな理性のあるわがままは、許されるものじゃない。誠意さえあれば良いと思ってる人もいるみたいだけど、自分に誠意があるから、すべて意のままに通ると思つのは、きつたない甘えさ。そんな奴は、この島に二度と来られ

ない状況にしてやるわ。あんたも、いつでも、どこでも、人であることを忘れるなよう。

島の外からやってくる、人間としての自覚のない人たち、誠意だけはあるけれどそれが甘えになっ
てしまっている人たちに、私もずいぶん泣かされてきたわ。けれど、私の涙はわたしひとりの涙じゃ
ないのよ。この島の人たちは、海も山も川も、岩も木も鳥も魚もすべてのものを、神のやどるものと
して大切に生きてきている。そういう気持をわかってほしい。だから、私の涙は、人間だけじゃなくて、
すべての命あるもの、何千何億の声なのよ。そうした小さな痛み、叫び声を大切にできない人にいっ
たい何が大切にできる？

あなたには、今、世界中から響いてくるその声が聞えるかな。

(安溪遊地執筆)

対談1 はるかな島へ

安溪遊地 初めて西表島に向かった時、何を感じた？ 抜けるような青空の下で、小さな連絡船のデ
ッキに立つと、はるかな水平線に接する所だけに白い小さな雲がたくさん並んでいるのが見えた。雪
国生まれの僕は、南の海へのあこがれに胸がわくわくするような気持ちがあった。

安溪貴子 先に西表島に着いたあなたからもらった電話の音が、とても微かで、はるかなトンネル
の向うから響いてくるようだったから、とんでもなく遠い所のような気がしていた。

遊地 港から四キロほどの村まで、トラックの荷台に載せてもらって、濃緑の風を切って進んで行
く時の、これから何が始まるんだろう、という高揚した感じもよく覚えている。

貴子 それと、あの海の色！……夜、泊めてもらった家で、何かがキョキョキョキョッって大きな
声で鳴いて、びっくりしたけれど、あれはホオグロヤモリが鳴いていたのね。朝起きた時に、真っ青
な空に濃い緑の木々の梢がとても印象的だった。なんか激しさを感じる緑色。そして自然の魅力にも
増して、お会いした人たちが印象的だった。

出合った人々

遊地 僕は、京都大学の大学院に入ったばかりで、ニホンザルやチンパンジーの研究で有名だった

伊谷純一郎先生についてアフリカに行つて、人間の研究をするつもりだった。ところが、先生は「君の行くところは、ひとつしかない」とおっしゃった。「それは、西表島の鹿川（かのかわ）村。地図には載つてない廃村や」とのこと。でも廃村なら、すぐ近くの京都の北山にいくつもあるじゃないですか、と先生に切り返したら、「あんな、人類学のフィールド（調査地）は遠ければ遠いほどいいんや」といわれた。二、三日考えさせてもらったけれど、いい智慧が湧くわけもなく、結局先生の言うとおり西表島に行くことになった。あとから考えてみると、異文化を鏡にして自分の姿がよく見えるようになるという、文化人類学の考え方がその根底にあった。まずは、なるべく違いの大きい異なる文化という大きな鏡に自分を照してみろ、という指導だったんだろう。

貴子 伊谷先生は、西表島に行ったら、まず石垣金星（きんせい）さんという人に挨拶に行くように言われた。

遊地 ちょうど、食堂で食事中の金星さんを捜し当てて、挨拶をしてから、方言で生き物の名前は何と言つんですかとかいろいろと尋ねていたら、五分もたたないうちに、いきなり頭上で大声がした。「フリムン！」これはまあ、馬鹿者というような意味だったんだけれど、見上げたら食堂のおばさんで、「そんなに次々に訊いたら、この人はご飯が食べられんでしょう！ちょっとは考えなさい」って。これが僕のフィールドでの叱られはじめ。

貴子 金星さんのおうちには、私たちと同じくらいの年かっこの若い男の人たちが昼間から何人もごろ寝していて……。昼はコーヒー、夜は泡盛、合間にインスタントラーメンという生活だった。

遊地 みんなリターン組で、まだ仕事もなくて、学校の先生をしていた先輩の金星さんの家がたまり場になっていた。僕もさっそく仲間入りをさせてもらった。

貴子 そうしたら、若者組の仲間が訊いてくる。
遊地 そう、「おまえ、何しにきた？」って。こっちは、天真爛漫に「人類学の調査だけど」と答えたわけ。そうしたら、にやりとして「何、調査だ？バカセなら毎年何十人も来るぞ」と言われた。

バカセという言葉は僕の辞書にはなかったけれど、研究至上主義の威張り屋という意味はすぐにわかった。でも、これが駆け出しのフィールドワーカーを育成してやるうという本当の優しさだったと気づくのには何年もかかった。イリオモテヤマネコが「発見」されてからというもの、調査隊がいくつも押し寄せて、地元としては迷惑している面が大きいということだった（安溪遊地、一九九二a）。

貴子 あのころは、虫採りのタモ網をもっている人が多くて、研究者であるうと、お金目当ての人であるうと、そういう他所者をにらみつけながら歩く若者たちに案内してもらったから、ついこっちも虫採り網をもつ人を睨んだりして……

遊地 自分が睨まれる側だっということをいつの間にか忘れていた（笑い）。

貴子 そのあと、廃村からの帰り、迎えの舟が来なくて、川が満潮で渡れないので仕方なく雨のマンングロープの中でテントを張って寝ていたら、猛烈な羽虫が襲ってきたり……。

遊地 朝になってみると、あなたの顔が西表のミリク（弥勒）の面みたいに腫れ上がっていた。あのあと、例の食堂のおばさんに「ひるぎ林（マングロープ）は、ハブの巣窟なのに、そんなことも知

らんであんな所に大事なかあちゃんを寝せてから……。あんなんかはハブに噛まれて死んでもいいんだよ！」とまたまた叱られた。

貴子 ダニやアハムシ（和名ツツガムシ）との付き合い方もだんだん覚えてきた。

遊地 あの猛烈な一九七七年七月三十一日の五号台風の時には、ちょうど僕は干立村にいて、村の半分以上の家が壊れる中を、村の人たちといっしょに公民館に避難するという体験もした。

こつびどく叱られる

貴子 だんだん分かった気になっていて、ある島でガツンと叱られたのは、それから一〇年もたつてからのこと。

遊地 西表島での二年間の廃村調査を修士論文にまとめ（安溪遊地、一九七七）、アフリカにもあなたと一緒に一年あまり行かせてもらえて、大学の文化人類学の教員として雇われてから数年したころ、PさんとP夫さんの住む島を訪ねた。

貴子 それまでは、調査「される側」の迷惑は「する側」の私たちが気遣っていれば、最小限にとどめられるものだ、となんとなく思ってきたのよね。

遊地 川喜田二郎先生が学園紛争の中で創設された移動大学に出会った僕らは、一九七三年、第一回目の新潟県巻町角田浜キャンパスのスタッフとして勉強するなかで、「調査地被害」という言葉を知った。宮本常一さんは「調査というものは、地元のためにはならないで、かえって中央の力を少

しずつ強めていく作用をしている場合が多く、しかも地元の人々のよさを利用して略奪するものが案外なほど多い」と書いておられた（宮本、一九七二）。だから、翌年西表島に行く時には、そのことをそれなりに気にはかけていた。泉靖一さんが一九四九年（放送大学教授の祖父江孝男さんのご教示によれば、これは泉さんの思い違いで実際は一九五三年）に北海道で強烈に叱られた言葉もそのころ読んだことがあったかもしれない。

貴子 「おめたちは、カラフト・アイヌがどんな苦勞をしているか、どんな貧乏をしているかしるめえ。それにのこのここんなところまで出掛けてきて、おれたちの恥をさらすか？それともおれたちをだしにして金をもつけるか、博士さまになるか」（泉、一九六九）という言葉ね。

遊地 そのとき、泉さんは「雷光に打たれたよりも激しい衝撃をうけ、ただあやまって調査をせざるに帰ってきた」と書いている。

貴子 PさんとP夫さんの声に素直に耳を傾ければ、調査の実体は今でも酷いものだということがわかる。本当にびっくりした。

遊地 そして、調査地被害は過去の問題ではないし、自分たちも例外じゃないということを、痛いくらい気づかせてもらった。ショックで、そのあとしばらくは調査も、学会発表もほとんどできなかった。

貴子 例えば、話した人の了解をもらわないで公表してしまう、というのは論文書きをしていると常にあることだったから。

遊地 その反省に立って、この本のもとになった聞き書きでは、すべて発表前に話者ご本人か、ご遺族に目を通してもらい、訂正してもらった上で発表するように務めた。写真を載せる場合も、御本人の了解をもらうことを原則とした。まあ、固い言葉で言えば、プライバシーと肖像権を侵害しないようにという当たり前のことだし（安溪遊地、一九九二b）、忙しさを口実にそうした人権への配慮を怠れば、筆の暴力になってしまうということだろう（安溪遊地、一九九三a、一九九三b、一九九四a）。

はじめに

日本列島の南の端の森の島、西表島では、五〇〇年以上も昔から人びとは亜熱帯の森とサンゴ礁のほとりでイリオモテヤマメコなどの気高くもたけだけしい自然と共存しながら暮らしてきました。

この共存関係が破れる時、自然の力は人間の営みを一瞬で吹き飛ばしてしまいます。そうした例が一九四四年一月一日の明け方に西表島の浦内川でおこった未曾有の洪水被害でした。

元来、この川の上流部は、神域として人間がみだりに手をつけてはならないとされていた場所でした。例えば、「八重山嶋諸記帳」という古文書は、イナバ（稲葉と当て字される）と呼ばれるこの一体には、水鯖（みずさば）という怪物がいて、酉の日と寅の日には近づいてはならないと諷めています。禁を破ると、いきなり大風が吹いてあたりの大木をなぎ倒し、水鯖が水面に浮き出て巡り狂うというのです。浦内川・仲良川の二つの川については、川ぞいの田に稲が生育する時期には、弁当をもって入ること、火を焚くこと、手拭いなどを頭にまくことを禁じる、などのさまざまなタブーがありました。

ところが、戦争が始まると営林署主動でここに製材所を造り、奥山の木を軍需用材としてどんどん伐り出すということが起こりました。当時、営林署の職員で、製材所の近くに住んでいた、一九〇五年に祖納（そない。租納とも書く）集落でお生まれになった新盛波（しんもり・なみ）さんは、家族もろとも洪水に家を流され、九死に一生を得ました。一九八四年九月二日にうかがった新盛さんのお話に耳を傾けてみましょう。

浦内川の奥の製材所で大水に遭う

うちの家の戸板には、今でも機銃弾が打ち抜いたあとが残ってますけど、戦争がひどくなって、昭和一九年には、西表島にも米軍機の空襲があるようになってたんですよ。それで、台湾に疎開する準備はしてたんですけど、それはやめて、お父さん（夫の新盛行雄さん）が仕事をしてた浦内川の上流の川のそばのイナバという所にできていた村に引っ越しました、製材所のすぐ下流にあるメバラ川という支流のそばの四軒長屋に入りました。仕事は、台湾の人たち七〇人を使つての木の伐り出しと製材です。

あの大水が出たのは、お父さんが四四歳の時、申の年の一月でした。三歳の三男と五歳の三女と四人でイナバにいました。その日は台風でもないので夜の九時ころから息もできないぐらいの土砂降りになってよ、飼っていた仔犬の鳴き声で気づいたら玄関で犬が水に浮いていたわけ。一時頃でした。さあ、川の水が上がってきて、外にも出られんし、もう山にも避難できないでしょう。

畳をみんな食卓の上に乗せて、親子で押入れの上の段にありました。それでも水はどんどん増えてくるので、こんどは天井裏にありました。そこにも水が来るので、お父さんが茅を引き抜いて屋

根に穴をあけて私たちを上に乗上げてくれました。長屋の隣のじいさんも上がってきましたけど、この人は水にタップンと落ちて、そのまま流されて行ってしまいました。

子供たちを穴から屋根の上に引き出して座らせて、もっていた毛布をまきつけたんですが、家はもう獅子舞いの獅子のように、動いておるんです。もし、この屋根が本川（浦内川の本流）に流されて出て行ってしまったら、命はないです。お父さんは、死体であがった時にいっしょに見つかるようにと、わたしが子供をおんぶしておる帯で親子四人のお腹をくろろとするんだけれど、帯が短くてくくられませんか。

カシの木に救われる

ところが、流れていった屋根が、川の縁に立っていたカシの木（オキナワウラジロガシ）の大木にぶつかって止ったんです。枝もない真っ直ぐな幹の木でねえ、お父さんにお尻を押し上げてもらって太さ五寸ぐらいの枝によろしくがみついて、命かぎりでの枝に上がりました。ここで死にはできませんと思うと涙も出ませんでした。気がついたら、男の子は背中に背負っていましたけど、こんどは娘を片手で引き上げて枝の上に立たせたんです。お父さんは男だから、あんなまっすぐな幹にしがみついて自力で上がってきたわけ。枝の上でよろよろ毛布にくるまったら、もう明け方で、戸板の二、三枚やアヒルや豚なんかが流されてくるのが見えてきました。そのうちほかの家が本川に流されていくのなんかも見えました。

わたしたちのいるカシの木の向かいにガチバナ木（ガジュマル）があって、その枝に近所の一人暮らしのおじさんがいました。すっぱだから、水がゴトンゴトンとして流れていくのに合せて上がったり下がったりしているんです。やせて目だけ光ってまるでマヤチコー（オオコノハスク）のように見えました。水が引いた後、この人はかわいそうに、手でちんちんを隠して四里の道を歩いて避難して来られましたよ。

そのうち、製材所の書類がたくさん流されてきて二、三枚が屋根にひっついて流れないので、水が引いてきたことに気がついたんです。しばらくして屋根の穴から下に降りたわけ。「命が助かったね」と思っていると、祖納村の人たちが心配して見に来てくれました。祖納のニシドゥンの浜まで豚の死骸やら生きたアヒルやらが流されてきていたので、もう死んでいるかもしれないと思って、かけつけてくれたんです。三男をおんぶしてくださいました方もあったし、干立（ほしたて）星立とも書いた村の婦人たちがズーシー（混ぜ御飯）を炊き出して、握って出して下さったんです。あれを今まで忘れられんです。よろよろの思いで祖納の家までたどりついたら、心配していたみんながもう、喜んで泣いたり話したりしました。あんなにして、死んで来たよう。

時計や昔からの写真や上等の着物なんかはみんな流れてしまいましたけど、祖先の位牌だけはひっくりかえった油鍋の中に、ちゃんと守られていました。

この時、石垣島の白保（しらほ）村から徴用人夫としてきていた人たち一〇人ぐらいが、浦内川の河口のアトウク島のへんで、家も人もむちゃくちゃになって死んだそうです。そのうちたった一人だ

け、岸に這い上がって助かりました。台湾の人たちは、山の縁に家があったので、山に逃げて全員助かったようでした。

それから五年間は、うちの家族は、毎年このイナバの洪水の日に、命を助けていただいたこのカシの木の下に集って、木を拜んで「お蔭様で元気しております」というてお礼をしていたんですよ。

当時の記録から

これで、新盛さんのお話は終わりですが、西表島の千立村のある家の屋根裏からガリ版刷りの小冊子が見つかったことがあります。雨にさらされて読めなくなった部分も多く、作成者もわかりませんが、その中にこの洪水の記事があります。

それによると、発見された死体は六体だけで、合計何人が犠牲になったかわからないといえます。以下はその冊子からの抜粋です。

天災ではなく人災だった

先日から降りだした雨はまるで川の水が流れるように三日二晩ひっきりなしに降り続いて止まなかった。そのためかあちらこちらの山々がものすごい地響きをたてて轟音と共に崩れ落ちた。ところで村民のこれまでの経験からして、どんなに豪雨といっても家屋への浸水はせいぜい床のあたりまでであった。そのために避難する考えはしなかった。このように簡単な経験や憶測だけで判断したことが

悲惨な結果を見る一つの因ともなったのだが、高を括っていたといえるわけだ。(中略)

このような大洪水は原因なしには起こらなかったはずである。例年にならない豪雨だけではない。山の伐採量が多いために調節弁を失ったことも考えられる。だが致命的な原因はむしろ他にあった。大きな大きなわながしかけられていたのだ。

営林署や軍関係者が伐採した木材の枝葉はそのまま山にあった。伐採して搬出しない木材も残っていた。これらのものと更に前からおこっている山崩れの土塊、岩石などが所々水門を閉じ狭い谷間をふさいで水の流れをせき止めていたのであった。これがさしもの豪雨に一拳に押し流されて切れたのだ。こういう自然のいたずらが上流に仕掛けられているということを人びとは誰一人知っていなかった。これこそ大洪水の直接的な一大原因であった。四囲山に遮断され他集落から隔絶されたこの稲葉の人々は近隣集落との連絡も応援もないままにこの悲劇に見まわれたのだ。(以上『地域と文化』五三・五四号、ひるぎ社、一九八九年刊からの引用)

木にもいの方が ある 西表島祖納・松山忠夫さん

とっておきの話

私たちが延べ二年ほどを過ごした西表島の「人と自然のかかわり」について、とっておきの話を紹介してみようと思います。話し手の松山忠夫さんに詳しくお話をうかがうことができたのは、一九九二年三月三日のことでした。

西表島の山は、自分の庭と同じ

私は、大正五（一九一六）年に西表島の祖納集落に生まれました。おやじ時代から網元の家でしたが、私は青年のころから猪を捕りに犬といっしょになって山の中をくまなく走り回っています。ですから、西表島の山は、自分の庭と同じと思っています。現在、本拠地は石垣島に移していますが、西表の家を寓居として楽しみたいという気持ちです。

今、方言をまとめてみたいとおもっています。「バシマムニ（故郷の言葉）を求めて」というようなタイトルにしたらどうか、と考えているところです。

戦後、沖縄の復興のために西表島の木を切るうということになり、マチウス大佐の伐採隊が西表に来ました。その時、私は、猪の肉を大佐にあげたところ、たいへん気に入られて、一二連発のカービン銃を渡されて、山の木の監視をしつつ、猪を求めて山を歩くという仕事をさせられました。一人で、兵隊の食料のクレーションとか、パンと粉末ジュースとかチーズとかの携帯用食料をもって歩きます。夜泊まる時には、リペレントという石油みたいな虫よけを塗ったり、燃やしたりして虫を防ぎました。

犬を引っ張って行って帰れない時は、犬のご飯が何もありません。猪を捕ってあれば、焼いて犬にもやれますけれど、それもとれていない時は、困ります。自分のパンを犬にあげるわけにもいけませんから。

翌朝は、まだ薄あかりの時から山に入って、アヤキサーといって、縞の入った子供の猪をねらいます。それをとったのを焼いて、洗って切ってやると、犬たちもほんとうにうれしそうに食べてくれますよ。

生き物をイクムシといえます

「いきもの」にあたる方言があります。イクムシと言いますよ。これは、牛も、馬も、猪も、犬も、猫も、鶏も、ハブも、虫けらにいたるまで、すべてがイクムシです。

人間は、イクムシに入るんですか。

普通は入りません。なぜかという、人間が人間らしくない行為をすると、こんなふうに言われるからです。

「イクムシ ニサル ムヌ」

つまり、動物みたいな奴という悪口ですね。

また、危機一髪で助かった時なんか、

「イヌチ シティンデイ アリシタ」

つまり、命を捨てるところだった、というようにいいます。このイヌチというものはイクムシにもピトゥ（人間）にもあります。

おやじの話していたことですが、旧暦の一月には、カチヤ（鍛冶屋）のところで、フキヌマチリ（ふいご祭）をやったものでした。これは、鍛冶屋のつくる道具によって、たくさんのイクムシのイヌチが奪われる。その命の供養をやるんだということでした。イクムシたちのタマシ（魂）を慰めるんですね。タマシたちがふいごに仕返しをしに来るといいました。どこから襲って来るかわかりませんから、一晩じゅう寝ずにいたんです。

植物はフサキ（草木）と総称します

タマシがあるのは、イクムシだけではありません。

イクムシは、だいたい動物という言葉で訳しても大きなまちがいはないと思うんですが、それじゃあ、植物にあたる方言はないんでしょうか。

そうですね。フサキ（草木）という言葉があります。雨がいただけるので、草木も萌え出てくるよ、というのを、方言では、

「アミノ トーラリツカラ フサキン ムイイディ キュンドー」といいます。

キのようでキでなさそうなものがいろいろありますが。たとえばバナナは、植物学では木でなくて草に入るそうです。

バナナは、バサヌキ（「芭蕉の木」といいますから、キに入っています。シトウチ（ソテツ）も、マンズミ（パイヤ）も同じくキです。クバ（ヤシの仲間のビロウ）はクバです。クバヌキとはきいたことがあります。マーニ（和名クロツグ）もキではありません。タキ（竹）の類もキでなく、その他にバラピ（シダ類）や、ピデ（コシダやヤブレガサウラボシ）、カツツア（蔓）など、キでもフサでもない植物はいろいろありますね。

海藻は、スナナ ムイル フサ（海に生える草）、また、海の動物は、スナナ プー イクムシ（海にいる生き物）といえます。

こんどは、キにもイヌチがある、という考えがわかる話をしましょうね。

島では、くりぬき舟を造るのに、マチキ（和名リュウキュウマツ）か、アカンギ（和名アカギ）を使いました。ときたまはシイ（和名イタジイ）も使いました。

山の神から舟の木をいただく

私も、終戦後シイの木でくり舟を造ったことがあります。家内のじいさんほか、七、八名の先輩に

おともをしてもらって山に行きました。私の舟にいただきたいというシイの木の前に立つと、

「これはすばらしい木だ」とみなさんがおっしゃいました。

そして古老の方が、「お酒をもっているか?」とたずねられました。

そのほかに、線香と花米(白米)をもつように言われていましたから、それは筒に入れてちゃんともってきていました。近くの小川から水を汲んでくるように言われました。

木の前にみんなで正座して座って、古老の方が、木の正面の胸の高さの所に水をかけ流して、線香をあげ、御神酒もさしあげて、祝詞をあげます。

祝詞は、山の神様によってこの大きさにまで守り育ててもらったこの木を、舟材としていただきたいので、この木をどうぞいただかせてください、というほどの意味ですね。

そうそう、祝詞をあげる前に、おじぎをして、ノコとオノを木の根っこにたてかけます。柄を上につて。

祝詞が終わったら、根元にお酒をあげて、のこったものをみんなで一口ずつみんなで回しのみします。これで、木をささずけてもらう約束ごとができた、と一方的だけ合点して仕事にかかるんです。

いよいよ仕事にかかる前に周囲に花米をまきます。

根元にオノを入れるときは、木の裏の方から入れるように気をつけます。山の木は傾いて立っていますが、山側が表、谷側が裏です。表から先にオノを入れると裂けやすいんですよ。シイの木なんかは裂けやすいので、直径の半分ぐらいまで裏から切り込んでおかないといけません。これでしょう失敗しました。木が倒れる前には、あらかじめ小さい木を切って準備しておいて、木がどーっと完全に倒れたらすかさず、切り株の真中に穴にこの小さい木をさします。この穴は方言でイキといひますよ。

さつき祝詞をあげた古老が、また唱え事をします。

「たしかに木はちょうだいしましたが、その代わりに子供をさしあげますから、もっとすばらしい名木に育てて下さい、山の神様」という意味の内容です。

私は、「なぜこういふことをするんですか?」と尋ねました。そうしたら、

「昔は、蔡温(さいおん、一八世紀の琉球王国の宰相)さんが、命令されたことだそうだが、木一本切るなら、二本植えなさい、それをおこたるものは嚴罰に処する、と言われたそうだよ。」
という返事でした。

「道具をたてかけるわけは?」と問えば、

「無事故息災を願う意味だ」という返事でした。

これを教えてくれた古老というのは、宮良孫全(みやら・そんぜん)さんという人でした。祝詞の方言ですか。ちょっとまとめてくださいよ。今思い出して書いてみましょう。

木を倒す前の願いのことは

ヤマヌ カンヌマイ シサレ 山の神様に 申し上げます。

ウウフドゥ	タキフドゥ	大きな胸	丈高い胸に
スタディオレル		お育てになった	
クヌ	フニムトゥ	この	舟の元になる木を
キユウヌ	キチジツナ	今日の	吉日に
バナツティ	クバリトリー	私に	お分けてください
デイ	ニガイ	という	願いを
デイ	ウキトリー	お受け下さいます	
トウードゥ	トウードゥ	ように	申し上げます
		尊々	尊々

木を倒し終わったあとの願いのことは

ミナ	クマナ	バカキ	今	ここに	若木を
ウビカイ	オイサバ		植えかえ	いたしましたので	
バカミドゥリ			若緑に		
サカラシ	トリーリ		栄えさせて	くださるよう	
ヤマヌ	カン		山の	神は	
トウイマシ	トリー		おとりは	からい	ください
トウードゥ	トウードゥ		尊々	尊々	

木にもイヌチ（命）があるんです

これはねえ、山の神に対する敬虔な気持ちのあらわれのことばです。木にもイヌチ（命）がある、という昔からの考えかたによる儀式ですね。かっこうの変わった岩にも神様があるっていいですよ。前泊の海にあるマルマ盆山も信仰の対象にしておる人がいます。老人クラブの人が香炉をおいたらしいですよ。

方言で、ムリムリ タキタキ ナン カンドゥ オーリル カンティ ヌ ニガイ、つまり、山々、岳々においてになる神様への願いをしなくちゃいけませんから。

ヤマヌカンは、男の神様でしょうか、女の神様なんでしょうか。

そのことは、私もたずねてみました。そうすると、古老の返事は、

「はつきりこつだ、とは言い切れないけれど、宰領権をもっているのは、男の神様だろう」ということでした。

宿乞いといって洞窟の主へあいさつします

猪などを狩りに山へ入って、野宿するときのことをすこしお話しします。

自然の洞窟を方言でイリヤーといいますが、そういうイリヤーや大きな石が突き出してその下が野宿に適したような場所で泊まりたいとおもつとしましょう。いきなり荷物を中に入れるないで入

り口で降ろして、ヤドウクイ（宿乞い）ということをするんですね。荷物を降ろしたらかぶりものを取って衿を正します。そして、中に入って、まずこつこつうぶつに呼びかけるんですよ。

「イリヤー ヌ ヌシ シサレ」

つまり、洞窟の主に申し上げます、というわけです。木の下に泊まる時には、

「キー ヌ ヌシ シサレ」

つまり、木の主に申し上げます、というんです。

そのあと、「今日は、これこれの用事で、ただだれが泊まらせていただきたいと思しますので、よろしくお願い申し上げます」と唱えるわけです。私の知るかぎりでは、特にささげものをする、ということはありませんでした。無断で泊まるのでなくて、許してもらおう。それは、必ずやるものとなっていたんです。このあと、中に入って掃除をします。そして、敷物をしいて、荷物を中に入れます。

この宿乞いをきちんやりと、夜中に責められないですみます。まあ、悪い夢をみない、といいますかね。

又シのことを、シーともいいます。精とでも字をあてますが。

鹿川湾の洞窟や、グザ岳の下のグザイリヤーなんかにはよく泊まりました。私のおやじたちの代までは、山の中でずいぶん泊まったらしいです。建材のキヤーンギ（和名イヌマキ）を切り出したりするときは、ほとんどグザイリヤーあたりまで行って泊まったものだと思います。

犬をつれて山を歩き回った時には、いたる所でこの宿乞いということをやりました。

自然の大切さに気づく

大自然が神である、あるいは樹にも石にも魂がある、ということは、あちこちの島の人から聞きましたが。

一切のものに神がやどるといふのはね、宗教的な立場からのことばになります。これは、自然を大切にしてくださいという意味ですよ。

自然と人間というものの関係は、太古の昔からいろいろ変わってきているけれど、今の時代になつてはじめて自然の大切さがわかったんですね。

竹富島や黒島では、浜に漂流木があるのをみつけたら、それを自分の家までもってゆくまでは、やりかけの仕事もしない。これぐらい、ものを大切にしたいそうですよ。西表あたりとはずいぶんちがいますね。

安溪君、あなたの学問は、まず自分の五体で感じたものをよく咀嚼して、それを学問的に表現していくところに持ち味があると私は思います。ひとつこれからもその持ち味を島のために生かしてください。

オー、ミーハイディ ウマリルヨー（はい、ありがとつ存じます＝西表島西部方言）。

お話を聞き終えて

松山忠夫さんは、一九九三年五月一日、自転車で村の中を走っていて、急に気分が悪くなられ、この世を去られました。心筋梗塞であったそうです。すばらしい深みのあるお話がわずか一日しか聞けなかったことが残念でなりません。つつしんでご冥福をお祈りもうしあげます。原稿は御長男の松山浩さんに目を通していただきました。ありがとございました。

南のはて波照間島から 西表島崎山村・川平永美さん

このお話の出発点は、列島最南端の波照間（はてるま）島です。今から二四〇年前のこと、平和に暮らしていた島びとたちに西表島への移住命令がくだります。無人地帯に新しい村を造るといいます。これは、薩摩藩の支配下にあった琉球国の宰相の蔡温の政策でした。新しい村は、マリアによって人口を激減させながらも、一九四八年の廃村まで人びとはここに踏みとどまりました。今はなき崎山村の最後の語り部が川平永美（かびら・えいび）さんです。川平さんは、宮古・八重山諸島に課された苛酷な人頭税がようやく廃止された一九〇三（明治三六）年のお生まれです。八〇歳を過ぎてから筆を執って、崎山村の伝承を記録に残し始められました。川平さんは、数えで九七歳になられた今日でも新しい原稿を書いたり、筆を編んだりの元気な毎日を過ごしておられます。お話を聞きはじめるとすぐに民謡や即興の歌が出てくるのは、まことに歌の島のおじいちゃんです。

一九九〇年に、私たちの編集で、那覇市のひるぎ社から川平永美述『崎山節のふるさと 西表島の歌と昔話』が出ました。ここではそれ以降の原稿と一九九二年の四月にうかがったお話を中心に、南の島に伝わる不思議の世界へご案内しましょう。

夢で自分の退院の時期を知る

このあいだ、入院した時の話です。いつ退院できるかわからなかったのですが、ある晩、こんな夢を見ました。女の人二人が病室に入ってきました。ようかんを一本ずつもってきて出してくれて「あなたはお医者から何も食べるなと禁じられているけれど、このようかんでも食べなさいよ」といんです。私は「先生の許可なしには食べません」と答えました。そこへ看護婦さんが入ってきたので、この女の人たちはパツと消えてしまいました。翌朝八時にお医者さんが入ってきて、「あなたは、もう退院ですからようかんでも食べていいですよ」と言われました。

竹富島の神様が見舞いに来られました

竹富島で偉い人というのは西塘さん（にしとう、首里王府に重用された一六世紀はじめの人）で、ウガン（拝所）にも祭られているそうです。でも、私はその場所がどこにあるかも知りません。ところが、前に入院した時に、こんなことがありました。同じ病室に竹富島の人がいまいましたが、病室の入口から神々しい人が入ってきて、私の枕もとで、「自分は竹富島の西塘の神です。私の土地を相続している男が入院したので、心配して見にきたが、いついつの日には退院できる。また、竹富島のどこどこに私の土地があるけれど、本当にどこまでも自分のものと言えるのは竹富島の土地だけだなあ。石垣島の字新川のあつちにも自分の土地があるけれど、今では自分のものとも言えないから、はつきりとは教えない」とおっしゃいました。帰りがけには、看病にきていた娘さんの肩に手をおいてなにかおっしゃっているようでした。西塘の神様が帰られたあと娘さんに尋ねると、全然気付かなかったと

いうのです。翌日、目がさめた病人にきいてみました。「これこれの所にあなたの先祖の土地がありますか」とすると、その人はとても驚いて「あなたは、竹富島に来たことがあるんですか、わたしの先祖の西塘さんの土地がある現地と、あなたがいた地名がきつちりみんな当たっています」という返事でした。そして、この人は神様のおっしゃった日にちゃんと退院していききました。

私に話をされる神様は、方言をしゃべられませんが、標準語でしたよ。

いきなり仏さんが現れて

一昨日、あんたらに届けてもらった、このりっぱな本（西表小学校百年誌『西の子』）に私の書いた文を載せてもらって、本当にありがとう。実は、昨日の明け方の三時から四時ころに、いきなり仏さんが現れて「本家にこの本を持って行って一応線香をあげてきなさい。おまえは、崎山村と網取村（崎山村の人々が移り住んだ村。一九七一年廃村）の代表のようにこの本を一人もらつてある。自分らもよく考えてもらったと思つてうれしい」とおっしゃってパツと消えました。うれしくもあり、びっくりもして、夜が明けのを待つてすぐに本家にこの本をもつて行って仏壇に供え、お線香を上げてきました。本家の人も「わが家の名譽です」といって大変喜んでくれました。私には、こういう時にはぴしゃっと仏さんが来られるんですよ。島にいた時にはあんなことはなかったけれども……。こういう状態だからひとつ、今後よろしく印刷とか出版のお世話をお願いしましょう。

崎山村の創立（川平永美さんの原稿から）

波照間島から人を移して、西表島に崎山村を創立した当時のいきさつを申し上げます。皆様もおわかりの点が多いと思いますが、この話は、私が古老のじいさん、ばあさんから聞いた話です。私が聞かされてきたとおり、これからお話ししてみたいと思います。

崎山村は、琉球国王様からの　いわば天からの　御命令によって波照間島からの移民で創立されました。命令が出されたのは、宝暦五（一七五五）年九月一七日で、お役人の与人（ゆんちゅ。首里大屋子「しゅりうふやく」に次ぐ第二ランクの役人）には、崎山寛紹（さきやま・かんしょう）氏が発令されたそうです。その他のお役人の名前は伝わっていません。

まず、波照間島からの出発の準備です。お役人たちは一生懸命に用意をしておりました。島に残る村人は、別れと見送りのために浜に集まっています。西表島への移住の団員は船に乗り込むことになります。皆、別れのあいさつをしております。目に涙で話しております。

その時、乗船の命令が出され、団員は泣きながら船に乗り込みます。船が何隻だったかは、わかりませんが、各船に一人のお役人が乗り込んでいます。残る村人も別れを惜しんで涙の別れをいたしました。あとは、出発の命令を待つばかりとなり、しばらくすると、号令が下って船はいつせいに波照間島の浜を離れます。団員は船の中で手を振り、村人も浜で手を振り、お互いに別れを惜しんで見えています。

船は波照間島を後にして、西表島をめざします。だんだんと遠くなる船に、村人は泣く泣く村に帰りました。船の中で、人々は生まれ島を思い、波照間島に残してきた父母、兄弟のことを思い、泣き伏しております。船は波照間島を遠ざかり、西表島がだんだんと近づいてきます。やがて船は次々と西表島の間近にやってきました。船の中の人々は、おもて面は笑顔で、心の中では泣きながら起きて見たら、白い砂浜が見えました。見たこともないような美しい島です。船は、ヌバンフチ（野浜津口）という入江に入って行きます。

ヌバンの浜に着いた船の中で、人々は各自の荷物をもって上陸の準備をします。全員が船を降ります。降り立った浜の、砂が厚く積もった土地に荷物を降ろしてほっとすると、西の方に清らかな川が流れているのを見えています。皆は大喜びでこの川を眺めております。

その時、「集まれ」との知らせがあり、与人氏のあいさつです。「われわれは、天の御命令、国王様の御命令で新村を創立することになった。ついでには全員が団結して新村づくりのためにがんばってもらいたい」団員も、「がんばります」と答えます。団員からのあいさつの中に、「ここは無名の土地と聞いていますが、なんと呼びますか」との問いかけがありました。「なるほど」と与人氏は答えて、「それなら、私の姓を入れて崎山と命名しましょう」との言葉です。それから後は、この新村を崎山村と呼ぶようになりました（編注。ただし、八重山ではこれとは逆に地名から姓をつける例が多いと言われています）。

それからは、毎日毎日、新しい村を造るために働いておりました。そんなある日、一人の女が、仕事をしながら突然に誰も知らない歌をうたいだしたのです。生まれ島のことをうたった歌らしいので

皆がこの女のまわりにあつまりました。これが、今も歌われる崎山ユンタという歌で、崎山節という三味線の伴奏の歌のもとなりました。

お役人も何ごとか、と駆けつけて聞いておられます。どういふつもりでこんな歌をするのか、という問いかけに女は「自分は何もわかりませんが、ただ生まれ島のことを思って歌が出ただけです」と涙を押さえて返事をしました。これを聞くと取り囲んでいた人々もみんな涙にくずおれてしまいました。これを歌った女の名前は、ナベマといい、柿本（垣本）という家の娘であったそうです。お役人は驚いて、この事を国王様に報告しました。

その後、皆は力を合せて働きました。ところが、そうするうちに台風がやってきました。又バンの浜は、沖から山のような波が押し寄せてきて、大津波そのままに白砂浜にうちあげます。打ち上げた波は、雨のように村の上に降りそそぎ、とても人間の生活ができません。また、冬には北風が吹きつけます。船の出入りも思うにまかせません。それで、又バンから他の場所に移転しようということに話が決まりました。

お役人は、移転先を調べてまわります。港の東の方にウラナーという所があります。傾斜もゆるく、地形も平らで一見とてもよい所ようです。ところが、よく調べてみたら昇るお日様を拝めない場所なのです。日の出を後にしては村は建ちません（風水、フンシが悪いのです）。それで、そこをあきらめてまた別の場所を探しました。今度は、港の西の方が移転の候補地になりました。そこは、急傾斜で、とても人が住むことができそうもない坂の土地ですが、お日様の出る場所に向かっていているから、

とてもいい場所だということになりました。ここに移転することに決まり、屋敷は段々につくるといふことに話がまとまりました。又バンに何年住んだかは判りませんが、移転のために皆がてくてこまいをするようになりました。

さあ、新しい場所に村を移転してみたら、こんどは、水が余るほどあつた又バンとは違って、水が不自由な場所でした。あの歌をうたいだしたナベマさんが、オイサー（村番所）の西の角に手洗い水をつくろうと思ひ、掘ってみたところ、清らかな水が出たので、一同は喜んでこの水を使うようになりました。ナベマさんの掘った井戸の南の谷間から流れる水があります。これを見たウフネー（大嶺）という家の人が、この谷間を上へ上へと登ってみたところ、清らかな水が吹き出しているのを見つけました。喜んだ大嶺さんは、皆を呼んで、ここに井戸を掘り、飲料水を確保しました。この井戸は、見つけた人の名をとって、ウフネーヌカー（大嶺井戸）と呼ばれています。また、村番所の南にもうひとつの井戸が掘られました。これが、アガネー（赤嶺）という家の人が見つけた井戸で、これで、村人の必要な水は足りるようになりました。

段々屋敷をつくるために働いている時、国王様からの命令がきました。それは、りっぱな歌をつくれたナベマさんに記念品を贈り、褒美としてナベマさんが生まれ島の波照間に帰るようにとりはからう、というものでした。こんな歌を次々にうたいだされたのでは、村人の間に波照間に帰りたい思ひがつのつて大変だと心配されたのかもしれない、ということでした。

生まれ島に帰るナベマさんを、浜で皆が見送って、田畑づくりに一生懸命にとりくみます。ところ

が山猪が農作物を食い荒らしてとても困ったことになっています。お役人にこのことを申し上げましたら、お役人は国王様に報告しました。国王様の命令では、村々島々の人夫を繰り出して山猪の垣をしなさいということでした。それで、山猪よけの垣を造ることにしました。

村の南側のパイタ川を出発点に、裏の海のピサイシ（平石）という大きな岩のところまで、猪垣を造ることになりました。長さは約四キロメートルあります。人夫は毎日毎日がんばって石を積み、一日一日と垣は伸びていきました。その時、平良仁屋（たいら・にや。仁屋は農民の肩書）という村人が、人夫の食糧として米俵で何十俵か寄付しました。さっそくお役人は国王様に報告して、すぐに平良仁屋は筑殿之（チクドウン）の位をさすけられました。

その後、崎山村では農作物が山猪に荒されることもなく、豊作にめぐまれ、団員は精を出して働き、生産にはげんだとのことです。

これは、私が育った崎山村のじいさん、ばあさんから聞いた話です。おしまい。（一九九四年八月受け取りの原稿から）

ナベマの歌った崎山ユンタ

崎山村の南のユクイチジ（憩頂の意味）は、昔は芝を植えてひろびろとした場所で、お役人が座って波照間島を眺めた場所です。崎山ユンタに出てくるでしょう。ふるさとの島を見れば親の顔を見るようで、おもわず手を出したが、手が届かない。泣きながら帰ってきた……。といってね。（歌つ）

一、サキヤマヌ アラムラユ タテイダン

ハラユイユイ シューラヨー ハリ

ユーバナウレ

二、ナユヌユイ イキヤヌチニヤンドウ タテイダネ

三、ヌバマフチ カニクジヌ ユヤンドウ

四、パティルマヌ シムヤイマヌ ウチカラ

五、ミドウナムム ビフナヤス クママディ

六、タルダルディ ジリジリディ ウムダラ

七、バンドウクリ クリドウバヌ バギラリ

八、タンディトード ユルシタボリ シユヌマイ

九、ユルシャフディ キムククル アラニバ

一〇、バンククル キムククル アラニバ

一一、ティンヌクイ ウシユヌクイ ヤリバドゥ

一二、ユルスクトウ キムスクトウ ナラニバ

一三、ティンヌアミ ユマルヌチジ ヤリバドゥ

一四、ミヌバトウリ カサバトウリ バンサリ

崎山という新村を建てたのは

（ はやし。繰り返し）

何のためという訳で建てたのですか

又バンの津口と砂の堆積地のためだよ

波照間島、下八重山の中から

女二〇〇人、男八〇人をごこまで

だれだれが選ばれるかと思っていれば

このわたしが分けられてしまいました

どうかお許しください、お役人様

許してやろう可愛そうだと思うけれど

わたしの心の一存ではないのだし

天の声、国王様のお声なのだから

可愛そうと許すことはできないのだ

天の雨や数えきれぬ雨粒であるなら

蓑をとり笠をとって防げるのに

- 一五、ムドウサルヌ カイサルヌ ミングイ 戻されぬ帰されぬという御命令とは
 一六、ユクイチヂ アスビバナニ ヌブリヨリ ヌクイ頂の遊び端に登って
 一七、パティルマヌ シムヤイマユ ミアギリバ 波照間島、下八重山を見上げれば
 一八、バヤヌアブ ナセルウヤヌ マムティ ミルソンニ 我が家の母さん、産みの親のお顔を
 まっすぐ見るよつで
 一九、ミラディシバ ミナダマリ ミラルヌ 見ようとしても涙がたまつて
 見られませぬ
 二〇、イカディシバ トウユサヌキ イカリヌ 行こうとしても遠く離れて行けません
 二一、ナクナクトウ ユムユムトウ ムドウリキ 泣く泣くいよいよながら戻ってきました

あとで改作された崎山節では、このあとに、次の二句がきます。

- 二二、タチナタチ プリナプリ ミリバドゥ 立ったり座ったり暮しているうちに
 二三、サキヤマヌ アラムラドゥ サニサル 崎山の新村こそが
 うれしい所になりました

鱧にまたがって波照間島から崎山村へ

大正一〇（一九二一）年、旧暦の七月二十四日のことでした。私が仲間と仕事で山の中へ出かけると、山の中の田のあぜに男が裸で寝ていました。何も言わないのですが、腹を減らしているようすなので、急いで村に使いをやり、「ご飯やお茶、それと着物も用意して行きました。この男は、持参したご飯やお茶を見る間に全部平らげてしまいました。それでも一言も声を出しません。着物を着せて歩かせようとはしますがどうしても立ちません。不審に思って調べてみると、両股の内側が真赤にただれていました。急ごしらえの担架で浜まで運び、舟を回して内離（ウチパナリ）島にあった巡査駐在所に連れていきました。照会したところ、相当の日数がたつてから、波照間島に行方不明者が一人いるとの申し出があり、関係者がやってきて連れて帰ったといえます。その話によると、この男は垣本松という人で、口が不自由でありました。お盆に魚捕りに出たまま行方不明になっており、波照間島では死んだものとあきらめ、搜索を打ちきり、その家では四九日の焼香も済ましていたそうです。台風後の西表島までの二二キロメートルもの荒海をどつやつて渡ったのか誰もその事情がわかりませんでした。ところが、波照間島出身で琉球政府八重山地方庁長だった仲本信幸（なかもと・しんこう）さんに聞いたところ、不自由な口で「自分はサバ（さめ、鱧）に乗って西表島まで行きました」と話したといえます。わたしは垣本松さんの内股の真っ赤にただれていることを見ていたので、それは本当のことであろうと思いました。この人はあの崎山ユンタを歌って島に戻された垣本ナベマの子孫にあたるのです。この事件があった当時、波照間島では昔、崎山村の村建てのときに道切りの法で泣く泣く崎山村に連れていかれた人々との関係が、いろいろと取りざたされていたといふことです。

(この項は川平、一九九〇『崎山節のふるさと』から抜粋しました。)

女の姿をした木の精

大きな桑の木には、方言でシーといって、木の精がついていることがあります。昔話にも魚捕りを手伝ってくれるかわりに魚の目をくれという桑の木の精の話が出てきますよ。

ほう、沖繩のキジムナーや奄美のケンムンが西表島まで遊びにきたんでしょーね。

桑の木でなくても、例えば隣の家の門のそばにフカイキ(和名フクギ)があるでしょう。ブロツク塀にはさまれているあれです。この木の精は女の人の姿をしています。私はそれを二回見ました。でも何も言いきれずにただ立っていただけで、二回ともすぐパツと消えました。私は隣の家の主人にあそこで立ち小便なんかしたらいかんよ、と話してあります。

網の目で魔物を防ぐ

明治の末に廃村になった鹿川村に一人残って住んでいたじいさんに聞いた話です。鹿川村の後の崖の途中に人ひとりごとと通れる細い道がついています。その斜面にりっぱな黒木(和名リュウキウウコクタン)が生えていました。狭くて斧も使えないような場所なので、ある人が音楽好きの人だったでしょうね。これを倒してサンシン(三味線)をつくるうとしてノミで根を切ることにしました。昔は鋸もないでしょう。半分ほど切ってその日は終わり、翌日来てみると不思議なことに切り屑がみんなもとのように付いて、傷もありません。そこでこの人は家に帰って網を作り、それを帽子みたいに被って切ってみました。そうしたら、翌日まで切られたままで、ようやく切り倒すことができました。切った材を斜面の下の海に直接落として、三味線の柄をつくったら、すばらしい音が出たそうです。

カカリム又と方言でいいますが、祟るようなものには、網が一番いいと言います。目がたくさんあるでしょう。人を迷わせるような魔物は、それを怖がるわけです。だから、例えば病人のある家には、外に網をまわしておけといえます。万一亡くなったときには、出棺したらその場所に戸を横にして網をかぶせておきます。これは、死んだ人の霊(マジヨヌ)が惑わされてまた戻ってくるのを防ぐためです。

洞窟の主へのあいさつ

木にはシー(精)がいますが、石にいたるはヌシ(主)と呼んでいます。イリヤー(洞窟)にもヌシがいます。洞窟に泊る時には、こういう言葉を方言で唱えてお願いするものです。「私もは、ここに今、どうしても避けられない仕事があります。天からの命令、お上からの命令がありましたので、こうしてここにやってきて泊るうとしています。ですからこの洞窟の主(イリヤーヌヌシ)も私たちをお守りください、りっぱにこの命令された仕事をさせてください、体を健康にお守りください。」

仕事が無事完了したら、今度は、お礼の言葉を述べて洞窟を出ます。その言葉は、こんなものです。

「フコーラ（ありがとうございます）。よくお守りくださったので、私の思った事も通り、神様のおっしゃる通り、お上のいう通りりっぱになしとげることができました。神様もお上もありがたいと思っておられます。私どもをお守りくださってありがとうございます。」

鹿川湾の奥には大きな洞窟があります。あそこに泊るときには決ってこんなふうにいいました。

安東丸事件

あの鹿川湾の洞窟にはね、こんなことがあるんですよ。こんどの戦争中に内離島の成屋（なりや）村跡の浜で難破した朝鮮の船がありました。アントン丸といったか。その乗組員たちは、西表島にいた兵隊たちからひどくこき使われて、食べるものもろくにもらえないので半死半生になっておりました。私が弁当を食べていると「ごはんチョーチョー」といつて来ました。兵隊に見つからんように弁当を分けてあげる島の人もいましたが、たいがいは、あげなかつたですね。ところが、終戦になつたから、こんどはあの人たちを誰もいない鹿川湾の洞窟の前の田んぼあとに放り出したんです。食べる物もないし、雨ざらしでしょう、みんな死んでしまつたんですよ。小野大尉が兵隊を連れて行って死骸を埋めたということです。そんなことがあつてから、あの洞窟に寝るのが怖くてねえ……。

幽霊の火を見る行事

島で大きな祭というと、シチ（節祭）ですが、この時に幽霊の火が見えることがありました。方言ではマジヨヌタマシ（魔物の魂）と言いますが、崎山村から一里も離れた網取村まで、ずつと幽霊の火が繋がって見えることがあるそうです。家の中で「あつ、火が見えた！」といったら、叱られました。若者がみんなで行つて、できれば墓の見える所に行つて木に登り、火が今年はどういうように出るかを見きわめるのです。ぱぱっ、ぱぱっ、と丸い小さな青い火がたくさん走るのをよく見ました。幽霊の火はかならず青い色です。赤い火は人間の火です。その見え方でいろいろの占いをするのですが、そのやり方は私にはわかりません。

霊火を指差してはいけない

また、幽霊の火を見ても絶対に指差してはいけないません。もし指差すとどこまでも追いかけてきます。こんな話が伝わっています。三名の魚捕り上手が海で夜釣りをしている時に、幽霊の火が見えたそうです。たまたまそれを指差してしまった男にその火がずーつとついてきました。みんながばらばらの方向に逃げて舟からあがつても離れないのです。とうとう便所の所へ逃げて、中にいる豚を突き起して泣かせたら、とたんにはつと消えたということです。

便所の女神の威力

ある時に神様をいろいろの場所に配置することになって、便所（フルヤ）にはどの神様が行くか、となつた時に飛び切り美人でまた位も高い女の神様が希望して便所の神様（フルヤヌカン）になら

れたそうです。それで、便所の神様は特別に力の強い神様で、ほかの神様をお願いしても通らない願事は、便所の神様をお願いしたら通るといわれます。これは、ユタ（職業的な霊能者）も話していたことですよ。

火の神に向かって御飯を食べるな

もうひとつ大事な神様は、火の神（ピヌカン）。この神様は耳が遠いので、ニガイ（祈願）をするときには声たかく唱えないといけません。また、なるべく火の神に向かって御飯を食べるなどもいいます。口を動かしているのを火の神様が見て、自分の悪口をいっていると思われると大変だからです。でも、今は食堂が台所にあることが多いので、火の神に向かって食べる家も多いですね。

産後の注意

お産のあと一週間以内の女を、シラヤヌピトウ（産室の人）といいます。八日目過ぎないと、足を海につけることも、舟に乗ることもできません。これは禁じられてきました。このことを破れば天気がしけて舟の事故が起こるんです。

春から夏にかけての一時期、崎山村の西のヌバンの崎を女は通れませんでした。網取村から石垣島に行くとき、島の南まわりの航路をとればここを通ります。それで、陸路を鹿川村まで歩かせて、そこから舟にのせたものです。北まわりの場合は、ウナリ崎の所を通れませんから、やはり途中で降ろして上原村まで陸路を歩かせたものです。西表島ではヌバン崎とウナリ崎は、神高い所です。

昔は男女に限らず、誰一人海に行つてはいけない、山にも入つてはいけないインドウミ・ヤマドウミ（海止・山止）という時期が、旧暦の四月と定められていました。

蛇をいじめたら

私の学校時代のことです。網取のすぐ東のウチタバルという所で子供たちがトゥカラという大きな蛇（和名サキシマスジオ）を棒でいじめていた時、ホーツと猫のような声をあげてかまくびをもたげて追いかけてきたそうです。恐ろしくなって逃げたけれどどんどん追いかけてくるので、一人が物陰に隠れて首の所を叩いてようやくやつつけたそうです。私は見なかったけれど、翌日学校でみんなが話していました。

私（遊地）も、鹿川村の廃村調査のとき、道に大きなトゥカラがいたのを思わず刀で切り殺しました。しばらくして、後を歩いていた伊谷純一郎先生に「君のズボンに蛇の首が噛みついているぞ！」と言われて飛び上がったことがあります。実際は何も付いてはいませんでしたが、「喰わぬ殺生をするな」という先生の教えでした。それ以来、蛇でもクモでもムカデでもなるべく殺さないようにしています。

なるほど。網取村の前に長くのびているサバ崎の途中の浜のひとつのプーラという場所では動物を一切殺してはいけないと言われていますよ。

それは初めてつかがいました。あそこは、雨乞いをしたりする神聖な場所だったですね。永
美しいちゃん、どうも、いつもとっても面白いお話をありがとございます。

おわりに

川平永美さんは、現在は石垣島にお住まいです。私も、西表島に行く前後に必ずおつかがいし
て、そのご長寿にあやからせていただくようにしています。いつまでもお元気な川平永美さんのご健
康に乾杯！

対談2 フィールドワークのスタイル

遊地 伊谷純一郎先生の指導もあつたし、エネルギーのかたまりのような西表島の人や自然の魅力
に触れ、そのパワーに圧倒されながら僕らは西表島に通い続けてきた。もう二五年を越えてしまった。

貴子 伊谷先生の学問は、自然科学と人文社会科学の枠にこだわらないしなやかな視線を最大の武
器として、ノートと鉛筆だけをもって、アフリカの原野を肩で風を切って歩くというフィールドワー
クのスタイルが根っこにある（伊谷、一九九一）。その中からたくさん門下生が育ってきた。私も、
自然人類学研究室のゼミに出させていただいて、あの発想のしなやかさにどれだけ学んだかしかない。
遊地 僕も、廃村調査のあとは、西表島で昔作られていた稲の品種と栽培の方法とか、理学部の動
物学教室とはとても思えない研究をいろいろした（安溪遊地、一九七九、一九八九a、一九九二c、
一九九六、一九九八a）。アフリカで大きな川の漁民と近くの農耕民が魚とイモを物々交換しあつて
いる市場に出合ったのが、博士論文になった（安溪遊地、一九八四）。

貴子 まるで経済学ね。理学博士号として通るまで指導された伊谷先生の御苦労がしのばれる……。
私は、あなたについて西表島に通っているうちに、微生物学から生態学に専門を移した。そして、ア
フリカでは森の中の小さな村の台所で女の人たちに習ったことをまとめたりもした。

遊地 人口一〇〇人ぐらいの村に二千種類以上の料理を作るわざがある（ANKEI Takako, 1990）と

か、米をカビで発酵させる独自の酒が東アジアだけでなく、中央アフリカにもあるというのは、新発見だった（安溪貴子、一九八七）。

貴子 行った先でわくわくする人たちや物や自然にであって、それにほれ込んで付き合っていくうちになんだか研究になっていっちゃった。

遊地 僕らがやってきたのは、既製の学問でいうと何に入るのかよくわからないけれど、広い意味で地域研究というものだろうよ。専門は何ですか、とよく聞かれるけれど、なかなか苦しい質問だね。心からほれ込んでるフィールドワークが地域研究の核心だと思う。地域を扱っていても、冷たい分析だけというのは僕らの性に合わないみたい。地域と接する時にその愛と学問のバランスがなかなか難しいことがあるんだけど。

貴子 のめりこみ過ぎて帰ってこなければ、フィールドワークじゃなくて移住。

遊地 本気で移住しようかと思ってた時期もたしかにある。

西表島の話し手たち

貴子 私たちの話の聞き方は、これこれのテーマを話してくださいということもあるし、それ以外に雑談めいた話をしている時間も長い。そんななかから、「ふんふん！それは面白い」といって脱線していつて予期しない大収穫ということも多い。

遊地 誘導尋問やアンケート調査は極力避けてきたね。

貴子 にもかかわらず……

遊地 「へえっ！こんなことがあったのぉ！」と驚くことが同じフィールドに一〇年通っても一五年通ってもある。「どっして教えてくれなかったの、こんな大事なこと」と聞くと、「どっして尋ねなかったの」といわれてしまっただけで、ということとは日本に限らず、アフリカでもしょっちゅうある。これは、人はすでにその問題の存在を知っていることについてしか質問できないし（安溪遊地、一九九八a）、一番いい質問項目は、フィールドを離れる日にできるという言い古された真理だ。

貴子 島の人たちに自由に語ってもらって、自然の恐ろしさや不思議な話が出てくるようになって、ここに収録した三つの聞き書きができた。

遊地 たまたまだけど、なんだか不思議なお話ばかり。

貴子 まず、新盛さんのおばあちゃん。やさしいおばあちゃん、いつでも「あんけいさん、たかごさん！」と行って、懐かしそうに嬉しそうに迎えてくださって……

遊地 おじいちゃんが健在のころは、あの茅ぶきの家に座らせてもらっているだけで、なんだかほっとする感じがした。

貴子 よく畑のことを話して下さったし、ひょいと庭におりては昔から作っている色々な作物を見せて下さった。かびたお餅を水に漬けておいて作る「ミリンチュウ」というものを見せてくださったのも、新盛のおばあちゃんだった。

遊地 味見もさせていただいた。今では味醂としか書かないけれど、事典を見ると焼酎伝来以降の

新しい酒で、もとは「味酩酊」と書いたとある。生活の中に、意外なまでに古風なものが生きている島だね。

貴子 「カシの木に救われる」は、何度もしてくださいました話だけど、いつも「あんけいさん、あんなにして死ななできたよう……」と言って泣き出してしまわれる。

遊地 なにげなく暮らしていたのに、ある人たちにとって特別の場所、特別の時ができてきて、そこで毎年その日に心からの祈りを捧げに参る、というのはまさにひとつの「まつり」の始まりだ。

貴子 西表島には木と語り、木に感謝する習慣がずっとあったから、一本のカシの木が家族の命を救ってくださったという実感の上に、自然に始まったものだったんでしょ。

遊地 それだけではなくて、島の人の経験知を越えるような、大規模な伐採の結果起こった大洪水で、実は人災だったということは重い事実だと思う。

貴子 それと対極にあるのが、松山さんの「木にもいのちがある」に出てくる、大木を倒したあとの儀式ね。

遊地 これは、万葉集にも載っている鳥総立（とぶさたて）の儀式そのもの。列島の人々が古代から連綿と続けてきたいのちの不思議との接し方がよく表れている。

貴子 不思議な話というよりも、自然と接する場合の心掛けのようなもの。

遊地 たしかに「一切のものに神がやどる」というのは自然を大切にしなさいという意味だ」と松山さんはコメントしている。

貴子 破壊する力を人間がもってしまった今こそ、その考え方が大切になるんだ、ということね。

遊地 生き物をイキムシと呼ぶという話は、なかなか味があるけれど、まあこれは生態人類学や民俗分類学のお得意のテーマでもある。すると、これまで琉球弧では、植物世界についてはキとフサの二分類、あるいはカズラを加えて三分類、西表島だけはバラビ（シダ類）が加わって四分類と報告されてきたけれど、伝承をくりかえし咀嚼して自分のものとしてこられた松山さんの話を聞くと、そんな単純なものじゃなくて、いろいろ当てはまらないものがあるんだ、ということがわかってしまう。

貴子 実際、自然の中で暮らしてみるとあてはまらない物がある、ということが大切なのね。都会の人たちが、生き物を捉えるのは、学校教育で身につけたものの見方がほとんどでしょう。でも、そういう見方以外の生き方や考え方が確かにあるのだ、と知ることはとても大事なことね。そして、地域ごとにその地域の自然に密着した、そこから生まれた自然観や生命観があって当然なのね。

遊地 松山さんは、木への祈りの言葉を教えてくださった時、正確を記すためだろうけれど、いったん書き付けてからそれを読んで下さった。それまで口づたえだった伝承が書きつけられる瞬間を見ましたわね。

貴子 それは、次の川平永美じいちゃんもそういう所はあると思う。

遊地 初めてお会いしたのは、山田武男さんの民宿にいらっしやった時。西表島の崎山という廃村の歴史と民俗と歌の数々を一身に背負っているという感じの方だった。

貴子 昔のことを本当によく覚えておられると思う。川平永美さんにしても、従妹の山田雪子さん

にしても（山田、一九九二）。雪子さんの弟の山田武男さんは、むしろ、みんなに語らせたり、歌わせたりしてそれを記録していく才能があった。

遊地 武男さんは学者タイプ。僕たちが編集を手伝った二年ほどの間に、たちまちみことな民族誌家（エスノグラフィアー）に成長された。ご自分の本（山田、一九八六）が出る直前に早死にされたのは、くれぐれも惜しいことだった。

貴子 永美しいちゃんは、今も御元気で、この間は九七歳のカジマヤー（風車）の祝いで、オープンカーで石垣市内をパレードなさったことが新聞にまで載っていた。

遊地 山田武男さんの本を出版してから二年間フランスに勉強に行って帰った来たら、川平永美さんは、崎山村のことをずいぶんたくさん原稿にしておられて、それをドサツと託された。

貴子 何度も何度も書き換え書き換えして、おじいちゃんが漢字の練習をしたものまでみんな見せてもらった。消えてしまった自分の村のことを記録に残すためにすごい努力をされたんだなあ、と思っただ。

遊地 コピーなんかない時代の人だから、孫にも見せるといって、いくつも書き写してあった。ところが、そのひとつひとつが微妙に違うから、編集する僕らは大変。それが一冊にまとまったのが、『崎山節のふるさと』（川平、一九九〇）で、沖縄のひるぎ社が『おきなわ文庫』の一冊として出してくれた。

貴子 それ以来、毎年一回か二回、お会いするたびに、「あなたに言われたのはみんな書いてあるよ。

どうですか、いいですか？こんどは何を書こうか。ぜひ印刷して」と……

遊地 歴史の伝承のこと、行事とそれにもなう歌のこと、生活のことなんかをずっと書いてもらってきた。もう種切れになるか、と思ったらそれがそうじゃない。思いもよらない新しい発見につながる伝承を思い出されたりして驚かされる。

貴子 西表島にいたワニが、新盛波さんたちがカシの木に救われた場所のすぐ上流のマリウドウの滝壺から大雨で流れて海に出て、ついに鹿川村の人々にうちとられた話（川平、一九九六a）とか。

遊地 ここに収録したのは、九〇歳になられた永美しいちゃんが、目には見えない世界のことをとうとうと語られた記録だけれど、いつもはこんな不思議な話ばかりじゃない。

貴子 戦争末期に、西表島で難破したアントン（安東）丸という船の乗組員が、日本兵によって虐待されて、敗戦になったから誰もいない鹿川村の跡に捨てに行っただというように、けっして忘れてはならない貴重な証言も入っている。

遊地 戦後すぐ崎山村に住めなくなると、全員が離村しなければならなかったのは、牧場にいた大事な牛たちを、日本軍が機関銃で撃って全部取って兵隊の食糧にしまったからだ、ともいわれている。波照間島では、国民学校の教員になりました残置諜報部員（陸軍中野学校のスパイ）が、西表島の南風見（はいみ）海岸への疎開と、家畜や鶏をすべて屠殺することを強制した。アメリカ軍が上陸した時の食糧を絶ち、住民がアメリカ側に協力しないようにという大本営からの直接命令だったらしいんだけど、そのために、約二千人の波照間島民は、ほぼ全員がマラリアにかかり、約三

分の一もの人が無残な死をとげてしまった（石原、一九八三）。

貴子 川平永美さんも、住民への軍の横暴なしうちについて書きとめておられる（川平、一九九六b）。波照間島の人たちは、一八世紀、首里の王様の命令によって西表島崎山村への強制移住をさせられた歴史がある。いろいろひどい目にあってこられたけれど、実際にお会いしてみると、とてもやさしくて明るい人が多い。崎山村の人たちのお人柄もそうだったと聞いている。

遊地 戦争マリアの犠牲者への国家賠償請求のことは、最近ニュースでも取り上げられていた。南の島の不思議な話ということだけで読んでほしくはない所だね。辺境に犠牲を押し付けているその痛みを感じとることができるかどうか……。

お金がいらなかったあの頃 宮古郡多良間島と水納島の方々

サンゴの海の緑の島へ

一九八五年の夏、二歳になった息子とともに始めて多良間（たらま）島を訪れました。白いサンゴ礁のふちどりをもった緑の島で、石垣島の北、宮古島の南の青い海に浮かんでいます。東西八キロ、南北六キロの丸っこい形をしています。島の北西二二キロの所には、東西一・五キロ、南北〇・五キロの水納（みんな）島という小島があり、両島を併せて多良間村となっています。なんだか、屋久島と口永良部島のサイズを縮めたような感じの二つの島ですが、多良間島の方は、最高地点三四メートル、水納島の方は、ハメートルという低くて平たいサンゴ礁が隆起してできた島です。

私たちはこのとき、アフリカの森に一年余りすごした経験の中から、現在も盛んに行なわれている森の民と大河の民の間の物々交換の報告としてまとめたばかりでした。それで、聞いたお話の多くが「お金を使わない経済」の話にしばられています。毎日の暮しの中で欠かせないものと思いこんでいる「お金を使う」という習慣は、大正時代末までのこの島ではわりあいまれな習慣でした。多くの経済活動は物々交換や、労働交換のかたちで行なわれていたのです。そういう経験からどんな智慧が見えてくるでしょうか。そんな気持ちで耳を傾けていただければ幸いです。

来る人をこばまない島びとたちに会って、おいしいお酒も御馳走になることができました。滞在中、宿のお世話をしていただいた砂川長清（すながわ・ちよつせい）さん御夫妻をはじめとして、もと中学校の校長をしておられた大山春翠（おおやま・しゅんすい）先生ほか、お話をしてくださったすべての方々に深く感謝いたします。

疫病よけの祈願の行事

私たちが島に着いた翌日は立秋で、ちょうど、島では「スマフシヤラ」の行事が行なわれています。疫病がはやらないための祈願で、男の人たちが豚を殺してその生の骨を村に通じるすべての道の上につるします。残った骨で汁を炊き、炊いた豚の切り身も折りに入れて、夕方から五〇人ばかりのなおらいの宴になります。ここに家族で参加させていただいて、歌や踊り入りで楽しく島の方々と交流ができました。虫くだしになると、いつのまにか泡盛を飲まされた二歳になったばかりの息子は、すっかり舞い上がって、みんなに酒をついでまわっていました。

多良間村の概況

八月八日、役場を訪ねて村長の仲宗根玄常（なかそね・げんじょう）さんに面会し、村の概況をうかがいました。

仲宗根 多良間村は、多良間島、水納島の二つの島からなっています。人口は一九〇〇人余りですが、農地は八〇〇町歩（ヘクタール）あり、将来は一二〇〇町歩に拡張する計画です。現在そのうち四〇〇町歩はサトウキビを植えています。一九八四年度のキビの収穫は二万八〇〇〇トンほどでした

が、四万五〇〇〇トンないと、分蜜糖を製造できる工場は建てられないそうです。島の農業にとって最大の問題は、水の確保です。宮古島で地下ダムのアイデアを実現された琉球大学の古川博恭先生によると、多良間島の地下にも水は四〇〇万トン位あるそうです。しかし、宮古島のように地下にせき止めるだけで水が溜まる所がなく、全体を囲わないといけないため、予算が一〇〇億円はかかるということですが、当面はため池で対応していかざるを得ませんが、水をどうやってひくか模索中です……。

方言の発音について

多良間島の方言には、イ行の音に特徴があります。普通のイの他に「舌はウを発音する時のように、唇はイを発音する時のように」広げる音があります。「中舌（なかじた）のイ」とも言われるのですが、この文章では、イ、キ、シなど、傍点を付けて（あるいは、島の方の表記に従ってシではなくスのように）普通のイ行の音と区別しています。

男が語る多良間島の暮し 大山春翠先生のお話

大山 物々交換ということは、古くからあります。方言では「カイー」と言っています。魚と芋を換えて下さいというのを、「ヂートゥ ヌムトゥ カイワリー」というように多良間の方言で言います。

戦後、現金が出回らず、物々交換に頼った時期がありました。備蓄食糧の「ソーガーラ（カンコロとも）、つまり干し芋と魚を換えるんです。魚の種類は、タマン、バベ、イラブチ、ニバリなどです。天候がよく、大漁したときは、生魚をもってきます。農民はあまり天候を見ませんね。せいぜい台風を気にする程度です。水納島の人は違います。

水納島からは櫂で漕いだら早くても一時間半、いい風があつて帆が使えれば一時間たらずで多良間に着きます。夕方になる前にやってきて、家ごとに入り込みます。早く売って自分の買物をして帰りたい人は、アキヨダ（あきんど）とよぶ仲買いの人にまとめて売る人もありました。私たちもそういう「中間搾取者」の所へ買いに行くこともありました。

私たちが小学校の生徒のころは、今日は図画（図工）がある、書き方（習字）がある、となると、店に鶏の卵を持って行って紙を買いました。卵一個で、習字の紙なら四〜五枚、素麺なら二束と交換できました。

家で作ったアダン葉のむしろでも店の品物と交換ができました。幅は畳と同じで長さが九尺のものを一枚かかえて、あきびん二本下げて店に行ったものです。これに石油一合とお酒を一合と小型マツチがもらえます。あと、交換するものは手拭いとかですね。

暗がりの中を酒を買いにお使いにいくと、ミンムヌの話思い出しました。これは、「かつて見たことがないもの」という意味で、まあ幽霊というふうなものでしょう。また、「ピトゥダマ（psitudama）」つまり人魂が鳴く声があるといつて怖がりました。これは、今にして思えばアオバトといつ鳩がいますが、あれの鳴き声でしたね。

大正六年生まれの僕が小学生のころ、一〇回のうち現金で買うのはほんの一〜二回で、残りは物々交換でしたね。

僕らの小さいころまで、石鹼をつかう家は全戸数の半分ぐらいでした。たいがいはアク（灰汁）を使うんです。髪を洗うのは、アカバナギー（ハイビスカス、和名フツソウゲ）の葉でした。

僕は、八幡から昭和二二年に島に帰って来ました。現金が全然なくて、屋敷の周りに生えていた古木のフクギを切って酒と換えたことがあります。敷居にするから二〜三本切ってくれんかと頼まれたんです。木一本で、酒一升でしたね。こうして、お盆で先祖に備えるお酒をようやく用意することができました。先祖の苦勞のたまもの古木で先祖孝行をしたわけです。

農業を始めようにも、農具もないんです。馬車の内輪用の資材になるヤラブ（和名テリハボク）の木を鍛冶屋さんに渡して、そのかわりにということに倣い、へら、鎌を作ってもらったことがあります。こういう習慣は昭和二五〜二六年ごろまで続いています。戦前の物々交換の伝統もいくらかは手伝っていたのだらうと思います。

昭和二二年八月三一日に小学校の教員になりました。その時の給料が三六〇円でした。その当時、さつま芋がものすごく高くて一〇斤（六キロ）で七〇円もしたんですよ。

遊地 給料を全部はたいても、三〇キロしか買えませんね。

大山 そうです。食料の芋は高いのに給料が安くて、教員をやめて潮炊きになった人たちもいました。昔は先祖がやったことですから、やり方は分っています。僕も炊きました。ドラム缶をひろげて厚さ一〇センチほどの四角い鍋を作って海水を炊いて、にがりは取りません。一升単位で魚と交換したり、店でお茶、マッチ、石油、タオルなんかと交換したり……。蚊取線香というものは、当時使いませんでした。生木を燃やす、それが蚊やりでした。とにかく芋は、昭和三〇年ごろまで品不足で、すごく高かったですね。これは、萎縮病（のちにバイラスといいました）という病気がひどかったせいで、せつかく伸びても、四〇から五〇センチで枯れてしまっんです。だから、一〇坪耕しても家族の三食分しかとれないという時代もありました。

物々交換の交換比率の主体は芋でした。魚はそれを中心にして上げ下げしたんです。

遊地 いちおうそれぞれの現金価格を計算して交換したんですか。

大山 そうです。でも、端数が出た時は芋のもち主の方がフータイ（風袋か）といっていくらかは上乘せする習慣でした。

物々交換のことは、水納島出身の知念勇吉（ちねん・ゆうきち）さんに問うてもらいなさい。経験者ですから、くわしい話が聞けるでしょう。

大正八年の新築の時の贈り物

大山 大正八（一九一九）の未年にこの家を建てた時の記録が、チョーバク（帳箱）の中に残っています。ちよつとこらんにいれましょう。

祖父の大山春和（しゅんわ）が書きとめたもので、表紙には「新築之時贈物記載」とあります。誰

が何をどれだけ届けてくれたかを書き留めておいて、こんどその家の建てかえの時には、忘れずにかを届けるんですね。

私（遊地）は、その品目を拾い読みしてみました。合計七八回もの贈物が届けられていることに驚きます。違う品目だけを抜粋してみましよう。

粟二斗（アワ）
飯マグ（粟のお握り一かご）
金五〇銭（現金も贈物になったんですね）
うやし（もやしのことだそうです）
黒縄二〇尋（クロツグというヤシの仲間の繊維で作った強い縄）
茶つき二重、フカギ（蒸して小豆をつけた餅の茶受けを重箱に二つ）
豆腐一箱（切り分ける前の豆腐箱に入ったままの豆腐）
ウル一箱（ツノマタという海藻でつくった寒天）
芋一マグ（茹でたさつま芋ひとかご）
酒一升（泡盛一升）
味噌一重（味噌を重箱に山盛りにしたもの一つ）

魚一斤四〇匁（生魚八〇〇グラムほど）
カンピー一斤（かんぴょう六〇〇グラム）
茶四包（台湾茶。ひと包みの大きさは不明）
冬瓜一個（トウガン一個）
青瓜七斤（しまური。切って刺身に混ぜるものです）
大麦二升（オオムギ）
キビ一斤（キビ六〇〇グラム）
小麦一升
大豆一升
麦粉一重（麦の粉が重箱にひとつ）
素麺一斤半（ソウメン九〇〇グラム）
タコ（方言ではタクといいます）
芋クス一重（さつま芋の澱粉を重箱に山盛り一杯）

何度ぐらいつ贈られているかを見てみましょう。一番回数が多いのは現金で、一二回合計四円一〇銭が贈られています。ついで、芋が一〇回、粟飯が九回、豆腐五回、もやし三回と続きます。驚くほど多彩な物質的な援助を受けながら、この他に、労働の提供も心のはげましも受けながら一軒の家

が建てられたことがおもわれます。

ムヤイ（模合）による家の建築

砂川 島ではよく、ムヤイ（模合）ということをしします。経済的な助けあいです。家を建てる時のムヤイは特にフンパツムヤイとよんでいます。ちょっと前までは、コンクリヤー（コンクリート製の家）でもフンパツムヤイをしていました。

大山 『沖縄タイムス』の「唐獅子」というコラムにフンパツムヤイと題して書いておきました。これは、屋根葺きのユイの物資模合のことで、資材の出し前の例を少しあげておきましょう。

カヤーバナ（一間四方に三尺の高さにカヤ束を積む）現金換算五〇銭。

ススキーバナ（長さ五尺以上のものを枯葉を葉柄とともに除いて周り三尺に束ねたもの）二〇銭。

白縄（カヤ縄）一〇〇尋一〇銭。

黒縄（マーニ縄、くろつぐ縄）二〇尋一〇銭。

八合ワカサー（壺）いっぱい自家製酒（同量の水でわり二倍にしたもの）一〇銭。

出役五日（一日二〇銭）計一円。

これは、明治末から大正初年にかけてのある結いの例です。村の役番になった人々に対しては、物資を増やしたり、出勤日数をオーバーしたりして報いたものでした。

ユイ（結い）とブナビ（賦鍋）の世界

砂川 ユイとかユイマールという言葉もあって、これは、働いてあげることですが、ただ働きではなくて、必ずいつか返してもらえるものとされています。こんな言い回しがあるほどです。

ミーツヴンケードゥ ヤーフキユイユバーウース

三つ子にでも 家の葺きかえの結いをかける

つまり、三歳の子供の家の葺きかえに結いで行ってあげれば、この子が大きくなった時にならず返してもらえる、ということなのです。家を建てる時など、受ける側はちゃんと書きつけて残しておきます。

それから、ブナビという習慣があります。賦鍋とでも書きますか。例えば、今日、この土地を開墾したいとします。一人ではできないし、手間賃を払う金もない時、「御馳走とお酒をふるまうから来てもらえないか」と頼むんです。

大山 私が先祖伝来の荒れ地を開墾してもらった時、何名かに来ていただいたことがあります。その方々には、最高のもてなしをします。その内容は、あらかじめ相談して決めておくのですが、まず、

一〇時のお茶。一二時は、米か麦か粟の御飯。三時のお茶。夕方が問題です。大御馳走をしなければいけません。酒も出します。ブナビは、ぜいたくな食事にありつきにゆくのが楽しみなんです。家を崩す時なんかもこれでやりましたよ。

多良間島の女性が語る大正以降の暮し

こんどは、明治四五年から大正七年生まれの女性たちのお話を聞きました。道端での立ち話です。つきあってくださったのは、松川セツ子さん、我如古（がねこ）操さん、仲本キヨさん、兼城（かねしろ）タミさん、下地（しもじ）ヨシさんの方々でした。

松川 木に登って枝を落としてタムヌ（たぎぎ）を作りました。長さ一尺五寸に切りそろえて、直径一尺にしぼったものが、一束一銭で売れました。大正八、九年ごろの値段です。

下地 交換といっても、島から出るものだけです。芋と麦はお金に換えることはしませんでした。常食用です。麦は味噌をつくったりね。物々交換はなかつたはずと思いますが。そうそう、水納島とは魚を交換していました。大正時代までですね。焼いた魚を持ってきて、「カイワリー」と言っています。換えて下さいという意味です。魚を斤がけてもってくるので、こっちも芋を斤がけて交換します。あっちには現金といつてないでしょう、こっちにもあまりないしね。

仲本 アダン葉のむしろ一枚で換えられるものは、例えば店にある割れ米なんかは一升ありました。

下地 スビガマと方言でいいいますが、小さい寶貝も交換できました。一斤で五銭の勘定でした。だいたいマカリ（こはん茶碗）一杯ぐらいで一斤になります。

我如古 卵で交換する時は、一つ二銭という計算でした。

松川 二銭のことをイッカンジン（一貫銭）というていたねえ。大正八、九年ごろにはマッチ一つが五厘でした。方言でグリーンといっていました。値段には半銭と書いてありました。

多良間島の女性からみた物々交換 豊見本操さんのお話

豊見本 私は、明治四一年生まれです。一〇歳の年に母が亡くなって、父と兄と三人で暮していました。兄さんは帆前船に乗る人で、宮古・八重山へ往復して八重山からは建築材料や人間を運んでくる仕事をしていました。主食の芋が足りない時は八重山から芋を積んでくることもありました。

八反ほどの畑があつて、そこで芋と野菜を作っていました。粟とか大麦、小麦、ウプゲーン（タカキビ）、野菜の時期には太くなる沖縄大根をつくって、切って干したものをつくり、「カンピヨウ」と呼んでいました。

娘時代から物々交換は経験しました。良い天気なら水納島の人々が毎日来ていましたよ。こちらの芋とあっちの魚の乾かしたのを交換していました。

砂川 戦前まで水納島には、四十何世帯がありましたもんね。

豊見本 毎朝、畑へ芋掘りに行き、籠に入れて頭に載せて帰ってきます。一〇〇斤（六〇キロ）くらいは自分で持ち上げて担ぎましたよ。八〇斤は売って、「交換して」のことだろう、一〇斤ほどは

屑芋ですから豚の餌に、残りは自分たちの食べ物です。帰って来てみると、たいてい水納島の人か何人が庭で待っていました。「この家(うち)の芋は腐れていないから」といつてよく来ましたよ。来る人は決っていて、四、五人もいたでしょう。前泊港から廻ってきて、うちらがまだ畑から帰宅してないと知ると、留守番をしているおばあさんに「人には売らんでねえ」と言い残して他へ買いに廻るといような忙しい風景でした。

一人の人にみんなあげるわけにいかないから、一〇斤、二〇斤と少しずつ交換してあげるわけです。あつちもあちこち廻って、一人五〇斤から六〇斤ずつ持ってかえりました。

水納島には、うちの親戚がおりました。一五、六歳の時に、父について水納島へ行ってみたことがあります。サバニから降りる時、太ももまで海につかるんですよ。砂地ばかりの島で、早魃(かんばつ)したら芋も麦もまったく穫れないそうです。だから、水納島の人にはかわいそうに思っただけでも少し多く持たせてあげたりするんですよ。すると、あとで魚をくれることもありました。

また、ツットウ(つと)とかトウシャン(土産)といって、おみやげを持つてくることもありました。タコやクブシミ(和名モンコウイカ)や魚の乾燥したものですよ。

交換の率は、私の経験した時代には芋二〇斤に乾いた魚一斤で、今にして思うと芋が安かったような気がします。お金での値段もついていて、麦を買う人も粟を買う人もありましたよ。値段はどちらも一斤七、八銭で、戦争前にはやや上がって一〇銭になっていました。芋の方は、嫁にきてからの値段で一〇斤が一〇、一五銭でした。乾かした魚の方は、一斤一五銭から二〇銭ぐらいでしたね。

酒を買いに行くこともありました。自分の家で作った酒を魚と物々交換もしました。

豚を養っていたことがありますが、豚の仔を買う人が来て、肉と換えようねといって、肉と交換ということもありました。豚の仔一匹で肉を二五斤もらったものです。

水納島での暮し 知念勇吉さんのお話

知念 私、明治四三(一九一〇)年、戌の年に水納島で生まれました。女三名、男四名の七人兄弟です。多良間島に引越して来てもう四〇年以上たちます。

水納島での仕事ですか。女は畑をしますが、男たちは、インピイトウばかりでした。これは方言で「海人」の意味ですよ。インピイトウは、天気が破れると(悪くなると)仕事になりませぬねえ。

男の子は、一二、三歳になると竿をもって釣りに行きます。くり舟に乗って一本釣りをするのが主でした。潜りで採るものもあります。方言でモーといいますが、天草なんかがそうです。ナチャーラ(海人草)を採るようになったのは、あれは終戦後ですよ。

戦前は、台湾にも潜りに行きましたよ。台湾のサリヨウ町という所へ出稼ぎです。昭和五(一九三〇)年に兵隊から帰ってあと、二歳から四、五年の間のことでした。本船にくり舟を積んで台湾まで遠征していました。一二、三人で行って、いろいろ必要経費や親方の取り分を引くと分け前が二七円から三五円くらいしか残らないんです。天草の値段は、四俵で六円か七円というところでした。こうして稼いだわずかな現金で来年の春まで過ごすという状態でした。

徴兵検査ですか。あのころは、水納島も人が多かったですから、多良間島まで行かず、検査を水納島で受けていました。特務兵として四九日間、熊本で訓練を受けました。

現金が何に必要だったかというと、水納島から多良間島に漕ぎわたり漕ぎわたりしては食料を買わないといけません。また、行事事の酒も必要です。水納島には、ソーミンガマやテヌグイガマ（素麺や手拭い程度のもの）を扱う所はありましたが、店というほどのものがないので、たいていは多良間島で買わないといけなかったんです。

店では現金が中心でしたけれど、海産物とも換えました。チョウセンサザエなんかのソナ（貝類）をお米やお金や素麺と換えました。この貝は、八個で一斤（六〇〇グラム）ありますが、一斤で一銭か二銭ぐらいにしかありません。タカンナアカフチャ（高瀬貝、和名サラサバテイ）は、一斤で一三〇〜一四銭、タカンナツスーフチャ（広瀬貝、ニシキウズ科の一種）と夜光貝は一斤七〜八銭というところでした。夜光貝は大きいから、これ一つで素麺の一〇束くらいと交換できたんじゃないですか。

冬は寒いから、海に入ることができません。一本釣りだけです。釣った魚は集めて（燻製状に）焼いて乾かして、ひとつ一斤の束にして、芋（さつま芋）と換えました。交換の比率は、乾魚一斤に芋が一〇斤で、これは年中変わりませんでした。生の魚の頭と腹わたを取って乾かしますから、生の四五斤が乾魚の一斤になります。取った頭は自分のおかず用になるわけです。タマン（和名ハマフエフキ）のような大きな魚を芋との交換用にして、ニバリなんかの小魚はおかず用にしていました。

タコやクブシミ（和名モンゴウイカ）は、ゆでてから火にあぶって堅くして売りましたが、これは一斤二五銭でした。タコは生の六斤が乾かすと一斤になります。クブシミはひとつ一五斤ほどの大きいものが乾くと四〜五斤です。乾かした魚はおいしいですよ。何よりの保存食ですし、おつゆに入れてもとつてもいだしが出るでしょう。

生の魚を現金で売れば、一斤一〇銭ですよ。イラブチャーなんかの魚なら、ちょっと値が落ちて八錢ぐらいというところでした。クルゲという小魚は、一斤五銭です。一斤八銭でも一〇銭でも、魚が生で売れるなら乾かす手間もいらぬし、楽で良かったんですが、冬は天気が悪くて多良間島に渡れないことが多かったので困りました。

夏はほとんどサザエとりでしたね。朝めしとして芋を二つか三つ食べたなら、浜に流れついた（漂流物の）太い竹を浮きとして引っぱって海に出ます。採った貝を入れるアミディリ（網かご）をその竹に付けます。舟は使いません。深さ七メートルから一五メートル位の所を主に潜るんです。チョウセンサザエなら一〜二メートルの所にいますが、高瀬貝なんかは二〇から三〇メートルも深いところにいるんです。

貝を採りに潜りに出たら、朝の八時から夕方の四時ころまでは泳ぎ通しです。その間、昼ごはんも食べられませんから、本当に腹がへりますよ。私のいとは、海で腹がへって死にました。本当の腹ペコのことを方言で「シユクアキ（shukuaki）」と言いますが、海でこうなると力が抜けて沈んでしまいます。

冬の雨降りの日には、海辺に生えているアダンの葉でむしろを編みます。水納島のむしろは、多良

間島のものより一割は値段が上でした。材料がいいんです。水納島のアダンは葉が長くて刺が少ないですから。長さ九尺で一枚が二五銭から三〇銭でした。主に宮古島に出荷されるんですが、穀物を干したり、畳がわりに敷いたり、タラマムツスー（多良間むしろ）の名前で親しまれたものです。

水納島では、夏の今ごろまでに「ンーガーラ」（干し芋）を多良間島で入手して蓄えておくものでした。麦や粟も蓄えておかないといけません。水納島でもパダカムギ（裸麦）ぐらいは作っていましたから、それも収穫して蓄えておきます。裸麦は、一度作ったら、その跡を四、五年アバラシ（荒して）土地が肥えたらまた作ります。こうして休耕しておく土地を方言で「トゥマリズー」とよんでいます。

食べるものがない時は、蘇鉄の実を灰汁で炊いて毒抜きをして食べましたねえ。灰汁は、方言でツケウスギーとよぶシャリンバイの木を焼いたものを利用しました。その他に、食べるものは、「ユリ（百合）」の根です。これは方言で「ンゲーリ」といいますが、苦いものという意味です。

水納島では冬の暮しが苦しかったですね。夏はなんとか過ごせるのですが……。それでも多良間島に畑を借りて作るというような人はありませんでした。

多良間島に魚を持ってきて芋と交換するときは、自分の知っている家ばかりをまわったものです。「交換してください」というと、どの家も「いらっしやい、いらっしやい」と歓迎してくれてねえ。今はあんなこともないからなあ……。うちにはそういうお得意が四、五軒ありました。こういう相手を方言ではウトウダとかウトウダガラといえますよ。

砂川 ミツサイウトウダというのが本当です。

知念 不漁の時ですか。それは困ります。不漁を方言でフドウキといいますが、イシユパギ（磯はげ）ともいいます。

砂川 そういう時は、前もって掛けをしておいて芋を先にもらい、後で魚が捕れた時に届けるんですよ。掛けのことを方言でシャガラスといっています。逆もありました。今日は漁が多かったからといって、先に渡しておくんです。一週間か一〇日のうちには芋をもらいに回ってきます。漁がある時は毎日のようにやってきましたよ。

知念 水納島からは四、五名でくり舟に乗り込んで櫂と帆で回りました。帰りに二五〇斤（一五〇キロ）も芋を満載して、海のあい中で転覆したことがありますよ。

砂川 女が魚をバーキ（目の粗い籠）に入れて「チーケーワリー（魚をお買いください）」と売り歩いていましたよ。

知念 焼いた魚は、一斤ずつになるように束ねて、一度に一〇束もって来ます。どれも同じように計ってあるのに、買う人は、少しでもいいのを選びたいとかき回すでしょう。すると、束が崩れたり、魚が欠けて斤減りしたりしてねえ。今思い出してもこれがきつかったですよ。

お得意さんへのおみやげは、焼いた魚の一、二斤です。それに対するお返しというのはありません。農民からのみやげというのは、芋でなくて、ふだんあまり交換しない味噌とか粟とか麦とかでした。

水納島から来る時は、弁当をもたずに来ます。ウトウダの所で食べられるからです。海がしけてき

て帰れない時はその家で泊まりました。この家のおばあさんは、私を実の子供のようにかわいがってくれました。

芋をくれるのは、女の仕事でした。中には例外的に男がでてくる家もありましたが。あるおじいさんの家ですが、ちょうど一〇斤入る籠を作ってあって、そこへ芋の子までもおじいさんが入れて、きちきちの一〇斤でくれるという家がありました。こんなにきっちりやる人は、カカイスゲと呼ばれますよ。けちという意味です。

魚が捕れない場合、芋を現金で買ったこともありませう。逆に魚を現金で売ることもありませう。給料をもらっている教職員などはみな現金取り引きでした。

結婚は、水納島の人はやはり水納島の人どうしというのが多かったですね。たまに水納島から多良間島へ嫁にくる人はありましたが……。水納島へですか？「仕事がついから誰があんな所へ嫁に行くね？」という感じでしたな。水くみ一つにしても、潮水しかありません。薪とりにしても木が少ないから。

こつちに引越してきたのは、食いものに困ったからです。こつちで魚を一斤か二斤捕れば、すぐ芋と換わるでしょう。今、あつちには三軒しかありませんよ。

水納島では、鍋に水をかけておいてから、銚で魚を突いてくるということができました。カシアミ（かせ網）という木綿の網に追い込んでもう捕りました。今でも家内を連れて海に行くことは続いています。

お話を聞き終えて

わずか四泊五日の滞在でしたが、やさしく受け入れていただいたうえ、いきいきとした物々交換の経験者の方々のお話を聞くことができました。そこから見えてきたのは、隣りあう島の人々が違う自然の立地を生かして、漁業中心の島と農業を主とする島にわかれて互いに支えあう智慧の世界でした。現金が手に入らないでもなんとか必要なものを満たすことができたあの頃。現在のわたしたちの暮らしにも、ここからいろいろのヒントが得られると思います。

与論島は、奄美諸島が復帰した一九五四年から沖縄が復帰する一九七二年にまでは日本の最南端の国境の島でした。年に一度、沖縄島の北の端の辺戸（へど）岬とかがり火をたいて交信しあったという与論の人々と沖縄とのきずなを学びたいと思って、私たちが那覇から飛行機に乗って大島郡与論町を訪れたのは、一九八九年の四月はじめのことでした。小学一年生だった息子は泊めてもらった民宿「星砂荘」の子どもたちと遊び、私たちは、宿のご主人に大盃で黒糖酒をふるまわれました。あいさつの言葉を述べ、必ず飲みほしてしずくを受け、その掌を頭に置きます。これが、与論献奉（けんぼう）といわれる親しみをこめた儀式です。お酒をまじえて宿でいろいろのお話をうかがいました。まず、役場で紹介されて、郷土史家で『奄美文化の源流を募って』（道の島社）の著作などがある野口才蔵先生の御教示を受けました。ちょうど『与論町誌』が出たところで、たいへんよい手引きになりました。また、たくさんの民具と方言を収集して『与論方言集』（与論民俗村発行）をまとめておられる菊千代さんにも味わいの深いお話をうかがいました。ここでは、宿の向かいの酒屋さんのおじいちゃんの佐藤為宜志（ためぎし）さんに二日間わたってうかがったお話を紹介しましょう。

かぞえ年で九〇歳になられるおじいちゃんは、たいへんに話好きでいろいろと話してくださいました。方言のこと、子どものころのこと、青年時代の生活、沖縄とのかかりというような順序で話をうかがううちに、家づくりのこと、そこに生まれる神様のことにも話題がおよびます。

与論の言葉が懐かしい言葉になるよ

与論のことは面白いよ。ゆっくり習えば与論の言葉が懐かしい言葉になるよ。あなたは、与論ことばも聞かせ、与論民謡も歌えとおっしゃるが、わたしのことをどこで聞いてこられましたか。

向かいの民宿で紹介されたんですが、わたし（遊地）のじいさんが大島の瀬戸内町の西阿室（にしあむろ）の生まれなもんですから、奄美の島々のこともいろいろ勉強したく思っています。

ああ、そうですね。あなたさまのねえ。私は、名瀬あたりはあまり行ったことはないんですよ。この方言で、「ウレターヤ イダカラ ワーチャンガ」といいますが、どういう意味かわかりますか。あてずっぽうですが、「あなた方は、どこからいらっしゃったか？」ですか。

ああ、よくわかるね。はい、というのはいん、うやまって言う時はオー。与論島は、もとの六か字が後に現在の九か部落になっています。各字ごとに少しですが、方言が違いますよ。与論ことばはやさしい言葉よ。鹿児島県の頰娃（えい）の言葉は、わかりにくいですねえ。スズメのさえずりのようにチリチリして聞こえます。反対に種子島の言葉は、ゆっくりして懐かしい感じがします。わかりやすいのです。

子ども時代のこと

今日は、まずおじいちゃんの子ども時代から青年時代ぐらいのお話をうかがいたいんですが。

わたしは、明治三三年の旧六月七日に生まれましたが、弟と同時に届け出されて、戸籍には二つ年下についていたので、二〇年後によく年齢を訂正しました。女四名、男五名のきょうだい九名のうち、私は五番目で、三男です。名前は親がつけました。

一三名の家族で、家の広さは三間と三間の九坪の母屋と七坪の家がありました。どちらもガヤ葺きですよ。そこに私なんか男の子は表の方の、じいさんが休んでいる所に並んで寝ました。

主食は、さつま芋と麦と米でしたが、子どもころの楽しみといたら、一〇日から二〇日に一回ぐらいソーメンを大鍋に炊いて、家族一三名が集って一生懸命食べることでした。昔は、ソーメンが御馳走でしたが、今わたしなんかあんまり食べたいと思いませんね。正月一五日にはウンニーマイといって、芋を練って、粟なんか入れて食べました。子供にはこれを食べるとミヤンチック。これは昼は引きこもっているフクロウですが。 なるよと威したものです。

海の水を汲んできてそれで味をつけておつゆを炊いていました。お茶は自分でつくる人もよそから買う人もいました。昔は力まかせに木をこすり合せて火を起こしたと聞いています。あとは火打ち石でタバコを吸いました。わたしのころはもうマッチでした。枯れたアダン、ソテツ、木などを集めて、家の一画に溜めておいたものです。

子どもころのもうひとつの楽しみはムヌヌバナシ、つまり幽霊の話と修身のえらい人の話でした。

父親は元治元（一八六五）年の生まれです。うちは父の代から佐藤という姓をなのっています。明治八年に戸籍法が改正されて、その時初めて上の名前（苗字）として佐藤がついたんです。佐藤がいか「保（たもち）」がいいかと選ばしたんだそうです。「保」は一つの字だから、二文字の佐藤がいいといって佐藤になったそうです。その時には色々な名前があったそうです。竹の生えたところでは竹下とか、山のところでは山下とか。本人から、「こうしてください」と言わん人はそんな風に地名のようにつけられました。自分でいうた人は富岡とか内田とかいろいろあります。

石板と石筆

この辺ではわたしのお父さんひとり学校にいました。城（グスク）集落のえらいサムレー（侍）の家に二、三か所学校があったんです。その学校では一〇時から十一時ごろまでは牛の草刈り、あと一時から一二時に読み方、書き方、ソロバンをやったそうです。

ここは昔は、山道でねえ、ガヤ（茅）、ソテツに荷物があつちこつちひつかかるような曲がりくねった道でした。ウチクイという風呂敷に包んで通いました。わたしらは、小学校一、二年まではイシセキバン（石板）とイシセキヒツ（石筆）を使いましたよ。与論尋常小学校六年を卒業しました。そして、学校を卒業したら親の手伝いをしました。かぞえて二一歳の徴兵検査を徳之島で受けました。あの時は、マールンという帆船が迎えに来ました。

わたしの同年配には普通語（共通語）がわからん人が多いんです。七〇から上の人には普通語を知らんじいさんばあさんがいます。あの時は義務教育といっても自由じゃったよ。学校歩かないで（学

校へ行かないで)無学の人もあったわけです。

代々の農家

うちは代々農家で、わたしで二三代目の子孫。西区と朝戸(あさと)の間の麦屋にずっといたんです。それからキヌ、いまは高尾(タホー)と言っている所、そこに行つて、そこから今の本家につつて、わたしはそこで生まれました。財産(土地)も一町歩ほどありました。田があちこちに四反歩ほど点在していました。残りはパツタイ(畑)です。うちのように一町歩も財産があるのは、島では多い方で、他の家では二、三反歩がせいぜい。一反歩という貧しい家もありました。そういう貧しい家では、米を炊くのは盆と正月ぐらいのほんとうに限られた日でした。

田んぼは、本家には俵で一〇俵ほど穫れる田がありました。収穫の時は鼠の番をして田のそばで寝ていました。上納蔵が三つありましたから稲の束はその蔵にあげておいたんです。税を納める時に蔵から降ろして臼ですつて一升、二升と米にしてね。それが税金の代りでした。

畑の広さは「何合時き」と数えました。時く種の量で言つんですね。麦の場合、一斗時きが一反歩と決っていました。昔は五勺から一升まで櫛がありました。田の広さは尺などの長さなんかでは測らなかつたです。

男には皆に平等に土地を分けてやります。女にも芭蕉布を織るためのバシヤヤマ(糸芭蕉を切る畑)として少しずつ分けます。わたしの娘は鹿児島に嫁にいきましたが、島の外に出る娘にはバシヤヤマを持たせられないから、代りにお金の五〇万円くらい持たせました。それからウトウム子といって夫を持つたら筆筈、蒲団のひと組などを持たせました。嫁にいく時にもたしてあげるといふ意味です。

豚と田うなぎ

家には、ウシが一头と、ブタが一头いました。どちらもメスで、仔を産ましていました。わたしが青年から壮年の時代まではブタを二株か三株かで共同でつぶしていました。トウシノヨル(おおみそか)には豚のスイモン(吸い物)をつくって食べました。ソーメンと豚肉を供えるのが島の習慣です。

田にタナギ、田うなぎがいました。焼いて食べました。年中水がある所に小さい魚が集っていました。海の魚ウンヌイユーに対して、田の魚はターヌイユーといっています。

海が好きで

農家は朝五時から五時半までに起きて六時までには御飯を食べます。食べたらずく畑仕事をしながら潮のひくのを待ちます。たとえば一〇時に潮がひいたらすぐ浜へ網と水中眼鏡を持って行きます。友達ももう潮の引く時間満ちる時間を知っているから、いつせいに浜に集ります。

小学六年を卒業したあと、わたしは海が好きでよく行きましたよ。友達、兄さんたち、また二〇、三〇歳も年上のおじさんたちがよくわたしをかわいがってくれました。自分のことですが、わたしが正直であつたので、かわいがられたんです。海をあちこちに連れて行かれました。沖永良部島のクン

ゲーダキという和泊の北の方にも八日くらい、五名、六名でいっしょに魚捕りに行きました。小屋を借りてただで寝泊まりしました。そのじいさんが「おい、君はわたしの所にきて眠りなさい」というので、じいさんの家へ行って眠ったんですが夜中に寝ることを言って笑われたことがあります。

追いこみ漁に五名、六名と連れ立って行きました。たて網を入れてボタンボタンと泳いで魚を追いこんでとるのが好きでした。毎日魚を捕ってきておかずにしていました。

おいこみをする時は夏、八月ごろですね。暑いところが潮がいいので魚もよく捕れるんです。旧暦で一三日から一八日までは一泊が三時間くらい前浜から茶花の沖まで真つ赤に出る。この百合が浜でも割り舟が二隻ぐらい出入りする溝を残して、大型の車が二台並んで通れるくらい出ます。この時に、おおかた潮が引いて浅くなる時に行って追いこみをします。それから、昔の人は時計がなくても、太陽さえ見れば時間がわかったんです。それから、海の潮を足で踏んで、「今日の潮は旧の何日の潮だから」と考えて、潮の深さで時間がわかりよかったです。

青年たちは自分で網をつくってやっていました。木綿の糸で、大きい、高い網を作りよった。糸は直径二ミリぐらい、指三本の目で編んでそれに、自分で錘をつけ、薄い木の板に穴をあけて浮きをつけました。そしてその下にはひもをつけてひっぱり、石をつけて下げて網を立てるよつに工夫しました。そして海の中で、魚を追いかけてきてかかったら潜って行って、その網を二回巻いてそして起き上がって、呼吸をかえて、魚を網といっしょに舟で引き上げます。それをまたおろしてりっぱに直して、むこうがたも舟にのせてくるんです。りっぱな魚の道があるからそこを三名ずつでだんだん追ってきます。潜るのが上手なひとが二人ならんでいるから、魚がきたらさつと潜って捕ります。昔は潜り方もちがいました。昔はウンハガン（水中眼鏡）をかけて息を吸って大きく潜り、あがってきてふーっふーっして息をついた。眼鏡は水ももらえないものですよ。

毎夏沖繩へ

沖繩へ行かれたことは？

はい。初めて行ったのは、亡くなられた昭和天皇様が皇太子の時代にイギリスに行かれた（一九二一）年の夏です。ここから見えるアダバナレという離れ小島がありますが、あそこにも小学校がありました。その青年が中心になって記念の運動会をやった時でした。その時は、馬乗り体操もありました。今の組み体操のことですね。歩き競争や相撲もやりました。それを見てそこで一週間すごしました。それから、おじさんたちに連れられて、ひと夏に一週間ずつ、直名真（ギナマ）、奥（ウク）、伊江（イイ）、楚洲（スシ）、我地（ガチ）、安田（アダ）、安波（アハ）、川田（カーダ）、平良（テララ）。この九か部落を今年はどこへ行くかといって一週間ずつ行っていました。二二、三歳でやめるまで、国頭（沖繩北部）の九か部落を一週間ずつ見て帰ったわけですよ。

沖繩に行った時に食べるものについては、魚の汁と御飯だけでした。女は連れていきません。行っても向こうの島の人とはあまり交流しませんでした。酒も飲めと言わんし、それにあの酒は黒糖酒に慣れた者には飲まれないんです。今ここに沖繩泡盛のつくりがありますが、これは後から来たもの

です。

今なら旅費をもっていくところですが、そこを見物がたら追いこみ漁をして魚を捕って、それを売って宿賃をつくったんです。宿は決つていなくて、行ってからよさそうな所を頼むわけです。宿といっても、たいていは物置小屋です。雨の日の薪用に山の木を切ってきて束にして積んである薪小屋を借りたのです。方言でクラと言っていました。捕った魚を小屋の主にあげれば、そこを借りて薪もいくらでも使いなさいといつてくれるんです。タキヒチン（薪賃）として魚をあげるんです。そうやって一週間ずつ滞在しました。泊って食べる米はトーマイ（唐米か）という味のないサラサラしたお米が安かったのでそれを買いました。自分たちが持つていった小さい鍋でそれを炊いて食べました。必要な現金は魚を売って手にいれていました。

こちらには糸満の漁師は全然こなかったです。沖繩の人が二、三歳の子供を金を払つて借りていくのは見ました。昔は親の生活が貧しかったから。

いわゆる「糸満売り」ですね。

交際と結婚

伊平屋島に向かった岩の所に五、六名座つて男女で遊びました。夕方八時に御飯食べてしまつたら一二時まで歌して遊んだ人もありました。

木綿糸を買つてきて、沖繩から藍を買つてきて、糸を蒸してかすりの着物をつくりました。かすりの着物をトウイキギヌといます。一番いい服を男女ともチュラギヌといます。

結婚の時に夫につくつてあげる着物、フトウムチギヌ（意味は夫を持つ着物）というのがありました。結婚の時には、筆笥か、それが買えない時にはイベという長もちのようなもの、そして、バシヤヤマ（糸芭蕉の畑）をもたせてやりませう。親が財産として分けてやるものです。さつきもお話しましたように、バシヤッタイといつて、お金で分けることもありませう。ナチクダーといふ身につけやすい着物もありませう。

ものの値段

あの当時はそのトーマイというおいしくないお米が一升で、さあ二〇銭だったか。子ども時代、卵ひとつが二厘。厘というお金はごらんになつたことがないでしょうが、穴あき銭でした。それから、当時の値段で魚一斤（六〇〇グラム）が一〇銭から二〇銭ぐらいでした。当時は物価が安かつたですよ。魚の種類によつて値段は違わなかつたんですね。追いこみ漁の魚だから味もそう変らなひです。焼酎が一升で二〇銭ぐらいでしたか。

仔豚も売りましたが、一頭二円から三円でした。これは計りにかけないで、見込みで値段を決めるんです。与論島内の人が買いにきました。

沖繩の国頭からは牛や豚を買いにきたり、またこつちから持つていつたりしていました。わたし等の年配ではバクリヨウ（博労）はしていません。

物と物の交換ですか。そういうことはしなかったです。すぐお金で売って、欲しいものはお金で買って。滞在が一週間ずつでそう長くはなかったですから。

わたしが昭和十九年に月二〇円が区長の給料でした。米一升ではいがかと言われましたが、わたしはお金を選びました。一番後では一八〇円の月給になりました。明治のころまでは米一升が人を使う時の月給でした。

わたしが少年時代は自分の親戚や近所のひとを頼んで畑を打ったりいろいろな加勢する時はただで頼んでありがとうといって昼御飯、夕御飯、焼酎を吞ましました。ダリヤミ（疲れ直し）をしてもらいます。ただで頼んだんですよ、知っている人だから。女の人なら夕御飯の代りにおいしいお茶うけなんかあげてね、これは気持ちですから。

戦争中の暮らし

昭和十九年四月、各字から五、六名ずつが出て、ひと月ずつ徳之島に行って飛行場をつくりました。奉仕隊といっけいきました。朝ごはんには天井が映って見えるようなお粥を炊いてね。

菊千代さんの『与論方言集』に「ティンジョー ハガ マイ」として、天井の影が碗に映るような水っぽい粥ということばが載っていますね。

そうそう。昼は小さい、虫つきのまじった芋を煮たもの三つぐらいでした。わたしは体が小さいから一番ちいさい芋をもらいました。夜もお粥で、おつゆがつかますが、カンダン（キャベツ）の堅い下葉に牛の脂を入れたものぐらいです。

昭和十九年七月に、与論中学校が接収されて、五三名の兵隊が駐屯してきました。ここは空襲だけでしたが、飛行機が二つずつ並んで襲ってくるのがきつかったです。与論島では一〇戸ぐらい焼けました。この同じ組内でも三軒の家が焼けました。そして、B29がずうつと北の方へ飛んで行くのがよう見えよかったです。

わたしが、二度めの奉仕隊に行くために船に乗ろうとしていたら、その時の村長さんで金井という先生あがりの人から与論村の区長になれといわれました。わたしなんか、尋常六年を出ただけの無学でとてもできません、といいましたが、「鳥から出るもお国のため、残るもお国のため」と諭されて、小麦粉一袋といっしょに船から降ろされました。三日後に区長の辞令が出ました。戦後は、アメリカから毛布などもただで配付されました。これは組で分けました。不足の時はくじ引きをしました。区長の仕事としては、道路掃除をさせることと屋敷の清潔検査が毎月ありました。

昔の農業・昔の稲

稲作は、昔はね、前もって九、一〇月には田のすき換えをしてどろどろになるまでやりました。フーダイという鋤で梳きました。水が漏らないようになります。ターシキフナシ（田をすきこなす）といました。

稲は、旧正月がすんだら田植えをします。男も植えます。刈り取りは六月から七月ごろになります。

サトウキビの刈り取りは旧の二月から三月ごろです。

収穫したら、藁を編んで俵をつくって、籾を三斗ほどずついれよったです。俵が多いうちは家の表の真ん中に積み上げて、家族がその周りに俵を抱くようにして寝ました。鼠を防ぐためです。うちの親は毎年俵の三〇俵ずつ米を作りよったですね。

高倉は、ここではジョーノグラ（上納蔵）といいよったです。ここから稲を引き下ろして月給を払いました。

籾摺りの歌がありました。二人で両側から臼を引いて回転させて「モミスリースリー」と歌ったものです。

米を搗いて白米にする時は、歌のように相互にことわざを一句ずつかけていきます。イヒ、イヒと相の手をいれて。「うちだせ うちだせ 誠の言葉を うちだせ」とかいいながら息をあわすんです。

昔の稲は、ヒゲの長さ二寸弱、高さはわたしの背の高さあるかありませんか。熟したら竹のクダバシ（管箸）でこき落とします。センバコキが来た時は、ハニクダ（金管）と呼びました。

昔の稲の品種名ですか。くわしいことは忘れましたねえ。そうそうクロフ（黒穂）というのがありました。これは糯米でしたからあまりたくさんはつくらなかったですよ。

献奉の由来

酒を方言でサイといいます。正月には、男も女も三つ重ねの大盃で酒を飲む習慣でした。方言では、ミカサビザイ（三つ重ね酒）と呼んでいましたが、この昔からのしきたりを、教育長をしておられた益田元甫（げんぽ）先生が、与論献奉と名付けて、よく話をしたり、物に書いたりして、今では、盃を回す習慣を献奉と呼ぶようになっていっていますねえ。

焼酎は自分で炊いていましたから。サクバという所に里小屋を建ててこっそり酒をつくりました。その後沖縄焼酎を商売人がとって売るようになりましたが、こっちの黒糖酒よりも度数が高かったです。焼酎がはいつたオキナワドゥクイ（沖縄とっくり）を正月前に一斗買って来ていました。こちらでも酒はつくったんですけれどね。家の床下には焼酎を炊いた道具がありますよ。麹を入れて夏なら一週間、冬は七日から一〇日ほどかかります。水を入れ、砂糖を入れて炊きます。蒸留した一番目に出てくる酒は火をつけたらパツパと燃えますよ。これは、アワモリといいます。二番目もようやく燃えます。三番目をとって一番目、二番目と混ぜます。もし四番目のも混ぜれば二五度ほどになります。これは田植えのダリヤミ用に飲みました。焼酎は年に一回炊いて詰めておきます。一斗とっくりぐらいのものに入れます。焼酎の免許はとって三〇年ほどになります。

家を建てる時

三〇歳ぐらいの時に、分家しました。本家は曲った道をたどっていけば一〇〇mほどはなれた所にあります。大声出せばとどきますけれど。自分の家をもってからは、青年時代のように沖縄へ出かけ

ることはしませんでした。

わたしが分家して家を建てる時の話です。野口というボージ（坊主、神官のこと）をお願いして儀式をするんです。まず、ここに家を建てようと思うまわりの四つの隅にデーク（ダンチクというイネ科の植物）を立てて注連縄をまわします。その四つの隅に三本ずつ線香を立てて四か所同時に火をつけます。それが全部きれいに燃え上がればそこは上屋敷、倒れるとだめ屋敷。そんな時にはそこから引き返してまたどこかに建てて、今度うまく燃えあがれば、そこが上屋敷になります。わたしの場合はここの空き地が上等の屋敷だったんです。

ボージは線香を並べて立てて、トートト、トートト、トートトとお祈りしてから、そこをボージが線香の燃えつきるまでついてまわるわけです。で、それが倒れなかったので、「はあ、上屋敷」といいました。

その四隅に囲まれた場所の真ん中でなくて、少し左側に寄せた所に門を作ります。門からまっすぐ家に入るのはよくないといえますね。だからごらんさい、この家も台所の向こうが門になっています。デークを立てて決めたんですよ。そしてここがウマヌホー（午の方）といってまっすぐの所になります。ウマヌホーに向けて家を建てます。だからごらんさい、ここの住家はみんな南の方を向いています。出入りの都合で東向きになっているところもあるけれど、北向きの家というのはぜんぜんありません。北はグシヨ（後生、あの世）の方角です。北を向けるのは、グシヨヤー、つまり墓場なんですね。

家の表の一番前には神棚があります。これは、ジヌカミダナ（地の神棚）とか、ジヌカミドゥク（地の神床）といえます。それとは別にカミドゥク（神さまの床）をつくります。昔も今も家を建てるときには必ず二つ作ります。ジヌカミとは地面の神様です。そして、ジヌカミが家の神様を生まれさせてくださるわけです。

あたらしく家の神様が生まれる時は、ジヌカミに「ここで、良か所で生まれたから良か成功させて下さい」と島言葉でお願ひしてここに祀ります。最初は神棚にまだ神様がおられないから祀らんわけです。オヤカミがあるところに子が産れた、孫が産れた。成功させて長生きさせてくださいとここから祈るんです。

デークがきれいに燃えて上屋敷となったら、最初に、そこに供えた時にはそのジヌカミをたかめる、おがむわけです。その次には自分の先祖を。さっきも言いましたように、家には必ず床を二つ作ります。向かって左がウフトゥクと言って大きな床を低く作り、向かって右手には、トゥクガマ（小さな床）を少し高く作りつけます。両方あわせて二間の中に作ります。どこの家でも、たとえ祀る先祖がなくてもこういうのをつくっておくわけです。分家したらそこに住むでしょう。子供をワラビ、大人をウフピトウといいますねえ。だからウフというのは大きいということですよ。

ガジユマルをグシヨバナ（後生花）といいます。そして、十五夜のシヌグの祭という時には子供が家を抜つのにこの木の枝を振って使ったですね。魔もの除けには、昔はデーク（ダンチク）もよく使いました。

建材は国頭から

この島には木がありません。モクマオウの木は二〇年前に来たものです。わたしが小学校へ通っていたころはまだ道を歩いて身体に触れるほどは木があつたんですが、それが畑のじやまになるからと切り倒されて、今ではほとんどありません。いずれにしても、建材になるような木は与論島にはありません。

使う材木は、イク（モックク）などです。材はみんな沖繩からです。材木は与論島にはないですよ。だから、かならず沖繩から持ってこんと家は建てられません。わたしが小さい時はくり舟で行った。前もってお願ひしておけば山原船（ヤンバルシン）で持ってくる場合もありました。また、むこうで材木を卸して商売する人もいたのでそこから買うこともありました。わたしがくり舟で行った時は、三人くらいで行きました。漕ぐのは一人でも漕げるけれど、材木を乗せたり降ろしたりするから。こちらの人は近いから国頭の北の端の奥の部落へ行きました。行ってから、山の木の係に頼んで切ってもらつたんです。また材木をあらかじめ切つてちゃんと準備しておいて、それをひとつの商売みたいにしてる人もいましたよ。

材木は、わたしより前の代の方は交換もしていました。国頭から豚買い、牛買いに来たので、その人に、家をつくるから材木を持ってきてくれと頼むこともありました。しかし、大方は現金だったな。わたしのころにはもう現金ばかりでした。

大東亜戦争の後は、南部地区と北部地区に別けられて鹿児島へは密航しなければいけないことになりました。藤田と永という二人の人が、くり舟で国頭の奥へ行き、材木をとってきていました。これは、昭和二九年に奄美が沖繩と分けられるまでは続きました。また、奥あたりから髪をきちんと鬘つけ油で整えた人が来ていました。商人というよりも、知り合いに頼まれて材木をもつてくる人です。皮をはいで角材にして、何尺と測つて切つたものを持ってきました。

舟づくりも沖繩

くり舟は、大きいよ。もとはマーキといって大きな木を彫つてつくりました。マーキとは、特別の木の名前でなくて、普通の木という意味です。沖繩の人が造りました。それを沖繩で買ってきたのです。のちには板で造つて油を塗つた舟が出て、さらにイチユマンブネ（糸満舟）という軽くして漕ぎやすい舟も出ました。与論島には、自分で舟を造る技術はなかつたんです。

どこまでも正直に

わたしは、区長の仕事を昭和一九年から昭和二八年まで一〇年間勤めて、その後は長く民生委員をしました。その表彰状をこうして見える所に置いてあるのは、自慢のためではなくて、子どもや孫たちに、お金にならないようなことも大切にして、どこまでも正直に、人から信頼されるような生き方をしてほしいと願つておるからです。

お話を聞き終えて

佐藤為宜志さんは、お店の来客の応対をしながら、実に根気よく熱心に話あいてになってくださいました。その後ごぶさたを重ねているうちに、一九九三年の二月二十五日に九四歳でお亡くなりになりました。つつしんでご冥福をお祈りいたします。下原稿を、為宜志さんの娘さんの才子さんと同じく麦屋のお生まれの野口才蔵先生に見ていただき、方言を中心に多くの聞き間違いをただすことができました。トウ・トウガナシ（ありがとうございます）。

屋久島へ魚を捕りに 南種子町下立石・立石助也さん

屋久島に一番近い南種子町の中でも、小瀬田（こせだ）あたりが真正面に見えるのが西之（にし）の西海（せいかい）地区です。一九八五年の二月末、そこをひとり雨に降られながら歩いていて、平野の牛乳屋さんの軽トラックが拾ってくれました。降りる時にいただいた一本の牛乳のおいしかったこと。その足で、海辺の村・下立石の長老のひとりの立石助也（たていし・すけや）さんを訪ねました。おじいちゃんは、屋久島との交流や物々交換のことを尋ねる私に、「まあ、そうあせらずにとばかりに、ゆるゆると言葉を選んで語りかけられます。そのひとつひとつに深い味わいがある、今でも時々、あのゆったりとした語り口を、自分の舌の上でこるがして楽しんでみることはあるほどです。

昔のことを聞いて何になりますか

（遊地）こんにちは。このあたりでの昔からの生活のようすや、南種子でも屋久島に一番近い場所ということで、屋久島との交流のことなどをつかがたいのですが……。

あのなあ、昔のことを聞きたいというて、たくさんの方が来られますが、費用も時間もかけて、そんなことをこんな年寄りに聞いてみても何かのたしになるかどうか。私はいつも心配になるんですよ。

その時間とお金で自分の生活を助けることを考えられた方が良いんじゃないでしょうか。

島々の交流や物々交換の歴史を勉強する意味

はあ。(しばしの絶句の後、気をとりなおして)「助言、どうもありがとうございます。今、日本の田舎は、元気というか活力を失っているところが多いと思います。それは、お金と仕事を求めて、若者が都会に行ってしまったからではないでしょうか。お金の魅力というのは、世界中どこへ行っても大きなものですが、私がしばらく過ごしていたアフリカの田舎でもそれは同じことでした。でも、昔からの物々交換の市場をもっている村々では、うまく智慧を働かせて、漁民と農耕民が手をつないで、お金にたよらない関係をつくり上げるのに成功しているのを、私は見たんです。これからの日本のためにも、そうした智慧を掘り起こしていくことはとても大切だと思います。ここに、私がそういうことを書いた文章がありますから、よろしければごらんください。

……物々交換市ではけんかや盗みなどはめったに起こらない。毎回一〇〇人ほど集まる参加者はほとんどが顔見知りで、現金取引の市にはない親しみを帯びた雰囲気と活気が市全体にあふれている。

……
伝統的な物々交換市を今日まで残してきた民族であるソングーラのような社会は、アフリカでも例外に属するだろう。しかし、経済活動のすべてがお金によって左右されることがないよう、現金使用を組織的に制限する物々交換市の制度を作りあげたソングーラの智慧にわれわれは多くを学ぶことができると思う(安溪遊地、一九八七a)。

ああ、こういうものを貰えるありがたいですなあ。これがあれば、夜もたいくつせずに、読んできスクスとよく寝られます。

種子島のことを丸出して話します

わたしは、兵隊の時に鹿児島へ出て、島外の人と触れ合ったばかりで、それ以外にはほとんど島の中ばかりで過ごしてきました。

ですから、人の質問なんかに答えて、向こう様に一応お答えしてからこう考えることがあります。お客さんが帰られたあとから、「しかし、オイが わたしのことをオイといいますから オイが いうたことがあの人にはわかっただろうか」ところのことを考えます。若い間は、四〇歳ぐらいまではそういうことを思わなかったですけど、もう、五〇に近くなってからは、いつでもそういうことを考えるようになりましたがなあ(笑い)。こちらとしては善意に話したのに、向こう様が何か悪意に受けはせなかったらどうか、と。

でも、八五、六歳にもなってみれば、そんなことばかりじゃナカモンナア。もう今さらなおそつと いても、本当の話が、舌は曲らずなあ、種子島の言葉をなおすこともできず、あきらめています。

語る言葉もはっきり種子島のことばを丸出しで、そのまましか語れません。それでも、なにかしら、鹿児島県内の方ならたいがい判ってくれるようですなあ。しかし、あなたたちのような他県の人とはなあ、「あのことは、どんなに言っただじやろつかい」とか、いつも考えますわ

でも、立石さんのおっしゃることは、とても判りやすいと思いますよ。どうぞ、方言も遠慮なく混ぜて話してくださいませんか。

しかし残念だなあ、と。これまで人様ともだいぶんつきあうてみたが、言葉が思うように話せないということは、人様に自分の思うことをば告げることのでけん、なさないもんじゃなあ、残念じゃったなあ、一生を、言葉だけは歩みそのうたなあ、とこう思いますな。

教育も種子島方言で受けましたから

昔の小学校では、ことばについてどつう教育がされていたんでしょうか。とくに方言を使うことについてですが。

方言なあ、普通語といたしましたですけど、やっぱり教える人も、わたしらの頃までは、種子島の人でしたから。また、種子島の内でも一番近い南種子村の人だったりしますもんですから、普通語、普通語というたけれども、本当の普通語はもう、半分も当たらせんじやったでしょうな

方言をしゃべるとよくない、というようなことはいわれたんでしょうか、沖縄みたいに。

いや、そういうこともイワンジャッタナア ええっと、これは、方言ですから……いわなかつ

たですなあ。昔は作文ていいましたからなあ、昔は作文を作らしても、種子島なりの言葉で書き表しても「普通語でないといかん」といつようなことまでは教えなかつたですな。

平民と土族では言葉遣いが違いました

また、昔は平民、土族というのがありましたから、言葉遣いも違います。例えば、平民どつうしてあいさつを言う時には、

ワゴー キタカイ

あんたは来たかい

と言います。返事はただ「オヨ」とか「オイ」というだけです。

土族の方にいう時には、

キヨーワ メーツカリ モーサン

今日はおめにかかりました

オマヤ ナンノヨージデ

あなたは何の用事で

キモーシタカイ

来られたか

と「モーシことば」になるな。土族の返事は、

オラ、ワガー タノマンバン わたしはおまえに頼まねばならん
コトガ アツテ ことがあって
キヨーワ キタトジャロー 今日来たのだよ

というようなものです。大正時代までは、卒業証書なんかでも鹿児島県南種子村何番地・平民・なんのなにがしと書きましたから

「士族」とか「平民」とかというのはいわゆる普通語ですが、島の方言ではなんというておったのでしょうか。

士族には、トツタチ。これは、頭の人、目上の人ということやなあ。また、シューサマともいうていました。平民は、農業中心の人たちはヒトゲラー、漁業や製塩を主にする人たちをアマブナトと呼んでいました。アマブナトというのは、もともとは漁師のことよ。海士船頭とでも書くでしょう。

一つ年上は兄、二つ年上は親

身分ちゅうのはな、「一つブセを兄と言え、二つブセを親と言え」という言い方がありました。ブセというのは、男でも女でも年上のことです。ですから、年上の人全部身分の高い人のように考えたわけでしょうな。

若いころの半農半漁のくらし

立石さんのお若いころの生活のようすなどをお話ししてただけませんか。

わたしは、明治三三（一九〇〇）年の七月生まれです。大川尋常小学校へ通い、そのあと上中に入った南種子高等小学校に入りました。

大正七（一九一八）年、一八歳か一九歳の時に、志願して兵隊になって島を出ただけで、あとはずっと種子島で暮してきました。屋久島に行けば兵隊におったときの友達がたくさんいます。

戦後第一回の普通選挙に当選して、議会に出たこともありました。そして、選挙管理委員を二〇年続けました。それから、大川の郵便局に勤めて、結局あまり農業は熱心にしませんでした。

魚捕りは、五〇歳ぐらいまでやりました。離農して一〇年。妻が死んで三年になります

なるべく昔の話ということ、兵隊に行かれる前後の生活のことをうかがえませんか。

わたしが兵隊に行くころの話ですか。そうですね、大正の中期から末にかけては、下立石は農業と海と磯で食べておりました。ここは、昔から半農半漁の村ですから。

切り換え畑をしました

農業は切り換え畑が中心でした。切り換え畑を方言ではアラキというのよ。昔は金肥（きんぴ）というのがなかったですから、自然の肥料がなくなってしまう。三年ぐらい作れば、荒して、アラ

ジになしてはまた作るというやり方でした。時々なあ、切り換えるという、今の人のいう一種の焼畑だなあ。いつかテレビで見たことがある、南洋の人のやり方に似ています。どんな人でも、一年に一反歩くらいは鍬で掘り返して毎年毎年アラキを開いたものでした。荒したあとをまた打つのがアラキウチです。

カライモのお弁当

テゴという小さいざるを作って、その中にカライモを入れて、大根の漬けものを丸のまま添える、それが小学校へ通う子供の普通のお弁当でした。漬けものは、指より少し太いくらいの、まあ一寸ほどの太さの、長さは五寸ばかりのもですよ。テゴももたない子供は、日本手拭いの中にカライモ二、三本をくくって下げて歩きました。

尋常小学校のうちには、全員がこんな弁当ですからどうということはありませんが、上中の高等小学校へ行ったら、あつちは米どころでしょう。みんな白い御飯の弁当で、カライモの弁当では笑われるんです。米の弁当を持って行きたくても、生活に格差があつてきんですよ。カライモに少し米の飯がまじったものをもっていくのがせいっぱいでな。カライモだけの弁当の時には、学校へ行く途中の山道の木に弁当を下げておくこともありました。帰りに食べたものでした。どうしても学校でお腹がすいたら、その時は早歩きして帰ってきて食べました。

女の仕事と男の仕事

ひとりで暮されるようになって、家事万端なんでもしないといけません、昔は、主に女がして男はしない仕事というのはどういふことがありましたか。

原則として、キモンアラ（洗濯）とかマカナ（炊事）というのは、だいたいが女の仕事やったなあ。キヒラー（薪拾い）もだいたい女の仕事やった。炊事用の薪が主じゃから。子供を育てるのも女で、男は運ぶに加勢をするぐらいのことでしたでしょう。

水汲みか。水道ができたのは戦後やったからなあ。村というのは、水の便利な所に作ったものですから。

水を溜めるところをツボというたなあ。井戸のことやな。水が流れて集る溜まりやな。水汲みのおけはミズタンゴ。これは、耳が長くて五寸ぐらいもあります。

タンゴのいろいろ

タンゴにもいろいろあつて、肥えを汲むのはコエタンゴ。これは、取っ手が短い。うちの所はおかたが潮を炊く村でしたから、わたしたちの所で潮を汲むのはシオタンゴといひます。この取っ手の高さは中間ぐらいです。用途によって取っ手の構造が違つておるんです。

タンゴには、片方で五升から八升ぐらい入るものでした。両方なら一斗五升ぐらい入れられます。どの種類も量は同じでした。それを二ナーギ（担い木）で担ぎます。これは、種子島でできます。島

の杉でタンゴをつくる桶屋さんがどの村にもひとり二人はおったもんです。杉はいちばん軽いですから。たがに使う竹は唐竹。各村に、潮風のみり当たたらん谷間に竹はありました。昔は植えたときのようなあ。

竹は若い人には植えさせない

竹を植えると、その竹が太って、死ぬ時の棺桶になるぐらいになれば、死ぬるといふような伝説があります。一年や二年ではそうなんですから、四、五年すれば竹が大きくなります。もう棺桶に使えます。昔の棺桶は高さ四尺四寸に、幅が一尺二寸ぐらいの丸い樽ですから、それをしめるたがに使ったわけです。ですから、あまり若い衆には植えさせなかつたものです。

今おっしゃったことを純粹の方言で言えば、どうなりますか。
それじゃ、種子島独特に言いますから。

ワゴー タケヲ ツクツチユー

おまえは竹を植える

ジャーナカカイ。

そうじゃないか。

ムカシノ ヒトガナー、

昔のひとがなあ、

カッタケヲ ツクレバ、

唐竹を作れば

カッタケガ カンオケノ

唐竹が棺桶の

オビー ナイゴトナレバ

たがになるほどになれば

シヌツトイウ モンジャカラ、

死ぬというものだから、

ジーカ バーカ

じいさんかばあさんに

ウエサスイゴト

植えさせるように

センバ イケンロー

しないといけないよ

と、こういうもんでした(笑い)。カッタケというのが本当の方言で、トゥー(中国)から来たからカッタケ(唐竹)というんですね。

魚取りは男の仕事

魚捕りは男ばかりでしょうか。海に行く女の人もいましたか。

大方は男でした。海に行く女は昔はあまりおらなかつたですな。ミナヒラー(貝拾い)程度で。海苔をとるとかな。種子島には海女もありませんでしたから。

村作業の変化

村作業というものは昔はあつたんですか。

村の団体の作業というのは、あっちこちありましたなあ。季節できまつていたわけではないです

が。大正のころまでは、男でも女でも一戸からひとり出ればよかったですけれども、その後は男が出るときということになりました。女には差別をつけて、不足の分をいくらというふうにお金で支払うという方法になりました。

屋久島へ魚を捕りに

そのころ、屋久島へは、年に二回ぐらい行っていました。五月には飛魚を捕りに行きます。八十八夜から一か月くらいが飛魚の捕れる期間ですが、捕れた飛魚を種子島へ持ってきて売り、また屋久島へ行って捕るという往復ですから、まあ、二〇日ほど続けるのがせいっぱいでした。わたしが屋久島に行かないようになったのは、四〇歳を過ぎてからでした。

九月には「ブリ引き」です。ブリ引きというのは、二〇尋ほどの深さの所で、網を廻して、人が泳いで魚を追いついで捕る方法です。沖繩の糸満の漁師の方法に似ています。捕れるのは、ブリのほかにはクロダイなんかでした。これは、一回が四日くらいで、二回は行くもんでした。

ブリ引きの魚は売るにも売れないので、島にもって帰って、一年間のおかずにしていましたなあ。塩漬けにしてから、カラカラに干し上げてカマスに入れるでしょう。それをば湿気のかからん所へ上げておきます。いつものおかずとして食べて、春の今頃の時分までは残りました。

屋久島まで追い風なら二時間半です

ここから屋久島が見えますが、船で通われたんでしょうか。

種子島のこっちの端をタカセバラといいます。屋久島のあっちの端はハエサキです。ちょうど飛行場のところですよ。

帆かけ船のころ、こっちからあっちへ渡るのに、追い風なら二時間半で着きました。風がなくて漕ぐときは、追い潮で四時間、向かい潮なら五時間はかかるものでした。帆で行けない風というのはほとんどありません。向かい風でもあっちへまぎり、こっちへまぎりして六時間ぐらいかかって、漕がないで行くことができるものです。

飛魚は島間の商人に売るもんでした

飛魚はたくさん捕れたら、塩して、干して商人に売るもんでした。南種子の島間（しまま）の町に商人がいて、一束五〇匹ずつにまとめて売りました。商人は四、五人いましたなあ。山田さんとか、姓を忘れたけれどキノスケさんとか、島元袈裟吉（けさきち）さんとかいう人達で、島元さんだけが種子島の人でした。あとは、鹿児島の人です。わたしたちの時代にはずいぶん種子島も開けていて、鹿児島との交流が多くなっていったんですよ。

屋久島へカライモを出しました

屋久島との物々交換ということは経験ないでしょうか。

ゴチョーラチという、櫓が五つで五反布の帆をかけた船で行き来をしました。南種子の下中や上中の人から頼まれて屋久島の宮之浦へ米を運ぶということもありました。まあ、運賃かせぎの仕事ですなあ。

西之の海辺の西海地区の村々と交流があったのは、上屋久の一湊から小瀬田までの間の村々です。こちらは、カライモ（さつま芋）がいくらもとれたので、毎年のように屋久島へ売りに行きました。自分のカライモと他人から頼まれたカライモを持っていくわけです。サバノイオ（さばの魚）と換えて来る人もあつたけれど、おおかたは現金で売ったもんです。魚は捕りさえすれば、いくらでもあるのですが、現金というのはそうはいかんものですから、お金が喜ばれたですね。

でも、海岸ばたの人は純朴ですよ。今の人のようにうるそうはなくて、みんないっしょに生きていくという考えでした。だから、カライモのかわりにサバノイオでも良か、というものでした。

交換する時の比率ですか。そうですね、カライモ一俵対サバノイオの量は、いろいろでした。サバノイオにも上下がありましたから……。

サバノイオは塩サバです。サバ節はみやげ物程度にもらうことはあつたけれど、良か食い物は来んだつたなあ。

カライモと飛魚を交換することはなかったと思います。さっきも言いましたが、飛魚は現金で売るものでした。それと、種子島より屋久島こそ鹿児島との交流が深いので、現金にも早くなじんでいたでしょう。

サバの頭の塩辛とカライモの交換

種子島の人は、みんな屋久島のサバンピンタ（サバの頭）の塩辛を石油缶にいっぱい入れたものを、カライモと交換することを望んだんです。これは、普通の食事のおかずになりますし、焼酎のカテモノ（肴）としてもヨカモン（良い物）でした。サバンピンタに塩を入れて、四〜五日もすれば食べられるようになります。

塩辛が一斗もあつても困りませんか。

たくさん手に入れたら近所の人に分けたりもしましたが、一斗缶にいっぱいあつても一年でももちますから、少しずつ食べます。

サバダテ（魚粉）は朮と物々交換

そうですね。お金よりも物々交換というものがありません。サバダテです。

屋久島でサバ節を作った時に、頭や骨が残るでしょう。これを、少しでもゼニになそうということ、サバダテというものになりました。サバダテというのは、サバの頭をゆでて干したものです。カマスに入れて持ってきて、これを朮と物々交換しました。サバダテは、肥料です。あんな効果あるものは、ほかになかったですね。

作り方は、サバの頭を大鍋でふつと煮たお湯でゆでて、干し上げて、それを叩いて粉にします。

杵で打って、いちおう細くなれば臼で搗きます。足踏み式の杵もありました。

島間と屋久島の交流は太かったですよ。肥料製造専門の人たちが島間にいました。カツオやサバの頭が肥料になるとは、すくなくとも明治初期からわかっていたことだと思えます。

屋久島からは薪の買い付けに来ました

屋久島へ行くのと、向こうから来るのと、大差ありません。

こつちからは、年二回行くだけでしたが、屋久島の船はしょっちゅう種子島に来ていました。ある二、三の人にかぎって屋久島の人に来ていました。その目的はサバ節をつくる薪を買うことでした。薪はお金で売るものでした。松以外の雑木を長さ一尺五寸に切って積み上げてなあ……。

薪なら屋久島にいくらでもありそんなものですが……。

それが、あつちは国有林が多くて自由に採れんでしょうが。

材木になるような木こそ屋久島には豊富ですが、わざわざ種子島まで持つてくるということはありませんでした。とくにお金のある人が、屋久杉で建具、障子、床板を買っただけで、あとは種子島にもありましたから。

屋久島の古い家をつぶして、その処分した材木を二、三軒分まとめて持つてくるということはありました。現金で買うんですよ。向こうには材料が豊富にありますから。

みやげはサバ節と白米

あつたら贈り物をするような仲の人は屋久島におられましたか。

上屋久には、会えばみやげをあげるような人も二、三人はおったけれど、もうみんな死んでしまいました。

みやげは、屋久島の人にもらうのは、サバ節と決まっていました。こつちからは米一升よ。カライモも豊富にあるから、一俵ぐらいいは余分にやる分をもつて行きました。一俵というたら、ソーケ（ざる）に四つ分ぐらいたったかなあ。カライモ一俵といつても、家族が多ければ、三日しかもちません。

戦後の衣類との交換

終戦直後は、屋久島から衣類を持つてきて、こちらのカライモや切り干しと換えました。これは七八年、いや一〇年ぐらいい続きましたから、屋久島の着物の半分ぐらいいは種子島に来ていたと思えます。わたしの家にも、屋久島の着物や蚊帳なんかがありました。

物々交換とは戦前から言う言葉やが、ナントナントカユル（何と何を換える）というのが本当の言い方ですね。

しだいしだいに田をひらきました

もともと下立石には水田がありませんでした。今ある水田は、水のわく水口を見て、大方は自力で

開田したとです。小さい区画の田んぼでしたから、一反歩に一〇〇枚もあるようなことでした。それをこんどは機械化して、さらにあっちこちから田んぼを平らにして自然自然と田も広くなりました。これは、私らが五〇歳くらいからですなあ。そのうちの幾割かの人は、下中とか上中にデザク（出作。馬で田の耕作に行く）とかイリザク（入作。向ここの人がこっちの畑を耕作する）という仕事をして、食糧には不自由せんようになったでしょう。

上中あたりは霜の害が強いですから、その害を除けることと、地質や作物の種類によって収穫がむこうよりこっちの方がよく取れる場合があります。肥料が出んころは、サトウキビの糖度なんかでもずいぶん違いがありました。土地は、個人が貸したり売ったりだったなあ。

むかしむかしは塩での生活でした

昔は、わたしたちは潮を炊くのを本業としていました。潮を炊く村は、南種子には五か所ありました。平家の落ち人が島流しをされたとき、南海の一二島に生きるための潮を炊く所を設けたんです。そのために塩釜をつくったのがわたしたちの村の始まりだと言われています

いつごろまで塩で生活されたのでしょうか。

わたしにもようわからんが、日清戦争（一八九四〜九五年）ごろまではそういう塩と海だけで喰らうという生活をしたのではないのでしょうか

塩は、米と換えたんですか。どの位の割合だったのでしょうか。

全部白米に換えました。交換の割合のことはみなさん尋ねられますけれど、どうもわからんですなあ。

潮炊きには薪がたくさん必要です

潮炊きには二とおりありますから、塩田で炊くやつとアオシオとなあ。アオシオというのは、海の水をば鍋に入れてそれを炊き上げるやつです。この方法はそうとう薪が要りますから、薪を確保するために、一つの村に一〇〇町歩も一二〇町歩もの山を与えたとしようなあ

この薪取りは男がやったでしょうね。

はい、潮炊きもみんな男の仕事でした。夜はもう、盛んなものでしたよ。夜になると、みんなこちそうを作ってきて、みんな寄ってそれを食べて、そして女の人は帰るんです。男の衆は当番制で潮を炊くという、村の団体の炊き方でした。これは、わたしたちのころまで続いていました。専売公社ができない前の潮炊きの話です。

塩屋牧を利用して木炭を焼いたりもしました

潮炊きをやめてあとの生活はどうなったんでしょう。

潮を炊くための燃料をとる、塩屋牧のあとの雑木林で、わたしらのところは二人でしたから、大方一二〇町歩ばかりあるでしょう。木炭を焼いて売ったり、一部の山は木炭山として売ったりもしま

した。

塩売りは女の仕事でした

炊きさえすれば、売りにゆくのは、女の仕事でした。かますを作るのは男の仕事やったから、それに二斗ずつ詰めて女が背中にかかるうて売りに行くのよ。上中あたりはもちろんのこと、莖永あたりまで売りに行きました。平山には向こうの中種子の方から来たんです。

しかし、かますを作る藁はどうしていたんでしょう。

田んぼがないからなあ（笑い）。たくさんはいらんですから、あちこち塩売りに行った時に、帰りにもろうて来たでしょう。藁がお金になるわけでもないから……。

潮炊きの歌

ひとつ、潮炊きの歌をうたってみましょうか。（歌つ）

エー シオヤ カマジノ

ええー塩屋釜司の

ヨメナリヤ イヤヨ

嫁になるのはいやよ

カマニ シオサス

釜に潮水を入れるには

シヨシャガ イル

そのしぐざがいる

タイテ フカセテ

炊いて湯気をあげて

オタテニ アゲテヨ

おたてに揚げて

ニガリヲ オトシテ ジャヨ

にがりを落として ジャヨ

コガネダスキデ シオヲハカル

黄金のたすきをして塩をはかる

おたてというのは、板で作った塩を入れる台みたいなものです。真ん中にがりが垂れるようにしたのよなあ。にがりは豆腐づくりや、さらに、昔は鍋は石灰で作ってありましたから、その石灰をうまく固めるのに使いました。

潮炊きのつらい仕事の所へ嫁に来てくれる人はいないだろうが、よそからは判らんよつな豊さもある、ということをおわした歌じゃろうと思えます。潮を炊く間に夜更かしにうつつた歌でしょうなあ

すばらしい歌とたくさんのお話をありがとうございました。

おわりに

はじめてお会いした一九八五年二月二十七日、別れ際に立石さんは、こうおっしゃいました。「できたら、またいらつしゃい。ただ、なるべくは一、二年のうちになあ」夜、宿に帰って、その日に聞かせていただいたお話を反芻しながら、ぜひもう一度、立石さんに会いたいと思いました。

ご迷惑もかえりみず、翌朝、わたしは再びおじゃまして、また色々なお話を聞かせていただくこと

ができました。久しぶりに晴れ上がった空の下、家の前に立って、目の前の雄大な屋久島を指さしながら、島々の交流について説明してください。立石さんの姿を昨日のことのように思い出します。

立石助也さんは一九九〇年二月一五日に他界されました。満九〇歳と六か月でした。つつしんで「冥福をお祈りするとともに、原稿に目を通してくださった息子さんの立石勝己さんと、中種子町立歴史民俗資料館の岩坪博秀さんのご協力にふかく感謝します。

種子島への魚の行商 上屋久町一湊・斉藤熊彦さん

はじめに

これは、南の島々での生活体験の聞き書きを作っていく、私たちのささやかな試みを『季刊生命の島』に掲載した第一回目の原稿です。前回の立石さんの場合もそうですが、聞き取りをどのようにおこなったかをも示すために、会話を録音させていただいたものなるべく忠実なテープ起こしの形式をとっています。聞きとりは、一九八五年三月一日、上屋久町一湊の永里岡（なが・さとおか）先生のお宅でおこないました。

会話の中では、永先生の助け船で、私の理解のおよばないところを大きく補っていただきました。また、原稿にする段階で行き届いた監修をいただくことができました。永先生の御協力に深く感謝申し上げます。

行商を始めるまで

遊地 こんにちは。種子島の島間の方（注、第四章、「嫁に行くなら島間の町に」参照）に斉藤熊彦さんのお名前をうかがってきたのですが、屋久島から種子島への行商をしておられたということですね。私は、山口県の大学の教員をしております、島と島の間の交易や物々交換ということ

を勉強しております。今日はそのあたりのご経験をおうかがいできればうれしいのですが。

齋藤熊彦 私はな、三七歳から六〇歳まで屋久島のサバを何千匹も仕入れては、種子島にもっていつて売る仕事をしていました。行商を方言でダウイ（駄売）というんですが、昨日の晩に捕れた魚を、種子島行き汽船に積もうとする場合は、宮之浦を汽船が出るのが午前九時ですから、それ間にあうように、夜明け前には家を出て急いだもんです。一湊から宮之浦へは馬車でも三時間はかかる道じゃったから。

遊地 私は昭和二六年、富山県の生れですが、熊彦おじいちゃんのお生れは何年ですか。

齋藤 私は、明治三五年一月二日、一湊の生まれです。大正一二年、二二歳の時に兵隊検査を受けて、台湾の第二連隊に入隊しましたよ。家は貧乏で、私が九歳の時に父が亡くなりましたが、母は私が三四の年まで生きていました。学校を卒業したら、サバ釣りの仕事にすることにしました。このあとは、半農半漁の生活でした。山仕事以外はいろいろやってみたもんなあ。

遊地 こういう行商の仕事は昔からあったものでしょうか。

齋藤 昔は、こういう魚のダウイの仕事はなかった。私が始まりだろうな。魚は種子島だけやなくて屋久島でも売りました。

三七歳の年に漂流しました

遊地 行商の仕事をしようと思立たれたきっかけは何でしたでしょうか。

齋藤 ダウイをしたきっかけはな。それにやその、とてもなあ、思えば、感慨無量の話があつと。私が三七歳の時に、一湊から種子島へ魚を積んでいって、屋久島に帰る途中、船の機械が故障で壊れてな。その時は、大島をとって沖繩の方まで流された。とつても潮が速くて、走っている船より速い潮やった。そやからたちまち、この高い屋久島が見ておる間に小さくなつてな。

遊地 この時は何名乗っておられたのですか。

齋藤 四人。種子島へ魚を積んで行つて、その売った金でもつて、こつちへ糯米やら米をもつてくれば、正月用にとつてななんぼでも売れる頃やったから。売った魚の代金で米を買つて、船に満船して積んでな、帰つてきよつとに、ちようど今の屋久町の尾の間前で機械が故障した。二晩目にはもう奄美大島が見え、三晩目には、もう沖繩が見えてきたもんな。……そんなところまで。

遊地 どこかの船に助けられたんですか。

齋藤 そう、串木野のマグロ漁船が漁に行く途中に見つけてくれました。私たちの船が「助けてくれ」とつて旗を上げているのに気付いて近付いてきてな。ずっと高い棒に旗を上げておつたからなあ。助けるつもりで来たのやけどな、その船は。どんどん近付いて来てな、もう船の上を歩いておる人まで見えてきた。ところが、あれーっと思うたのは、その船が急に向きを変えて、後ろを向いてだんだん遠くなつて行つてな。あの時はもう、へっ、へっ、へっ（笑い）、気落ちしてな、これでもう最後やと思つた。それでも気を取り直して、力いっぱい「おおい！」と呼んだらマグロ船はまた回つてきてな、ほいでどうつ救われたなあ。

遊地 これはまたどういう訳でしょう。

永里岡 マグロ船が始めにこんな風にしたのはですね、海での遭難者を助ける時の常套手段のひとつだったんですね。と言いますのは、遭難者が「助かった」と思って安堵すると、へなへなとなってまったく予期しない事故がおこることがあるんですね。命が助からんこともあるそうです。それでこういう風にするものなんです。

齋藤 そうです、そうです。ほいで、すっかりがっかりしておったところが、またもとへ来たときもんな。ほれから助けられて、船長にいろいろ話を聞いたら、あんたらみたい、三日とか、一週間ならいいけれど、一か月も流れておる船の衆じゃたらな、がっくりする、という説明でした。こういうことは、以前から聞いておった。

遊地 救われたのはいつごろでした。

齋藤 もう年の瀬でな、こっちは正月の米を売ったりして商売しようと思っておったのに……。乗組員はマグロ船に移って、船と別れた。いっぱい、米もいっぱい積んだまま。積みかえるどころやなかった。人間の命さえ助かれれば。その衆も自分たちのマグロを捕りに行く途中のことで、荷物を積んでくれん。帰りなら何か積んでくれたかもしれんが、これから正月のマグロを捕らにやらんからな。船は水面から見えんようになったけれど、高い竿の上の旗だけがいつまでも見えておった。別れをするまでな、わじゃ部屋にも入らんかった。

助けられてから、ちょうど一週間そのマグロ船に乗った。それがもう、とても波が大きうてなあ。だんだん時化てきて、こっちで言えば台風なみの天気。マグロ釣る衆が三人かたまって釣っていて、そこに波がくれば、ゴーツといっしょにひとところへひっくり返るよつな、そんな波やった。

私らを助けてくれたマグロ船は、宮崎県の油津というところへ着いた。ほいであんだ、一二月の二八日やったが、雪が降ってな。それから郵便局まで裸足です。「無事やった、今おった」というてな。電報打ちに行くのに、助けられた四人でなあ、郵便局まで行くのに、はだして雪の上を歩いていく、その足の痛かったこと、今もって忘れんなあ。

遊地 いやあ、それは本当に大変でしたね。

父は八重山でのカツオ釣りで遭難

永 そうすると、もう少してお父さんの二の舞いすれすれになるところを救助されたんですね。

齋藤 はい。私のおとうさんはな、私が九つの時やから、明治の四四年に遭難して海で死んでいます。沖縄の八重山群島な、あそこで事故に会ったわけ。八重山でカツオの製造をしに行った衆は、陸の仕事で残った。二七、八人が船でカツオ釣りに海に行ったが、しだいに台風になり、もどる途中でとうとう、船がひっくりかえった。陸から見えている所であったので若い者は助かったけれども、年上の者四名がなくなりました。この時は一湊からは私の父の斉藤熊吉、安藤袈裟吉(けさきち)、それと平田なんとかという三人が死んでなあ。永田の人も一人おって、姓は知らんけれど、叶(かのう、永田の字名のひとつ)のイッターロー(一太郎か)という人もいっしょに遭難したそつや。

永 沖縄で亡くなった本土の人たちの墓を、沖縄では大和墓と呼んでいるようです。

いろいろな仕事をしました

齋藤 私が、漁師をやめて種子島へ行商に行くようになったのは、この遭難のあとのこと。何かせんにや食っていかれんじやろ。子供も一〇人くらいおっただから。(笑い)。いろいろな仕事しましたよ。

遊地 漁のほかになんない仕事をなさいましたか。

齋藤 あのなあ、昔は、漁船が使う油の一斗カンの空きカンを買って集めて鹿児島に送ったり、いろいろな仕事しました。船の売り買いも何度もやりました。山の仕事はやりませんでした。

種子島へ魚の行商に行きました

遊地 種子島へ行かれたのには、季節があつたんでしょうか。

齋藤 種子島に行くのには、季節はなくて、年中いつでも行きました。一回行けば一か月、短くても一〇日ぐらいは、種子島に滞在して行商をしました。家内が向こうで売る品物をこつちから送ってくれましたから。塩サバやとか、サバ節やとか、カツオ節やとか……。あのころは大分売りました。まだ、魚屋がどこもかしこもない時期やからな。

リンゴ箱を、上・下(上屋久村と下屋久村で)買って集めてな。なかなか、二〇〇箱、三〇〇箱の空箱を集めやらんもんでな。それから、普通の大きさの塩サバなら一箱に八〇匹から一〇〇匹くらい、それをあんだ二〇〇箱ももって種子島中に売ったのやからな。

遊地 はあーっ！二万匹ほども。

齋藤 びっくりしたなあ。

遊地 向こうの人が？

齋藤 いや、私が。

遊地 はあ、こんなに売れるのかと。

齋藤 そう。この大きな運搬船に船いっぱい積んで行ったからな。

遊地 リンゴ箱というのは、高さがト口箱の三倍ほどありますよね。あれにいっぱい入れたら何斤くらい入りますか。

永 一杯詰めたら、五〇キロか六〇キログラムの重さだろつね。

齋藤 そのくらいあるやろな。

遊地 それを、種子島では馬車でしたか？

齋藤 たいてい馬車でした。

遊地 ご自分で売って歩かれたのですか。

齋藤 はい、はい。もう得意があつたからな、ずうっと。魚をリンゴ箱に入れたものを、部落の大きい小さいを見てな、「はあ、おまえの所は一箱売ってくれ、おまえの所は二箱売ってくれ」と言う

て置いて歩きました。そういう得意があったのです。頼まれた人は、みな売って現金になしてな、わしが集金に行くときは全部まちがいなくあった。頼まれてくれた人には、やっぱり口銭（手数料）があった。

遊地 お得意のおった種子島の村はどこだったか覚えておられますか。

斎藤 はい。もう、島間、上中（かみなか）、西之……。

遊地 西之は平野ですか。

斎藤 はい。それから、長谷（はせ）な、長谷。それからこう行って、平山。それから熊野。あのへんをずうつと回っていったな。

遊地 あのう、熊野あたりは魚を自分でも捕っておったはずですが……。

斎藤 はいはい。熊野は魚を捕っておったけどもな。あんまりサバの塩つけはなかったから、すぐ売れましたよ。

サバの塩つけは、（旧暦の）九月から二月の寒い間。そうでないと、腐ってしもつから。サバ節は腐る心配がないから、いつでもな。

遊地 種子島での宿はどうされていましたか。

斎藤 種子島での宿は、島間の河東ヤナという人の家にいつも泊まりました。ヤナさんも屋久島に来てうちに泊まったもんです。中種子では石田尾（いしだお）という人、西之表ではウタツシゲヨシという人の家に泊まりました。

魚の内臓もおいしいものでした

遊地 私は、このあいだ南種子の下立石というところへ行っただんですが、西海地区ですね、大川の近くの。あそこの人がおっしゃるには、サバの頭を塩辛にしたものを屋久島から一斗カンに一杯くらい持ってきた人があって、それとカライモと交換しておった、そして、それは酒の肴にはけっこうなものであった、と。

斎藤 そういえば、そんなことをした人もおったですよ。私はしてみただけ……。

永 それは終戦後ですよ。それをやったのは私の従兄弟だろうと思います。私はあのころは南種子町の西海地区の大川小学校にいまして、従兄弟は、持ち船でこの浦に来て物々交換をしていたからです。戦後の食料難のころでしたけれど、大川小校区は農産物が豊富でしたから、交換は順調だったようです。

遊地 それで、サバの頭だけでもってきたのでしょか。

永 サバの頭と内臓の塩辛ですよ。塩サバ・サバ節のほかに塩辛の注文があったのでしょか。

遊地 今、サバの臓物を食べようという人は、あまりいないですよ。

永 こんな経験があります。種子島の大川浦の瀬の鼻で漁師が何かを口にほうりこんでいるのを見ました。何を食べているのかなあ、不思議だなあと思って、私は泳いでいったんです。近付いて見たら、ここらの方言ではコメンドとかコメジロとかいいますが、和名ではニザダイという魚ですね、

あの魚の腹を開いて取りだした臓物を海水で洗いなから食べているんですよ。「先生も食べんか」と勧められたんですが、「さあ、僕は食べたことないんだがなあ」と言ったら、「どんが（私が）食べて死ななから、大丈夫だよ」といんです（笑い）。こう念を押されては後に返けず、「じゃあ、ひと切れだけいただくよ」と言っって、海水で洗って恐る恐る口に放り込んだのですが、確かに刺身よりおいしい。瀬の上に盛った臓物は、あつという間に平らげてしまいました。ああいう食べ方があるというところは向こうで初めて知ったんです。この件の後、家内からは、糸満（漁師の代名詞）の弟子入りが叶ったと冷やかされた思い出があります。

遊地 なるほど。私も、八重山の西表島で、方言ではイラブチというアオブダイのはらわたを潮で洗って同じようにして海でいただきましたが、シコシコしてとってもおいしいですねえ。

永 ほつ。やはり黒潮を産湯にして育った海士（あま）の一族なんですね。

遊地 ところで、さっきおっしゃっていた、永先生の従兄弟の方はなんというお名前だったんですか。

永 兄の方は、真辺繁武、弟は真辺俊彦です。彼らが持参したサバの加工品は、西海の立石という方を通して捌いていたようです。

斎藤 立石ハンジロウさんというたら、精米所もして、こまか（小さい）店もしていたな。

永 そうそう、立石さんは手八丁という異名で知られた事業肌の方でしたな。

遊地 こういうはらわたの塩辛の商売は戦前はなかったものでしょうか。

永 いや、戦前は私は知りません。戦前は熊彦さんの方が詳しいですよ。

物々交換より現金が主でした

遊地 それで、向こうでサバの塩つけを売って回られる時に、必ず現金で全員が払ってくれたものでしょうか。それとも現金がないから食糧で、というような場合もあったんでしょうか。

斎藤 ああ、現金がない時は、大方もう米と交換してな、米は屋久島に持ってきていたな。

遊地 商売を始めたころ、つまり三八、九から四〇歳くらいのころのことを思い出していたきたいんですが、現金が多かったでしようか、それとも米やカライモとの交換が多かったでしようか。

斎藤 その当時から、やっぱり現金の取引が多かったな。もう、売れんでもなんらん時があつて、その時は米と交換して帰ってきたな。交換するときには米で、カライモということはないな。あったな。

永 たいいてい米ですね。ただ、終戦後は、米の統制が厳しかったですから、ヤクサバの加工品はカライモとの交換が主でした。

斎藤 統制でな。

遊地 それでも持ち出す人は？

永 よくひつかかってですね、私のところへ助けてくれといってきたものですよ。頼まれたら引込むわけにいかんですから、仲裁役をようやりましたよ。

何かにつけて幸せだと思っています

遊地 この商売は、何年ごろまで続けておられたのですか。

齋藤 三七、八歳ではじめて六〇歳ごろまでサバ節やとか塩サバなあ、あれをもって種子島へ行ったからな。

遊地 ええ、昭和三三、四年から見えなくなったねえ、と向こうの人が言っておられました。

永 はあ、ちょうどそのころになるんですねえ。

遊地 あのう、飛魚なんかは扱われなかったんですか。

齋藤 飛魚なんかもたくさん扱いました。飛魚は、一日にいちばん多く製造した日は、二万匹ぐらいしたからなあ。

遊地 えっ！二万。そんなに。

齋藤 平均八千から一万匹を毎日のように買ってた。市場は入札やったから。塩をして樽に一晩つけて、天気の良い時はあくる日にこれを洗って二日干します。干す条件にめぐまれても、鹿児島に出荷するのは数日後になります。

遊地 ああ、これは鹿児島へですか。種子島へは？

齋藤 種子島ではそんなにたくさん売れんもの。そいでな、はらわたを出すとたくさんとれるトツビヨノコ（飛魚の卵）は、塩漬けにして種子島に送りました。これは、おおかた金にはせんじやった

なあ。知った人あげよつたものです。魚をいつも売ってくれる人や知り合いの人です。向こうの人は、もらえばなあ、ただじゃなくて米でもくれたもんや。南種子には、めつたに私が顔を知らん人はいなかったですよ。

遊地 おじいさんが四〇くらいの時に、売りにいっても魚がほとんど売れないという村はなかったですか。

齋藤 いやあ、そういう村はなかった。なにもあんまり魚がないころやからな。売れんことはなかった。立石やらあのへんの海岸の人はなあ、網でもって魚も捕ったりして、内臓も売ったりしてまあ自給もしたでしょうが、たいてい百姓が多いからな。

永 まあ、南種子町内で漁師部落といたら、やはり西海地区ですね。

遊地 もう古い話になりましたが、これはそうとう儲けというのはあったものですか。

齋藤 さあなあ、儲けたのでしょくな、やっぱり（笑い）。一〇人の家族が不自由しないだけの生活をしたから。船も何回も売ってみたり、買ってみたりしました。

遊地 おやめになったのは、どういうきっかけというか、わけがあったんでしょつか。

齋藤 商売ですか。私が六〇歳の時に、うちの家内が死んだもんやからな、そうしたらもう商売に以前ほど熱が入らんようになったな。子どももどんどん働くようになってな、生活に不自由がなかつたから。私は、本当にもう、何かにつけて幸せだと思っています。自分より幸せな人はあんまり少ないぞと思って感謝した気持ちで毎日をすごしています。

遊地 どうもありがとございました。いつまでもお元気で過ごしてください。

お話を聞き終えて

斎藤熊彦さんは、種子島の島間の河東不凡（かわひがし・ふぼん）さんと河脇寅次郎さんに紹介された方でした。ふたつの島をつないでひんぱんに行商しておられた方と聞いて、島と島の交流と交易ということに興味をもって私は、さっそくおたずねすることにしました。島間港から太陽丸でついたその足で一湊のお宅をおたずねしました。ところが、あいにくお留守でしたので、石垣島の画家で民俗研究家の石垣博孝さんに紹介されていたナチュラリストで考古学や地名研究にも造詣の深い永里岡先生のお宅をたずねました。大正五年生れの永先生のお父さんが、私の母方と同じ奄美の瀬戸内町のご出身であると知って、深い親しみを感じました。

斎藤熊彦さんは、永先生の電話で、先生のお宅までわざわざ来て下さって、すばらしい話をして下さいました。始めは少し緊張しておられたのか、非常にきまじめな方という感じがしましたが、やがてドラマチックな話を淡々と語り始めてくださいました。笑いをこめて、余裕をもった語り口はとても暖かなものでした。

お話の内容は、読んでいただければわかるように、種子島での塩サバの行商の話が中心でしたが、沖縄の北への漂流、お父さんが明治末に八重山までカツオ釣りに行って遭難されたことなど、貴重な記録に満ちています。

斎藤熊彦さんは、一湊の老人クラブの会長を一〇年間つとめて、鹿児島県の老人会の連合会から表彰を受けられたこともあるそうです。永先生のお言葉によれば、一般に漁民の村では三代続いて安定しているという家は少ないけれど、斎藤さんの家は、まず珍しい安泰な例だろうということでした。

斎藤熊彦さんは、一九八八年に八六歳でお亡くなりになりました。つつしんでご冥福をお祈りいたします。

小さい時から牛や馬が好き

上屋久町楠川・日高長八さんと日高甚七さん

今度は、一九八五年の春に初めて屋久島を訪れた時にうかがった話です。楠川と書いてタブガワと読みます。上屋久町の宮之浦から東の方へゆっくり歩いて小一時間ほどで楠川（くすがわ）集落に着きますが、もうすこし足をのばすと落ち着いた小さな楠川温泉が湧いています。ここは、地元の人には割引料金がありますが、一般料金でもちつとも高くなく、落ち着きたいいいお湯です。それを過ぎるとすぐに楠川集落です。

さて、温泉の話はともかく、楠川の仲良しのお二人にうかがったお話に入りましょう。

日高長八さんのお話

日高長八さんは、村のタバコ屋さんのおじいちゃんです。とてもしっかりした話ぶりです。安心してお話をうかがっていることができました。隣の楠川集落と比べて楠川が「貧乏」であったと強調されてきました。夏には種子島にカライモを買いに行ったというお話は、屋久島と種子島の間にかんたな交流があったことを示していて貴重でした。お話は、一九八五年三月三日、上屋久町楠川の御自宅でうかがいました。

惜しいことに日高長八さんは、一九九一年の五月二十八日に亡くなられ、私が一九九一年の夏に楠川を再び訪れた時には、もうお会いすることができませんでした。それで、この原稿には奥様が目を通してくださいました。御協力に感謝いたします。

この村から一步も出たことはありません

私は、明治三三（一九〇〇）年九月二十八日にここで生まれました。この村から一步も出たことがありません。徴兵検査は大正九（一九二〇）年でしたが、結果は乙種合格で兵隊には行きませんでした。あのころは甲種でもくじ引きでした。学校は、私らの二年前から六年生まで通うことになりました。学校を出たあとは、畑仕事を中心にやりましたが、楠川はどの家も貧乏で、うちも家庭は苦しかったですね。

船元は楠川衆たちでした

トビウオとりや、サバ釣りもしましたが、船元が楠川衆たちでしたので、楠川の人を取り分は少なかつたのです。

楠川の親方の船に乗ると、サバなんかは六分の一を親方に出しました。カツオ釣りなんかはフナマエ（船元の取り分）が多くてなあ。カツオ釣りは、餌のダコ（雑魚）がとれんとどうしようもないので、ダコがとれん時は、その日は遊びです。あわれな仕事でしたね。

ヒラギなら盗伐しても目立ちません

徴兵検査を終えたころの主な仕事は山でした。焚き物を探って一湊や宮之浦に売りますが、楠川の方が共有地がはるかに広くてゆとりがあるのです。

官有地からは杉を薄く割ったヒラギを盗伐します。建材を伐り出すことは、長くて目立つので出しくいのです。ヒラギを切ったら山で時を過ごして夜帰ってきます。薄く割るのも夜です。そんなに注意しても私の父は、つかまったことがあるそうです。できたヒラギは、楠川の親方衆が買いにいらっしやっています。値段は親方衆の言っなりでした。

田んぼのある家は少なかったですね

田んぼですか。うちは一反ばかりでした。楠川には全部で一八軒ありましたが、田んぼをもっていたのは、六、七軒ぐらいだったと思います。三畝とか五畝とかの家もありました。一畝は三〇坪ですからわずかなものです。

畑はコバとアラチがあります

畑は、コバとアラチがあります。コバというのはわが所有地です。アラチというのは、作って、荒らして、またかえすというように作ります。コバでも荒らすことはありません。自分のコバというのは、五畝か、多い人で一反ぐらいがせいぜいでした。アラチは共有地で、これはいくらでも作ることができます。

カライモ不足で女は苦勞したわけです

畑は、カライモ（さつま芋）とムギを作るばかりです。ムギは小麦です。これはほとんど味噌用でした。カライモは、相当不足しました。男衆は、カツオ釣りなどが主な仕事で、家ではただの主人をしてあまり畑などをしませんから、それだけ女は苦勞したわけです。

小舟に乗って種子島へカライモを買いに行きよかったですよ

四月から六月ごろには、小舟に乗って種子島へカライモを買いに行きよかったですよ。カライモを買う時は現金です。私は、子どもの時から物々交換とか掛けなんかがきらいで、いつも現金で売り買いくるようになっています。だいいち、こっちから交換にもっていくものはありませんでしたよ。

種子島から食糧を売りにきたのは、ずいぶん時代が遅くなってからの話です。ヤミがさかんな時代ですよ。それまでは、そういうことはありませんでした。

小さいサバ節工場がありました

楠川には小さいサバ節工場があつて、できたサバ節は楠川の博多雄次郎さんという、もと鹿児島

人のやっている店に売りました。この店は、今もあります。長い間、楠川と楠川で唯一の店でした。製造所が小さいので、サバの頭とハラゴで作る塩辛も自分で食べてしまっほどしかなく、売ったりはしませんでした。

みなさんの力のおかげで家が建ったのです

この家を建てたのは、私が二三歳の時でした。楠川で一番いい家でしたよ。もう、大変な苦勞をして命からがら建てたんですよ。この時は、村のみなさんの加勢で建てたのです。大工さんには七〇円あげただけで、みなさんの力のおかげで建ったのです。

牛を買いに種子島へ行ったことがあります

若い時にバクリヨウ（博勞）の仕事をやってみたこともありましたが。免状もとりましたよ。牛を二匹買いに種子島へ行ったことがあります。その時は、南種子の下西田に一月も泊ることになりました。ちょうど今ごろの季節（三月始め）で風が荒い冬だったのです。しかし、この仕事は、三〇歳になる前にはもうやめていました。馬も牛も地元から買って鹿児島に売りますが、運賃と旅館賃を払うともう何も残らないのです。バクリヨウというのは、もうけようと思えば人に嘘も言わんといかん仕事なんですね。それで、やめたのです。

道の向こうの日高甚七さんにも会ってごらんさい。友達ですから。

日高甚七さんのお話

その足でお訪ねした家の離れで日高甚七さんは布団をひいて寝ておられました。私のあいさつを聞いて、起きてくださり、座られると実にしゃんとされたので驚きました。時、所、人名など、こまやかな話しぶりですみずみまで信頼できる話し手だなあとという印象を強くもちました。事件から二年もたったあとの後日談など、話に落ちのある語り口は絶妙です。

お会いするひと月ほど前に病気になるれて、寝たり起きたりの生活をしておられたらしいのですが、半年後の一九八五年一〇月一八日に病没されたということです。しっかりした生活に根ざした、すぐれた伝承をもっておられる方であったと思います。

ここから先の原稿は、甚七さんの息子さんの日高勝雄さんが見てくださいました。ありがとうございました。

凧であれば夏は毎日毎日漁に出ました

私は、明治三五（一九〇二）年八月にここに生まれました。尋常六年を終えて卒業したときは、数えで一四歳でした。

ここは主に漁をする部落でした。私が卒業した当時は、機械船というものがありませんでした。ですから、長さ二〇尺、幅六尺の帆船でド（櫓）を漕いでサバを釣りました。ゴチヨウラチ（五丁立）

の船に八人で乗組んで、交代で漕ぎます。一四歳で学校を卒業してからは、五月から九月にかけての四か月ばかりは、風であれば毎日毎日漁に出ました。夏はあまり風は吹きません。シラハエという南風が吹くだけです。八月になればまた風が出てきます。

昼の一二時に楠川を出て、帆船なら三時間で一湊の沖に出ます。サバを釣って帰ってきたら、もう夜の一〇時です。毎日二、三時間しか寝られません。船で居眠りをしてはビンタ（頭）を後ろから叩かれたものです。

船元は、楠川の人でした。私は、楠川の船には乗りませんでした。

「このままではいけない」と山仕事にかかりました

父は、私が一七歳の時に亡くなりました。私は漁の仕事を二三歳の時にやめて、山仕事にかかりました。そのきつかけは、二、三人の人と語りあって、「このままではいけない」と思ったことでしたね。

冬は時化の時分です。こたつもないので、ジロリという三尺角のいろりに薪を燃やして暖をとりました。食事も冬はここで炊きました。冬場は海に出られませんので山仕事を主にやりました。

たきぎを一湊まで売りに行きました

山で伐るのは、たきぎです。自家用のたきぎとサバ節をゆがくためのたきぎです。売るためのたきぎは、ゴチヨーラチの帆船に三人で乗って、宮之浦や一湊に運びました。大正二一、三年ころの値段

では、一八エのたきぎが、楠川では、二、三円しかありませんでした。ところが、同じ頃、宮之浦では五円くらい、一湊では八円もしましたから、高く買ってくれる一湊まで売りに行くことが多かったのです。一八エというのは、たきぎを数える単位で、長さ一尺五寸のたきぎを幅一丈（一〇尺）、高さ五尺に積んだものです。ゴチヨーラチの船一隻に二八エ半しか載りませんね。

このたきぎ作りの仕事に使われた時は、一日に賃金を一円二〇銭もらいました。これは、当時としては破格に高い賃金で、普通は一日の賃金は、米三升相当くらいが普通でした。当時は米一升が一五銭でしたから、四五銭くらいにあたります。たきぎの運搬の賃金をこんなに高くしたのは、一湊から帰ってくるのがもう夜中になるので、その分だけ多く払ったわけです。

「良か焚きもんがあつじやないか！」とつかまりました

屋久島の山はほとんど国有林ですから、たきぎはだいたい営林署の目をぬすんで盗伐するのです。各区域には、ひとりずつヤマホーというて、営林署の係員がいました。ヤマカン（山官）ともいいますが、内地人ですよ。

木を伐るのは、楠川と宮之浦の間の山でした。ヤマカンのこない日を選んで、朝まだ暗いうちにひと仕事します。

あれは、私が二〇歳の時でした。枯れたタブの木をとり三人で山に入ったのですが、いきなり後ろから「おい、良か焚きもんがあつじやないか！」という声がしてつかまりました。さんざん説教さ

れて、「今日はコイデ許す」と言われました。「署名をして、兵役に関係ない人を一人探してきて、保証の裏書をしてもらってこい」と言われました。逃げているうち、幸いそのままになりました。私の父はつかまって三か月の懲役を受けたことがあったそうです。

共有林制度が始まりました

私が二五、六歳の時に共有林制度が始まりました。何十人で何町歩分として金を納めて払い下げを受けました。営林署のヤマカンが縄を引いて、その内側だけを利用するようになりました。山に五か所の札箱を置いて、これを毎日一回まわって印をつけておくのです。この仕事は無報酬ですが、部落の奉公（村仕事）ですから部落からは一定の免役がありました。

部落の奉公と営林署の官行

元来、部落の奉公は、部落経営のための費用かせぎが主でした。道の修理も奉公ですが、これは年に一回だけでした。この仕事の時は、山にも泊りました。

官行といって営林署の事業もありました。これは、山師がとった木をかるつて（背負って）下ろすという仕事でした。この仕事の時も、山に泊ることがありました。

小さい時から牛や馬が好きだったので

三、四年山仕事をしたころ、私は二六、七歳になっていましたが、少し経済が落ち着いてきましたので、牛馬の仕事の方にかかることにしました。私は、小さい時から牛や馬が好きだったので。

上屋久村の仕事で、種馬の経営がありました。種馬をもって小瀬田、宮之浦間を巡回して、一日二、三匹ずつ交尾させるのです。私が二七、八歳の時、ある農業技手が「種馬おいてくれ」といって頼みに来ました。この仕事は、それから二〇年もやったのです。

種馬をもって馬小屋に肥料がたまらんです

ところが、三年ばっかしゃやってみたところが、いつも馬を乗り回すので、馬小屋に肥料（厩肥）がたまらんです。うちは百姓なので、どうしても肥料は必要です。

ウマンコ（馬の仔）は一〇月になると乳ばなれをします。これを二、三頭やしなつて三、四月に内地から買いにくるまでの間の冬場に肥料を取らつと考えたのです。

馬を三頭買いました

楠川に、私より五つ年上でバクリヨウ（博労）をしていた宗太郎さんという人がいて、営業権をもっていたので、この人に「馬を二、三頭買ってくれ」と頼みました。そうしたら、「今日は永田へ行くから、いっしょに宮之浦まで行ってみよう」と言われました。

ところが、着いてみると宮之浦の拵（かこい）フキヨシさんという、私より三、四歳年上の人が、

「宗太郎おじ、おまえに売る牛や馬はおらん」とはねつけるのです。それで私は「今日は遊びやから、小瀬田へ戻って買ってみる」と言つて昼飯のあとひとりで行つてみました。そして、雄の馬を二六円、牝の仔を一五円、雄の仔を八円で合計三頭買いました。二六円の馬は、上屋久でも一番の馬でした。馬を受け取る前に、家の下に掘つ建て小屋を作つて、厩を準備します。おなご衆を二、三人やつつて萱で屋根を葺きました。二、三日で厩はできて、屋根も葺き終わりました。

種子島の博労の大将と喧嘩をしました

屋根葺きが終わつた昼ごろのことです。先日、楠川のバクリヨウと種子島のベテランのバクリヨウの中里さんという人が来ました。私より、二〇も二五も年上の人です。私は大将が来たのでぺこぺこしました。本家に案内して、その縁側に腰をかけさせました。一〇月ごろですから縁側でも寒くはありません。

中里さんが言つには、「おまえが二六円で買った馬、わしに二七円で売れ」といふのです。せめて三〇円と言つてくれれば「うちも考えたのですが……。それでこう言いました。」「私は、商売に買ったのではない。コヤシをとるのが目的だから」と断りました。そうしたら、向こうは喧嘩腰になりました。

「おまえは、営業（免許）も持たんで、一日に馬を三頭も買うとは、これは違反だ。警察に突き出すぞ」と言います。こっちも喧嘩です。とつとつ喧嘩わかれになりました。

別れて二、三分して中里さんがひとりで戻ってきます。「三〇円出すから仲直りせえ」といいます。でもこっちは心がおさまりませんので、「でけん！」「といて意地をはりました。

警察へ行つて免許の申請をしました

しかし、免許なしに牛馬を買つて五円から一〇円くらいの罰金を取られる人もおつたので、その晩よく考えました。そうしたら、いい考えが浮びました。こっちが先に警察にいけばよいのです。

翌朝早く警察に出頭して言いました。一部始終を言いました。そうしたら、「いや、君のは違反にならん。君こそ営業（権）をとりなさい」と言われました。「でも、試験というのが不安です」といいましたら、「いや、試験はいらない」と言つて、親切に申請紙の下書きを作ってくれました。田中という代書屋へ行つてハンコをつけて出しました。免許は一か月くらいで下りました。

私がバクリヨウの営業免許をとつてからは、どういふわけか、宗太郎さんによりつく人が少なくなつてしまいました。昭和一八（一九四三）年に法律が改正になつて家畜商試験というのが必要になつた時、宗太郎さんはもうこの試験を受けませんでした。家畜商試験は、牛と馬と別々になつていて、私は両方とも通りました。

軍馬を売りに鹿児島へ急ぎました

バクリヨウの仕事は、せり市で牛や馬を買つて鹿児島で船にのせて屋久島で売つたり、交換したり、

変な馬を鹿児島にもって行ったりしていました。知覧、指宿方面から良か馬車馬をもってきたりしました。

昭和一二（一九三七）年までは、ここで一番いい馬が八〇円から一〇〇円。普通は五、六〇円でした。ところが、昭和十二年八月に、軍が鹿児島市内で六〇〇頭も徴発しました。そんなに急にたくさん馬がそろうものではありませんので、大騒動をしていたそうです。こっちはそんなことを知らなかったわけです。

安房のバクリヨウで東袈裟吉（けさきち）さんという人がおりました。この人が、七〇円くらいの馬を二頭鹿児島へもって行って、すぐ帰ってきました。袈裟吉さんは、五〇トンくらいの運搬船に馬を積んでいて、その船に私は招かれました。「一日一〇円で雇うから、馬を買って手伝いをしてほしい」と言われました。四、五日のうちに馬を手に入れないといけないのです。八月一四日か一五日のことでした。

金と馬を集めました

まず、楠川の川崎栄蔵さんという人に、金を出してもらえないか相談に行きました。楠川では渡辺新次郎さんという人が馬を六〇円で持っていけといっています。また、牧常義さんの馬を一頭、これは四五円で買いました。このお金は、栄蔵さんが出してくれました。つづきに、小瀬田の向こうの船行に行きました。そうしたら、日高袈裟次郎（けさじろう）さんという人がいましたので、「おじさん、銭貸さんか？」と尋ねました。そうしたら「馬を一頭もっていけ」と言われました。これは、八〇円の約束で後払いということになりました。

はなはだ荒もつかりいたしました

東袈裟吉さんは四頭、私は三頭、あわせて七頭を船に積んで鹿児島に向かいました。家畜市場は鹿児島騎射場というところにあつて、五日、一五日、二五日の月三回の市でした。馬の値段は、もう下がり気味でした。じゃけど、袈裟吉さんは、「二五〇円より安く売るな」と言います。相手が二三〇円というのですが、袈裟吉さんは売らせません。その日は一頭も売りませんでした。翌日には一〇円くらいまた下がります。「明日は何でも売ろう」ということで、八〇円で買った馬は二三〇円で、六〇円のは二〇〇円で、四五円のは一四五円で売り、はなはだ荒もつかりいたしました。

三、四回続けて行って、何千円かもつけました。予想もしない金でした。これを元手にどんどん商売をしました。昭和二一年には、三万円ほどかけて長い厩を建てました。

種子島のせり市にも行きました

鹿児島だけでなく、種子島のせり市にも行きました。こっちから種子島へ牛馬をもっていくたりすることもずつとやっていました。それで種子島へは毎月のように行きました。一〇馬力ほどの船を一隻買って、これで往復しました。片道二時間です。種子島には長居はせずによくちよく行ったり来

たりしました。

物を五〇俵くらい積んできてヤミをやりました

あの時分の屋久島は、米不足でなあ。終戦一か月もせんうちに、種子島へ行つて物を五〇俵くらい積んできてヤミをやりました。ちょいちょい種子島に行く用事があるのでいつでもに持ってくるのです。

ヤミ米をやったのは戦後だけです。長くは続きませんでした。というのは、こっちでも米を作つて売るようになってきたからです。

「日高君、ヌシはひっかかった」

私の相棒がヤミ米でいつべんひっかかったことがあります。種子島で買って来た五〇俵の物を二五俵ずつ分けて、私は楠川の浦へ自分の分を降ろしました。相棒は、宮之浦のトウリュウという人でしたが、私は「トーさん、おまえもここで降ろせ」と言ったのですが、「いや、夜の二時すぎなら見つからんよ」といって、宮之浦まで船で行きました。そして宮之浦観光ホテルの前身の富士屋旅館に無事持ち込むことができたそうです。この時の船主は、南種子の立石という村のサンジユウさんという男でした。この人は、私よりも大分年上の人で、屋久島で作った運搬船をもっていました。この時、サンジユウさんは、サバを釣つて帰るといって、三〇〇斤ももつて帰りました。

ところが、一か月ほどして会つたらトウリュウさんが言うには、「日高君、ヌシ（私）はひっかかった。警察には、一〇俵だけもってきたと言つてある。ヌシは一人がかぶつちよる」といいました。

種子島に河野さんという家畜商がいました。この人とは友達でしたが、なかなかのやり手で、実は物を五〇俵買つてくれたのもこの人でした。ところが、トウリュウさんは、この人から物を買つたことや、積んだ船のこともみんな白状させられてしまったのです。

検事局へ出頭しました

トウリュウさんがヤミ米でつかまって二年して、たまたま河野さんの所へ行つたところが、「あさつては、例の件で検事局へサンジユウといっしょに出頭せんといかん」ということでした。（いっしょにヤミをやったのを伏せてもらった恩義に感じて）私もついていくことにしました。昭和二四年が二五年の三月一八日のことでした。バチギン（罰金）はひとり五円でした（编者注。記憶違いではないでしょうか。戦後にしては少し安すぎる感じがします）。私は、弁償はしませんが、それ以上に使わされることになりました。

仲間が競輪場でお金をすられました

三人で泊まった鹿児島島の宿の姪の夫が自転車乗りであるというので、三人そろって鴨池の競輪場へ行つて自転車競争を見ました。ところが、サンジユウさんは人の預かり金一万二、三千円を持っていて、これをすっかりすられてしまったのです。この時すられたサンジユウさんのあずかり金を河野

さんと私の二人で出してやらんといかんことになってしまい、思わぬ出費をしました。

焼酎の密造もやっていました

終戦後すぐ、楠川では焼酎の密造もやっていました。ある人が旅館用に買いに来て、自分もちよつと飲んでから帰りましたが、宮之浦に帰っていないというので大騒ぎになったことがありました。探してみたら、途中のトイゴエタン（鳥越谷）という川に落ちて死んでいたのです。こんな事件もありました。

初も三俵から五俵をとるのがせいぜいでした

（遊地）徴兵検査を受けられたころの日常生活のことや種子島とのつきあいのことを少しお話いただけませんか。

私が徴兵検査を受けたのは大正二一（一九三二）年でした。体格は良かったのですが、小さい時に相撲をして左手が少し曲がっていましたので、第一で兵隊には行っていません。

その頃、港の所にほんの五畝ばかりのムタダ（湿田）をもっていただけで、初も三俵から五俵をとるのがせいぜいでした。このムタダは今埋められて、港の一部になっています。そのころ作っていた畑は、アラキ（アラチ）が二、三反で、コバはもっていませんでした。

昭和九（一九三四）年に楠川の神社の上の土地を耕地整理して、二五、六人で六町歩の水田をつく

りました。それで、私が四〇歳になった昭和一五（一九四〇）年ころからは、初四〇俵くらいとっていました。供出分をさしひいても、余ったほどです。この土地には、今は薬用のガゼツ（ガジユツ）を植えています。

私は、材木の商売はしたことがありません。こつちから運んだ人は多かったですよ。

三日で一〇〇斤のカライモを食べたものです

戦前は、七、八人の家族で三日で一〇〇斤のカライモを食べたものです。大正二〇（一九二一）年、私が二〇歳の時、種子島にカライモを買いに行ったことが二、三回ありました。四、五人と一緒に行きました。値段ははっきり覚えていませんが、一俵一〇〇斤で七、八〇銭じゃなかったでしょうか。現金が主で、私は物々交換をやった経験がありません。

夏場に種子島からカライモを持ってきます

南種子の西之の下西目（しもにしめ）の人が夏場によくこつちへ来ました。向こつからはカライモを持ってくる。こつちから行くときは、飛魚を持って行って売ったり、イモを買ったりしていました。塩サバはよう売れました。

サバの頭や骨は肥料として使いました

サバのビンタ（頭）や骨でつくる肥料は、骨粉代用に田や畑の肥料として使うのですが、これは、私の小さい時からあります。サバ節は楠川でもつくっていました。乾燥したサバの頭は一俵で三〇キロほどだったでしょうか。買うちゃみましたが、値段は覚えていません。

サバノセンジは高かったですよ

サバノビンタの値段は安かったのですが、サバをゆがいた汁を煎じて水飴のようになったサバノセンジは高かったですよ。これは、だしとしてお汁に入れて溶かしました。二斤ほどの壺に入っていて、一斤あたりの値段は二〇から三〇銭ほどでした。

サバの塩辛は良かもんでした

サバの腹の中のおかしな物を捨てて、はらわたとサバノビンタ（頭）を混ぜて塩辛にしたものは、良かもんでした。御飯のおいしくない時にこれを添えたら、良かおかずになったもんでした。しかし、食べる分はわずかなもので、余ったら肥料になりました。

種子島は人づきあいのいい所でした

種子島は、なかなか人づきあいのいい所でした。一週間おっても、一〇日おってもお金なんか払うたことはなかったし、むこうからも来て泊まっていたものでした。

種子島では、西之表の牛島四袈裟（よつげさ）さんという私と同年の家畜商が友人でした。この人は、若い時分に鹿児島から来た人でしたが、一回千頭のセリのうち、三〇〇頭もせり落とすような大きな家畜商人でした。

深い友達がいってイトコと呼びあっていました

日高長八さんは、竹馬の友です。三〇歳を過ぎてからなんでもふたりで相談しているいろいろありました。屋久島の中にも深い友達がいって、それはイトコと呼びあっていました。下屋久（今の屋久町）の方へはサバなんかを持って行きました。むこうからは黒砂糖を持ってきたり、どっさりもらったりしましたね。

お休み中のところ、どうもありがとうございます。

対談3 アフリカへ、そして再び南島へ

遊地 アフリカに行くことを夢見て大学院に進んだ僕だったけれど、なかなか機会が来なくて、伊谷先生にいつになったら行けるんでしょうか、と聞いた。そうしたら、先生は「僕が初めてアフリカに行ったのは三二歳の時だった。君はまだ若いんだから、あせらんでも機会は来る」と言ってくれた。

貴子 伊谷先生のそのまた先生の今西錦司さんとのゴリラ調査の時ね。まだほとんどのアフリカの国が独立できないでいた一九五八年のこと（伊谷、一九九一）。

遊地 幸い、僕らがはじめに出合った西表島の人々は、アフリカ調査への足慣らしなどというかりそめの付き合いでなく、人間としての深い付き合いを迫る人たちだったから、アフリカから帰っても西表島で研究を続けるということになった。僕の家主の石垣金星さんが「汝の立つ所、深く掘れ。そこに甘き泉あり」という、沖縄学の父・伊波普猷（いはふゆう）の言葉をモットーにしていたことにも励まされた。

貴子 まあ懐の深い島で、廃村調査の間に見残したこと、聞き残してきたことも多かったし、人の話を聞く面白さに目覚め始めていた。自分で面白いテーマを嗅ぎあてて、それを掘り起こしていくという研究のやり方が知らず知らずのうちに私たちの身についていっていた。のびのびとやらせ、励まして下さった伊谷先生の指導もよかったし、西表島というフィールドもすばらしかった。

教育者としての伊谷先生

遊地 伊谷先生に、「君の見つけたことは、こんなすごい意味があるんだぞ」といわれると、なんだかとても重要な研究をしているような気になってしまふ。そういう意味では人を乗せる天才。

貴子 そのあとの面倒見もきちっとしていらっしゃる。

遊地 そういえば、修士論文を書く時に、僕は生まれて初めて日本語の実用文を書くという訓練を受けた気がした。僕の書いた拙い言葉を生かし切って、それをきちんとした論理の通る、読みやすいものに変えてしまふ。そのために、自分の原稿のほかに、バスの中でさえ何百枚という原稿の添削をしておられた。その仕事があまり込み合っていると、息抜きに藪ぐりをされた。特技は、川魚の手づかみだとおっしゃっていた。

貴子 研究室恒例の米と味噌だけを持っていく山菜採り遠足もあった。

遊地 藪ぐりのことを先生は「ジャンジャン」と呼んでおられるけれど、僕が西表島で廃村調査をしている時に「ジャンジャン」を口実に三度も西表島まで来てくださった。荷物は極限まで少なくし、軽い靴をはき、厚鎌を片手に軽々と進んで行くのが彼のスタイル。僕は、目覚まし時計まで持って行って「百貨店」のあだ名をたまわった。岩がころころ重なる急な沢を登ったり降りたりしながら、ある所で先生は小さな滝壺へへつりながら、「ここは君には無理や。横から廻れ」とおっしゃった。と

ころが僕は横着をして、先生の踏んだとおりを通ろうとした。ところが、やっぱり僕の引き締まった足では届かなくて、滝壺の中に落ちこみそうになった。僕が先生の立場だったら、水の中で少し頭を冷やせと静観しているところだ。ところが、先生は、さっと水の中をかけよって来て肩で僕の靴を受け止めてくださった……。

貴子 伊谷先生も御心配だったんでしょね。先輩方を代わる代わる西表島の廃村研究の手助けによこして下さった。

アフリカへ、そしてまた西表島へ

遊地 大学院の四年目に、ようやくアフリカへ行く機会がやってきて、二人でザイル（現在はコンゴ民主）共和国へ飛んだ。伊谷先生がやっぱり「君の行くところはひとつしかない」といって、決めて下さったコンゴの森の中。

貴子 先生は、飛行機で上空から見て「あそこは、アフリカの緑の心臓だ。とても美しい森が広がっていた。きつと、あの森の下には今も伝統が生きていて、美しい暮らしがあることだろう。君たちの行くところはあそこだ」とおっしゃった。

遊地 そのあと、付け加えてこうおっしゃった。「どんなに粗い網目でもよいから、ある全体を覆う研究をしなければいけない。そうすれば、これまでに誰もやるうとしなかった課題に気が付くはずだ。それが見つかったらその一点に集中して深く掘るがいい。岩盤に届くまで。ルアラバ川（コンゴ川の上流）の東側の森がいいだろう。あそこはこれまで研究者が誰も手を付けていない所だから……」

フィールドワーカーとしての判断だけでなく、学問的な目配りがあることも忘れずに付け加えられた。

貴子 初めての外国で、私は高い崖から向つを見ないで跳んだような気分だった。

遊地 森の中の一〇〇人ぐらいの小さな村の村長さんが養子にしてくださいって、村の半分ぐらいが親戚になって過ごしたあの日々は、僕たちの人生にとって決定的な経験になった。

貴子 わたしにとっては、人間に対する信頼の回復だった。人間として実にするべきな人たちに出会ったし、その人たちと自然との関係がまた深いものだった。「人間って、こんなふう生きて行くこともできるんだ、ああ、人間ってすばらしいな」と心から思えた。

遊地 日本に帰って、村で撮った写真が現像されてきたのを見て、あなたは、「あら！こんなに肌の色が違って写っている……」と叫んでいた。

貴子 だって、そんな違いなんか全然意識しないで暮らしていたもの。

遊地 あの人たちは心が広いから、そんなことを意識させないように計らってくれていたんだろね。

貴子 二年間のアフリカ行きが一段落したら、また、西表島に通いはじめた。

遊地 幸い、沖縄の大学に就職できたし……。

貴子 西表島の人たちにアフリカの村の写真を見せたら、ある人は「ムットウ モヒヌ バシマ

ニサル アランカヤー」つまり、まったく昔の西表島とそっくりな暮らしじゃなかったって。肌

の色の違いや、動植物の種類といった小さな違いを越えて、自然と共存する生活のもつ共通点が西表島の人たちには強く感じられた、ということだと思つ。そして、以前と違って、何かあると「おいで、いっしょにやるう」と島の人たちが呼んで下さるようになった。

遊地 アフリカで、人間大好き人間になり、「敷居の低い人」に育てていただいた、ということかな。僕は、西表島で誰もやらない廃村調査をやり、それから昔の稲作の復元研究をしてそれなりに評価されて、その次に何を西表島でするか、先が見えていなかった。でも、アフリカで生きている物々交換の市場を見て、そういう目で日本を見直すきっかけをもらったような気がした。

貴子 それが「高い島と低い島の交流」という論文（安溪遊地、一九八八a）になった。

遊地 自然条件が違えば、なりわいが違い、なりわいが違えば、海幸と山幸の間に経済的なやりとりができる、という見方が、八重山の島々でも成立することを確認できた。

貴子 その研究のためにしたフィールドワークが『季刊生命の島』での「橋をかける」の連載につながってくるのね。

橋をかける

遊地 屋久島と種子島の方々のお話を聞き始めた一九八五年ころには、僕の主な興味は隣りあう島をつなぐ物々交換の研究だった。もちろん、物と物の交換だけじゃなくて、贈与もあり、人間や文化の移動もそこにあるので、「橋」を渡るものは、様々だった。

貴子 だから『季刊生命の島』の連載中は、扉に「伝統の智慧を受け継ぎ、交流しあうための心のかけ橋が島から島へ、世代から世代へ、見える世界から見えない世界へ、屋久島の空にかかるあざやかな虹のように幾重にもつらなっていくことを祈りながら……」と書いた。

遊地 実は、始めのうちには、「見える世界から見えない世界へ」という言葉はなかった。島の方々のことばに素直に耳を傾けているうちに、それまでは聞こえなかったもうひとつの音色がしだいに強くひびくようになってきた。それは、豊かな自然と共に生きる智慧の輝きとでもいったらいいようなもので、見えない世界との交流を含むものに徐々に育っていった。

貴子 九州の南に散らばる島々をつないでいた心のきずなや、世代を越えて伝承されてきた智慧が滅び去ろうとしていることに、アフリカから帰ってあらためて気づいた。手遅れかもしれないけれど、なにか書き残したいと思った。

遊地 「みどり」のまなざしで世界をみるための手引書の『みどりの考え方の辞典』（BUTTON, 1988）は、こんなふうの説明している。「橋。人びとが本当にわかりあうことができるようになる結びのシンボル。人びとを とくに違う背景をもつ人びとを 結びあわせようとする努力を表わす時に使うことば」一九四〇年ころからこの意味で使われるようになったそうだ。ちょうど、僕たちが「橋をかける」という言葉にこめた願いにぴったり重なる。

物々交換をめくって

遊地 ここに収録した四つの話は、だいたいは、隣りあう島々の間の物と物の交換や、行商といった目に見える話を中心としている。石垣島と宮古島の間の多良間島で聞いた話が「お金がいらなかったあの頃」。実際に多良間島に通って物々交換で暮らしを立てていた、水納島のおじいちゃんの語りは、実感がこもっていて、とても貴重なものだった。

貴子 多良間島は、小さい島だけれど森があつて、海も豊かで美しい島。民宿で新鮮な魚をあんなにたくさんいただいたことはなかった。それを民宿のおばさんが捕ってきたと聞いて二度びっくり。そして、短い旅だったのに、いきなりお祭にでくわして、その仲間に入れていただいた。男の人たちの豚料理を手伝うことになって……

遊地 地元の学者の方々が、原稿を直してくださいました。方言の表記法に教えられるところが多かったです。アフリカでの経験に引張られて、なんとか昔は物々交換が主だったと書きたいと思っている僕の勇み足を、丁寧に訂正してくださいました。

貴子 多良間島からは南はるかに石垣島が見えた。そして石垣島からは西表島が見えて……

遊地 そして、西表からは与那国(よなぐに)島が見えたという伝説があり、与那国からは年に数回台湾が見える。

貴子 見える所には、行ってみたいくなるのが人情。

遊地 琉球弧の一番幅広いギャップは宮古島と沖縄群島(久米島)の間にあつて、五〇〇キロもあるから、とうてい目で見ることができない。この距離は、東南アジアから東北アジアにかけての島々のつらなりのなかでは最も大きいらしい。

貴子 すると、文化的にも宮古・多良間・八重山の島々は、沖縄以北とは違う部分がある可能性もあるわけかしら。

遊地 そう。このギャップを人々が容易に行来するようになるのは、考古学的には最近のこと。まだわずかに三千年ほどしかたないという。

貴子 そういうことを栽培植物の品種を手がかりに調べることが出来る(安溪遊地、一九八六a、安溪貴子、一九九六)。

遊地 二番目は、奄美諸島の最南端の与論島。ここでは、沖縄とのつながりのことを主に聞いた。貴子 あの時、那覇から沖縄島の北端を越えて飛行機が与論空港に近づくと、サンゴ礁の海に面して、いきなりリゾートホテルが現われた。ところが、降りてみると、街はなんだかゴーストタウンのようで、さびれた民宿や閉った旅館などが立ち並んでいた。観光で生きて行くことを目指したけれど、情勢が変わったということがよく見えた。

遊地 与論島は日本最南端の島だったんだけど、沖縄が日本になって奄美の島々のひとつということになってしまったから。でも、農業もがんばっていた。

貴子 泊めてもらった民宿は、三世代同居で、みんなが暖かく迎えてくださいましたし、うちの息子と同じくらいの年かっこの子どもたちがいて、楽しく遊んだ。

遊地 「与論民俗村」を経営しておられる菊千代さんは、与論方言の記録を残すことに懸命に取り

組んでおられて……

貴子 与論を愛する気持ちがひしひしと伝わってきた。

遊地 その情熱に動かされて、生活語彙が専門の沖縄国際大学の高橋俊三さんが、助言者として協力している。そのうち大きな協同作品が生まれるのが楽しみだ。

貴子 必死になる気持ちもなんだかわかる。サトウキビ畑を増やすために、田や水路を埋め、木を切り払って、地形もすっかり変わってしまったと聞かされた。私には、水田が広がっていたという元の様子をどうしても思い描くことができなかった。

遊地 観光と農業の両方で進行中の地場産業の空洞化と、自然の環境の激変が同時に起こって、伝統文化が一拳に崩壊しかねないという危機感が島の人にはあると僕は思った。

貴子 そういう時に、自分の島を深く掘り続け、島の未来を熱く語るリーダーがいるかないかが島の運命にとっての分かれ目になるのかもしれない……。

屋久島との出会い

貴子 続く二つは、屋久島での聞き書き。屋久島の雑誌での連載の始まりになった「種子島への魚の行商」と「小さい時から牛や馬が好き」。

遊地 上屋久町の一湊（いっそう）漁港の漁師だった斎藤さんの話は、淡々とした暮らしをしてきたように見える人が、実はたいへん劇的な事件を経験してきたりしていた、ということがわかって、

とても印象的だった。そして、明治時代には、屋久島の人たちがはるか八重山までカツオ釣りに行っていたこともわかった。

貴子 お話を聞き出す手助けをして下さった、永里岡先生は、もともと中学校の理科の先生で、ナチュラリストリー（自然誌）の専門家であり、屋久島の地名考を出版されたりするジェネラリストだった。

遊地 次の楠川（たぶがわ）集落のお二人は、いずれも博労の経験のある方たち。商売の詳しいようすを、値段入りで記憶しておられるのには驚かされた。

貴子 それと、国有林から木を切り出したり、闇米を運んだり、焼酎を密造したり、お上の弾圧にもめげなかった庶民の智慧とパワーが感じられた。

遊地 どの島でのこととは言えないけれど、雑誌への連載中に、あるおじいちゃんの語りを収録しようとした考えたことがあった。簡単な骨格だけの原稿をつくり、お宅に届けた。お会いしてから七年の年月が流れ、残念なことにおじいちゃんは、寝たきりになっておられてお会いすることができなかった。その後、おじいちゃんは亡くなられてしまった。短い前書きと、後書きを添え、本文も雑誌に載せられる形に整えた原稿二部を、チェックしてもらおうと、御遺族にお送りした。

貴子 一部はチェックして送ってもらったための返信用封筒付きで。

遊地 しばらくたって届けられた手紙には、おおよそ次のようなことが書かれていた。……なつかしいおじいちゃんのことを書いて送ってもらって、家族一同たいへんにつれしく思っています。ただ、

お話をした当時、すでにじいちゃんは自分のしたことと息子がしたことの区別がつきにくくなっていたようです。家族で相談した結果、赤で印を付けた所だけは公表しないでいただきました……。

貴子 事前に見せてよかった。そう思って、どこに赤がついているのか、返送されてきた原稿を見るよ……

遊地 「はじめに」と、おじいちゃんのご冥福をお祈りしますという内容の「おわりに」以外の本文のすべての行が赤で消されていた！

貴子 大ショック。でも事前に見せて本当によかった！そのまま無断で出していたら、それこそ調査される側の大迷惑。

遊地 それだけではなくて、雑誌の発行所にも取り返しのつかない迷惑をかけるところだった。さつそくお礼状をしたため、連載の予定を急遽別のものに差し替えた。時間と材料のゆとりをもって書くべきだ、ということをお願い知らされた経験だった。

四、海をこえる絆

屋久島の白川山に住まないか トカラ列島中之島・松田武彦さん

ザグレブでの出会い

屋久島の南側へまわると、島の南につらなる島々が見えます。トカラ列島です。行政的には、十島（としま）村に属し、北から順に、口之島、中之島、今は無人の臥蛇（がじゃ）島、平（たいら）島、諏訪之瀬（すわのせ）島、悪石（あくせき）島、小宝島、宝島からなっています。

私たちが中之島を訪問したのは、一九八八年の九月二六日から一〇月四日までの約一週間でした。そのきっかけは、ユーゴスラビア（当時）での姫田忠義さんとの出会いでした。その夏、内戦で破壊される前の、おちついたたたずまいの古都ザグレブで、国際人類学・民族学会が開催されました。会場でお会いした姫田さんは、日本の、そして世界の人々の生活誌を映像記録していく日本民族映像研究所の仕事を続けていること、その一環として、日本に戻ったらすぐにトカラ列島の中の島での丸木舟の復元にとりかかるともりだが、よかつたら来てみないか、とおっしゃいました。私は、ゆうゆう迫らぬ姫田さんの語り口に耳を傾けるうち、いつしか夢が伝染して、日本に帰ったらなるべく早いうちにトカラの島々を訪ねてみたい、と心に決めていました。

はじめて訪ねた中之島では、原木を山から切り出して丸木舟が着々と建造中でした。姫田さんの仕事ぶりは、撮影をするよりも、みずから大鋸を営々と挽く時間の方がはるかに長い、というようなやり方で、島の方々のやさしいものごととともに、強い印象を受けました。

一九八八年の九月二八日から二九日にかけて楠木（くしき）集落の松田武彦さんにお話をうかがいました。

二八日は、村作業で神社の境内の掃除でしたが、海を望むピロウの林の中での作業を手伝わせていただきました。休憩の時間にかがったお話と松田さんのお人柄にひかれて、その翌日はご自宅におじゃましました。

松田さんは、明治三九年のお生まれ。三〇代のときに屋久島の一湊白川山（しらこやま）で鉄道の枕木を切りだす仕事をされ、数か月の仕事を終えた時、白川山に住まないかと誘われたといいます。

お話をうかがった時、まだ私たちの屋久島通いは始まっていませんでした。やがて、詩人の山尾三省さんや画家の手塚賢至・多津子さん一家などの出会いを通して、今では私たちのとてもなつかしい大切な場所になっている白川山のことを以前に聞いていたことは、なんだか不思議な気持ちがあります。

ご無沙汰が続いている間に、松田さんは東京の息子さんのところへ引っ越され、大変お元気であったそうですが、一九九八年一〇月ころから不調を訴えられて一二月一日に眠るような往生をとげられたということです。ご遺族のお話では、時おり私たちのことを思い出して、東京でも話題にしてくださいとのことでした。貴重なお話を聞きっぱなしにしていたことをお詫びするとともに、つつしんでご冥福をお祈り申し上げます。

ヒマガワリ（労働交換）で建てた家

この家は、二〇年前（一九六八年ごろ）に建てた家です。柱はヒトツバ（和名イヌマキ）。しきいはタブ（和名タブ）、床板はサクラです。みんな自分で切った木ですよ。昔は、一番の奥山のオオヤマという所には、ヒトツバ（和名イヌマキ）の大きなのが、竹のごと立っておったもんです。大きなものになると一本のヒトツバで家一軒分の柱がみんな取れたんですから……。

昔の人は、お互いに加勢しあって家を建てたものです。自分が加勢してもらったら、よその人をまた助けてあげる。こういうやりかたを方言でヒマガワリといいます。

丸木舟にする木

私は、明治三九年生まれの午の人です。今、姫田忠義さん（民族文化映像研究所）たちが丸木舟を造っていますが、以前に「最後の丸木舟」といつて造った時は、私なんかも造りました。大きなヨキを振るって。

丸木舟は、手入れさえすれば長くもちます。マシンの油かフカの油を煎じてひきよったです。そうすれば腐れないんですね。私の丸木舟は、昭和二六年一月一日のルースタ台風で流されました。高波が津波みたいじゃった。（役場の）支所の上まで波が上がって、郵便局から向こうの家が全部流されたんですよ。造ってまだ五、六年しかたたん、まだまだ使える舟だったんですが、それからもう丸木舟をつくらなかったです。

今でも、山には舟を造るような材木は、あることはあるでしょう。

そうそう、ヒトツバの丸木舟というのもありましたよ。材としては、今使っているローソクノキ（和名オガタマノキ）よりも、かえってきれいで長持ちもするかもよ。

昔は、山で仕事をしていると、御飯を握って、お茶と一緒に途中まで届けてきよったんですよ。でも、オオヤマというのは、一番の奥山だから、三時間はかかって歩いた所ですから届けられません。

若い頃は、何里歩いててもサーッサゆきよったが、歳をとれば、一寸も先に行きませんが。

昔は、ブト（和名ブユ）が多くてね。ブトにさされたら焼酎を叩き込んでおくんですが、子どもなんか刺されると熱がでて化膿したりして大変でした。夏でも冬でもいるんですよ。先生が研究して川の水の一番きれいな所に発生することがわかって、一〇年ほど前にブトは駆除されました。

学校を出てから

学校ですか。中之島には、尋常小学校の本校がありました。高等小学校はありません。教員は医者も兼ねていた人で、寺小屋みたいのもんでしたねえ。

学校を出てからは、島にあるだけの仕事をしてみました。魚釣りしたり、枕木切りをしたり……。中之島には田んぼというのは、そのころはまだ無くて、終戦後に始めたことですよ。昔はイモが主じやった。カライモ、サトイモ、ミズイモなあ。品種もいろいろあったでしょう。いま、うちの屋敷の一面に、アカツベというサトイモの品種が植えてあります。ヤマイモの一種でコーシャイモ（和名

ダイジヨ」というのも植えてあります。

徴兵検査は、奄美大島の名瀬で受けました。「第一乙じゃ。兵隊にゆく覚悟はしておけ」と言われましたが、行きませんでした。

お金はたまにソーメンを買う程度

弟がおったけれど、小さい時に亡くなって、父と母と三人で暮しておった。父は吉次郎といいました。おやじの時代には、カツオブシで金をもつけていました。工場じゃなくて、各家で乾燥しよったんです。取り引きをする問屋に送りよったんです。そのお金の使い道というても、お盆やお正月にソーメンを木で作った箱に一杯買うという程度のことです。めったにぜいたくはしませんでした。

お米は、鹿児島から買いつたです。平島ではお米ができませんけれど、あれも最近のことですよ。臥蛇島あたりは、木も取れないから、ほとんどカツオブシで生活をしよったよつです。

一七、八歳になるまでは、丸木舟で魚釣りにゆきよつたです。朝、カツオを釣りにゆくんです。餌ですか。ヒツジの角を削って舟の後に引っぱるホ口引きです。あれは、枕崎あたりの連中が教えた発明でしょう。今の魚はあんなもの食わんですよ。

カツオは、二月ころから釣れ始めて、三、四月が一番釣つですよ。あとも少しは続きます。一番釣れる時には、朝のうちに五〇匹も釣れることがありました。釣れん時には、一匹だけ釣つてみたり、何も釣らずに帰ることもあつたんですよ。いっしょに行つても、全然釣れない人がいたり、いろいろです。まあ、よう釣つても一人で一か年に一万匹釣るといふことはなかつたですな。

空襲のさなかに一番魚が釣れた

戦争で、空襲が激しい時分が一番魚が釣れよつたですよ。輸送ができなくなつて、食糧がなくて、木の葉っぱなんかをかじつて命をつなぎよつたんですが、魚だけは釣れた。

中之島では、学校がまつさきに空襲にあいました。

朝の九時ごろ、アメリカの飛行機が通るので、それまでに海に行きます。一〇〇匹もカツオを釣りよつたです。南方の魚が全部こつちに寄つて来たか、と思ひました。これは、空襲の激しい年一年だけのことでした。

子供に食べさせるものがないので、カツオを食べさせました。それでようやく人間みたいになつくりの子供になりました。食べ物が悪いので、腎臓病みたいになつたりして、死んだ人もたくさんいます。私の友達もみんな亡くなつてしまいました。

空襲前の楠木は、一八戸の家があつて、そのうちで漁師といえる家は、うちを入れて、四、五軒だけでした。そして、子供の代にも漁師をしたというのは、私だけでした。

ヤマナギ（焼畑）の仕方

ヤマを薙ぎて、アワを作つたり、自給自足でやってきたんですよ。ヤマナギ（焼畑）は、田んぼを

するようになってやめました。それまでのやり方は、旧暦の正月から二月ころにかけて、山をなぎに行きます。三月ころに焼いて、その日のうちにアワの種を撒きます。アワバタケといっています。

ヤマナギをようした所は、地名で言うと、シイサキ、シラキ、シヤハイ（ヒラハエ）なんかですね。

旧暦の六月ころにアワを収穫したら、そのあとには粟畑を倒してサトイモを作りよったです。ヤマでつくるサトイモはようできよったです。アワの後を全部サトイモにするわけじゃないです。サトイモは旧暦の九月から一〇月ころには収穫です。三か月で太っです。

アワが終わったら、カライモの草を取ったり、魚を釣ったりです。暑いから、大した仕事もしなかつたですよ。

カライモは、ヤマに作らずに、ぼつぼつ近くに作ったりしていました。カライモを植えるのは、三、四月ですよ。畑は家の近くにもあるが、多くは村はずれの畑に作りました。サトイモもカライモのように近くに作る人もあります。

米づくりの始まり

まだ、戦争が始まらんころからぼつぼつ米づくりは始めていました。米を作らんでおったら、他所から農業技術（ぎて）さんが来て、田を拓いて米を作らにやいかん、といわれて、作るようになったです。フミゾトという人が校長から村長になって、はじめて村営の十島丸を造った、あのころのことです。

田に初めて植えた稲の名前は、ヨンジュウハチという品種でした。大島から来た強か技手じやたんですけど、指導してな。あの人が来てからこの米を植えさせ、田んぼに来ては指導して手伝いしよったです。

私の拓いた田んぼは、四反（一反は三〇〇坪）ぐらいありました。たいがい多かつたんですが、ヤマ（藪）になして、ほとんど捨ててしまいました。近くの田は人に貸してありますが。

村営船がないころの苦労

今のこの風なら、諏訪之瀬島には行けるでしょう。低い雲は出ていますが、まず、三時間あれば着きますよ。平島からは四時間かかります。遠いですよ。

私は、一人で舟を走らせて諏訪之瀬島に行ったり、臥蛇島へ行ったりしたこともあります。

村営の船がないころは、通りがかりの船に乗せてもらったり、乗り遅れたり、不便をしていました。初めての村営船の第一十島丸は、垂水丸という船の形に造りました。小さいけれども、波につよい船でした。

十島丸は、昔は今のようには岸壁に着けませんから、はしけの荷役が済むまでは、船を降りて遊んだものでした。はしけの往復に何時間かかりましたから。そんな時には、オヤコとかトモダチとかはお互いのぞいてみるんですよ。

屋久島で枕木の切り出し

そういえば、私が三〇歳ぐらいの時ですから、昭和一〇年ごろでしょうか、屋久島にも何か月かおったことがあります。鉄道の枕木を切りだすという仕事をしたんです。一湊の白川山の官山地を払い下げたが、山師がないというので、頼まれて切りに行き、二千丁ぐらい取って帰ったでしょう。

そのころの私は、鹿児島にゲタの工場をもっている親戚と組んでゲタの材として、雑木の柔らかいのを出す、という仕事をおったんです。ゲタにいい木というのは、柔らかい木で、シマクロ（和名ハマセンダン）とか、フクギ（和名ウラジロエノキ）とかアブラギ（和名アブラギリか）なんかです。そして、うちに同じ仕事をする人が泊っていました。その人がゲタ材を出荷しにいったついでに、ゲタ材だけじゃ仕事にならんから、と屋久島での枕木の仕事を頼まれてきたのです。

小さい機械船に乗って八時間かかって屋久島に着きました。四人で行って仕事をしました。屋久島での宿は、ゲタ材の親方が下宿屋を探していました。安藤正五郎さんという白川山の組合長の家にお世話になりました。安藤さんは私よりも年上の人でした。他の三人は先に帰りましたが、私はひとりだけ残りました。牛を持っていったので、売れるまで残ったんです。私は山からのコバ出しをやるために、牛をもって行ったんです。白川山には馬車馬が一匹あって、共同で仕事をしよう、白川山に残れ、と言われたんですが、いろいろ考えて、結局帰ることにしたんです。

白川山に四か月いて判ったことですが、中之島の言葉は、屋久島とちよつと似た所もあります。牛は結局一〇〇円で売れました。当時、お金もわずかしが出回らん時分ですよ。サバを釣る小さい

漁船を借り切っても四〇円というぐらいの時代でした。屋久島では、現金収入といえば、飛魚でした。バットという一番安い煙草を買うのでも、飛魚を捕らんといかん、というようなくあいでした。

このあと、中之島でも枕木山が始まったので、これを専門にしてやりよりました。平島あたりの人材木を集めていました。ヒトツバなんかの良い材木は枕木にはしません。ここは、村有林ですから、村に申請して許可になれば、他島の人も切れます。

オヤコになるのは漁師の関係が主

だいたい、わたしが「オヤコ」になるというのは、漁師の関係でなつたんです。漁に行つて、帰れないような時に泊めてもらう。そこからオヤコになっていくわけです。

前にもお話したように楠木の一八戸の家のうちで漁師といえる家は、うちを入れて、四、五軒だけでした。漁をしない家でも、オヤコがありました。あれは、どついつ関係だつたのか……。

来たら、三食たべさせます。大した御馳走はしません。毎年は来ません。私が飲まんものやからそれほどでもないが、酒も少しは飲ませます。来てから風向きが悪くなって帰られんということとはなかつたですよ。ええ風を見て、すぐにきよつたです。漁師やから風のこと詳しいです。

ミヤゲは魚の干したやつなんかでした。冬の寒い時に、ノリをよくある所から採つて送つてくれました。こちらから送りますが、そうしょつちゅうはしません。お歳暮を贈るといふこともしません。

うちは口之島、小宝島、平島、臥蛇島だけで、諏訪瀬島や悪石島や宝島にはオヤコが無かったです。そして、オヤコよりは、近い親戚の方が力づよい気がしています。

口之島のオヤコ

口之島の人も昔はちよいちよい遊びにきよったですよ。遊びにくる時は、一人ずつ丸木舟に乗って来ますが、用事がある時は二―三人で来ました。

おやじは、口之島にオヤコがありました。名前は覚えていませんが、今でも海岸で会ったりすれば挨拶ぐらいはします。昔は、家にも入って遊びました。線香をあげたりしたこともありますし、たまには、わずかな果物やらのおみやげもあげました。

北側の口之島に肥後国吉さんという親しい人がいて、行ってそこへ泊めてもらうものでした。私なんかは下宿と言っています、いわゆるオヤコといつやつです。向こうから来て泊ることもあります。特に用事がなくても、「遊びにこんか」というので、丸木舟に乗って、漁をしながら行くんです。ですから、口之島にはしょっちゅう行きました。国吉さんは、私が始めたオヤコです。きっかけは、学校は違うが、学年が同じやったもんですから。

国吉さんも、毎年は来ません。ちょっと用事があるときにふらっと来ました。ミヤゲなんか持ってきてません。こっちからもたまに行きました。

平島のオヤコ

平島の日高としおさんとも、私の代にオヤコになりました。おやじの吉次郎の代に平島にオヤコがあったかどうかが、それはわかりません。

臥蛇島と平島には、一ぺんずつしか行ったことがないです。

諏訪之瀬島とは何もありません。おやじの代にもなかったと思います。

臥蛇島のオヤコ

おやじの吉次郎の代には、臥蛇島にもオヤコがあったようです。おやじの亡くなったあとも、ちよいちよい来よったのを覚えています。高崎猪之助という人でしたが、早くに亡くなりました。高崎さんの子供たちもちよいちよい来よったです。こっちに来るとまず、あいさつをします。方言が違つけれど、判つですよ。

一回だけ臥蛇島へ行ったことがあります。まだ、若い時ですが、こっちが魚が釣れんので、行ってみたくです。行つたついでに陸に上がって晩には帰ってきました。どこの海で釣っても文句が出るということはありません。

小宝島のオヤコ

小宝島にもオヤコがありました。岩下新助さんという人で、よく泊りに来ましたが、こっちから行

ったことはありませんでした。岩下さんは戦後大阪へ行って、今は妹の岩下ナカさんがいるばかりです。中之島に来たらすぐにここへ来よったもんでした。終戦前までは来ていましたが、空襲になつてからは、会わんです。

小宝島から毎年は来ませんでした。はつきりした頻度までは覚えていませんが。二三日おつたらまた帰っていきます。あそこは、魚が捕れるから、塩して乾かした魚なんかもつてきよつたです。奄美大島へ売るために小宝島の人は、ようそついうものをつくっていましたから。

親父は、小宝島にオヤコをもつておらんかったです。岩下新助さんとオヤコになつたわけですか。仕事の上での見知りです。私の青年時代に、裏（島の反対側）の方から枕木なんかの材木を出したんですが、かついではしけに積み込んで、十島丸に積み込むんです。岩下さんは、その十島丸の船員でした。本当に友達みたいに、オヤコみたいによつたですよ。オヤコのことをトモダチともいいましたから。

岩下ナカさんは、ここへ来てひと月ばかり遊んで行ったことがあります。まだ結婚しないうちでしょう。ひと月食べさせましたよ。毎日遊んで、農作業の手伝いをしたりしてくれていました。

小宝島あたりでは、よそへ出ておつた連中、今は、みな郷里に帰つとるそつですよ。

おわりに

「早速拝読させていただき、とても懐かしい文章に、島の生活の話になると水を得た魚ように、いきいきとした顔で話をしていた父を思い出しました。今はなき父も当時、秘境の島で先生方とお話できたこと、それが後生に語り継がれることをとても喜んでいることと思います。島の言葉、父の語らひの遺産としては是非とも掲載して頂くようつにお願ひ申し上げます。」

これは、下原稿を見てくださった松田勝哉さんからのお使いの一部です。松田勝哉さんは、話者の松田勝彦さんの三男にあたられます。お話を聞いたあと一〇年以上も放置してきた私どもへの過分のお言葉に恐縮するとともに、「島からのことつて」をうかがうといつことの重い責任を痛感しています。今回、福岡にお住まいのお孫さんや東京在住の三人の息子さんたちの連絡先を知るまでに約二日を要しました。そのための手がかりについて、様々なご協力やご教示をたまわつた中之島の関勝盛さん、中之島支所と中之島中学校の方々、十島村役場の松田清則さんに深く感謝申し上げます。

島と島をつなぐ人間関係のネットワークを、トカラ列島ではオヤコと言っていますが、屋久島の「島イトコ」に近い語感ではないかと思ひます。短い滞在でしたが、まだまだ学んでみたい、聞いてみたいことがたくさん埋もれている島だと思ひつています。

島々を結ぶオヤコ トカラ列島中之島・日高貞矩さん

三〇度線を越えて島に密航

私は、大正八年に中之島の里集落で生まれました。去年（一九八七年）やめるまで三期一二年の間村会議員を勤めたので恩給がついています。

昭和一四年の六月に、二二歳で兵隊に行つて、終戦まで海軍にいました。私は、内地勤務よりも第一線を希望しました。海軍兵学校の練習艦隊にまわりました。ところが、平時は三年生を乗せて外地に出ることになつていたんですが、大東亜戦がはげしくなつていてできませんでした。それで、国内で訓練することになつて、なかなか第一線にはやらせてもらえませんでした。

徴募で行きましたが志願扱いにしてくれました。そうすると一年勤めても三年分と計算する扱いになるんですね。一二か年目（の扱い、つまり実際は四年目）からは、恩給が付きましたが、まだ下士官にもなつていませんでした。なかなか島に帰れそうにないので、再役したんです。上海に長くいました。四回目の復員の時に終戦を迎えました。

終戦後、島にもどるのは警察・教員・郵便局あたりが優先されるんです。それで、鹿児島から島に戻ることはできません。十島村の船舶運営会に行つてみたら、帰れないと言われました。それで、十島村関係の復員軍人を募つて密航しました。「それは危険だ」といわれましたが、三〇度線を越えて強行したんです。

大城さんという沖縄の人が魚のおいこみを十島でやっていたので、その人の船、まあ一五トンほどの船をチャーターしました。口之島四名、中之島四、五名、あと、平島、宝島の復員軍人とともに乗り込みました。ところが、中之島に夕方入つてみたら、村の間人は、誰もいない。みんな山の下避難壕に逃げ込んでしまつたんですね。戦後、船を全然みていないので、恐ろしいわけよ。ようやくはしけを出してくれて上陸できました。

もう冬ごろになつて、アメリカさんが来て、床に飾つてある刀などを没収して海に捨てました。

戦後の食糧難でカンネカズラがたより

帰つてみたら食糧難でした。充分な農作業もしていません。あのころ、鹿児島には、十島村の配給米が少し残っていました。中之島には一〇俵の米を降ろしました。船舶運営会で、「船を出すな。しかし、行くなら食糧はもつて行つてくれ」と頼まれたんです。

役場は中之島に本役場があつて、鹿児島には出張所がありました。今と逆です。

食糧難の中で食べたものは、わずかのカライモにフツ（よもぎ）をたくさん混ぜたもの。ゴーリとつかずら。これはめつたに探せません。よく利用したのはカンネカズラ（和名クス）。花は藤色です。古いかずらの下にイモが太るんです。イモを臼でついて、袋に入れて洗つとデンプンが沈殿します。団子にしても美味しいし、お汁にも入れました。でも、一メートルもあるイモを掘り上げるのは

大変でした。

アメリカ軍政府がここへ食糧を配給するようになるまでの約二か年間食べ物がなかったので苦労しました。種子用の米もカライモも使い込みました。

私が復員してすぐ、カンネの根ほりをしていて、死んだ人があります。石の下をひとりで掘っていたら、この石が落ちてきたんです。私と同年の優秀な青年じゃったが、即死でした。

ひどかった空襲

口之島あたりは、わりと中之島よりもよかったです。空襲の中でも植え付けができたんです。中之島には陸軍の部隊が駐屯していて無線局もあったので、空襲がひどく、灯台なんかは、今でも一寸おきに弾痕が残っています。

丸木舟にはあまり乗りませんでした

私が兵隊に行く年、櫓と櫂だけで口之島に一度だけ渡ったことがあります。でも、丸木舟で漁をしつつ島をまわるようなことは、もうありませんでした。私の生まれる前の話ですよ、それは。

丸木舟は、兵隊にいくまでは乗りませんでした。父親に乗せてもらったぐらいですね。

焼畑から水田へ

昔の中之島の特産品といつては、シイタケぐらいです。これは、まっすぐ大阪へ出していました。ごくわずかは鹿児島へもやったでしょうが。

終戦後、田を作るようになりました。戦後の食糧難のため、水源地の付近の畑を水田に切り換えたんです。

それまでは、米は全部島外から買っていました。米の中にカライモを置いて、切り込んで炊いて食わせるんです。カライモは豊富でした。

アワも作りました。竹やぶを伐採して火をつけて、畑は、火が鎮まってからアワの種を撒くという方法で、終戦後三丁四年間はやりました。すておけばまた竹が生えます。一年すればまたものようになるので、二年おきに使うことができました。

私らが米づくりをやめて、もう一〇年以上になります。漁をするようになってやめました。

枕木を切りだして松を植えました

松は、国が補助金を出して植えさせたものが、三〇年近くになります。松を植える前は、イタジイが主のキヤマ（木山）が多かったです。それを枕木用の材として切りだしたんです。切るとすぐ竹やぶになります。当時は竹やぶを利用して松を植えると指導されました。内地から一尺余りの松の苗をもってきて植え、二丁三年の間は草取りをしました。パルプ材として出荷する予定でしたが、今ごろは見に行く人さえありません。中越パルプという仙台の工場が、電話の中継所の裏に一〇〇町歩も植

えたんです。ヤマハが、ここに飛行場をつくらうとしたら、両手の山が急傾斜すぎました。それで、飛行場を諏訪之瀬島にもっていったんです。

高尾の盆地の歴史

御岳の手前の盆地は、高尾の盆地といいますが、面積は九〇町歩あります。昔は、中之島の山は全体が二八戸数の共有地ということになっていました。明治二〇年代に村ができた時、山を村有地に、という話が出て、二八戸数は村ともめごとになったらしいですよ。何年かもめたあと、交換条件として、二八戸数としては、今の盆地の一面をよこせ、そうすれば中之島の山は村有地にしてよい、ということになりました。将来戸数が増えた時に、分家が移住できる場所を確保しておこうと考えたんですね。ところが、この盆地の土地は、戦後の農地法にひっかかって一町歩以上の部分は、国の方へよこして、国としてはここへ開拓団をもってくるということになりました。

今なら法律ということですが、当時の里の人々二八戸数にとっては、とうていがまんでできることではありませんでした。それで、分家する時は、木材がなければ家を建てることできませんから、サコの浜の近くに家材の出せる山を確保してほしいと要求しました。そして、明治時代に新しく村有地になっている所から二八戸数の方へ貸与するという貸付林の契約をして、昔にひきつづいて山を守りつつ利用してきました。

貸付林は、センピロガワラの上流のヨケーの川と、この盆地の上のトクノアザという所を通ってほぼ御岳の山麓を含んでいます。資材を探るとか日常的に活用していたのは、八合目までですね。これから上は風が強いせいだと思いますが、大きい資材用の木はありません。

御岳の木の利用

御岳は、前から行った上の方、休憩所の上には、マルバツツジ、カワザクラ、シャリンバイなどが多く生えています。シャリンバイは大島紬の染料になるので、昔は、皮だけを剥いで、奄美大島あたりへ出していました。皮は剥いてもまた萌えてきます。また、よその島の人が、皮を大釜で炊いて、レンガぐらいのかたまりの染料を製造することもありました。これは、たくさんマキが要りますから、山に製造釜を置いて仕事をしていました。まだ、わたしが兵隊に行かない前のことです。

オヤコはお互いに宿をとる

オヤコというのは、今でも続いてはいるんですが、もとのように行き来はさかんではありません。なんだか遠くなったなあ。

口之島に肥後さんという人がいて、お互いに宿をとります。オヤコで、私より年下じゃが、どっちがオヤコでどっちがコということはいません。

私のおやじの当時は、宝島の前田さんという人とやっておったんですが、私は、平田さんという人とオヤコになりました。平田さんのところに宿をとっても、前田さんの家にも仏さんをおがみに行き

ますよ。

兵隊に行った時の同年兵という関係からオヤコ関係になった場合もありました。

他の島では、悪石島の宮永さんという私より年上の人とオヤコになっています。

平島あたりは、自分のイトコが嫁にいつておるから、そこへ行って泊ります。議員をしていたころは、なんだかんだと役があったので、島々をまわったもんですが、今は引退しました。うちへ泊りに来る人も、同じように役をもっている人だけでしたね。

昔のオヤコには、ちゃんと挨拶もせんといけません。たとえ民宿に泊っても、必ず顔をだして、ミヤゲも置いてきます。

オヤコにはミヤゲをもつていきます

オヤコの家に泊めてもらつ時のミヤゲの中身ですか。

中之島から口之島へ行く時は、お茶を飲む時に使うようなお菓子類を持って行きました。内地から直通で口之島に渡るときは、衣類とかね。オヤコ以外にも、口之島には友達関係が多いので、つきあいの深い浅いによつても持って行くものは変わります。

口之島から中之島に泊りに来る時は、ソーメンを持ってきたり、茶受けとか、白米を持ってきてくれたり、口之島で多少取れるお茶だったりしました。

悪石島から中之島へのミヤゲは、といっても、あんまり来んかったもんな。年に一回、ひとり来る

かどつか、という程度で、個人的な用件で来るようなことは、まずなかったです。今は、各島に出張員というのを置いています。当時は電話もないし、区長が連絡に動いたんです。

おやじの代のミヤゲが何だったか、まではわからんですね。物々交換というのもどうじゃったろうか。わしらの代になつては、考えられないことでした。

おやじは硫黄島の人とオヤコでした

硫黄島のおじいさんで、ものすごい背丈の高い人が、おやじの時代にオヤコをしとつたんですよ。

私の幼かったころに来ていました。硫黄島の区長だったんです。私は、硫黄島に行けば、かならず線香をあげて、線香代もあげるようにしていました。おばあさん一人が残っていて、去年久しぶりに行ったら、「そらあ、珍しいなあー!」と言われました。しかし、このおじいさんとうちのおやじとどうやつてオヤコになつたか、それはわからんですね。

奄美の人ともオヤコを

大島出身者ともオヤコがあつたらうと思います。大島の方は、七いとこ半ぐらいまでの親戚をひっぱるといいですよ。私のおふくろは、臥蛇島の人で、大島とは遠い血のつながりがあるらしく、名瀬の旅館に私が泊っていたとき、久保さんという名瀬の木工の棟梁が訪ねてきて、「あんだとは、七いとこぐらいにあたる」といって、だいぶ歓待してくれました。昭和三〇年ころ、二七、八だった息子

さんが、よくうちを頼って中之島にも来ていました。

大島との行き来の多い人は、オヤコをすることが必要だったんでしょね。

臥蛇島と火で交信

臥蛇島の人たちは、一九七〇年に廃村になったあと、鹿児島、岡山、大阪とあちこちに散らばっていきました。十島村が一番財政的に苦しい時代だったんです。高齢者が多く、若い人は五、六名いたただけでした。そのあと、財政的には良くなってきたんですが、今は、取り残された野生ヤギが多くなっている島です。

あそこは、良か漁場が二か所あって、カツオブシを製造する、漁師専門というてもいい島でした。中之島にもよきよったです。丸木舟での往来ですから、いつ着くかわからんでしょ。臥蛇島の丸木舟が入ったら、その晩、火をたいて臥蛇島に知らせやります。シタミというて籠の古くなった使わんのを、一〇ほど集めて、楠木の松田さんの家の下の突端へ行って、積み上げて火をつけると、枯れた竹ですからよう燃えて、火の手があがって、臥蛇島から見えるんです。向こうでは、部落のはずれのタチガミの横で火をたきました。こうやって知らせることを「火をたいて見しゆる」というていまず。

臥蛇島の名物

臥蛇島は、水が不便で、御飯を食べても糠臭いような気がしましたが、おいしいものは、ノリです。長くだれたノリが瀬の上で乾くのをバリッと剥がすんです。平たい所から剥がしたものは、マキノリと言って、ギリツギリッと巻き上げます。村営船ができてからは、定期的に送られてきました。ノリのお返しには、方言でショークンミカンという島みかんを送りました。むこうからは、サトイモなんかも送ってきよったです。

臥蛇島には、みかんがなかったけれど、タニワタリというシダが多いところであ、鹿児島の花屋さん契約して、良か金儲けじやったものですが……。

二種類の在来みかん

今は、ミカンコミバエも出て、全然あのショークンミカンを取りませんが、竹の先を割って、ねじりおとして食べました。みかんの皮の油を服にまっ黄色につけては親に怒られたものです。女の人が大きいシタミにかるうて、売りに行くこともありました。この他に、クネビという、高級品のみかんがありました。何か月も長持ちして、置くほど甘みがついて香りがいいんです。皮はちよっとかたくなりませんが。

島の鳥たち

島にはどんな生き物がいますか。たとえば、いま鳴いた鳥は、西表島では、あれが鳴くと明日

は晴れるという鳥で、鳴き声からチコホーと呼ばれています。

あれは、フクローといいます。小さいやつで、鳥には一種類しかいません。それから、昼間にコンコンと鳴くので、コンコンと呼んでいる鳥もいます。大こうもりはコーモリといいますが、アコウ木の実を食べにやかましいくらい来たものでした。今は、昔の一〇分の一くらいになっとなるでしょう。アカヒゲという小鳥は、こっちが本場です。ときたま冬にも見えます。ヒヨとメジロは、煮ても焼いても手に負えないほど来ます。ビワの花をつついて子房をだめにしてしまっんですよ。

ヒヨドリの捕り方

小さい時、ヒヨドリを捕って食べていました。絹糸で釣り針をしばって、カライモをかけて板の上に置いておくと釣れます。焼いて醤油をつけて食ったもんです。ハトやカモも食べましたが、カモなんかは、あまり捕りにいきませんでした。

底なし沼の大ウナギ

ウナギは川にいっぱいいます。川のはせいぜい太さが五センチぐらいですが、御池と島の人と呼んでいる、山の上の底なし沼のウナギは、太さが一五センチ以上あります。もとは水力発電をしたのですが、さらに前には、その下の方に河原があり、海岸まで流れていました。六月の梅雨時期になると、池が満たんになって、いっぺんに流れだすことがあります。すると、油断したウナギが池から突き

出されてくるんです。一〇〇メートルも下流のツボキ（壺、川の深み）にそのウナギが溜まります。梅雨が上がって、一週間も日照りがすると、川尻が切れます。下の方の水が空になりますから、そういう時にツボキの中のウナギを捕ってきます。

わしらが青年学校の時、枕木を切ろうとしてそこを通りかかったら、ウナギがいたので、ノコで引っかけたら太さ二〇センチ以上のものがいました。かずらで中ごろをしばって、大きい木を切ってかっいでみましたが、二人でかついても、地面に垂れていました。

御池には、コイが多いです。戦後入れたんですが、一尺五寸にもなっていますよ。でも、ミシャゴ（和名ミサゴカ）という魚をとるタカにやられています。

イタチとネコの島

へびはいません。イノシシもいません。道の途中に穴をほってあったのは、人間のしわざです。竈をつくるのに最高の粘土がとれるんです。

イタチとネズミは多いです。それから、この島はやがてネコの島になるんじゃないか、というぐらいネコも多いです。最近のネコはネズミを捕らん風ですが、ネズミも最近は少なくなっています。

竹の花が咲いてネズミの大群が上陸

明治の何年かにネズミの年という年があったそうです。海をわたってネズミの大群が中之島にやつ

てきました。まず、島の反対側のヤルセというところの上陸して、その畑の農作物を荒しました。ヤルセがもっともひどく被害を受けたのですが、海岸の石にネズミたちが止まっていた。アラ（和名クエ）という大きな魚を取ったら、それがネズミを飲んでいました。それから村の方にもやってきました。ネズミに手足をかじられた人もありました。

これは、竹の花が全山いつせいに咲く年に、実がなって熟するころネズミが押し寄せてくると言われています。

戦後に、口之島で竹の花が咲いた時、ネズミの大群が中之島にもやってきました。臥蛇島へも来たそうです。私が見たらネズミは、ねずみ色のものもありましたが、白いものや、首に輪をまわしたような模様のあるものなどいろんな色がありましたよ。畑も村の中もすごい被害で、山の中はいたるところネズミのあけたトンネルでポツクンポツクンしよったです。駆除するために、シヨーケ（ざる）を裏返しにして、中に野菜屑をいれて突っ張り棒をしておいて、入ったところを棒を引いて、布で押さえて踏みつけるんですが、追い付くもんじゃありません。ネズミに噛まれて破傷風になった人さえありました。

ヤルセの付近は、カライモ畑が中心でした。もとは木の山を開いて開墾したのだと思いますが、それだけの余地があり、南むきでもあるので暖かく、作物がよくできるんです。

ヤルセには、大島からの開拓が二〇数戸入りました。シイサキ辺にも開拓が入っていました。

ガラツパを負かした人の話

川にはガラツパ（かっぱ）がいます。昔の伝え話なんですけどね。昔はよう出てハバルものだったらしいです。松田武彦さんの道の上の屋敷は、今は空屋敷になっていますが、ここは宮江という家でした。宮江家の先祖の人が、ヒラハエという地名の、雨の時に上から落ちる水が溜まった、直径三〇メートルほどの水たまりの所で、ガラツパに遭遇しました。ここで、ガラツパが「相撲を取ろう」と声をかけてきました。おやしさんは、ひょうたんをもっていましたが、話しあって、「このひょうたんを完全に沈めることができれば、わしの負けとしよう」と申し合いました。先方は、数が大勢でしょう。みんなでかかって沈めようとしたが、どうにも沈められなかったんです。それ以来、このガラツパは、人民には触らないようになった、ということなんです。

ガラツパに負かされた人たち

戦後、ガラツパと相撲をとった人が二人います。一人は、鹿児島の人でしたが、今お話しするもう一人は、名瀬からの人で、そんなガラツパというふうなものを信ずる人じゃないです。

この人が、楠木の大きい松の下で、ガラツパに出会いました。当時まだ、三五、六歳で、柔道三段でしたから、受けて立って、投げたけれど、いくら投げても自分の膝くらいの高さしかないのがおつて、精魂切れました。それで馬鹿の様になって、トボーンとなって帰ってきて、具合が悪いというて寝込んでしまいました。

わしらが見舞いに行っても、何があつたかをなかなか言いません。一週間ぐらい寝込みましたが、ミコさんからお払いもしてもらって、ようやく回復しました。それを限りに、この人は「世の中の何は、われわれに割り切れん所がある」と言つようになりました。

ミコさんというのは、おがむ人です。別に免許をもらつておがんでいるわけではありません。島の方言では、ネーシといえます。このミコさんは、今、九〇近い年ですが、鹿児島でやつぱりミコさんの仕事をしているそうです。感心な人で、祝詞をあげるときだけは、うまく大島ことばを使うんですよ。普通は使いきらんに……。

ミコさんがつないだ沖縄と中之島

そつえば、沖縄からミコさんが来たことがありました。

中之島でトンチとよばれる有力な家の人が沖縄へ渡つて、それっきり帰つて来なかつたことがあつたらしいですね。沖縄「征伐」(一七世紀始め)のころか、そのちよつと前でしようね。実は、この人は沖縄でものすごく繁盛していたのですが、その子孫が系図を見たら、「十島の中之島」とでていたそうです。それで、これだけ繁盛したんだから、元祖に線香をあげてこんにゃ……ということになつて、その子孫がミコさんをつれて中之島までやつてきました。

ミコさんが言つには、中之島にさえ行けば、この家が元祖の出た家ということはすぐにわかるということ、あらゆるお供えを持ってきていました。家がそこだ、ということはすぐにわかつたと言います。ミコさんは、「どついつものが出るかわからるので、覚悟をして……」と言つてあつたそうです。昔の先祖の墓を全部まつりつづつ見てみると、出るは、出るは。よろい、かぶと、当時使つた刀なんか、ものすごかつたらしいですよ。

トンチという有力な家が、トカラの各島にあるそうです。私の知っている範囲では、口之島、中之島、平島にはたしかにあります。お盆になると、村びとがここに集つて踊りや狂言の出し物があります。太鼓のうちこみを始めるときは、この家の許可をもらわんといけませんでした。今でも、お盆の行事はトンチでやつてからお寺に行きます。

人間が通れない神様の通り道

私たちは、山から降りてくる尾根が途中で終わっている場所をシリナシオ(尻なし尾)と呼んで、そついう所は通らんようにしています。神様の通り道だからです。支所の上のカミヤマなども通りません。あそこの森は、日高という人がおがんでいました。ヒゲナガドンチとかいっていました。

御神体の移動

中之島のカミヤマは、ヤルセと、シラキと、コモリなどにありました。年に二回の六月祭と霜月祭の行事の時には、ミコさんなんかは行って泊っていました。一回行けば、二日ぐらい泊りました。わたしが兵隊に行かん前にミコさんが来て今の神社にまとめたんです。

日高岩吉さんの上に小屋があります。ここにおまつりしていある御神体は、もともとシラキにあったものです。帆船で御神体を中之島におつれた時、シラキの前まで来たところで船が前にも後にも動かなくなつたそうです。オセン（御籤）を取ってみたら、「ここに降ろしてほしい」というオセンでした。たぶん鹿児島からお連れしたと思いますが、同時にあみだ様もお迎えしたらしいです。あみだ様は、ハマン様の横つちよにいらつしゃいましたから。このあみだ様の目には黄金が入っていました。ところが、シラキに安置しておいた間に、その黄金を盗って行かれてしまつたんですよ。

始めは、神社の上のハマン様の所にお連れしたんですが、ここは、雨の時に五センチぐらい水がたまる所でした。それで、別の屋敷をさがして安置したんです。わたしが兵隊から帰ってきたあとのことです。拝殿は、くずして青年団が柱を一本ずつかついで、はるばる運びました。

噴火する御岳への祈り

昔、ある年、ある月の一二日に、御岳が大爆発をして、神にたよる以外には方法がつかなくなつたということがあつたそうです。通信手段もないので、部落の力だけでなんとかしなければなりません。それが、神への祈りの行事になつて残っています。

西と楠木と里の三集落では、毎月一三日には仕事を休んで、漁にも行きません。朝の五時半から海岸に出て、シユエイという潮を汲んで、エビス様にさしあげ、神社にもあげて、日高さんの家の横から神山に祈ります。また、この日を利用して、集落内の掃除をします。昔の人は良かしつけをしたと思えますね。

楠木は、里村からのワカサレ（分家）が行っている村です。里村が二八戸数になる以前のワカサレもあり、なつた後のワカサレもあります。それで、本家がこつちにあるので楠木の人は時々は里村に来るのです。

六月まつりには神社の砂を入れ替える

かつての六月まつりには、神社の砂も全部入れ替えました。この時には、小さい丸木舟を作つて、竹をけずつて横に出し、そこに大根で魚の形をつくつて二つぐらい下げます。布を敷いて、その上に竹で直径七〇センチから八〇センチぐらいの輪をのせて、その中にこの丸木舟を置いたものを要所要所にかざります。

私が小さい時、お祭の火をつける時、スリキというものを廻して火をつけよつたですよ。ガジユマルの木のくさつたのをホクチにします。詳しいことは、私は経験していないので、わかりません。

神社でハタケイモをもらう楽しみ

ひとかかえもある大鍋で、ハタケイモ（里芋）を炊きました。ハタケイモは各戸から出しただろうと思います。あれは、うまかもんでした。神社に入れる砂を運搬してから、もらえるんです。皮をむいた芋を箸でツンヌクと、芋の汁もイバシ（和名クワズイモ）の葉の上に入れてもらいます。使うの

はハタケイモだけで、ミズイモ（湿地につくる里芋類）は入りません。

子供のころはたくさんあった行事の多くは、兵隊から帰ってきたら、もうなくなっていましたよ。

神社の幕を盗んだ外来者

おまつりの時に、神社の横にはる幕がありました。古いもので、魚やサンゴ礁やいろいろ描いたものでした。いつごろ奉納されたものか、調べがつかんうちに、この大切な幕が盗られてしまいました。ひんぴんと大学生やらの調べ方の人が来て、入りよったあと、なくなっていたんです。

境内を汚して急病になる

昭和三〇年ごろ、こんな事件がありました。ちょうど、いま丸木舟をつくっている広場の横の一画に住んでいた人があって、税務署を建てることになった時、この人が神社の境内の土地を少しだけ削りました。「満州」（中国東北部）帰りで、神も仏もあるものか、という人だったんですが、土地を削つてすぐに、急病も急病、たちまち鹿児島県の病院へ運ばれて入院、面会謝絶ということになってしまいました。お医者さんが見ても原因不明で、時間時間に高熱が出て、それが一週間も一五日も続きました。たまたま家族がミコさんに相談して、本人に内緒でシャツを一枚もっていってお払いしてもらおうという運びになりました。

その結果「神社の中で不始末なことをしてある。ひとつきれいにしてもらいたい、と知らせをかける」というオセンでした。そして、翌日には、すっかり良くなってけろっとしています。医者もびつくりです。島にもどって、家のまわりをきれいにし、便所を神社から離れた方へ移動しました。この人は、その後いつもこう言っておられましたよ。「わしは、神、仏はないと考えていたが、今は毎朝毎晩手をあわせてある」と。

山の上からひびく赤ん坊の泣き声

夜でも漁をするので、諏訪之瀬島や臥蛇島までも行くことがありましたが、二回ただごとでないできことに会いました。

島の北のコモリの湾に夜シビ釣りに行っておって、魚が浮かんから、明日の朝夜がホーツとあける時に出ようと思いました。宿を借りればよかったんかもしれませんが、潮どきが間に合わんと思って、四時半ごろ舟を出そうとしたら、山の上から生まれたばかりの赤ん坊の声がして、それがずつと続くんです。

海上を追ってくる火の玉

もう一度は、臥蛇島に行く時に、途中から大きさが五センチから一五センチほどに見える火の玉がつかれました。相棒が来ると思っていましたが、相棒のエンジンは、わたしのよりも小さいので、ようついてくるなと思っていました。小臥蛇島から四〇分ほど走ると大臥蛇島につきます。ホーツと

夜があけたころ、小臥蛇島の西の方へ行ったらこの火がポツと消えました。「ははあ、航海灯を消して反対側にまわったな」と思っていたんですが、向こうへいっても誰も来ない。そういえば、航海灯なら赤と青なのに、もっとよわい赤というかだいたい色よりうすい色の火だったんです。そして、臥蛇島に着いた時にたずねても、私のほか誰も来ないといつんですねえ。

目当ての島が消える

臥蛇島の人がここへよく来ていました。その人に聞いた話です。月がある晩で、見通しがきくから、自分の島は見えておるのに、漕いでいって島まで近づくと、島がポツと消えてしまう。どうしても島にたどり着けない、という体験をしたということでした。これは、舟こぼれで海になくなった人が出るのだからという話でした。

天狗山

ここから尾根筋を上がっていくと、今のピウ園のある所の上に絶壁があって、そこは、テングヤマと呼んでいます。天狗が出る所だと言われています。そこは、マキ採り、タケノコ採り、などに利用した細い道が通っています。一時はここでシイタケづくりもしていました。

山に入る前にシバを供える場所

山の上の盆地の少し先の方へゆくと、きれいな飲料水が出ているところがあります。大きいシイノキが目印です。そこをハナタテと言っていますが、ここを通る時は、行きがけにシバをささげてゆくものでした。山に入る前に「今日一日、何こともないように」と祈るんです。帰りにはしません。花でもでもいいんですが、ふつうは竹の葉を道の上側からとって、細い道の上側にある一対の竹筒の花立てに供えます。道の下側からは採りません。たぶん不潔だからということでしょう。

シイノキのそばに花立てがあって、道の両側は杉が多く立って、昼でも真っ黒くしていました。入り込むと若干気持ちわるいような所でした。夜中に、あるいは夜明けの三時ころ通れば、シーンと気持ち引き締まりますよ。ひよっとしたら、昔なにかの事故でもあった場所でしょうか。ブルドーザーを入れて道を広くしてからは判りにくくなっていました。今は石垣で少しかこって祀ってあります。

渡る時にたぎぎを捧げる川

御岳に入る時には、こういうことは別にしません。ただ、シラキの手前のセンピロガワラというところで流れを渡る時、かっいでいるたぎぎを必ず一本この川にあげたものです。小指の先ほどの木ぎれでもいいんです。それを投げて唱えことをします。それで、このあたりには、みんなが投げていったたぎぎが山積みになっていました。

そつそつ、今、家内が言ったように、たぎぎをもたない時は、米のひと粒でもあげなさい、といい

ました。これは、昔、山で食料をなくしたじいさんとはあさんが、センピロガワラの先の細い川を渡りきれなくなっていたのが、米を一粒か二粒食べたなら気をとりなおして、二人とも生きて戻ってくる事ができたという話から出た習慣だといわれています。

これからどうなるか

これまでお話ししてきましたように、この島にもいろいろなことがあります。中之島に製糖工場ができて、二か年ぐらい操業したことがあります。いいサトウキビはできたんですが、輸送がうまくいかんです。道路が悪くて雨ばかり。キビ畑のあとをカライモ畑にしたりしていましたが、今はみんな捨てて、ヤマになってしまいました。それから、機織をしようって、畑作全般が不振になりました。村が指導者を呼んで、大島紬の技術を覚えさせたんです。ところが、これも安い韓国産が出回って、だめになりました。

役場が鹿児島にあることは、大問題です。例えば、畜産を奨励してみても、掛け声ばかりで、島に畜産の技術屋がいないんですよ。

そうですね、沖縄の八重山地方でも、竹富町は、ヤマネコで有名な西表島や最南端の波照間島などのたくさん島々からなりたっています。町役場が石垣島にあります。同じ悩みをかかえる十島村や三島村との智慧の交流が可能になればよいなと思います。いろいろと興味つきないお話をどうもありがとうございました。

おわりに

トカラの島々の魅力。それは、ゆたかに湧きだす温泉と、それにもまして、南の島々の中でもことにやさしく感じられる島のひとびとのものこし……。南島の原像を西表島に求め、その南からの視点で北の島々を見ようとしていた私に、トカラの人々との出会いはそれまで気付かなかった多くのことを教えてくれました。

嫁にいくなら島間の町に 南種子町島間の方々と語りあう

屋久島に一番近い南種子町の海に開かれた玄関口・島間浦が舞台です。沖縄との交易の港としても重要な役割をしてくるこの港での生活のこと、とくに、交易のこと、屋久島との関係のこと、漁業のこと、農業のことなどをおうかがいしました。島間の人たちは、いろいろな話手の所へ案内してくださり、いっしょに話してくださいました。おかげで短い間に五人の方のお話をうかがうことができました。

まず、会って下さったのは、島間の高台に住んでいらつした郷土史家の河東不凡（かわひがし・ふばん、一九一六～一九八九）さんです。お話をお聞きしたのは、一九八四年八月二一日のことでした。

島間の歴史を詳しく調べてみたいんです

河東 私が住んでいる島間の方向には、城あとがあります。水ヶ上城とよんでいます。ここからは、屋久島はもちろんのこと、開闢が岳、竹島、黒島、硫黄島が望見できます。屋久島との関係を意識して、種子島一の穀倉地帯である茎永や下中を支配し、保護するために造られた城ではなかったかと思えます。私は、この水ヶ上城を中心にして、このあたりの歴史を詳しく調べてみたいんです。

遊地 先日案内していただいた時、沖縄の城跡にもやや似た感じがありました。日本の城の歴史を考える上で、たいへん貴重なものですね。

河東 そうです。それから、島間の高台には火合せ峰という地名の所があります。ここから烽をあげて、通信した場所だと言われています。屋久島や西之表の南の住吉と通信したのだそうです。丘の上には、北の天神という場所があつて、そこからは完全に島々が一望できます。さらに、私は興味をもっているんですが、島間に大光寺という古い律宗の寺がありました。この寺は私にはわけがわからないんです。普通は山や丘の上にある寺がどこからも見えない谷間の底に建てられていたんですね。ひよつとしたら、水ヶ上城との関係で軍事的な意味があつたのかもしれない、と考えているんですよ。

遊地 種子・屋久は熊毛郡ですが、私の住んでいる山口県にも熊毛郡がありますね。

河東 どういう関係でしょうね。こちらは、ヒコホホデリノミコトをまつる熊毛神社が元だとおもいますが。私は地名もいろいろ調べたいんです。島間には、カミ、ミヤ、テラなどといった他にないような地名が多いんですよ。茎永までいくと、シオイリという地名が多いので、あのへんの田んぼの多くはもともと水田ではなくて、海水が入るような所だったのだらうとわかります。名字も島間の浦だけで二〇ほどあります。しかも、島内にないような名字が多いんですよ。それだけ独自の歴史をもっているということじゃないでしょうか。

先祖が遭難したとき屋久島からも助け舟が出ました

遊地 島間と屋久島の関係はどうだったでしょうか。

河東 明治の始めに、私の先祖が海で遭難しました。旧の正月に魚をとりについて、屋久島と種子島の間で転覆したんです。その時は両方の島から助けの舟が出ました。いっしょに遭難した三人とも助かりませんでしたけれども。ここから屋久島を見ると、もちろん南の安房の方も見えまじょうけれど宮之浦が真ん前になります。

ちよつと気のきいた家には屋久杉の板戸がありました

河東 種子島のヨーカイヨーという童謡の中に、屋久島へ鎌を売りに行ったという内容のものがありませんが……。そうそう、昔はちよつと気のきいたうちには、屋久杉の一枚板の戸があったものです。ふるくは、屋久・種子の家の屋根は、板で葺いてあって、その上を大きさが一尺ほどある石で押さえていたものです。私たちの小さいころまでもきたまそんな家がありました。でも私が小さいころに多かつた家は、草葺きか、瓦葺きでした。瓦はあちこちで手焼きしたんじゃないでしょうか。島間の部落の中にもいくつか窯の跡がありますから。

一族に伝えたい諭しのことば

遊地 これまでに、いろいろお書きになったものを少し見せていただけませんか。

河東 まず、これを見て下さい。ここに書き留めてあるのは、私の祖父の教えです。昔の人は、こういう心がけで生活をしていたんですね。これは、子供たちにもぜひ伝えたいと思っています。

そついつて見せてくださったものには、ぎつしりとおじいさんの教え、おばあさんの教え、そしてお父さんの教えさとしての言葉も書かれています。種子島の教養ある家に伝わる教えとして、大切にしたい言葉だと思い、奥様のお許しを求めてここに再現させていただきました。

祖父貞兵衛の教戒

- 一、喧嘩は我より上とすべく、下とすべからず。
- 一、左之(の)手に我物を持たずして右の手で人の者を借るな。
- 一、人間一代は五、六十年に過ぎざるも一家は無年限代なり。然れども之を伝ふると否とは代々の任用如何によるを忘るべからず。
- 一、不義不道の富を謀るは自身に罪を作り、子孫に過ちを及ぼす。終に一家を絶亡するの本なるを忘るべからず。

祖母の教戒

- 一、仕事は云わずともせよ。
- 一、所帯は六月ともて。

一、河の水を無駄に使うな。

父の教戒

天地の真理に順し、天地の大道を踏み、人間至善の行を為さんと欲せば宗教に倚らざるべき。麗室の浄座、清心して聖教金訓を精誦すれば、人通明らかにして天理自ずから了解すべし。

河東 祖母の教戒の中の「所帯は六月ともて」というのは、おわかりになりにくいと思いますが、種子島では一年中で生活が苦しいのは、四月から六月の田んぼの植え付けの頃なんです。それが一番ひどくなる六月のことを考え、いつも今が六月であるような気持ちで家計をひきしめていきなさいという意味なんです。どうですか、ひとつ下に降りてもっと先輩の方に尋ねてみませんか。

遊地 はい、ありがとうございます。

というわけで、同じ日に、河東不凡さんにつれられて、島間浦の船川森蔵（ふなかわ・もりぞう、一八九八〜一九九〇）さんと弟さんの御夫人の船川ゆきさん（一九〇三〜一九八六）に引き合せていただきました。

昔は屋久島からたくさんの方が来ていました

遊地 こんにちは。島間の農業や漁業のこと、とくに屋久島との物々交換のことなど、御経験になったことを教えていただけませんか。

船川森蔵 屋久島との物々交換か。徴兵のころにはもうなかったな。私は明治三一（一八九八）年七月一〇日生まれやから、大正の始めころまでということになるかな。

船川ゆき うちが明治三六（一九〇三）年、島間の中之町古川生まれです。小学校のころまでは島間へも屋久島からたくさんの方が来ていました。

森蔵 島間は浦やからあまり田んぼがなくて、カライモが主でした。屋久島から島間へ来ていた物は、サバイオ。生も塩も節も来ていました。こっちからは、米やカライモを出していました。米どころの茎永（くきなが）の人は屋久島へ米を出していたそうです。

ゆき うちが屋久島に行ったことはないですけど、屋久島にはたくさん友達がいきましたよ。

森蔵 屋久島とは行ったり来たりな。

ゆき 来たのが多かったでしょう。

森蔵 そうじゃった。宮之浦、一湊、年がら年中やってきよった。

ゆき とくに用事がないときは来ませんよ。

森蔵 屋久島から来る時は帆もはっておったな。

ゆき 屋久島の人は魚とり船のサバブネに乗ってきました。五丁のド（櫓）をこぐゴチヨウダチでした。あつちからは毎年来ました。おおかた年に一回。二回のこともありました。むこうから持って

きた物の量はわかりませんが、カライモは船に一杯持って帰ったでしょう。

屋久島からはサバダテがよくきました

ゆき 屋久島からサバの頭を煮て乾かしたものがよく来ました。これをうちでつついて、やっぱり魚粉にしました。

河東 あれは、サバダテといいましたね。

森蔵 牛や馬の骨粉もあったはず。現金で買う人も、物々交換もあった。

ゆき 若松キノスケおじい元気が時までサバの頭が来ていました。

河東 枕崎に塩屋という所があります。ここから三人の人が移住してきていましたが、この人達が物々交換の主役を演じていました。そして金持ちになったんですね。サバダテの取り引きなどを商売化したんです。

森蔵 商売人同士が交換するから、どんな比率でやっていたか判らんですね。

河東 カライモを例えば五円で買って、サバとかえて、それをまた売りつけるといいうやり方だったんです。

主食はカライモでした

遊地 年中物々交換できるようなカライモはあったんですか。

河東 そうです。秋とつたイモをわらで困って畑に保存したり、蔵に入れたりしていたんです。

ゆき カライモを蓄えておく穴を方言ではカマといいます。

遊地 カライモの現金とりひきはいつごろからありましたか。

河東 カライモが現金で売れるようになったのは、昭和七（一九三二）年ごろからでしたね。

遊地 やっぱり主食はカライモでしょうか。

森蔵 そうです。学校へもカライモを持って行きました。食べようと思って蓋を取ると、蠅がワーンと出たもんです。

ゆき これを食べても八〇歳まで生きたもんですね。

森蔵 あのサンダーカライモがある限りのちあつたもんなあ。

河東 サンダーカライモというのは、腐りにくい品種なんです。だから長い間蓄えられるんです。秋に取つたイモが五月から六月ごろまでありましたから。

森蔵 サンダーカライモはもともと琉球の品種で、こつちには次郎作という人が持ってきたものやつたそうなの。

ゆき 炊いたら砂糖みたいな甘みが出ておいしいカライモでした。

畑から集ってきて魚をとつたもんです

河東 私の覚えている時まで、イオミ（魚見）という当番があって、イオミが魚の群をみつけて

吹く貝（ほら貝）の音を聞きつけて、大急ぎで畑から集ってきて魚をとったもんでした。

遊地 西海地区なんかの南種子の西海岸では、漁業が盛んだったようですが。

河東 そうです。西海岸の人は百姓をあんまりしないんです。魚取りが主です。あのへんの人は冬でも食べるシコ（ほど）は魚をとったでしょうが、魚を仕入れて売ることもしていました。

船川森蔵 西海岸の人は、アジのイオ、トブ（飛魚）、イワシなんかをとるんだけど、冬は漁がないので屋久島からくるサバの商売をしたわけよ。サバイオは生では持ってこん。全部塩。これは焼いたらつまかったな

遊地 サバは屋久島でしかとれないんですか。

森蔵 昔は種子島でもサバイオを捕ったがなあ。地引網も戦争前までやっておったし。

河東 それにしても売るほどは捕れなかったでしょう。

ゆき うちがここへ二二歳になる前に嫁に来た時、もち船が三隻もあって魚をとっていたんです。

うちも女だけど、いろいろ仕事はきつかったですねえ。冬はオオアミという網を入れるんです。

森蔵 魚を売る商人たちは、上中あたりにもいっぱいでした。

ゆき 籠を担いで歩きました。川辺郡の人でなければできませんよ、あのきつい仕事は。

材木はおおかた後の山からとっていた

森蔵 家を建てたりする材木はおおかた後の山からとっていた。

ゆき 自分の杉をしたてていたから、よそから買つ必要あまりなかったんですよ。

山の畑はアラージとっておった

河東 じいちゃんの若いころは、畑をアラージャウツチャ、アラージャウツチャ（荒らしては打ち荒らしては打ち）しましたか？

森蔵 やりました。ああいう所はカヤ（茅）が肥しです。カライモもうまかったですね。

ゆき 本当の畑（常畑）にはナタネのカラ（油粕）をいれました。

森蔵 （山の畑は）アラージとっておったけれど、新地という意味かな。

ゆき 私らの時の畑はもうアラキ（アラージ）じゃなかったです。

海でも昔は何やかや思うことをしてなあ

森蔵 昔はよかったなあ、何やかや思うたことをしてなあ。ナガラメは何月から何月は採るなというような禁漁というのはあったけれども。

河東 ナガラメというのはとこぶしのことです。海藻などもノリとフノリとフト（寒天をとるテングサ）は禁漁あけにだけ採ったものです。今はスнде（潜水して）魚を捕る人もなくなりましたね。

うちの部落（向方、うえぼつ）は魚を捕りに行きません。こちらの浦でイワシをたくさん捕ったら、懇意にしている人なんかを持ってきたから、百姓が作ったものをお返しにしたり、ということとは近頃

までやったことを覚えています。

森蔵 こっちで捕れた魚は、仲買人が買って売った。残ったら個人で商売するし、よそから買いにもくるな。

河東 今日はイワシがとれているとわかっとなるから、浦へ来るんです。交換するための物ももってきたでしょうし、お金ももってきたでしょう。私たちの小さいときまで、つまり大正の末期から昭和のほんの始めころまではそういう習慣がありました。島間の人だんだん漁業をしなくなってなくなっていきました。しだいに魚の商売は企業化されたんですね。

森蔵 魚とりも採算がとれなくなっていた。

河東 太平洋戦争でいよいよできなくなりました。五月の節句にはオシブネ競争といって、船漕ぎ競争をしたもんでしたが、それもなくなっていました。

森蔵 そうそう、村を上と下に分けてな、上の船には神官が乗る。漁が良くなるように祈る祭じゃった。エビスの神への祭。イナゴドマリにタカセの神がまつてあるが、魚を取ったら必ずささげるもんじゃった。エビス様にあげる魚は、あごを折ってからさしあげるもんでな。この祭は島間だけでやっていたもんじゃろつな。

河東 島間は種子島様から海の権利を手広くもらったんです。南の大川、立石あたりは認められた権利が少なくて、自家用しかとれませんでしたね。

森蔵 島間は、馬毛（まげ）島の中にも土地をもらってあったな。いろいろ権利をもらったかわりに、週に一回、西之表の殿様の所へ魚をもっていかなとならん。これがひどかった。そのために、島間岬のうしろに魚を活着ておくところがあった。魚は陸から、米は船で運んだ。

秋風につて琉球旅をして

森蔵 秋になると北風が吹くから、この秋風につて琉球旅をして、翌年の春のハエノカゼ（南風）で帰ってきた。琉球旅に行く船を島間岬のハゲノハナで見送ったもんです。

ゆき じいさんに聞いた話ですよ。

森蔵 こっちの人は琉球旅の船乗りとして雇われて働いたわけ。

遊地 琉球旅のお話もおもしろそうですね。今日はどうもありがとうございました。

船川森蔵さん再訪

翌一九八五年の二月二十八日の午後から三月一日の朝まで、もう一度島間を訪ねる機会がありました。屋久島への第二太陽丸に乗るまでの時間に、前の年の夏お世話になった船川森蔵さんを訪ねてみました。船川さんは、近所の瀬戸ロツルさん（一九二二）というひとり暮らしのおばあちゃんの所へつれていってくださいました。九三歳とは思えない、実にピシッと背筋の伸びた方で、わずかな時間でしたが、お話のあと、いい声で草切節をいくつか歌ってくださいました。わたしも、お礼のつもりで、西表島の民謡「まるま盆山節」を大声で歌いました。

屋久島から硯を売りにくる人がいました

船川森蔵 屋久島とのつきあいのことな。屋久島に兵隊友達がおったけれど、もうおらんやろな。こつちには楠川の人がよく来た。島間におった浦口という人の友達で、屋久島のゲンゴザーとかいう人は、よう硯をもって来る人じゃった。小学校三年生からはみんな硯を使うからな。私もあんまり海にスンデ（もぐつて）耳が悪うなったが、私より年上の瀬戸口ツルさんは歌もうまいから、訪ねてみましょう。

九三歳のおばあちゃんの語る明治時代の暮しのようす

遊地 おばあちゃん、お生まれはいつですか。

瀬戸口 うちやあなあ、明治五年の九月二五日に島間の東田尾（ひがしたお）で生まれた。役場が上中やのつて茎永にあつた時代にな。結婚したのは二〇のときや。結婚するということをや、わかつておらんじゃったと。だんなさんと遊ぶこともなし、ひよっともろわれたな。嫁に来るときやあ、昔の人は、今の人みたいに結婚式じゃなんじゃというようなもんはなし、親ん衆からもうつてよ、すぐもう連れて来たとよなあ。ただ焼酎を一升、米をば一升もつてきてもろつたわけよな。

船川 だんなさんは、瀬戸口太一ちゆう人じゃろ、島間の中之町の船川家から養子へ来た人だな。遊地 結婚されたころの生活の様子を教えてください。

瀬戸口 結婚したころは、舅のギスケというじいさんが、ゴチヨウダチの船をもつておつて、魚取り中心で暮しておつた。

遊地 田んぼや畑もあつたんですか。

瀬戸口 その時代には、田も畑もたいていあつてなあ。嫁に来た頃には米も一〇〇俵ばかりとつた。ここの家は町の内でも一番の税金頭やつたちゆうからなあ。そいじゃから嫁に来てても不自由は知らんで。米から何から。ぜいたくしたわけや。明治の時代になあ。その田んぼも島間のネキ（そば）ばかりやつた。そこの広か所に。

遊地 田んぼは相当面積もあつたでしょうね。

船川 一町五反はつかあつたじゃろ。ここでは、今でも一反の田んぼから二、三俵の米をとるのがせいっぱいやから。一〇〇俵といえは余るから、余つた粕は臼に挽いてな、鹿兒島さへ出したと。昔の俵は、クブキという容れ物に四つ分やつた。

遊地 畑はどのくらいでしたか。

瀬戸口 何町歩もあつた。オーギ（サトウキビ）中心の農業で、カライモはそれほど多くなかつたなあ。それから砂糖づくりもやつた。肥しをくれて、中を二度、三度も打つて（中耕して）な。砂糖樽ひとつ二〇〇斤（一二〇キロ）入りのものを五五丁も詰めて出したと。太か樽を二人で担ぐ仕事。自分も担うて、海で仲仕した。

船川 あのころの仲仕はたいへんじゃつたと。おなごん衆は強かつた。

遊地 海も、田も、畑も、それだけのお仕事をこなすには、家族だけではとても無理でしょうね。

瀬戸口 田畑の仕事で人手が足らん時は、ヤテロー（雇い入れ）をしたと。人をやとった。オーギの中打ちも田作りも、土地の少なか人をよくヤテローしたな。オーギも肥しをくれて中打ちを二度も三度もしたから。土地のない人は賃取りしたわけ。あんまり銭はくれんで米をくれることが多かった。米は一日働けば二升ぐらいずつくれた。男なら三升ばつかくれたと思う。着る物もくれていた。こういうことも大正に入れば変っていったな。

うちは不自由ということとはひとつも知らなかった

瀬戸口 島間ではうちは分限者の方やった（笑い）。嫁に来る前の生まれた家も、自分の食うほどはあったから、明治時代のころ、うちは不自由ということはひとつも知らなかった。だから、言っほどのことはひとつも覚えておらん。人のことはひとつも気がつかん。

遊地 それでは、少し明治時代の種子島と屋久島とのつきあいのことを聞かせてください。

瀬戸口 屋久島の人たあひとつも付きあわん。何も屋久島から買うもんはなかった。たいてい自分の所にあるもの。

船川 いや、サバと節（塩サバとサバ節）が来たやないか。

瀬戸口 うん、サバ節を買ったんろうよ。

船川 おおかた冬にもってきたな。サバ節はうまか物じゃった。

瀬戸口 明治時代には、こっちから屋久島に行くこともなかった。

船川 わしは、明治時代に、知りあいの人の葬式に一度行ったばかり。屋久島から来てサバ節なんかの商売してある人はあったなあ。

家が良くなったのは琉球旅に通うてお金をつくったおかげ

瀬戸口 うちの家はよ、リユーキュータビ（琉球旅）に行った家。帆で走る船に乗って二か月も三か月もかかって行ったり来たりする。ブンローササゲというて、中指くらいの長さの、実が青い豆なんかを一俵とか二俵とか積んでなあ。何人乗ったもんか知らんが、何反帆とかいうて太か船やったらしい。琉球旅でお金を持ってきて、それで田畑の地面も何も買ったらしい。この家が良くなったというのは、琉球旅に通うてお金をつくったおかげや。三代前のショウサクというじいさんの前の人からのことやからな。

船川 琉球旅の船はな、向かい風でも進める船で、三三三反帆まであったらしいな。「三三三反の帆を巻き上げて」という歌もあるから。ブンローササゲとササゲは別物や。ササゲは長くて、赤ササゲと黒ササゲの二種類があった。これは日が昇らんうちに取りにいかんと爆ぜてしまつ。

瀬戸口 こっちから持って行つたものといつても、古いことやからようわからんが、町中の人がみんな品物を頼んだわけ。米や茶はあんまりなかったと思う。材木を持って行つたかどうか、それも聞いてはおらん。

船川 換えて貰ってきたものは、泡盛の入った琉球焼の壺とかやったなあ。あちこちの家に壺があったもの。

瀬戸口 食糧もこちらからもっていったし、男だけで行ったけれど琉球で女を見つけたというような話はなかったようやった。向こうで子供作ったという話も聞かんかった。

船川 琉球からの人も来ておったけれど、イチヨマン（糸満）という人たちが、スンデ（潜って）カメノイオ（海亀）を捕っていたなあ。琉球旅に行く時は、種子島から直接は行けんかったらしい。前もって西之表のシュータチ（侍たち）にも会い、鹿児島へも行ったりしてな。

瀬戸口 いろいろな頼まれ物もあったらしいな。

草切節を聞いておまえひとり歌って稽古せいよ

遊地 琉球旅で習ったような歌はありませんでしたか。カジョーガネとか。

瀬戸口 どっちも知らん。島間節も歌わん。島間生まれて島間節知らんじ島間生まれたせんがなか、というがなあ。明治に生まれた人が何を知っておるか。

船川 ひとつ草切節でも歌うてやれよ（笑い）。歌が一番じゃろ。

瀬戸口 歌うばうてが、忙しかよ（笑い）。年とれば声がなあ、揺らしがなかと。これ聞いておまえひとり歌うて稽古せいよ（笑い）。昔の歌がよからうがよ。草切節を歌うて見つかん。（歌う）

あよう チンチヨ鳥 じゃよ

我が身に 惚れて

ええ 川の堰所 身を捨てて

瀬戸口 （笑い）これはな、チンチヨ鳥というきれいな鳥がおってな、あんまり自分の姿が良か鳥で、川に映った自分の姿のカゲンボウに惚れてな、川に入って死んだという歌よ。

遊地 チンチヨ鳥というのはどういう鳥ですか。カワセミかしらん。

瀬戸口 いや、それはどがん鳥が知らん。草切り節はどしこもどしこも（いくらでも）あつと。

遊地 どうも、ありがとうございました。お礼に、私も鳥が出てくる沖縄の西表島の民謡「まるま盆山節」をひとつ歌うてみましょうね。（歌う）

ヨーホー マルマボンサン ヨーホー マルマ盆山という鳥を

ユニヤユニヤ ミリバ 毎夕眺めると

カジヌニユシチ 風の吹いてくる方向を知っ（反対側にて

イチユル シルサヤ 止まっている白鷺たちよ （後略）

河東不凡さんの再会

二月二十八日には、夜分にもかかわらず河東不凡さんがわざわざ港のそばの宿までタクシーで降りて来て下さったうえ、交易のことにくわしい河脇寅次郎さん（一九〇八～一九九〇）を電話で呼び出していただきました。話はひとしきり琉球旅と島間の性格のことをめぐって盛り上がりました。午後一時ころ河東さんが帰られたあと、フクサイモンのこと、島間港の女仲仕の歌、ウスオコシの行事のことなど、河脇さんのお話は午前一時ころまではずんだのでした。

種子島では魚屋というのは珍しかったんですよ

河脇 私は明治四一年島間の中之町生まれで、現在は七六歳です。三八歳の時に兵隊に召集されて、三五七二部隊におりました。もともとは百姓なんです。昭和二六年ころ魚屋を始めました。当時ザウイ（駄売、行商）はあつたんですが、魚屋というのは珍しかったですよ。西之表から卸が持つてくる魚を自転車で上中まで取りに行きました。一湊の斉藤熊彦おじい（第三章「種子島への魚の行商」を参照）のもつてこられる屋久島のサバも扱いました。上中の魚屋が一二〇円で売っている魚を私は六〇円で売るといふ具合で、つい相手の事を考えて損をするんです。それで、この仕事は二年ほどでやめました。

このあと、山を売ってもらって、パルプ用材を出すという仕事をしました。佐伯の興国人絹という会社に主に出していました。河東さんなどは優先的に山を売ってくださったんです。このあたりはものすごい松がありまして、一人の人の山で一万石というところもありました。今の単位は立米（りゅうべい）、つまり立方メートルになりましたが、昔は石でかぞえたものです。この仕事は一三年間やり、そのあと、竹商売に切り換えて、やめて二、三年になります。

竹はメダケで、ここらではニガダケと呼んでいます。愛知県で、外壁を編むのに使うといっていました。太さ三〇センチほどの束にして一束二五〇〇円くらいでしたかね。

屋久のヨメジヨが手でまねく

遊地 今晚はひとつ島間を中心とした交易のことなどをお聞かせいただけませんか。とくに屋久島との関係のことなども。

河脇 そう、屋久島と言えば一湊の斉藤熊彦おじい。この人は魚の行商によくきていました。昭和三四、五年頃まででしたね。物々交換ですか、あれは、私の記憶では、終戦の時、物のない頃だけだったですね。歌では、屋久島とのつながりを歌ったのがあります。草切節ですが、どんな節でも歌えますよ。（歌つ）

島間崎から 屋久島見れば

屋久のヨメジヨが 手でまねく

島間には琉球旅の名残りの地名や歌があります

遊地 なるほど。それでは、琉球旅のことはいかがでしょうか。

河脇 島間にはリュウキュウサクバルという場所があります。琉球旅をしたところの名残りの地名でしょう。琉球に行く時は、お茶とか雑貨を積んで行き、帰りには黒糖を積んできたそうです。

河東 種子島が砂糖を炊くようになってそう長くないですからね。琉球から船乗りが戻る時は、四月に吹く八エノカゼという南西の風に乗って帰ってきたものです。その時、船乗りの妻子は、岬神社から二〇メートルほど離れた場所へ出迎えたものでした。それから、島間には琉球の歌が伝わっていますよ。カジョーガネとかシココヤマとかフネノチーとかね。

河脇 昔の大船はよっぽど力がないと楫を取りきれなかったそうです。三五反帆船などは、全部帆を張ると船も割れるくらい力がかかるんですから。

嫁にいくなら島間の町に

河東 島間には、古くから一六軒の家がありますが、貿易という目的を主体にした集いだたのではないのでしょうか。そういうものが発生した動機には、例えば今、漁業組合を必要とするよりもっと強い動機があったんでしょね。そこから島間独特の団結心も生まれたと思っんですよ。

河脇 島津は、坊津から幕府の目をそらすことを考えたんでしょ。

河東 赤尾木（あこうぎ、西之表のこと）は、城下町。闇貿易はできんですよ。それが島間なら可能だったわけですね。

河脇 スノサキにユキフネという家があって、この家の人とのつきあいは今まで続いています。嘉三太じいさんなんかは、若いときに飯炊きとして琉球旅の太か船に乗ったそうです。

河東 積荷で小遣い稼ぎもできたらしいです。

河脇 草切節にこんなのがあってしょ。（歌う）

嫁にいくなら 島間の町に

オオサカベイジヨ着て しゃらしゃらと

オオサカベイジヨというのは、「大阪の晴れ着」という意味です。だから、島間には大阪方面からの着物もたくさん来ていたんでしょ。

三番鶏が歌う時はたいまつをともして仕事に出ました

遊地 生産活動はどうだったんでしょか。

河脇 一応島間は半農半漁と言われてきました。でも、本当の百姓は、日が暮れるまで田んぼにやるけれど、島間の人は夕方の五時頃には仕事を終えて上がってくるという習慣でした。

河東 だからといって怠け者ということはありません。日が暮れてもいつまでもベラベラ（だらだら）してやるのとは違っんです。そのかわり、朝は早いですよ。

河脇 朝は、三番鶏が歌う時は、たいまつをともして仕事に出ました。

河東 私たちの所の向方は、山の中でしょう。朝起きて島間に降りてきてみたら、もうもぬけの殻でしたよ。

自分の田があれば分限者といわれました

河脇 島間にはほとんど田がないです。あっても西之表のシュータチの田が主です。山の中に自分の田があれば、分限者（ぶげんしゃ）といわれました。

河東 それも、検地をまぬがれたわずか六畳ほどの小さい田ですよ。

河脇 米がないので、船に積む米俵を担がされる時に、竹でつくったサシというもので俵を突いて、前に下げた袋の中へ少しづつ盗んだそうです。茎永あたりの米のとれるところは、それで物々交換もやっただんですが、島間はあまりそういうことがなかった。

川辺郡の塩屋（枕崎の東）というところの人が島間に来ていましたが、この人は体ひとつでできるザウリ（行商）をしていました。まず、魚を米と換えてきます。こっちは人は、秋にはもう自家用の米がなくなってしまうから、米を一俵貸し付けて、収穫時には二俵取り返す、というやり方で商売をしていました。イレツケ（貸し付け）というんですが、越中富山の売薬みたいに廻ってきよったものです。

種子島様の女中やニサイ（下男）にこちらから行くというのがだんだんなくなってくるでしょう。

それで、西之表のシュータチ（土族層）もだんだん田んぼを売るようになっていったんですね。それを買ったのがこの地の人です。塩屋の人々は田を持つ必要がなかったんですね。

島間魂は団結心から

河脇 島間は、昔は相撲も強かった。喧嘩も強かったなあ。

河東 島間ダマシイというて、ここはもともと根性の強か所でしたから……。島間の人間は、負けじ魂、団結心が強いんです。それを島間魂と呼んだんでしょうね。種子島全体の運動会をして、島間が三、四年も連続優勝したことがあります。

河脇 昔、イワシや飛魚が来た時は、一つの櫓に二人がかりで根性を出して漕いで、競争して魚をとったので負けじ魂が生まれたんじゃないかなかったですよかね。

河東 今の南種子を昔は下の郡（こおり）といいました。元禄二（一六八九）年の資料を見ますと、種子島の中でも、下の郡が一番人口も多くて、米の生産量も多かったです。西之表の着倒れ、中種子の喰い倒れ、下郡の書生倒れ（教育熱心）というように、北から南へ、同じ種子島といっても気質は違います。西之表へいけば、めでた節のひとつも誰も歌えないというような村はたくさんありますが、南種子では考えられないことです。それと、南種子では凶悪犯罪というのがほとんど出ないんですね。

遊地 貴重なお話をうかがいました。ありがとうございます。

おわりに

人あたりが柔らかかで親切な方が多い南種子の方々の中でも、島間では、話をして下さる方が次々に、もっと年上の次の話し手に送り届けてくださるといふ、めったにない経験をさせていただくことができました。その結果、家により、人により、おかれていた境遇はじつに様々だったこと、屋久島との関係といった面にもその違いは反映していたらしいことをつかがい知ることができました。

一九九一年の暮れに家族で訪れた島間の町は、少し寂しげに見えました。高速船トッピーが鹿児島西之表 宮之浦を結ぶようになつて以来、港町としての島間の町の重要性が薄れたためでしょうか。見知らぬ旅人であるわたし（遊地）にも、限りなくやさしく接して下さった島間の方々から心から感謝いたします。

なお、原稿は、河東不凡さんの奥様のミヤ子さん、河脇寅次郎さんの奥様の薩子さん、船川森蔵さんの娘さん、瀬戸ロツルさんの代理の船川文一さんに目を通していただいて、それぞれ誤りを訂正することができました。また、中種子町立歴史民俗資料館の岩坪博秀さんからも内容についての御教示を受けています。御協力ありがとうございました。

対談 4 島からこそ世界が見える

遊地 西表島の石垣金星さんは「幸い地球は丸い。ここが地球の中心だ」というのが口癖で、「本島」とか、「離島」といふ言い方はおかしいと言つ（安溪遊地、一九九五）。

貴子 那覇市に住んでいた時、知り合いの高校生に「ニューヨークには二回行ったけれど、西表島とかの離島方面には行ったことがありません」と言われて驚いた。西表島とのつきあいが深くなるにつれて、ついつい、半分西表の人のような気持ちで見たり聞いたりするようになっていた。

遊地 島々は対等の存在だし、中央・地方・辺境などというのは、自分こそが中央と思っている人たちが勝手に作った差別的な考え方であることをはっきりと教えられた。

貴子 西表島から見ると、隣の石垣島の人たちの多くが、西表島を離島と見下している一方で、首里・那覇の人々からは「離島」と見下され、その那覇の連中が、ヤマトウ（九州以北）、さらにアメリカに頭があらがないという具合に、こっち向いて威張り、あっち向いてペコペコしている人々の背中が西表島からこそよく見えるんだと、金星さんは表現している。

遊地 だから、世界中の背中が見える西表島からこそ、本当に世界が見えるんだ、という考えが成立する。

貴子 もちろん、西表島だけでなく、宮古の池間島（野口、一九七二）からでも、『島島は入って

いるか』(鹿野、一九八八)の鳥島からでも、ヤポネシアのしっぱ(島尾、一九九二)のどの島からでも世界は見えるはずだけれど。

フランス滞在を経て

遊地 一九八七年から八八年にかけて、フランスに一年半勉強に行かせてもらった時、フランス人の地域研究の姿勢に感銘を受けた。

貴子 ひとつは、その息の長さ。三〇年も四〇年も、アフリカの同じ村に通い続けている女性研究者たちと知り会った。村の若者を養子にして勉強させている、これも女性研究者。

遊地 もうひとつ励まされたのが、百科全書派の伝統が受け継がれているという事実。ひとつの地域にいくついても、地道にすべてを知りつくして行くことという、あのねちっこさ。僕らにぴったり。

貴子 アフリカの森の村の料理の総リストなんていう報告が出せたのも、フランス滞在のおかげね。研究者たちが面白がって励ましてくれたもの。パリで文献をいろいろ探索して、ヨーロッパの人たちがアフリカを特別のものとしてではなく、まんべんなく見ようとしていることを知って、日本では点の集まりとしか見えていなかったアフリカが面として見えてきた。

遊地 でも、素晴らしいことづくめでもなかった。

貴子 ももとの植民地から、今は学生としてアフリカの若者たちがフランスへ勉強に来ている。フランス人の若い研究者の中には、アフリカ人をゼミに連れてきて、小声でいろいろ教えてもらって

は発言するのに、そのアフリカ人自身には一言も発言させないという人がいた。自分の情報提供者として連れてきたと公言してはばからない態度がそこにあった。

遊地 とても植民地的だと思った。

学問世界から踏み出す

遊地 西表島に通い始めたころの僕は、そういう差別のまなざしという話や、自然保護といった、自分がやりたかった学問に直結しそうな話にはなかなか入り込めなかった。

貴子 行けば家族のように三食をともしながら、一つ屋根の下に一緒に暮らせてもらった。そんな時間が長くなるにつれて、そういうことにも共感できるようになっていった。

遊地 西表島の伝統稲作の研究をした時に、稲作の作業に実際に参加して、下手ながらも自分で経験しながら進めた、参与観察という文化人類学の方法のせいで、島の人々が直面している問題にも無関心ではいられなくなっていた。

貴子 子どもが生まれて家族ぐるみで、島の人たちとつきあうという新しい関係に入って、つい背中を押されて学問の枠を踏み越えたということかもしれない。

遊地 「西表島で農薬散布が始まった」(安溪遊地、一九八六b)という警告のエッセーを書いたのが、学問世界から踏み出して行くひとつのきっかけになったと思う。フランスから帰ってすぐの一九八八年に、研究の結果を島の人たちに広く聞いてもらおうと、石垣金星さんとともに西表島のシ

ンポジウムを企画した。

貴子 「西表島の人と自然 昨日・今日・明日」というテーマだった。学界の長老で私たちが敬愛する國分直一先生をはじめとする学者の方々や、屋久島で地域を守る活動をしている長井三郎さん（後に『季刊生命の島』編集長）らも駆け付けてくれて、地元を中心に、二〇〇人も参加があった。

遊地 僕は、基調講演で古代稲作の研究や、東南アジアの農業、さらに、日本の都会に住む消費者の志向などを踏まえて、無農薬の伝統を付加価値にしたお米の産直を西表島の農民たちに提案した（安溪遊地、一九八八b）。

貴子 そのアイデアが「ヤマネコ印西表安心米」としてスタートするのが翌年の一九八九年。

遊地 火をつけた責任から、僕はボランティアの営業部長になった。約三年間は、商売を軌道に乗せるための渉外と広報に必死だった（安溪遊地、一九八九b、一九八九c、一九九一、一九九二d）。『農業六法』の本なんかも買って、特別栽培米の制度の勉強をしたり、お役人とやりあったりするはめにもなったし、本土並み稲作を推進する立場の地元農協の幹部からは「あいつは西表の癌だ」という言葉を頂戴していたらしい。冒頭の「される側の声」の中で「島の間が独力でできるように育てていかなくちやだめでしょ。今みたいな、船をひっぱって岩ゴロゴロの山道を通すようなやり方が長続きすると思うのは、あなたの思い上がりじゃないかしら」と諭されているのは、その時のこと。

貴子 だから、しばらくの間は、論文書きどころではなくなっていた。

遊地 伊谷純一郎先生が京都大学を退官された日、ゼミ室に顔を出されて、そこに集まった弟子たちにごう言われた。「学問はアグレッシブ（闘争的）に」これは、自分の小さな業績に安住することなく、地平線を切り開いて、常に最前線で論争を巻き起こしていけ、という意味だったと思うけれど、そのあとすぐ、僕の方を見ながら「この人はちょっとアグレッシブすぎるけどな」と付け加えられた。

貴子 慣れない商売の道は、それまでの学問よりもずっと大変な真剣勝負で、アグレッシブすぎるぐらいにならないとどうして新しい道を開くことができなかった。

遊地 そのあと、西表のガソリンスタンドで「あんたらから金を貰うわけにはいかん」と、しばらくは無料で給油してくれたり、民宿のおばちゃんに「あなたの勉強は、本当は島のためにやっていたんだねえ」と言われたりした。これは、学問のための学問をしていた時には出合うことがなかった島の人たちの一面だった。

貴子 それ以来、行けば島の行事に参加するように誘われるようになった。そして、取材にきた人たちが、私たちのことを島の人間と認めていろいろ質問してくるので、答えられる範囲のことは答えたりもしてきた。けれど、これは複雑な気持ち。

遊地 それは「調査される側」の立場を実際に体験することでもあった。

貴子 西表島の祭は神様に捧げるものであって、観光客向けのイベントではないのよ。これは実際に参加してみればすぐにわかる。こちらが、神様への奉納として真剣に祭に取り組んでいるのに、それを掻き乱すように取材する人たちへの対処の方法も考えるようになった。「される側」はいやな思

いをするのがけつこうあるのだから。

遊地 そこで、神行事としての祭を尊重し、許可なく取材・公表はいたしません、という誓約書に署名した人だけに腕章を渡し、それ以外の人の取材は遠慮してもらおうようにした。

貴子 取材陣や観光客に対してもつと毅然として、自信をもって祭をすればいいんだ、ということが取材制限をしてみても地元の人たちにもわかったという意味で、大事な経験だった。

遊地 この時は、西表島の節祭（シチ）という大きな祭の記録作りのために呼ばれて参加したんだけれど、この時みんな話してあってルールづくりをした。僕は料理や取材陣への対応も含めて、裏方をいろいろ務めることになった。

貴子 丸三日間の祭が終わって、疲れなおしの慰労会で「干立（ほしたて）村の下男下女の安溪さんです」と紹介されてしまった（笑い）。

種子島にて

遊地 さて、聞き書きのことだけれど、屋久島からの交流を逆にたどる意味で、種子島の南の方を訪れた。そこで出合ったお一人が、立石さん。

貴子 この方の初対面の挨拶がなかなか強烈。

遊地 こんな役にもたないフィールドワークをするより、自分の生活を大切に、その暇にお金もつけども考えたら、という助言だったから。「はい」と答えてしまったら、もう、すぐに帰らなくちゃいけない。

くちやいけない。

貴子 このお話では、種子島の南から見た屋久島との交流の話だったから、アフリカの物々交換のことを書いたプリントを渡してなんとか切り抜けた。

遊地 京都で忙しい暮らしをしていて、胃がキリキリと痛くなったりしていたのに、種子島でこんな対応をしているうちに、いつの間にか治っていたから、立石さんの言葉も、活字で読むほど強烈じゃなくて、とても優しい言い方だった。

貴子 方言でしゃべって、よその人に本当に通じるだろうかという立石さんの心配も、優しい言葉のようだけれど、フィールドワーカーの力量を問うておられるとも言える。

遊地 それから、「嫁にいくなら……」。これは、種子島の南の玄関口にあたる島間（しまま）の町を訪ねて出合った方々との対話。

貴子 こんなに、次々と別の方に引き合せていただけのことにはめったにない。

遊地 でも、一九九一年に三度目に訪ねてみたら、話をしてくださった方にひとりもお会いできず、島間城址を中心とする郷土史に取り組んでおられた河東不凡さんも、研究への思いを残して病没されていた。

貴子 話をうかがうということは、だから、責任重大ね。その時々、時を得て聞くだけけれど、もうちょっと聞いておくんだって、と思うことはある？

遊地 そういうことを思わないようにしている。フィールドワークは一期一会だし、聞けただけし

か聞けないものだから。

貴子 私もそう思う。こっちがそこまで育っていないのに、本当に聞いたり見たりわかったりすることはありえないのではないかな。聞いておけば良かったと悔やむよりも、今できることを今やることが大切なのではと思っている。

五、地の善として

留哉じいちゃんとの出会い

種子島の南端、鉄砲伝来で有名な門倉岬にほど近い南種子町西之地区の平野村が主な舞台です。安溪遊地が、種子島をはじめ訪れたのは、一九八四年の夏のことでした。渡部忠世（わたべ・ただよ）先生をリーダーとする「日本稲作の南方的要素」という研究班のメンバーの一人としてでした。民俗学の下野敏見（しもの・としみ）先生のご案内で、八月一六日に平野の本国寺での古式ゆかしい盆踊りを見学したときに、日高留哉（ひだか・とめや）さんに いつもお呼びしているように親しみをこめて「留哉じいちゃん」と書かせていただくことにします に出会うという幸運にめぐまれました。

留哉じいちゃんは、四〇年ほど前までやっていた石塔祭のこんな踊りがあるが、若い者は知らんじやろつと「イエー 長い刀は 差し様がござる 後上がり の 前下がり ヤッコラサー ヤッコラサー ヤッコラサー」という歌をうたって、その踊りを披露してくださいました。私は、すぐに、これと同じ歌詞の歌はるか南の西表島のシチという祭で歌われる「ククパ」という歌と共通する部分があることに気付き、種子島と南の島々との意外な結びつきにはっとさせられたのでした。そのことは、私たちが編集した『わが故郷アントウリ』という本（山田武男、一九八六）にも解説しておきました。

「前の上がる」が、いつの間にか「前の明る」と思って歌われ、次のように解釈されていたことに興味をひかれます。

ナンガイカタナバ サシユガゴザル 柄の付いた鉈を差している

ウシルサシミリバ マイヌアカル 後の方に差せば前方が明るい

そのあと間もなく、一九八四年八月一九日に、民族学の佐々木高明先生や東南アジア学の高谷好一（たかや・よしかず）先生らとともに南種子町西之字平野の御自宅におうかがいして、昔の農業の技術をつかいました。理路整然としたお話は、実に明快でわかりやすく、「このおじいちゃんにもっといろいろ習ってみたいなあ」と強く思いました。

「じいちゃんが民宿をはじめたよ!」

ところが、私は連日連夜の先生方との共同研究で疲れていたのか、体調が思わしくなかったので、お話をうかがったあと、ずうずうしいとは思いますが「少し昼寝をさせていただけませんか」と思いきって頼んでみました。ちょうど八〇歳になられたばかりの一人暮らしの留哉じいちゃんは、とっても気軽に承知してくださり、縁側で眠ってしまった私をおいてバイクに乗ってどこかにおでかけになりました。

留哉じいちゃんのおうちの居心地が、あまりよかったですので、翌二〇日、こんどは私一人でうかがい

ました。この日は、昔の経済のことや屋久島との交流のことなどをあれこれおうかがいしました。

翌一九八五年の二月末にもう一度おうかがいしたときは、留哉じいちゃんは、ビニールハウスで花や樹木の苗を育てるお仕事に余念がありませんでしたが、二月二六日は、丸一日つきあってくださいって、島の人の自然とのつきあい方を教えてくださいました。お昼に御馳走になった、ジャコでだしをとった味噌汁と、留哉じいちゃんの畑でとれた無農薬の野菜の美味しかったことは忘れられません。そして、お別れする時には、たくさんのお話し手の方々を紹介してください、「これからこういう人間が話を聞きに行くから、よろしく頼む」とみなさんに電話をかけておいて下さいました。そして「話を聞いたら、電話でいいから、どうだったか必ず報告せよ」とおっしゃいました。

その後、年賀状をやりとりさせていただくたびに、一度家族で遊びにくるようというお誘いが書いてありました。「留哉ちーが味噌汁をつくるから泊っていきなさい」と結んであることが多かったように記憶しています。

一九九一年二月二五日のこと、ほとんど七年ぶりに念願がかなって、お元氣な留哉じいちゃんに、こんどは家族でお会いすることができました。お話をうかがううちに、夕暮れが近付いてきました。おいとまをして、茎永あたりの宿に泊ろうと電話を借りましたが、なんとロケット発射の関係とかでどこも満員だったのです。

しばらく電話をかけていたところ、留哉じいちゃんが、「宿がないなら、今晚はうちへ泊れ！」と言ってくださいました。せつかくのお言葉、御好意に甘えることにして、ふとんを出し、夕食などを準備しているとところへ、すぐ近くに住むお孫さんが何かの用事で見えました。そして、目を丸くして「じいちゃんが民宿はじめたよー！」と叫ばれたので、みなでももわず笑ってしまいました。

「留哉の声」 自筆原稿から

留哉じいちゃんは、いくつもの原稿を書いておられます。おうかがいした話とはまた別の深い味がありますので、それをまじえながら聞き書きを進めていきたいと思います。安溪遊地が補った部分は、四角かっこに入れてしめしてあります。

日高留哉は、明治三七「一九〇四」年三月二三日に生まれた。日高矢市の二女四男の末子として生まれる。明治四三年四月一日、西野尋常小学校入学し、大正五年三月二四日卒業する。大正五年四月一日、「上中の」南種子高等小学校入学し、大正八「一九一九」年三月二二日卒業する。

その後父は、師範学校進学を勧めたが断り、「平野にあつた定時制の」実業補習学校と農業補習学校で五ヶ年間修業しつつ両親と農業に励み、大正一四年二月「満一五歳の」植田ふじを嫁り、同年三月独自の営農に取組み一女二男を得て懸命の努力中、昭和一三年二月二九日、ふじは亡くなった。

幼小の子供との生活に堪えず、一五年には次妻として大脇カメと再婚。次々と又三女二男を得て、再び苦難の生活を続けながら自分は左記の通り各分野で社会のために働いたが、得る処は少なかった。

昭和四二年に隠居宅を作り二人で楽しい毎日暮した。八人の子供、一人の孫まで夫々家庭を持たせ独自の生活となり、ほっとしたので門倉老連を名乗り、西之の七夫婦で「昭和四九年一〇月二七」

二九日の「宮崎旅行も実に楽しかった。この時が一代の絶頂ともいうべきであった。」日高留哉さんの自筆原稿から」

石臼の下になりかけた

母はケサというた。わしは、下中の真所のオッチョオバーという産婆さんにとりあげてもらった。もうこんなに子供が多いので「育ちやあならんからムギウス（石臼）でオソウテくれ」と頼んだけれど、このオッチョオバーが、こんな元気な子供だもの、育ててごらん、といって命を助けるように計らってくれたそうや。これは、いつも母に聞かされたことやった。

末っ子のためやったかと今更ながら思われることがある。それは、母の厚い心や。母は、小学校五年になるまでお乳をさすらすほど、わしを大切にしてくれた。成年になって仕事につく時も、母が手放したくなかったのやるつな、遠いところには行かさんかった。じゃから、わしは、種子島から外には出ん人間よ。

学校の九年間無欠席でがんばった

大正八年三月二日に高等小学校を卒業するまでの合計九年間一日も欠席をしなかった。これが、わしの小さい時のがんばりだった。そのうち二年間は二席やったが、七年間は首席でおしたもんよ。まあ、ここに三三枚ばかり綴じてある、我が幼小時代の努力の跡を見てごらん。

馬耕競犁会という競争があった

馬耕競犁会という競争が毎年あったよ。馬で田んぼに犁をかける競争よ。昭和一七年まではやってる。女の青年も馬耕試験はやった。南種子中の若い男女がよりあう唯一の機会でもあったから、男女とも、想いの人を見つけるチャンスだった。男の側から言えば、女の品較へよ。馬耕の技術だけでなく、体格、見目、器量、人間としての態度も見た。化粧をつけるような女は男にきらわれた。この頃はズロースというものがなかったので、女は前を出さんために苦労したわけ。それで腰巻をしっかりしめてやったもんじゃった。腰巻の色か。それはだいたい白じゃよ。赤いお腰は生理の時だけ。

馬には朝草を食わした

馬には朝草（朝刈つてきた草）を食わした。カライモを煮て、ぬかと水を少し混ぜたものも食わしたが、人間の三丁四倍は食うなあ。生のカライモも少しは食わせる。

昔の青年男女は、朝起きたらすぐ鎌を研いで、顔も洗わずに草を切りに行く。短い草が柔らかいから、それを優先して切る。一束は、二尺まわりほどに束ねる。朝露のあるうちは鎌はよく切れるから朝草を切るんだけど、食わすのは夕方。刈った草は発酵しないように日陰においておいて、それを夕方、束を立てて馬に食わす。

草は、畑のクリの土の肥えた所で採した。野大野（のおおの）あたりは切り換え畑ばかりで草が多

いので、そこへよく草を刈りに行った。一二束を一把としてしばったものを四つ作ったら四把荷というけれど、一度にそれくらいを運んだ。

馬は自動車がわりに乗ったもんよ

もともと種子島は、女も馬に乗る島だ。乗り鞍を置いて今の自動車がわりに乗ったもんよ。荷鞍で乗る人もあった。ひと樽約一八〇斤（一〇八キロ）もある砂糖樽を右と左に振り分けて、合計二六キロも積んで島間港まで持って行くと、帰りは荷物がないので、人間が乗ってきても速かったよ。

大正時代に南種子で牛をもっている人は分限者じゃといわれた。牛を飼う人はよっぽどしんぼう強い人じゃとな。馬に較べるとノロカじゃるが。牛は、昼はあちこちにつないでおいて、夕方は小屋に入れてちよっと草を食わすだけでいい。つなぐ時は、七尋の縄だったが、クリメギといってクルクル回って縄がよれない装置をつくって留めた。

牛は有畜農業をするためには大切なもんじゃ。金肥（化学肥料）ばかりとか、ヤギや馬の堆肥ばかりでは畑作はうまくいかん。厩肥をとるためにも、わしは牛を飼った。

産業組合ができて目があいた

昔は、白下地糖でないと売れなかった。その作り方は、四国の讃岐の人が来て、指導していた。あとから黒糖でも売れることになり、しだいに製造の簡単な黒糖の生産が増えて行った。

黒糖は鍋で煮詰めるだけだけれど、白下地糖は、澄まし樽という樽に入れて仕上げる。サトウキビの絞り汁二石（千八〇〇リットル）から、黒糖なら五〇斤採れ、白下地糖なら二割減の四〇斤しか採れん。樽ひとつを一丁といって、黒糖は一丁に一五〇斤（九〇キログラムに相当）しか入らんが、白下地糖は重くて一丁に一七〇から一八〇斤くらいも入る。

値段は、一斤いくらという相場と、タオシといって、一丁いくらという見切りの相場があった。黒糖の場合、昭和の始めころの値段で、高い年で一丁四円くらい、安い年なら三円くらいだった。

見当金といって、砂糖ができる前に、金を貸す人があった。島間の人が多く貸し付けたけれど、黒糖一丁で二円とか二円五〇銭しか貸さないから、頭の巡らん人は、ますます損をしたもんじゃった。それから産業組合というのができて、よつやく損ばかりしていた人も目が明いたわけよ。

昭和六年から産業組合に入った

昭和六年に西之産業組合の書記に採用されて、今でいう農協の仕事を始めたわけよ。昭和一九年には召集をつけたけれど、昭和二〇年から二三年にかけて南種子産業組合西之支所に勤務して、昭和二三年から二六年までは鹿児島食糧事務所南種子出張所の職員をした。この年の五月には西之校区長になった。

日高留哉さんの農業関係の賞

留哉じいちゃんのもらわれた農業関係の賞のうち、今も賞状が保管されているものを見ておきましよう。昔は、こんなにもいろんな部門で農業技術の競争と振興がはかられていたのです。日本農業の現状と比較するとき、ある感慨を禁じえません。

- 大正一二年一月一五日 西之區主催 第二回馬耕競犁會 壹等賞。
昭和二年四月一〇日 南種子村主催 第一〇回甘蔗増収競作會 四等賞。
昭和五年三月二六日 南種子村主催 造林品評會 二等賞。
昭和五年三月二六日 南種子村主催 第四回茶園品評會 二等賞。
昭和八年四月二二日 南種子村主催 第一〇回苗代品評會 四等賞。
昭和一〇年四月二〇日 南種子村主催 第一八回裸麥競作會 一等賞。
昭和一〇年四月二〇日 南種子村主催 第二二回堆肥品評會 三等賞。
昭和一一年四月一日 南種子村主催 第二三回堆肥品評會 四等賞。
昭和一一年四月一日 南種子村主催 第一九回甘蔗増収競作會 三等賞。
昭和一一年四月一日 南種子村主催 第一九回苗代品評會 二等賞。
昭和一一年九月一六日 南種子村主催 第一六回仔牛馬品評會 一等賞。
昭和一二年四月一日 南種子村主催 第一四回堆肥品評會 二等賞。
昭和一二年四月一日 南種子村主催 第二〇回甘蔗増収競作會 二等賞。

- 昭和一三年 熊毛郡主催 第二〇回畜産品評會 三等賞。
昭和一三年四月一日 南種子村農會主催 第二一回甘蔗増収競作會 一等賞。
昭和一三年四月一日 南種子村主催 第一四回堆肥品評會 二等賞。
昭和一四年四月二〇日 南種子村主催 第一五回甘蔗増収競作會 二等賞。
昭和一四年四月二〇日 南種子村主催 第一五回甘藷源地競作會 二等賞。
昭和一四年四月二〇日 南種子村主催 第一五回甘藷源地競作會 二等賞。
昭和一四年四月二〇日 南種子村主催 第一五回堆肥品評會 三等賞。
昭和一四年四月二〇日 南種子村主催 第一五回苗代品評會 二等賞。
昭和一四年一月九日 熊毛郡主催 馬匹蕃殖成績品評會 三等賞。
昭和一六年六月四日 南種子村主催 土寄品評會 一等賞。

「これは、このころ盛んだったタバコの中耕の競争でした。」
そのほかに、西之校區長として賞状を受けたものがあります。

昭和一一年一月一四日 南種子村主催 第一回牧野品評會 二等賞。
これは、西之地区に一八町歩の放牧場を作って、土手を築き、家畜の水のみ場を作ったのが評価されたものでした。

教育委員を六年したけどこれは損な仕事やったなあ

わしは、教育委員時代に相当勉強したと。しかし、これは損な仕事やったなあ。儲かることがひとつもなか仕事。相手は校長連中。対等の交際じゃろが。よるとさわると飲み方や。まあ、ひどい仕事や。これを昭和二十七年から六年間やった。終戦直後のうるさい時じゃった。公選になって初めての教育委員やった。

もうかる港に二度船乗るな 屋久島のことなど

わしが屋久島へ行き始めたのは、昭和八年の夏から。これは牛を買いに行ったのだけど、屋久島にはまったく大した材が多かった。とにかくけわしい島だというのが印象に残っている。

安房の南で、中里畷助（けさすけ）という人の紹介で赤牛二頭と黒牛の一頭の合計三頭を五〇円で買った。これを太らせて年内に肉用に売ったら八〇円に売れた。しかし、牛の商売は二度とやらなかった。「もうかる港に二度船乗るな」という言葉があるけれど、まあ、そういうもんやな。

その後は、牛を飼うのはやめて、昭和一〇年ころからは、馬の方へ馬力がかかっていった。戦争準備ということもあって、昭和一四、五年になれば「軍馬資源保護法」という法律に基づいて政府から補助金が出るようになってきたからな。

屋久島に初めて行ってみて思ったことは、心の持ちかたの違い。人に対する接触の仕方、産業に対する身の入れかたなんか、ずいぶん違いを感じたな。言葉も種子島と較べれば屋久島は鹿児島流だな。

それでも屋久島は林業は熱心だった。魚捕りもサバやトビウオ捕りがさかんやったな。あまり地人は魚捕りを熱心にはやらんようやったけれども。

屋久島からサバの頭がきた

わしの小さい時から物々交換があつて、屋久島からは、サバの頭の干した物がきていたよ。交換にはなにを渡したかな。物々交換は、食糧が不足する屋久島からの要求でやっていたことだと思つ。

サバの頭はこつちでもう一度よく干して、臼でついて魚粉にするんだけど、臼をつくのは子供の仕事やった。サバの頭の魚粉は、ブタの餌にもしたけれど、使い道としては、田んぼに入れて肥料にすることが多かった。この魚粉は、化学肥料にとつてかわられた。それに、うちのおやじは魚粉を使わなかったよ。篤農家が米をちつとばかりよけいに取るつというのでいれたばかりよ。

わたしらの代になって魚粉を入れるようになってきたんじゃ。若い頃は、六〇七反しか田んぼがない。子供ができるころによつやく一町二反三反に増やした。魚粉は骨粉とまぜて使つたよ。

田んぼの肥料は骨粉と堆肥

昔は、骨粉、大豆かすを鹿児島から買うこともしていた。しかし、大豆かすを田んぼに入れる金はなかつたな。骨粉もたくさん入れる余裕はないので、稲の苗の束を水に浸して、骨粉をモミツケしてやる。一町三反もある田んぼに、骨粉一俵一二貫入りのものを使う程度だった。まあ、苗一本に骨粉の粒がひとつつく程度でも、苗の成長にはよろしかった。このやり方は、終戦後まで黒土地帯で流行

った方法だよ。わしが物心ついたころにはもうやっとながな。

田んぼに一番多く入れたのは、堆肥よ。方言でイシゴーツという石原の坂道を、馬の背中に堆肥を積んで田と往復したもんよ。定速歩させることができれば、七回も往復できる。帰りは人が乗って行くけれど、馬は大事にしたぞ。

屋久島との物々交換は戦後まであった

物々交換は戦後まであったな。昭和二四、五年まではやった。戦前は相当あったぞ。昔、交通の便の悪いころ、種子島のカライモ（さつま芋）を求めて屋久島から人が来た。交通の便を考えると、鹿児島まで食糧を求めに行くというのは難しい。もって来るものは、魚が主で、塩サバ、サバ節、塩をしたトビウオなんかだった。ゴチヨーダチと言って、櫂が四つ、櫓がひとつの船で来た。この船には帆もあった。

こちらから屋久島へ出かけていくことは少なかったように思う。その時の情勢によってこっちまで来たのよ。屋久島は畑も多いのだけれど、早魘したら被害が大きかったから。種子島でもトビウオは捕れるけれども、豊富に捕れるといえばそれは屋久島じゃった。

屋久島からカライモを求めて来るのは、四、五月ごろの端境期が多かった。食糧が不足する時期だから。カライモと魚と、決まった交換の比率というのはなかったな。

木材が、木材は屋久島から来たかもしらん。向うで製材までしてもらってきた。これはだいたいお金で買うもんじゃったな。物々交換はせん。ああ、もっとも相手が国有林から盗伐した時は物交も可能だっただろう。

自分は、屋久島に木材を買いに行くということもしなかった。

物交のお得意さんをトモという

屋久島から人が来るときに、「トモらが来る」というような言い方をした。屋久島にトビウオを捕りに行って友達になつたりしたというような、そういう各個人の結び付きというものがあつた。

西海岸の方にはよく屋久島から来ていたようだが、莖永まで来ることはほとんどなかっただろうな。わし自身は、屋久島にトモを持っていかなかったな。

野尻や立石の村の人はよく屋久島へも出かけていた。昭和七年の初夏に大きな遭難事故を起こしたのを覚えている。あれは野尻の舟が、嵐でひっくり返って十何人からの青年が亡くなった。立石、砂坂の人も海に出ていたが、幸い舟が転覆せんで死ななかった。

物々交換は、古い人がやった。若い人はやらん。だからもう覚えている人が少ないんじゃない。南種子とつきあいがあったのは、楠川、小瀬田、安房、一湊あたりだった。宮之浦とはどうだったかな。あそこは裕福な村だったから……。

松の木も仲間が少なくなれば淋しい 南種子の森林の消滅

「西之地区は」農会の指導による競作会等で大正時代から農業経営優秀部落、水稻作では優秀農家がいたそれ故に山々は深々と繁り、特に高木としては、十二、三米から二十米もある松の大木、その下には鬱蒼とした広葉樹で、大夏でも滴したたる程の森林。その間に点々と有名な島間半島杉の樹齢五〇年、六〇年のものが天高く、夏の谷間は天然のクーラーであった。

そして海岸には春は飛魚、夏はイワシの大群がおしよせ、ナガラメは女、子供でも干潟で取れる。冬は定置網と魚の宝庫で、特に昭和の始め頃まではイワシが処分に困って肥料にした時代が幾年か続いた。この頃は島間から西之の下西目までが沿岸磯辺で「イワシを」大鍋でゆで、磯辺での天日乾燥が夏の炎天下で続き、男は鉢巻とふんどし、女は和手拭を姉さんかぶりに腰巻一つで真つ黒で、人が瀬か動かなければ見分けがつかない様相であった。又、各部落別に塩小屋もあり、順番待ちで自家用塩の製造も昭和の初期迄続いた。

西海岸の松の木は、殆ど岩間から生えていたが、昭和の初期からあちこち立枯が目立ち、更に又台風の度毎に枯松が倒れ、林間が広くなる程立枯が多くなる。又、下木の広葉樹も高木の減少と共に風害を被り、必然的に背丈を下げた。追討ちを掛けたのが昭和の始めから西之の官造牧（西之表、平山官造という大地主の所有）で東京の島崎精太郎という資本家が始めた蒸気ボイラー製材事業で、原始林の松木と広葉樹を全面切り払い製材して都心へ出荷。跡地は全面当時流行の屋久杉苗を植え、一時的に八ゲ山と化した。又それに続き、下中の里沖の昔の馬乗「馬場」にも同じ大仕掛の製材所

が出来て真所の上部から郡原、夏田方面にかけ、保安林以外の松は悉く買い尽くされた。

松の木も仲間が少なくなれば淋しい様で、次々と枯木になり保安林まで飛火が始った。昭和二十年終戦で、国でも少しでも収入を、と営林署も枯木につけて、もう樹齢が来ることだと伐採を始めた。この事は西之浜の山を皮切りに、追って下中、郡原、夏田、松原、茎永以北、平山地区まで上草「生えている木」を売払い、耕地に適した場所は追い追いに売払い、食糧増産を勧めたのが昭和二十三年次からであった。

昔は水稻が晩期作で現在のようにならなくなれば町内水田は植付け不能や八月、九月の旱害で皆無状態が多かったので、旧藩時代に夫々必要の地区に限って水源涵養林として国有保安林とか県有保安林として、明治十年、地租改正時保安されたと聞く。又、西之地区は立石と砂坂に製塩用林として部落共有林に種子島島主より指定され、相当広域の広葉樹を与えられておっらしい。この様に、各々用にに応じて森林保有を定められていたが、前述の様な事情で殆ど伐採され尽くした。現状は、更にまた圃場整備等で耕地間の屋根木迄が皆無となった。「日高留哉さんの自筆原稿から」

原始林を開いた畑をコバという

原稿にも書いておいたように、南種子には直径が二メートルにもなるシイの大木やタブの大木が生えた原始林が残っていた。そして、昔はそこを伐り開いて畑にするということがあった。西之には部落の共有地や西野校区の共有地があつて、そこを伐りたい時には、区長などに相談をもちかけたもん

や。昔でいえば、庄屋に相談ということやな。部落のクリは全部防風林だから、どこでも伐るというわけにはいかん。中種子の一六番あたりには、かなり原始林が残っていたらしいけれどな。

原始林を伐り開いて作った畑を古い言葉でコバという。普通の人はアラキといっているが、アラキというのは、開墾した畑一般を指す言葉。うちのおやじはコバと言っていた。もっとも、おやじが大正一四年の一〇月に死んでからは、この言葉を聞くこともなくなった。

ここでは今の人の言うようにアラキウチということにするが、原始林を伐るアラキウチには、決まった時節というものはない。いつでもいい。

ノコギリやナタで木を倒すけれど、倒したい側にあらかじめ切れ目を入れておく。この切れ目をウケギリという。伐った木は、区有林なら区に納める。松は主に角材にしたし、炭が銭になったところは、少しは炭も焼いただろう。

焼畑の広さは何升蒔きという

共有地を開墾してアラキウチをする時など、どのくらいの畑を作りたいのか、区長に言わなければならぬ。その時、田んぼなら、何反何畝というのに、焼畑の場合は何升蒔きというた。これは、陸稲が基準になっていて、陸稲を蒔き付けるなら何升の種子がいるかで広さを表す方法。一升蒔きという、だいたい二畝に相当した。すでに耕して畑にした場所でも、何升蒔きという言い方をした。

開墾するのが難しい場所ほど、作物のときは良かった。一番すばらしいのは、シイ・タブの闊葉樹（かつようじゅ、照葉樹）の所。その次は松の所。竹の生えた所は下だな。ここは開墾した結果竹が生えたのじゃろうから、あまり地力がないわけだ。

大木を伐ったら枝を立てる

大木を伐る前には、その木にノコとヨキとナタを立てかけて、「キラシテタモーレ（伐らせて下さい）」と唱えてお願いしたものだ。大木を伐って倒したら、そのじき後に、枝をちよっと切って、倒した切り株に立てるものだったよ。

ヤマンカミ祭

山仕事をするひとは、旧暦の一月一六日、五月一六日、九月一六日、の年に三回は、ヤマンカミマツリ（山の神祭）というて、大きな宴会をしたもんや。一般の人も、旧暦の一六日には遠慮して山に入らんもんや。とくにヤマンカミ祭には山に行く人はおらんかったな。

四人の葬式をした人間や

わしは、もう妻子の四人の葬式をした人間や。その意味では、きわめて不幸やったな。この人は苦労しとらんからあんまりそいう事を知らんが。

長男が、昭和四〇年の九月に交通事故で死んでしもった。まだ三四歳やった。わしも、昭和四二年

には隠居生活に入った。ところが苦勞して子供たちを育ててくれた二番目の家内が、子供らが独立したために気がぬけたのか、昭和五年から病気になって、いろいろ手当をしたが、とうとう昭和五年一月五日には死んで、わしも一人の暮しになったわけや。

死んであの世に行けば

人間は死んだらどこへいって？人間はな、死んだら墓に行く。白骨になるばかりや。わしの考えは淡泊やと思う。きわめて薄情というかな。妙なじいやろなあ、妙なじいや、本当に。

死んであの世に行けば、先に行った人に会えるか会えんか。前の妻と後の妻の二人のばあちゃんがあの世で「あの腐れオンジヨが来れば」と考えておるじやろつとも想像するな。

あつちにもう早う行きたいと。でも使いが来んから仕方なかと、こりや。この前一二日に本家の所で転んで、今もおっぱいの横が痛い。腰も痛い。一年も二年も病院通いをするようなことがあつてはこりやいかんと思うがなあ。とはいつても自決をするわけにはいかんしなあ。こりや大きな恥やから。

コンクリートの屋根のついた墓を建ててあるが、見てきたか。地ならしからほとんど自分一人であった。今、三種類のブーゲンビリアが咲いているぞ。もう自分で戒名も作つて彫り込んである。「明大学院昭研日留居士」とつけた。その意味はな、「明治大正と勉強して、昭和で研鑽した日高留哉」という意味や。坊さんに聞いたら、これでかということじゃった。

人類学のもつとも重要な問題

あんたは、人類学をする人だから、ひとつ、今度くるまでの宿題をあげよつ。ここでは、死んだ人を寝かせる時は、北枕にして寝かせる。しかし、普通は南枕か東西かで、絶対に北枕にするということとはないんじや。このことの意味を勉強しなさい。人類学のもつとも重要な問題だ。わかつたか。

今の人は人間が汚かよ

人と話す時は、しっかり相手の目を見て話をせんといかん。そうでなくて目のきよるきよるする人は精神が統一されずに話しとる。こんなことは初めて聞いたか。まっすぐおれの目を見るやつでなけりや、相手せんと。

それは、まったくフランス人みたいですね。目を見ないで話すと失礼になる、というのは。ははあ、そつか、それがあたりまえじゃ。本当にまごころを込めて対等に話をつける、という姿勢じゃ。

人間というものは信念が通つたらんといかん。今の人は人間が汚かよ。例えばリクルート事件ひとつみてもな。やかましいオンジヨやと思うやろ。わしは、もともとやかましいんじや。

ゲートボールばかりしておるじやないか

明治四〇年ころまでは、衆議院選挙権をもっている西之の人は数人だけやつた。ところが、荃永、

平山、下中には国税を一〇円以上納める有権者が多かった。

わしの父親は、七年間、一三里離れた西之表で奉公をして、それでまあ、コネをつけて、西之表の地主が南種子にもつておる土地を小作させてもらえるようになった。母親も三年間西之表で奉公をした。

わしが学校を出るか出んかという時分には、平野もカライモばかり食べていた。それで、カライモゴローと悪口を言われたり、西之村のカライモクラー（さつま芋喰い）に嫁やらん、などといわれたもんや。

ここらには、松田節という歌がある。「トノジヨ（夫）もつならツケグチ（受け口）もたれ、粟の御膳もこぼしゃせぬ」と歌うけれど、それは、米の飯が喰える境遇でない、ということだったもんよ。しかし、頭脳ではこっちが上だった。しだいに、西之表の地主の土地を精農家は買えるようになってきた。西之表の土族の連中が、金が必要になって土地を手放す時代がきたから。

平野には、精農家が多い。昔、優秀だった村では、子供に書生ばかりさせて（上の学校に行かせて）、今では老人しか残らんようになってしまった。そして、ゲートボールばかりしてあるじゃないか。

このままでは日本国は滅亡じゃ

若い人を見てお考えになることはなんでしょうが。

うーん。このままでは、日本国は滅亡じゃ。戦前のような軍閥の復活ということとは絶対にいかんが、日本国の伝統というか、「やまとだましい」を忘れておる。学校教育もしかり。働くな、走れ、跳べ、というばかりで、人間としての独立性を育てるということがない。今の高校生あたり、なんの苦勞をする必要もない。

留哉じいちゃんからの手紙

留哉じいちゃんのお話も原稿もまだまだ続きがあるのですが、それはまたのお楽しみということにしましょう。ここでは、生前にいただいたお手紙で、日高留哉おじいちゃんのお元氣だった様子を伝えて終わっておきたいと思います。留哉じいちゃん、ありがとう。

一九九二年二月十九日

安溪一家様

今日昼 写真が届きました。有難ふ。

とめやぢー

年暮 お出の事を思い出して あの時は 又一人の息子一家が出来たと子供等に話しております。是で子供が計十一人で 孫が二十五人 ヒ孫が五人 計留哉の家族四十一人の大家族が出来た。八十才乍ら楽しい限りです。今日は今年中最も冷え込みコタツに入って過ごして お安心下さい。

「原文のまま」

これは、いわゆる「縄文杉」を発見したことで著名な、屋久島の伝承者・岩川貞次（いわがわ・ていじ）さんにかがったお話の聞き書きです。岩川さんは、語り部ということばがびつたりくるようなみごとなお話を短い間にたくさんしてくださいました。そのために、お話の一部を録音したテープを聞いてみても、私（遊地）はほとんど「はあ」と「なるほど」と交互に言っているだけのような感じでした。宮之浦港から上陸したばかりの私に、まず岩川さんに会うことを勧めてくださいしたのは、当時、上屋久町立歴史民俗資料館に勤めておられた長井三郎さんでした。お話は、一九八五年三月二日に上屋久町宮之浦の岩川さんのご自宅で行われました。

長井さんもおっしゃっていたことですが、岩川貞次さんの話し方の特徴は、一見遠いところから始まって、だんだんまわってきて、実はそれが質問に関連する答の一部だったのだ、としばらくしてからわかる、というところにあります。「ひとつこの話をしてみましようか？」と尋ねられ、語り始められる様子は、まるでフロツピイに記憶させた文書をずんずん読みだしていくような不思議な迫力がありました。

なお、ここで岩川さんが語られている数字（例えば縄文杉の年齢、カツオ漁などの開始時期、年貢としての平木の数など）については、別の意見もあることと思います。数字は、岩川さんの実感を示すものですから、この聞き書きでは、あえて異論をさしはさむことを控えています。

お父さんの影響で昔の話が大好きになりました

こんにちは。私は長井三郎さんに紹介されて、おうかがいしたんですが、山口の方の大学で古くから伝わる世界の習俗とか方言とかを勉強したり教えたりしています。ひとつ、この屋久島のそういうお話を教えていただけませんか。

私は、今年で八一歳になりましたよ。二年前に病気をして、少し体が動きにくくなりましたが、今でも、昔のというか、歴史の話をするのが好きなんです。そのわけは、といいますと、小さいころ、うちのお父さんは昔話なんかをよくしてくれまして、その話と島の地名が一致するので興味をもって覚えようとしたんです。

高等小学校を出てからは、当時の役場の小使いをしていました。一八歳の時に大阪へ出ました。兵隊検査の時に屋久島に戻ってきて、その結果は第二乙で行かんで済んで助かったんです。その翌年、大阪で警察の仕事に入りました。大阪では代用食ばかり食わされて、たまに勤労奉仕で稲刈りに行くのと、米の飯が出ます。「羽二重飯（はぶたえめし）や！羽二重飯や！」といって喜んだもんでした。

それから、二年ばっかし鹿児島におったこともあったんですが、終戦後は島に帰り、役場に入って觀光を担当したんですよ。それからの勉強が大きいんです。こっちは漢字にうといんですよ。明治の初期に島に学校作ったころには、みんな文盲であったのに、私はどういわけか、漢文をちよつと

やって文書なんかを調べむこうた（始めた）ところが興味をもつようになったんです。

一九九年前に年齢がきたので六二歳で役場を辞めたんです。

屋久島の島の男衆は二〇日は山へ五日は海へ

屋久島の生活を示すこんな古い民謡が記録に残っています。

「屋久島の島の男衆は、二〇日は山へ、五日は海へ、残る五日が我が家にて」

これは、何という民謡ですか。

これを今歌う人はほとんどないですよ。記録の上にあるだけで。この歌は、マツバンドともにならぶ屋久島の山歌ですよ。

結帳と香典帳はこの家にもあったもんです

昔は家々に必ず結帳（ゆいちょう）という帳面があったんです。これは、どういつ結いをやったかを克明に書いておくものです。

どの地方にもありますけれど、ユイ（結い）というものがありますね。例えば、今日は、労力を集めて、今日はうちの家のサトウキビの刈り取りだとか、また一〇日ばかり先には今度はタロペーのうちのキビ植えというような、ユイ制度ですね。

もつひとつ大切なのは、香典（コウテン）帳でした。これには、やった香典ともらった香典をちゃ

んと書いておきます。出る方と入る方を記録するのです。

どんな貧乏な家でも、この結帳と香典帳の二冊だけは世襲で保存して、たんすの中に入れておったもんです。私の家にもあったのですが、これは残念なことに火事で焼いてしまいました。今もっている家はほとんどありません。

どうして、結帳が必要だったかという点、屋久杉の平木で葺いた屋根は非常に長もちするからです。

例えば、家の屋根がくさったので直したいというとき、どうしたらいいか、誰に頼んだらいいかわかるのです。今から五〇年ほど前の何年何月、誰その要請で誰と誰が一週間山に入って平木とりをした、などと書いてあるのですから。それによって、誰それに頼もうということが出てくるのです。

子守歌に聞く宮之浦方言

宮之浦ではこんな方言の子守り歌をつたいました。（歌う）

ンドガ テツチャ ナンダ ヨー おれ達の父さんなどは

カゴシマ イタテ 鹿兒島へ行って

モドリヤ キンノ ヘンジョー 戻れば絹の晴れ着を

コーテ ワシャル 買っていらしゃる

ヨイヨカヨー ヨイヨカヨー

上等の着物を方言ではベンジヨといいます。これは別誂（べっちよう）、つまり特別あつらえという意味だと思えます。

正月、子供たちはイワイザイモンを唱えて小遣いをかせぎました

昔は若正月いいましてね、旧正月の一五日にもう一度正月があつたんですよ。女正月ともいうて。その前の一四日の晩にはイワイザイモンというめでたい文句をいいながら、子ども達が門づけをしてまわります。これは、今は、一月七日の魔よけの鬼火焚きの晩にするように変りました、子どもたちが、「祝つてよろしいですか」ときいて、「祝つて下さい」という返事がもらえるとなつた。子ども達がい言葉をとなえます。すると、子供たちは、今なら五〇〇円ぐらいもらえます。それを集めて、子供たちは何かしよるらしいですが。

祝つて 申す

恒例（こうれい）の門松 いつもより今年は 木戸の松が栄えた

栄えたも ドーヨー（道理よ）

東の方の枝には 飛魚が下がって

西の方の枝には 鶯がとまって

鶯が前に 生（お）えたる稲を

ひとつと刈れば 千石 ふたもと刈れば 二千石

そなたの宿を見上げてみれば

米の俵は一千石 籾の俵は二千石

祝つて もーす

大人の、昔の青年団の連中は網元や船元をまわります。これは、一般の子供はまわれません。網元では、先程のものを唱えておいて、さらに次のようにいいます。

恒例の お庭に イガワ（井戸）が 掘れて

水は 湧かねど 泉の 酒が 湧きそつろつ

白銀瓶（しらかねびん）に 黄金（こがね）のひしゃく

汲んでも 汲んでも 尽きはせぬ

祝つて もーす

屋久島で井戸を掘るといふのは、地下水が深いので大変だったのです。

船元では、七福神の宝船をかたどつて祝います。琴の糸は綱でできているので、帆の縄を琴の糸に

例えています。

恒例の 大船に 白銀柱（しらかねばしら） 押したてて

本帆にや 綾錦 てなわみなわー（手縄・御縄は） 琴の糸

宝を 一隻 積み込んで 宝が島に うち向けて

思う港に そよそよと

祝うて もーす

青年団は大人ですから、こうして祝ってもらえば、二千元とか三千元とかはあげないといけません。

春一番が吹くと「良か上りん風の！」と言います

私は、伝統的なことからの中でも、島を越えた交流とか、物の交易とか、物々交換といったことに興味をもっているんですが、屋久島にも物々交換ということはあったものでしょうか。

そうですね。春一番が吹くと、その風で北前船が北海道に向かいます。その時分には、屋久島では「良か上りん風の！」と言いますよ。そして、下りの風は、一〇月から三月いっぱい吹きます。それに乗って北海道からコンブを積んだイサバという、一五〇トンくらいある三本柱の帆船が、沖縄に向かいます。南北に貿易をする船は、私が一〇歳ころまで屋久島で見掛けました。こういう貿易をタテ

ネと言いますが、値を立てるといいう意味でしょう。この話は、私が一八歳の年に亡くなった、山口末吉（別名は嘉平）というおじいさんに聞いた話です。

また、私の家の隣のじいさんが、琉球へちよくちよくいったと言っていました。

こういう遠い所との貿易の流れをくんで屋久島の貿易も始まったのです。

物をもっていれば金をもっているのと同じでした

明治になって通貨を使う割合が激しくなってきました。それまでは、タテネという藩が指定した物品の交換が主であったことは、今お話したとおりです。種子島の人が、米をもって宮之浦へ来たということもあります。目当ては、サバダテというサバで作った骨粉でした。サバの頭とはらわたで作る塩辛も、古くから交易されたと思います。

サバダテが欲しい種子島の人、一〇俵も米をくれる約束していましたよ。でも、交換の目当ての物ができあがるのに時間がかかることはありません。

これは余談ですが、昔の昼飯といえば、さつま芋と塩辛でした。カツオの塩辛はサバのよりもうんと上等です。飛魚のはやや落ちるんです。

種子島のお米の味は、鹿児島より落ちました。私が一歳のころ、普通の米が一升一〇銭なのに、種子島の米は一升七銭でした。「これは米じゃなかる」といって種子島の人に叱られたことがあります。物々交換の時代は、物をもっていれば金をもっているのと同じでした。それに物交時代はみん

な親切でしたね。

イサバという船には二〇万斤も積んだものです

役場の小使いをしていたころ、宮之浦に二隻のイサバが入りした。それで、楠川のナガトモチヨスケという老人に「権現丸という船はどれだけのトン数があつたものですか？」と聞いてみました。そうしたら二つ返事で「あれは、二〇万斤積み」という返事でした。つまり一五〇トンぐらいということになるんじゃないですか。(注、一斤は六〇〇グラムですから、二〇万斤は、一二〇トンに相当します。)

隣のじいさんは山川から二時間で宮之浦まで着いたことがあります

この船は帆をかけて走ったら早かつたですよ。うちの隣のじいさんは、山川から二時間で宮之浦まで着いたことがあります。鹿児島からでも三時間ぐらいで来たということになりやしませんか。今の汽船なんかかなわん、といいよつたですよ。船がドターツと傾くほどにして帆のテナワ・ミナワを絞め込んで走らせるのです。ミナワで帆を巻き上げて、帆の下には手縄というのがありますから、その締め方ゆるめ方によつて帆にあたる風を調節したのです。そういうふうに傾けてやらんとかえつて危ないそうです。隣のじいさんは、「良か上り風や(または、良か下りん風や)、ホレ出さんジ」といつてよくよく風を見て船を出していました。また、その風でなければイサバという船は動かせるものではなかつたのです。

方言で滑車のことをセービと言います

イサバという船には、三本の帆があります。下の方はひと抱えもあるような太い帆柱です。へさきの小さい帆をヤホと言います。真ん中の中ぐらいの大きさの帆をナカボと言います。ともの大きい帆がホンボです。この本帆の滑車は、一トンあまりの屋久杉の、神社の門柱なんかを揚げることできるものでしたから大きかつたですよ。

滑車の方言はありませんか。

あります。方言で滑車のことをセービと言います。屋久島の人は、蟬のことをセービと言います。今でもそういいいます。今は、こまい(小さい)帆かけ舟しかないけどな。滑車の材料は昔は桑の木です。桑の木には雷が来んもんじゃというひとつの迷信があるわけ。……たぶん迷信だろうと思ひます

帆は何でつくつたんですか。

帆は綿布です。ムシロでつくつたムシロ帆もあつたんですよ。綿布が破れた時などは、ムシロ帆を湿らせておいて助けにする場合も一部にはありました。一五人乗りのカツオ船は、カマス帆(注、ムシロ帆と同じか)でした。帆を上下する縄をミナワといいいます。帆の方角を変える手にもつ縄はテナワです。

イサバの柁は大きくて、ハメートルもあるカシの棒が付いていました。昔は、各港でイサバを作っていました。私が見たのは、楠川の船でした。

独木舟は川渡し舟として三、四隻が動いていました

独木舟（まるきぶね）は、種子島では、ヤクタネゴヨウ（松）で作りましたが、こっちの人は、この木が手近になくなったので最近はずぶでつくっていました。私らが一〇歳くらいまででしたね、独木舟を作ったのは。川渡し舟として、三、四隻が動いていました。

とびきり美味しいこの水を粗末にすると水害が起きたりするわけですよ

どうも、ありがとございました。今度は少し屋久島の昔からの農業のやり方のおつかがいできますか。

はい、元来、屋久島は農業が余り盛んではありません。雨が多すぎんですよ。雨が多ければ水があつていいじゃないか、つていうけども、土質が悪いんです。宮之浦岳からここの下まで岩が一枚岩で、その岩が門柱やか墓石なんかになるような岩じゃないんです。それで、柔らかいんですよ。道路をこしらえて、発破をかけるために穴をほるといって、他の所の三倍穴が早う空くということです。風化が激しゅうて、今でも行ってみるとわかるんですが、安房から屋久杉ランドまで登ると、左側に一枚の岩がつながっていますよ。ところが、これは岩が風化して、砂になるんですよ。その風化した砂を

雨がぐくつてくるから水はとびきり美味しいということになるんです。どこの谷川の水を飲んでも大丈夫です。ちょっと一キロも上に登ったら人家がないですから、飲料水に困るようなことは絶対ないんです。その水を粗末にするといつと、水害が起きたりするわけですよ。

屋久島は、谷が深いのです。何千年、何万年の間、水が流れるあいだには、深くなるんです。その水の上に揚げるには非常に金がかかるから農業はふるいません。それで、今から五〇〇年前の文明元年から山に入って仕事をするようになりました。農業するよりは、その方がいい、ということでしたんです。

里芋をチヨンボというわけは

唐突ですが、イモのつくりはじめということに興味をもっているんですけど、例えば里芋のことを屋久島ではなんといっていますか。

里芋の仲間には、タイモ、ミズイモ、ミガシキ、ハスイモなどがあります。

九州にあるツルノコという種類はありませんか。これは、沖縄ではチンヌク、西表島ではキヌクウムと言っているものと名前は関係があるんですけど。

いや、ツルノコという里芋はありませんね。

屋久島の方言で里芋のことをチヨンボと言います。古老に聞いた話では、昔インドへ行った船が、上りの風に乗って上ってきたら、浸水はする、のどは乾くので七島灘で水をとりうとしたそうです。

諏訪之瀬島で水を補給したと言われています。

さて、そのとき船の飯炊きが、ホロイモ（きぬかつぎ）を皮のまま食べているのをみて、島の人が貰って食べてみたらこれがとても美味しかった。何というものかと尋ねたら、「チョンボの港からもってきた」と答えたそうです。それで、里芋のことをチョンボというようになったそうです。チョンボという地名がどこかインドかビルマあたりにないものでしょうかね。

あれほどいた飛魚が今はさっぱりいないのですから……

屋久島の鯉節は八〇〇年前から始まります。飛魚（トツビヨ）は、捕り始めて六、七〇〇年になっているでしょう。サバ漁の歴史はまだ二四〇年から五〇年にしかありません。

南方で生まれた一尺ほどのカツオが、二カ月ほどかかって次々に上がってきます。屋久島から一カ月遅れで土佐に行く頃には、成長して二尺余りになります。土佐のカツオは、鯉節にするには、脂が強くてあぶら節になってしまい、あまりよくありません。鯉節にするには屋久節がいいといわれています。水もいので、質のいい節ができるのですよ。この鯉節を全国にある問屋筋を利用して出すようになったのが屋久島の貿易の始まりというわけです。屋久島の各部落にはトイヤ（問屋）というのがあるてカツオ節を集めていました。

屋久島は、日本一カツオ漁がさかな所で、カツオ捕りの前進基地になっていました。土佐からも一湊の港に船が来ていましたよ。屋久島の漁師は一五人乗りで一七、八トンのカツオ船に乗って七島灘をかけずりまわりました。ところが、発動機船ができて、前進基地が枕崎の山川に後退したわけです。それで、屋久島の漁業はさびれてしまったのです。飛魚は、五人で組んで五千匹も捕ることがありました。ひとりあたり千匹も腐らせないよう早く加工しなければなりません。魚を切りながら居眠りをして、手を切った人もありましたよ。あれほどいた飛魚が今はさっぱりいないのですから……。

地の者が言うことを尊重しなければ成功するはずがありません

屋久島の昔の家は、五寸角の柱でした。明治になって木を勝手に採れないということになって、柱は細くなりました。屋久島の山は、明治始めまでは島人のものだったのです。それを地租を払えないからと取り上げて国有林にしたのです。そのあとは、見てごらん下さい、国は屋久杉を皆伐してもうほとんど切りつくしてしまいました。

昔の人は、皆伐しないで抜き木をしたのです。一〇本あればそのうち一本か二本を伐るのです。そうして空間があれば、日光がさしこんで、そこから子どもがいっぱい出てきます。密林の中には小さいの是一本も生えていないのに……。これを一〇本とも伐れば水害をひきおこします。昔の人は、屋久杉を永久に絶やさないようにうまくい政策をとりました。地質にあわせて利用法も変えていました。

ところが国有林になって皆伐したので水害も起きました。あの昭和五四（一九七九）年の永田（土面川どめんがわ）の大水害につながりました。地の者の言うことを尊重しなければなにことも成功するわけがありません。

岩の上で難儀した木は小さくても千年たっているのがあります

屋久杉のお話をうかがえますか。

だいたい、八〇〇年から千二、三〇〇年たって太さ（直径）が一・八メートルぐらいになったものだけを屋久杉といえます。それより若いのは「小杉」です。もっとも岩の上で難儀した木は、人が抱えてみて小さくても千年たっているのがあります。逆に、コエチ（肥え地）では、同じ年でその倍も大きくなっているものもあります。三千年以上たったものは、天眼鏡でも年輪が見えませんが、四本の木の太さと年輪を調べて、同心円型の物差を作っております。物差と実際の年輪とのずれは、プラスマイナス六〇パーセントぐらいの範囲にだいたい収まります。

「縄文杉」は七年前から見当をつけておったんです

私が、「縄文杉」を発見したのは、昭和四一（一九六六）年五月二八日の午前一〇時ごろでした。私は形が大きな岩のように見えたので、「大岩杉」とつけてみましたが、新聞に大きく出たときはいつの間にか「縄文杉」になっていたので驚きました。

実は、一三人でひと抱えするような太い屋久杉があるという、こういう言い伝えがあったのです。それで、あのあたりに必ずあるはずだと実際に見つける七年前から見当をつけてずっと探していたんです。この杉は見る距離によって太さが違ってみえますが、周りは三味線のバチのように広がった所の上で一六・一メートルあります。一二人とすこしで抱えられます。

天正一四（一五八四）年の「屋久島掟条々（おきてじょうじょう）」にはオトメヤマ（御止山）、オタテヤマ（御立山）ということが出てきます。お殿様が接収した、木を切ってはならない山という意味ですが、これが推定でおよそ七千町歩あったと言われています。地元ではこういう山のことをハッジョーヤマとよんでいます。そして、そこに行けば一三人で抱える杉があるということを感じました。私が言うておるのを、私は小さい時分に聞いておったことがあったのです。昔の人のいうことについてわりはないんだ、必ずあるはずだということを探しておったんです。

この杉を、丸く年輪を書いてつくった物差をあてはめてみると、七二〇年と出るので、縄文時代に生まれた木だということで、「縄文杉」と名付けたわけです。しかし、二千年を越えた杉は、みな中がウト（うろ）になるので、実際の年齢を調べることは難しいんですよ。

これは、なんとも知れんところにはひょこつとあつたんです。それも、心にとめておいたからこそ出会ったので、心にとめていなかったら、判らんかっただろうと思います。同じ木でも一〇間のところから見るのと、一五間のところから見るのでは、全然違う太さに見えるんですから。見たところですぐ、巻尺をもって廻してみなくっちゃわかりません。それと、谷はないかを見ました。谷があると、杉の木は遠いところから根を伸ばして水を吸います。「杉はかすみを吸って生きる」という言葉が現在、秋田方面にあるんです。それは、杉がかすみというよりも水分を要求するということです。

今は、杉の木の皮はなかなかはげません。もうそろそろ、あと一週間か一〇日すると、皮を剥くと

水がピユウツと走りますよ。水をどんどん吸っているのです。極端な人に言わせると、ザアザア水の揚がる音がするというのですが、私はそれは信じません。やってみるけれど、私が耳が遠いのかどうか知らんけど聞こえたことがないからです。

樹脂が多くて腐らないから屋久杉の平木は高く売れたんです

屋久杉は建築材にはなんののですよ。千年ほどたった杉の木でホゾを組んでも、ホゾをかませてカント叩くとサーツと裂けてしまふんです。ですけれど、天井板や八分板の一枚戸などのすばらしい造作材になるんですね。それで京都あたりに屋久杉が出て行った、というわけです。

明治時代までは、屋久島の家は皆ヒラギ（平木）で屋根を葺いたものでした。私の小さい時に、瓦があつたのは神社仏閣だけでした。しかし、釘を使わずに屋久杉の平木で葺いた屋根の方が上等なのですから、神や仏はかえって粗末にされた、と裏返して言えば言えるでしょうね。どんな分限者でも平木で屋根を葺く時は釘付けしません。釘付けすれば平木が割れるのです。上にはなるべく断面が三角をした、長さ五尺の押さえ木を置いてその上に石を乗せます。

平木というのは、長さが一尺八寸、幅は五寸、厚さ一分五厘から二分くらいの板です。これを軒先から三寸ずつ出して並べていきます。いまと違って釘はつかいません。そうすると、一番重なるところでは、六枚の平木が重なることになります。屋久杉と呼ばれる千年以上たった木は、八から八・五パーセントまで樹脂ですから肥え松と同じことです。樹脂が多くて腐らないから、屋久杉の平木は高

く売れたんです。それに対して、小杉といわれる、例えば一〇〇年ぐらい以下の杉で平木を作って屋根を葺いても雨に当たる部分は五年すりゃあ腐ります。これは、私が大阪から屋久島に引き揚げてきて一〇〇年生の杉の平木で屋根を葺いてみて実際に経験したことです。

ところが、屋久杉ならその雨にあたる三寸の部分が腐るのに三五年から四〇年は充分かかりますから、高く売れるわけ。昔は人生五〇年といいましたが、一代のうちに二度あたることもありましようけれども、普通は一代に一回葺きかえれば足りたのです。三寸は腐っても、今度葺きかえるときは、五枚重ねにすればまた三五年は使えます。それで、屋久島では瓦というものは必要ありませんでした。

神社仏閣などを平木でなく、瓦で葺いたりしていました。屋久杉の平木で葺かなければ、かえって神様や仏様を粗末にしていることになると思っていました。

男子一五歳以上の年貢は平木でした

江戸時代、屋久島に在番所（ざいばんしょ）がおかれていて、ここに屋久島奉行がいました。そして、男子一五歳以上は、平木一〇〇枚一束のものを三〇把を上納せねばならないという掟だったので、これが年貢と決まっていたんです。

宮之浦に屋久島の在番所という役所があつて、ここに屋久島奉行があつて、第一官倉、第二官倉とあって倉庫が二つ三つありました。第一官倉には、飢饉米と称する米を鹿児島からもつてきて詰めてありました。これは、平木三〇把を上納したうえで、さらに平木の生産をあげることを奨励するため

にやったことでした。ここでは平木一五束と米三斗が交換されていたようです。それだけでなく『屋久島規模帳』という古文書には、物品の交換リストが載っています。

「この木にのぼれーっ」と倒した大木の魂に呼びかけるのです

千年から千五〇〇年たった屋久杉でも今はチェーンソーで四、五〇分で倒します。昔は、直径二メートルとか二メートル六〇センチとかある木を倒すためには、八〇歳にもなる杣頭（そまがしら）から飯炊き役の一五歳の男の子まで、全部で七人とか九人組みとかの男がかかって、一週間以上かかったものです。

たとえ一五歳でも平木を分配する時は平等に与えるのです。それで初めての少年でも三〇束の平木の上納ができたのです。平等に出しおつて、平等に分配するんです。

屋久島の百姓とは名のみの百姓であつて、どこの家でも百姓には必要のない屋号があつたんです。山帳というのが今でも永田あたりに残っています。一般の人は字が読めないもんですから、二重丸、ヤマチョン、三角チョン、カネチョン、カネ銀というようなものが通用していました。これはみんな山で使う時に必要だったものを村でも使つておつたのです。ヤマチョンあたりは分限者として通つていました。

話は変わりますが、尾根の杉は背が低くて、三〇〜三五メートル位しかありません。谷間の杉は背が高くて、例えば小杉谷には、四、五〇メートルあるのも多かつたですよ。

まず、伐る木を決めます。伐る木が決まったら、この木をどう倒すかを考えます。枝を見て、枝が多い方を切つて落としてやると、木は反対側に傾きます。やぐらを組んで高さ三メートルほどの所で伐ります。枝を落としたのと反対側に切り込みを入れて、最後に枝を落とした側を切つて倒します。明日は倒すというときは、飯炊きの少年が立役者になります。

この一五歳の少年に、川べりに生えているユズリハの枝を三本切つてこさせます。採ってきたら、ミカンの接ぎ木のように枝を平たく削つておきます。あすは倒れるという日には、米と塩と魚の塩物とこのユズリハの枝をちゃんと準備しておくのです。

いよいよ倒れるぞということになりますと、ピシピシピシッと音がしはじめます。「行くぞーっ！」と叫ぶと「バリバリバリッ」という大音響をたてて木が倒れます。これが倒れたあと、ユズリハをもつた少年は、パツと切り株の上に登つて皮と幹の間に枝を差し込んで、「この木にのぼれーっ」と叫びます。そのあと、前日から準備しておいた米と塩と魚を捧げて祈ります。

これは、大木の魂に呼びかけるのです。魂が空間に迷わないようにやるのです。わしらの小さい時分まではやっていました。

山で寝る時は「今宵一夜の宿を貸してください」と土地を借ります

大杉を探してあるいていたとき、人夫二人を連れて行きました。ところが、私が知らんうちにこの人夫が道にテントを張つたのです。絶対に道に張るもんじゃありません。これは、神様が通られる所

を邪魔する事ですからとんでもないことです。まあ、言い伝えがあるわけよ。それを信ずるものやから、私は、横抱きに抱いてこの二人をテントから外に投げましたがね、その晩、私は夢の中で驚いて飛上がったですよ。人夫たちも知らんからこういついことをするのですね。

屋久島の山に行って今夜はここで野宿するといふ時は、山の「土地カイ(借り)」といふことをしなければなりません。決してそのまま寝ることはできません。弁当をとっておいて、飯とサバか飛魚の塩をしたものを、人の足の当たらないところに置いて、「今宵一夜の宿を貸してください」と願います。これが、宿を借りる代償です。必ず塩の入ったものを捧げるのは、清めるという意味だと聞いています。

先にお話しした、道の真ん中にテントを張ろうとした人夫といっしょだった時は、これをやらんでひどい目にあつたことがあります。夕暮れ、山の中ではガツガツと段がついて暗くなります。そして、下の谷から水のせせらぎの音の中に、私の名前をいれたように感じるんですよ。シャシャシヤシャシヤシヤ、シャシャシヤシヤシヤ、という音の中に自分を呼んでいるような声がしだいに大きく大きく聞こえてくるように思われてきます。信じておるもんじゃから。こうなるととても寝られるものではありません。それを「この木からこの間を今宵一夜の宿を貸してください」とかしわ手を打つてお願いすれば、それがひとつもないんです。信仰からですがなあ、不思議になんともないんです。

いったい誰から土地を「借りる」のでしょうか。

それは、地神、荒神、水神からです。それらの神様をはじめとして大自然の恩恵に対する、あらゆる大自然に対する信仰心なんだと思います。

神とはなんぞや。大自然である。太陽の熱である。だからいまだに東に向かってかしわ手を打つじやないですか。水があつて生きられる。だから、それらを神様として拜むわけです。その信仰が屋久島の人にはあるわけ。そういうものが発現して、あるいはあなたの尋ねられたチョンボ(里芋)となつてあらわれてくるわけ。

はあ、チョンボもねえ……。それじゃあ、サバもそうなんですか？

ええ、サバももちろんそうなんです。

サバでもなんでもいいんです。そして、もしそのサバが塩物ならば、もうお話ししたように、これはもつと重大な意味をもつことになるんです。

海の神様にはなにかあげないんですか。

海の神様はエビス様。エビス様には、塩物、酒つまり焼酎、また赤飯をもつてエビス祭をします。

また、飛魚がもつくるぞあ、というときは、招き祭をしました。

山で餌切れすると動けんようになりますよ

山の上の空気の薄い所では、すぐにエギレ(餌切れ)します。ああ、腹が減つたと思うたらもう間もないですよ。動けんようになりますよ。それで、山に登る人は、だから、必ず黒砂糖や氷砂糖をも

って歩くものです。餌切れしたら、砂糖ひとかたまりを山に水はいくらもありますから、その水で飲み込むとピターツとなおります。これは、人間の生理ですけどね、そこまで信仰に結び付けて山の掟をこしらえとるんです。

また、山に行く時の弁当は、全部食べてはいけません。カップリという曲げ物の弁当箱に五合の飯を炊いてつめて、その上にサバの焼いたのを一匹乗せます。

山に行く時はな、飛魚でも、サバでもええから、塩サバを、塩トビの干し上げたやつを必ず持って行くもんです。いまはそんなことは頓着はないです。ということとは、土地を借りにやならんのです。一夜の宿を。それには、「借りる」という名前がつくからには、代償がないといかんです。それで、山に行く時は、カップリちゆうてな、蓋が全部かぶるような容れ物に、飯を一升なら一升、五合なら五合炊いてつめて、晚には戻ってくるのであっても、いっぱいにつめます。

その蓋を取ったら、サバなり飛魚なり、一匹なりに焼いたやつをそばろにして御飯の上のせて、向こうの方を、それを最低一割は食べないで蓋の方に残しておきます。道に迷った時には、これがないと困るからです。どんなに空腹でも非常の時のために残すのです。うちへもって戻って捨てるとも。それで命を助けられた経験がいくらでもあるわけなんです。

人を埋葬する時は「土地カイ（借り）」をしないとイケません

屋久島では穴を掘って土葬します。四、五年前まで、いや二、三年前まで「墓の土地を借りにゆく」ということをしていました。その時は、四人でいきます。五人でもだめ、三人でもだめです。四人と決まっています。

墓地に着いたら井戸のように八尺掘って、縦棺はそのまま、横棺は寝かせて収めます。その時に塩と米とゼニ六文銭とおみき（焼酎）を一緒に穴に入れます。今は、六文銭がありませんから、仕方がないので紙に書いた六文銭を入れています。そして「永久にお守りください」と願います。これも、山で一夜の宿を願う時と同じように、土地を借りようという思想だと、私は思います。

ここは、ようやく、去年火葬炉とお墓の整備が二年がかりで終わったところですから、もうそういうことはありません。

お話を聞き終えて

岩川貞次さんは、一九八七年に老衰のため安らかに亡くなられたということでした。つつしんで冥福をお祈り申し上げます。このお話をお聞きした当時（一九八五年）の私には、話者自身が迷信だと言いながらも内心深く信じておられた心意の世界を理解することができなかったことに思いあたります。ですから、何事にもそれをなすべき時が熟することがあるのだということは今実感しています。

岩川さんの「大自然が神である」というメッセージ。いまの日本にはこのような意識を強くもった人々の住むいくつかの島と、その意識がわりあい希薄になってしまったたたくさんの島々があるようです。

ふところ深い自然の恵みに生かされ、大いなる自然の前におそれつつしみながらその恵みを生かして、ながいあいだ共存を果たしてきた人びとがいます。その自然観・宇宙観には、いま「いのちの危機」の時代を生きているわれわれすべてに直接に訴えかけてくる強い力がこもっているのではないのでしょうか。

心の深い所をたずねれば 屋久町原・日高光志さん

いろいろな方のご配慮でアオモジやタブの花咲く三月に、屋久島の南側の屋久町に一週間ばかり滞在することができました。屋久町は気候や植生から見て奄美以南の島々に近い点が多いことをあらためて実感しました。役場の上村舜一郎さんに紹介していただいて、もと屋久町の助役をしておられた原（はるお）集落の日高光志（ひだか・みつし）さんにお話をうかがう機会に恵まれました。一九九七年三月七日の夜おたずねして、一〇日にはお話を補足していただきました。日高さんの、自然に密着した暮らしと思索の中からおふれ出る話題の泉の密度の濃さに圧倒されます。じゃがいもやおいしいタンカンなど、持ち切れないほどのお土産をいただいたいへん恐縮した次第です。ありがとうございました。

あいさつの仕方を習う

こんにちは、まあ、上がって下さい。屋久島では人の家を訪れたらまず、神様の前に座って挨拶をします。それから、線香を一本あげて仏様を拝みます。それがすんでからはじめて、机の所に座って、家の主人にあいさつをするんです。しきたり通りには、そういう順番です。

神棚には船魂様も祀る

旧の一日十五日には花を替えて神様を拝む昔からの習慣が続いています。

この神様の所には、船魂様も祀っております。船は、一トン半の小さい船ですが、船にも船魂様を載せています。うちのおやじなんかは、船魂様にタツノオトシゴを祀っていました。昭和の始めごろはおつたけれど、最近はある見掛けなくなったなあ。それから、トカゲ。トカゲには白いトカゲと青い海の色のトカゲがあって、青いトカゲでしっぽが二又に変形したものを神様に祀ると漁がいいと言います。

そのほか、正月の若水を汲む時は、塩と米で清めて「あらたまの年の始めに黄金のひしゃくで水を汲まずに福を汲む福を汲む」とくりかえし三回唱えて水を汲みます。

それでは、何でもあなたがたの尋ねたいことを聞いてください。

なぜ、いま自然との付き合い方を問うのか

私どもは、アフリカのザイル(コンゴ民主)共和国の森の中の村に二年間ほど暮らしました。その経験でいえば、ゴミが出ない暮らしです。魚をさばけば、ウロコや内臓をアヒルがくわえていくし、自然にもどらない粗大ゴミなんかありません。そしてランプに灯油を一週間に湯飲み茶碗一杯使う人は多い方で、それ以外はすべて薪などの自然の循環の中のエネルギー利用でした。もの豊かではないけれど、それが不幸かというと、実に笑顔がすばらしい……。

そうです、そうです。昔は中国もそうだったそうですよ。

また、沖繩の西表島にも合計二年ほどおりまして、それから他の島々もまわって、農業の始まりとか、自然とのつき合い方とか、いろいろと勉強してきました。そうすると、日本にも自然を神と想って生きてきた智慧はあったし、必ずしもアフリカまで行かなくても、今でも日本で学べるんだということを思うわけです。

私どもの生活もそうだったよ、五〇年前までは。

私(貴子)は、非常勤で生態学を教えているんですが、人間と自然との関わり方そのものに興味があるんです。今じゃなくてももう少し昔のやりかたの方が智慧があったんじゃないか、と思うんです。今は、人間の力をはるかに越える機械なんかを入れて自然を変えていきますが、自然の方には、そのほころびを癒していくだけの時間的ゆとりが与えられていないんです。

一番の悪者は人間

一番の悪者は人間やないか、と思います。動物は、どういふことをすれば自分たちが食べていけないか、ということの本能的に知っていますよ。全部根こそぎにするとということがないし、うまくすれば、お尻から種を出すというような智慧ももっています。今の人間のすることは、外からきてもとの住民の寢床(静かな生活の区域)の上の方に家を作ったり、山はウンコだらけになったり、何事か、と言っておるんです。屋久島は人がいなかったからこそ自然が残つとるんですから。自然を

作ったんじゃなくて……。ここの青年連中が上がって行って、しておることを聞いてみたら、こつちに溜めた便をただ、横の所へ動かしているだけということですよ。それでは、何にもならん。土の中に深く埋めるなら別だけれども。

昔は、鹿児島島に出る船は、種子島による船しかなかったから、鹿児島まで二日かかりよったのよ。私は、機会があるたびにいいますが、自然遺産になって良かったことは、鹿児島島が近くなっただけ。種子島によらない直行便が増えて、鹿児島島に行き来するのが便利になった、とまあこれだけです。

五〇年前の暮らし

頭の方は近代的になっておるけれども、心のもつと深いところをたずねれば、昔の、例えば環境を汚染しない生活習慣というものが大切じゃないか、という反省が出てきておるんですね。今、終戦後五〇年ですが、昭和四年生まれの私の小さい時の私どもの生活は、お金なんか一か月なくても、暮らせよったですよ。

御馳走は海の幸

そして、御馳走といえば、まず、海の幸でした。私は、滋賀県に三年いたことがありますが、あつちでは、餅とか寿司とか、米の変化したものが御馳走でした。それに比べて、こつちでは、御馳走があるか、という意味で「今日はブエンがあるか？」とまず聞くんです。ブエンは、無塩で、刺身なんかの生の魚のことですよ、焼いたりしても御馳走は御馳走ですよ。

台風には魚やみかんを拾う楽しみも

島で一番恐ろしいものは、台風ですよ。台風は屋根を剥がされて、住まいが壊れていく面もありますが、台風が来ると、また楽しみもあつたんですよ。海に行くと、魚が波から打ち上げられて、こつちの陸の方から見ると、大波が引く時に、魚がコロコロと行くんです。それを拾いにいくとかねえ。また、雨戸を少し開けて見ると、隣の家のみかんが風で吹き飛ばされて落ちます。こうなれば所有権はないようなものですよ、それをひらいて行くのよ。

それはいいんですか。

いいも悪いも、落ちたものはみんなの物だもの（笑い）。

生き物たちに語りかけることば

子供のころ、小正月にはヤナギの棒でみかんの木を叩いて「みかん、ナーレ、ナーレヨ」と唱えました。自分の家のみかんだけじゃない、人のみかんまで叩いてまわったよ。柿の木にもやりました。

小さい子供は飛んでいる鷹を見ると「オイヤ ナナツ ヤンドー」と叫んで、もう大きな（七歳の）子供になっているからおれに掛かってくるな、といって叫ぶ習慣がありました。

モツチヨム岳の上からヒヨドリが南に渡るとサシバがそれを突き飛ばし追い散らすように襲い

かかっていくんです。そうするとヒヨは低空飛行して、木の中に入って行きます。

ヒヨドリの群には「ツーンン サイサイ ミッコナツタイ ナゴナツタイ セーノセーノ マンコーマンコー」という歌を唱えれば、何百、何千羽の群が降りてくる。これは、「通年 歳々 短くなったり、長くなったり、精を出して マンコーマンコー」この最後のマンコーというのは、満腔という日本語じゃないでしょうか。

メジロのことを方言でスゴメといいます。この方が感じを出しています。目が白というより、すごい目のよ（笑い）。

そこらの原の所にオニコリを採りに行く時は、まむしが一番恐ろしいから、それがいそうな所では棒で叩きながら、「マームシよけよ、薩摩のゴケドンに かまーんろ」といいます。ゴケドンというのは、豪傑どん。それに噛まれるぞということよ。そんな遊び方よ。

里芋の来た道

（貴子）私たちは、一九九〇年ころから屋久島に通うようになりました。これまで、私は里芋の来た道の研究をしてきましたが、染色体数が二倍体の南方系のものと三倍体の北方系のものが交代する地点がどうも屋久島の中央付近らしい、ということに気付いたりしています（安溪貴子、一九九六）。

里芋が大切にされた屋久島

そうですね、昔から屋久島の人は、米よりもイモンコ（里芋）が主食といっても良かったでしょう。昔のイモンコの栽培法は、川があつて、砂浜があつて、そこにの砂の中に作ってきました。あなたの研究と関連するかもしれません、屋久島の北の方と南の方では、里芋の栽培法がずいぶんちがっています。南の屋久町では、上屋久町に近い安房は別として、平野の「三岳」の焼酎工場の下あたりから栗生（くりお）までは、浜の砂の中に作る里芋の方がうまいの。この里芋は、芽と付け根の所が赤い種類でした。ただし、その芋はあまり子どもが大きくなくて、生産性はあまり高くないです。そういう場所のできるイモンコを方言では「カワヒコ」と呼んできました。川尻に作るからです。この芋を餅のように粘りがあるというので、内地から来た人が「モチイモ」と呼んだりもします。そして、時代が進むにつれて、だんだん川を捨てて、水の少ないところでも作れるようになってきました。

古式にそって元旦は里芋の吸い物

だんだん薄れてくるようですけれど、私どもの家では、祖先からのしきたりを守って正月には木戸柱を立てて、門松を立てて迎えます。そして、私どもは元朝（正月の元旦のことです）のお吸い物はイモンコのお吸い物です。餅は入らんですよ。餅は、神様の前に飾ってあります。そして二日目から餅の吸い物を食べます。芋より餅の方が後や（笑い）。

餅の他にはボンカンを飾る習慣です。これは、タンカンは新しいものですが、ボンカンは以前からお金をとるもの（大切な現金収入源）ですからこれを飾るんです。

屋久島の焼酎がおいしいわけ

屋久島の焼酎はとても美味しいと言われています。そのわけは、水のよさもありますが、原料のライモがいいんです。北緯三〇度の南側のあたたかい場所ですから、澱粉の含有量が少なくすぐ餡になる。それでいい焼酎ができます。カライモを、こちらへんの人はトンモと短くいいいます。唐芋の略です。

平野に「三岳（みたけ）」という焼酎の工場があります。あの三岳とは、黒味岳（くろみだけ）、宮之浦岳、永田岳の三つの岳の意味で、ラベルにはバナナがあしらってあります。

やっとかつと生きているから屋久杉は長生き

屋久島はね、千四〇〇万年前に花崗岩がぐんぐんせり上がってきてできた島で、もともとは何も表土はなかったわけですから。そういう表土のない所に杉が生えて、栄養のない土の上に、水と温度でやっとかつと生きておるんです。

西部林道の土石流のところを見て、本当に層が薄いですよね。

そう。屋久杉は、やっとかつと生きとるから長生きしとると、これは私の判断。人間は、医学が手助けしておるから長生きしとるけど、今の肥満の人なんか、医学がなければ、もっと昔の人より早く死んでおると思う。

杉のめぐみ

私は、奄美なんかの家を見て思うことは、屋根がトタンなんです。台風には、ブリキの屋根が一番弱いんです。しかも日当たりが強いときは、中にいてもガンガンほてってくる。それをがまんして使うということは、生活が苦しいからでしょうね。屋久島のような杉がなくて、屋根を葺くのに平木がとれなかったからだろうなと思います。屋久島では、屋久杉の平木が使えるようになって、家が格段に長持ちするようになりました。屋久島の古文書に詳しい山本秀雄先生によれば「やく」にあてた漢字は「益救」を始めとして二〇種類以上あるそうですが、今の「屋久」という字は「家が長もちする」という意味でしょう。しだいにこの字が主に使われるようになったのは、平木が使えるようになったせいだ、というのが私の解釈です。

山での作法あれこれ

屋久杉、縄文杉といえば、宮之浦の岩川貞次さんに教わった、山での作法を思い出します（第三章『探しあてた縄文杉』）。山で寝る時に神様に捧げ物をして土地を借りるとか……。

山の作法ですか。ひとつは、斧を使う時の試験は、まずきちんと上を見るかどうかでした。振り上

げた時に、上の枝にからんかどうか確かめることができれば、合格でした。

そして、木を倒した時は、枝をちゃんととって株に挿します。切らしてもろうてありがとうござい
ました、また跡継ぎが出るように、という意味です。ここらへんの人は、杉をわざわざ採ってきてや
る人が半分、あとの半分の方は、そこらへんの木でやります。杉はいいことには、挿し木で生きる性
質をもっていますから、本来は、杉でないといかんといつことでしょうね。

それから、切った木が倒れる時は、「行くぞー！行くぞー！行くぞー！」と大きな声で叫んでそのへ
んにぼさーっとしておる人の安全をはかるように。

村ごとに拝む山がある

屋久島の山は、宮之浦岳を中心に、部落ごとに分けて使っていました。川や尾根を境にして、山を
分けて、自分の村の拝む山というのも決めてありました。だから、ダメマイリの時には、代表を選ん
で山へ、拝みにいってもらいます。おさい銭を出し合って持たせるんです。今はもう簡単にするけれ
ども、昔は山は必ず二晩泊らんといかんかったです。岳参りに行く時は、神山の入口に、身そぎをす
る場所がありますから、そこで、笹か木の葉っぱを採って、それで身体に水をかけながら、「キヨウ
モソ、キヨウモソ、キヨウモソ」と唱えるんです。これは、清めます、ということの短くしたもので
しょう。帰りには必ずシャクナゲとビヤクシンの枝をもって帰ってきます。これは、十人組というの
があつて、それでうけおっていました。十人組がないころは、青年組の仕事でした。しかし、だんだ
ん今の世界遺産条約になれば、自分の山のシャクナゲの枝も採れないようになってきました。それで
も、私どもには、神様にあげるものとしては、サカキよりもシャクナゲ。これが一番尊いと思つてい
ます。このへんは、屋久島の部落はどこも変らんと思っています。

村ごとに違うこと

村ごとに違いが大きいのは、どの魚を主に食べておったか、という点です。栗生の人なんかは、魚
といえばアカバラでないと魚のうちに入れないふうですし……

ほお、そりやぜいたく！

それから、ここらへんは、ダース(ダツ)でいい、ということですし、安房へんはシロダイ、一湊
に行けばこれはサバになる。こういう具合に、集落ごとに魚の種類が変わるんですが、そういう意味で
は、栗生あたりが魚はいいのを食べておるよ。

上屋久では、岳まいるのときに、ダチク(ダンチク)の葉でツノマキを作って、それに海の砂
を入れてもって行くというような話でしたが……。

私らの時代になってから、ここいらへんでは、お賽銭だけです。昔の人があげた穴あきのお金なん
かが岳の神様の所にはありよったもんですが、今ごろはあれを取る人がおるからなあ、罰が当たるの
よ。

私どもは、今でも、水神さまに行き渡りそつな場所では、エヘンエヘンエヘンと咳ばらいをします

よ。

メンに取られる

山におると、あまりの静寂のために判断力をなくすことがあります。そうして道に迷ってしまっんですが、それを「メンに取られた」といふんです。神様からたまされたというかな。屋久島では、そういう人間の判断力をなくすようなものは全部ひっくるめてメンです。これは、芝居を「狂言」といいますが、その中に出てくる夜叉の「面」が語源でしょうね。

屋久島の地名に思う

屋久町原・日高光志さん

ひきつづき、屋久町の日高さんのお話です。地名の由来や村々の歴史についての独自の見解の数々は、日高さんが暮らしの中で日頃考えておられることなのでしょう。野の学者の面目躍如というところですね。

山幸彦の龍宮城が屋久島

ヒコホデリノミコト（山幸彦）の足跡が屋久島全島に印されています。鯛之川（タイノコ）は、山幸彦が釣針を取り戻したところで、今でもレンコダイがとれます。屋久島には花上川（はなあげがわ）という川が二か所あって、どちらも山幸彦が花をもらった場所です。山幸彦がモツチヨム岳の賊を平らげた所には今も矢のあとがついた岩があります。ですから、山幸彦の行った龍宮城は、屋久島だったということです。

八重岳は屋久島のこと

「八重岳」ということは今は使わんようになりましたが、屋久島の山は、海から見ると七重、八重に重なっています。特に鯛之川なんかの川筋のところから見れば、重なって二千米トル近く

も高いところまで連なっているのが見えます。あれを八重岳とよんだわけです。だから、宿や船、最近では出版社にもこの名前がついています。つまり、屋久島全体を総称して八重岳といって、それを前岳と奥岳に分けたんです。私は、沖縄の八重山と屋久島の別名である八重岳との関連もなにかあるんじゃないか、と思っっているんですよ。

なるほど。八重山の西表島は古見（こみ）村の民謡「古見の浦節」は「古見の浦の八重岳」（方言ではクソノウラヌヤイダギ）という言葉で始まります。八重岳というのは、古見岳という西表島の最高峰のことだ、と島では伝えていきます。また、沖縄島の北部には、これは地名で八重岳という山があつて、沖縄戦の激戦地の一つです。

方言による屋久町の村めぐり

屋久町の集落の名前を本当の方言で発音してみましょう。フナイキ（船行）、アンボウ（安房）は、今も昔の通り。麦生（むぎお）はムイゴ（ゴは鼻にかかる音）やよ。原は、ハルオ。聞きようによつてはハローとも聞こえます。尾之間（おのあいだ）はオネダが本当やよ。コシマ（小島）は昔から変らない。あそこはヤマノセという小さい島があるから、それでコシマになっているんです。それから、平内はシャーウチ。その語源がどうしてもわからなかつたんです。いろいろ調べるうちに、海からみたらわかつた。海の瀬が一本の線のように白い。これは、私の判断だけれど白い線を打つてあるから、シャーウチ。湯泊（ゆどまり）はイドマイ。湯の泊という字も意味はわかるけれど、私は、むしろ「行き止まり」の意味ではないかと思っています。それは、湯泊（ゆどまり）までは村が連なつてあるでしょう。ところが中間と粟生は、遠く離れていて、湯泊で一たん行き止まりみたいになります。中間と粟生へ至る七曲りの道ができたのは、昭和になつてからです。そしてナカマ（中間）とクイオ（粟生）。クイオの、もとの名はイモオ。江戸の中ごろまでの古文書には、「芋生」として出てきます。これは、イモンコ（里芋）の栽培が盛んだったことの証拠だろうと、私は考えています。

一湊とは屋久島の「ただ一つのみなと」

上屋久町の方ですが、一湊は、屋久島にただ一つの湊（みなと）の意味ですよ。あとは、みなもとと川の河口だから。そういうふうはこの名前は考えついたと思います。

屋久島でサバ漁がさかんになるのは、明治に入ってからです。カツオが釣れんようになってから、鹿児島山谷の辺から生活の糧を求めてサバを釣りに来たんです。四国からもやってきました。一湊は、いろいろな人たちが入り交じつて作った集落です。そういう歴史があるから、一湊は方言が今でもほかと変わっています。

屋久島の方言は四つに分かれる

私に言わせれば、屋久島の方言はだいたい四つのグループに分けられます。今言ったように一湊がひとつ。粟生・中間がひとつ。それから平内がひとつ。あとはたいがいどこも似ています。こまかく

見れば、その中では小瀬田と安房がそれぞれ少しずつ違って見えます。

「〜ラブ」「〜ラマ」という地名の意味

それから、屋久島から八重山にかけての島々には、「〜ラブ」「〜ラマ」などという島名がいくつもありますね。口永良部と沖永良部（おきのえらぶ）のふたつの永良部、伊良部（いらぶ）、慶良間（けらま）などね。これは、なぜかなあ、と思います。はっきりとは言えませんが、大島にひついた小さい島という意味ではないかな、と私は思っています。口永良部は、大きい意味での南西諸島の入り口という意味でしょう。北海道では、「〜シリ」というのが、島の名前についていますね、利尻島とか、奥尻島とか。それと同じように南の方では、「〜ラブ」「〜ラマ」などというのではないか、と考えてみたら面白いよ。

奄美の加計呂間島や八重山の波照間島の「カケロマ」「ハテルマ」というのも語感は似ていますね。

ハテルマなんかなんちゅうのは、ここでは、人をのしる時に、こげん奴はハテルマまで蹴とばしてやれ！というような言い方をすることがあります。「はての島」という語感があるからかな。

「ケラモン」と人をのしる

それからまた、人をのしる時に「ケラモン！」といいます。これは、動物の「けだもの」の意味だろうかなあ、とも思うんですが、最近では、「ケラマモン」つまり、小島・慶良間島の人間という言葉が元かもしれない、と思うようになってきました。屋久島へんではそういうことはないけれど、あそこからは、「本島」というのがあって、そこが非常にいばっているのよ。まわりの島を家来の島みたいに見てるわけ。ここの方言で「ケナブラレル」といえば、馬鹿にされることなんです。こう考えたりすると面白い。日本人が力で朝鮮を従えて、その人を連れてきて、言葉がわからんからといって、「半島者」と馬鹿にしたのと同じ精神構造だな。

人類学者の野口武徳さん（一九七二）が、『沖縄池間島民俗誌』の中で書いていますが、次ぎ次ぎと自分より小さい島を差別していく精神構造が確かにあります。ところが池間（いけま）島で「あなたがたはどの島を差別するんですか」と聞いたら「差別しようにも、もう後に島がない」という返事に、野口さんはいへん喜んだんです。私が通っている西表島でも「離島と差別する人がいても、幸い地球は丸い。ここは世界の宝だし、世界の中心だ」と言っている人がいます（対談4参照）。

他所者を入れないような村の作りだった

西表は、あんな自然の豊かな島なのに、どうして大きな集落ができないんだろうか。

おそらく、マリアアがひどくて、免疫のない他所者がくればすぐに死んでしまう、という状況が何百年も続いたせいだろうと思っっています。明治三六年まで続いた人頭税のために、病気のない所への移住の自由もなかったんです。

なるほど。屋久島では、むしろ他所者を集落の中に入り込ませないようにしていたのよ。昔は、道らしい道はなかったし、村の中へ入る数少ない道は特別の道を作って、他所者を監視しやすいようにしてあった。用のない人は、村に入らずに通りすぎていくように、村に入る道は閉ざしてあった。人が来るからこそ病気がする、とこういう考え方に立つとるわけですね。そして、東側の道を村の入口とし、西を出口と言っています。

沖繩の宮古島と石垣島の間が多良間島では、村の入口ごとに高く注連縄をして、それに血のついた豚の骨を下げて、病気をもたらす悪霊よけにするという行事を見ました（第三章『お金がいらなかったあの頃』）。

「先島」つまり極楽という感じ

行政上は沖繩の宮古島から八重山の石垣島にかけてを先島といいますが、私どもの考えでは、先島といえば、あのへんにいけば極楽があるんじゃないかという思いが、少なくとも原集落では最近まであるんです。

人がなくなると、ここは以前は土葬でしたから、墓に土葬にして、それをもういっぺんきれいにしなおす明けの日に、タマヤというて、墓の上に小さい家を作るのよ。その壁に死者が極楽へ向かう帆かけ船の絵をかきます。たいていその船には、「先島丸」という名前がつきます。

八重山の竹富島との関係

八重山の竹富島へ行くと、屋久島の人に来ていたという記録がありますが、明治の末にカツオが不漁になって屋久島から漁民がカツオを捕りにいったということがありました。

そうですね。神話時代に竹富島の六つの村を創立した六人の長たちは、屋久島、久米島、徳之島、沖繩島からの人たちであったと伝えられています。屋久島からの長は、玻座間（はざま）村を建て、粟作に努めたので「粟の主」として尊敬されています。屋久島とのつながりのことは、今でも玻座間御嶽というお宮の祝詞の中にはつきり歌われています（上勢頭、一九七六）。それから、明治四四年にカツオ漁に行った八重山で遭難して一湊の人が三人、永田の人一人が亡くなられたということを知りました（第三章「種子島への魚の行商」参照）。

「人二万、サル二万、シカ二万」の意味

「人二万、サル二万、シカ二万」とは種子島の六万人に対抗するために考え出した言葉なんですよ。昔は、西之表が三万人、中種子が二万八千人、南種子が一万二千人でした。屋久島はいつでも種子島の下にされるでしょう。それに腹をたてて、屋久島もいっしょや、というので主張するために言い出した言葉です。

屋久島は島津の密貿易基地

奄美を島津はずいぶんいじめたようですね、どうしてかな。むしろ屋久島では「うるさいことを言えば山から蹴おとすぞ」と役人に言ったという話です。薩摩の殿様は、屋久島で幕府に隠れて、いいことをしておったからかな。

「いいこと」というのは、密貿易とか？

そう。大きな川の所は港だったから、唐船淵とかいう地名でもわかるように、中国の船が停泊した地名が今でも残っておるもんね。幕府にガタガタ言われるといかんから穏密裡にやっていたので、あまり島民をいじめなかったのかもしれない、と思います。島津にとつてつごうの良かったことは、屋久島にはあまりいい港がない、ということですよ。だから、押さえるには簡単なの。瀬戸内海みたいにどこにも船が入られるようなら取り締まりはできませんよ。丸い島で、しかも屋久島は、風がはっきりしとるから、北風が吹けば、南の方だけが船を入れられる。春先になれば、宮之浦がよくてこっちは時化という具合に、敵が攻めても来にくいし、監視も天候を判断して重点を押さえればいいので、やりやすいですよ。

川を水田に利用できたのが永田

屋久島には、四つの大きな川があるけれど、大きな川を農耕に利用しておるのは、また利用できたのは、永田だけです。その他の、宮之浦にしても、安房にしても、栗生にしてもね、わりと平野はあるけれど、谷底だから水が引けないんです。永田は、橋の向こう側の叶（かのう）の所は全部田んぼですが。そして、米ができる所から文化が先に開けていくのが普通ですから、永田は早くから開けたわけです。ですから、こころへんの人は、殿様もいないし、自分で食べるものは食べて、のんきな生活をしてたんじゃありませんか。

安房川とその港

屋久島の集落が発展してきたのは、川が中心ということでしょう。

川というより、港が中心。

安房川は北東に向いていて、一番強い雨が降りますからいつも水量が多くて、河口が砂で詰らなかつたのよ。東北の風が吹くと安房川の上流に降った雨がゴーツとくるから。日本全体、北西の風が吹いて海が砂を持ち上げてくる所は、どこも砂で浅くなって干上がっていくわけですから。永田なんかはその典型的なものです。栗生もそういうふうです。そういう意味で、安房は、屋久島で一番いい港でした。

けれどもカツオや飛魚がとれる漁場から、遠かつたんです。それらが捕れるのは、島の南の沖ですから。それで、安房の人は生活ができる収入がなかつたのよ。それを見て、泊如竹（とまり・じよちく）という人が、（それまで誰も手をつけなかつた）屋久杉を切れ、と言つたと私は判断しています。その当時は安土桃山の時代だけれど、その後ずっと大正一三年に営林署が木を切りはじめるまで、生活が苦しいということは続いたと思います。

そう思うのは、子供の数の違いです。大正一四、五年までは安房の人は一族に平均七・八の子供がいました。それに比べて粟生は、五・八人ぐらいの子供しかいなかったんです。やっぱり、生活が楽になると子どももだんだん少なくなっていく。

三年生から牛馬の草刈り

私が子どもの頃は、原にあった七〇軒ほどの家のうち、五〇軒ぐらいは牛や馬を飼っていました。私も小学三年生から毎日草刈りに行きました。方言でトイサンという背負い子からってね。炭やきの手伝いにも行きました。女の子は、方言でニオゲという天秤棒をもってタンゴに水汲みでした。

「好き」こそ

世の中というのは、「好き」ということで人生が変わって行きます。いい面もありますが、そうでもないこともあります。男と女というのは、「好き」ということがあってひつつく（仲良くなる）わけですが、私の場合は農業が好きだったんです。好きでもあり、働くことが収入にもつながります。だから働いて働いてきたんです。

切り換え畑のころ

原集落では共有地の一〇〇町歩を二〇年間貸し付けてもらって切り換え畑をしました。新畑を二ワタケといいますが、三反歩の面積からとれるカライモで一家族が五年は食べました。五年間は、肥料なしで作れたんです。畑が古くなると松を植えれば二〇年後には土地が肥えてまた畑にできました。切り換え畑の一年目はソマ（ソバ）、そのあとカライモを植えました。掠奪農業のようですが、切り換え畑ですね。畑を焼いてすぐは、四尺余りもあるツワブキが出たものです。

空襲で焼けた家を黒砂糖で再建

私が兵隊に行っていないとき、ここは空襲で焼きました。米軍はどういうふうな攻撃したかという、航空母艦を近くに泊めてそこからグラマンで焼夷弾と機銃で攻めました。学校なんかの大きな施設はみんなやられました。

焼けた家を復興させたのは、黒砂糖の力です。

砂糖きびというものは、薩摩は屋久島には植えさせなくて、大正時代になってからでした。収穫した砂糖きびを馬に背負わせて運び、絞るのは水車を原動力にしていました。終戦当時は黒砂糖はずいぶん高いものでした。石油の一斗かんひとつで、一万円という値段がついたものです。今の感覚でいうと一〇〇万円ぐらいの値打ちやった。

当時の家は、簡単なもので三つか四つの部屋があって、いろりがあればそれでいいので、大工の手間もせいぜい三〇日ぐらいでできました。その費用ですが、砂糖一缶で大工賃は全部払えたのよ。

砂糖きびが来てからは、牛馬のための草切りも楽になったの。砂糖きびの葉を牛にやるから。

カツオ釣りより生き餌の確保が大変だった

ここは、だいたい飛魚とカツオが主だったです。それからザコエビス様。これは、キビザコ（きびなご）が捕れるように祈るためのものです。昔は、カツオは湯泊の沖に行きさえすれば、釣れたんですが、問題は、餌にするキビザコです。それを捕るのは、くじ引きで順番待ちでないといけなかったんです。時間をきめて、ひとつの船に例えば一時間として捕らせたわけ。捕るのも問題やが、もっと大変なのは、それを生餌として生かしておくことです。今なら生け簀があります。昔は、直径二メートルぐらいの大きな桶に、キビザコを入れて、下っぱの連中が海から潮を汲んで、直径一尺ぐらいの手勺で海水を投げ入れてやると桶の中で潮がぐりりと回るでしょう。そして、汚れた水を汲み出してやります。もし休んで水が止まるとキビザコがだめになるから、大変な仕事でした。それで、その仕事をイナモンだという言葉が残っているのよ。佐渡なんかの金山で、水汲みが休んだら仕事にならん、それと同じです。イナモンというのは、餌の係という意味やろつな。

ここには、四隻のカツオ船があっただんです。幅四メートル、長さ二二メートルほどで、五反の布の帆をかけて、八丁櫓という大船です。行きさえすれば釣れんということではなくて、餌がなくなるまでは帰らんかったもんでした。

この間、ここから二〇キロほどの所で、七、八キロもあるカツオを釣ってきた船がありました。一〇〇グラム七〇〇円とかで売れるようです。これは、四国と宮崎の人で、この人には釣れません。そんな遠くにいける船を今はもっていないんです。

「トツビヨじゃー！トツビヨじゃー！」

飛魚が大漁した時は、当時は今のような冷蔵庫もありませんから、鮮度が落ちないうちに塩漬け保存しなければなりません。そのために、大漁時には学校も役場も仕事はホタイスステ（放り出して）全部休みになって、加工に専念するんです。学校なんかへ行くもんですか。まず食べることが大事です。

まず斥候隊が飛魚がいるかどうか見にいけます。飛魚は、季節と潮によってどこに寄るか違うんです。飛魚がもう浦に寄ってくれば、夜中の一二時頃に「トツビヨじゃー！トツビヨじゃー！」と大きな声でふれて歩く。あっちでもこっちでも「そそそそそ」と起き出して、港に集まってくる。飛魚がおらん時は、「イクロー！イクロー！」つまり「行くぞう」というだけです。聞いている人は「ああ、今日はあまり飛魚がおらん」と思って聞きます。

晩におった飛魚が実際に網を入れて見ると五割ほどしかとれません。というのは、飛魚は産卵する時は一度にはしないで、まずは産卵場所を見に来るんです。だからたくさん来たようでも産卵までしないことがあるわけです。亀同じですよ。私がそういうことだと分かったのは、亀が上がる頭数が違う。産んだ数と上がった数が合わない。四〇〇頭上がったも二〇〇頭しか産んでいないというのは、下見に来てあちこち見てまわった数が入っているからだと考えています。

方言でいうた方が情があります

海なんかには頭から飛び込んで潜ることを、方言でスノゴムと言いますが、やっぱり方言でいうた方が情があります。同じようでも学者がいうと、誤りはなくてもなんか勢いがないようだなあ。

臨場感も違うような気がします。

方言のことを喋りはじめたら一日かかっから、今日はこのくらいにしておきましょう。

ありがとうございます。また、こんどお願いいたします。

対談5 「建設を続けよ」 伊谷純一郎先生の言葉

遊地 このあいだ、押入れの段ボール箱の中から伊谷先生に添削していただいた僕の論文の原稿の束が出てきたけれど、原稿用紙にして千五〇〇枚ほどもあった。伊谷先生は、霊長類の社会構造の研究で人類学のノーベル賞ともいわれるハクスレー賞を受賞されたわけだけれども、あんなに僕なんかの稚拙な文章の添削に時間を費やしていなければ、もっともっとすごい研究ができたのかもしれない。

貴子 でも、もしもそうしておられたら、今の私たちはいなかった……。人を育てるには膨大なエネルギーが必要だけれど、そうして育てられた私たちがゆるやかなネットワークを作るうとしている今、先生方のなさっていた取り組みの意味の大きさに初めて気づくようになった。

遊地 今年の夏、フィールドワーク講座にかかわる人たちとともに屋久島で過ごし、専門はちがうけれど、志が共鳴しあう仲間としての絆を強く感じる事ができた（安溪遊地、一九九九a）。

貴子 そして、若い人たちに大切なものを伝えて行くことの大切さと喜びもまた感じる事ができて、しみじみ幸せなことだと思った。

遊地 生きて行く時に何を優先するか、という問いに誰もが直面するわけだけれど……。

貴子 それは毎日のように出合う問題。青い顔をして研究室へやってくる若者たちの話に耳を傾け、真剣に向き合おうとするのは、時にはこちらもつらいことがあるけれど、私たちとしては今それを最

優先にしている。

遊地 何をするときにも手抜きということをしないう伊谷先生は、その時々時代が要請していたものを、一歩先んずる形で構想し、提案し、人を動かして実現していくことにも大きな足跡を残された。今西錦司さんから受け継いだアフリカ調査隊を、毎年のように送り出し、自らもアフリカに何十回と赴き、体力と精神力の限界に挑むような踏査を繰り返しながら、その報告をまとめ、しかも次々と新しい組織を作ってこられた。

貴子 京都大学を定年でお辞めになる時に、「僕がこれまで建設に関わってきたものは」と指おり数えられたけれど、犬山市のモンキーセンター（現モンキーパーク）、京大自然人類学講座、京大霊長類研究所、タンザニアのマハレ国立公園、京大アフリカ地域研究センター、京大人類進化論講座、兵庫県立人と自然の博物館などなど、一〇以上あったと思う。

遊地 そして、こうおっしゃった。「僕はこれまで、人を押し退けてまで自分たちの取り分を増やそうと思ったことはありません。いつもどうにかしてパイを大きくすることを考えて、建設を続けてきました。」

貴子 それが人の輪と学問的な活力のもとにもなっていた。それで、先生が京大を去られる時に弟子たちに言い残された言葉として、前に言った「学問はアグレッシブに」の次に「建設を続けよ」が来たわけね。

遊地 先生ほどの馬力で建設を続けて行ける弟子は今のところいないようなだけけれど、つねに建設を続けて、組織としても学問としても沈滞しないようにという意味だっただろう。

「地の者」とは

遊地 話は聞き書きに戻るけれど、いわゆる縄文杉をさがしてた岩川貞次さんに話を聞いて、僕はその意味に何年もかかって気づいていった。岩川さんの話は、石牟礼道子さん（一九八二）もまとめておられて、すぐわかる人にはわかるんだらうけれど、僕にはなかなか理解できなかった。例えば「地の者のいうことを尊重しなければ、何事も成功するわけではありません」ということ。これを聞いて以来の僕の大きな宿題は「地の者」とは何かということだった。

貴子 「地の者」というのは、「その土地に住み続けて来て、そこに骨を埋めるつもりの人」かな？
遊地 ある土地に生まれ育ったことが条件で、そうでない人は何十年住んでも「旅の人」だという習慣のある土地が日本のあちこちにあるようだけれど、それでは辛いものがあるし、反発もしたくなる。

貴子 そこで生まれてもちつとも「地の者」として生きていない人もいるから、どこで生まれたかということだけを中心に据えるべきではないと思う。

遊地 鳥取県の大山のふもとの村で田んぼと畑をしながら一年間暮らした時、別れの日が近づくころ、村の男の人たちからこんなことを聞いた。田んぼや畑を「ゴミ捨て場にして、そこにまだまだ使えそうな立派な材木を捨ててしまつ工務店があるが、そついう人は、物の心、人の心がわからん。また、

ゴミ捨て場にはしないまでも、丹精こめたナシの木を切って畑をつぶすのを見ると涙が出るという。畑が草山になるのは見ておれんし、田畑を荒して、野となれ山となれでは、そこを耕してこられた先祖に対して申しわけがないという気持ちが強くなって、それがたとえ赤字でも農業を続けている原動力になっている、と。

貴子 田んぼが野になろうと、畑が山になろうと、先祖が怒ろうと知ったことじゃない。その無責任さを言うのが「あとは野となれ山となれ」という言い回しの意味だったのね。それと、もうからないうちから土地を放棄してしまえば、将来大水や地滑りなんかの災害が起こるということを強く心配しておられた（安溪遊地、一九九四b）。

遊地 すべての公務員は、少なくとも一年間は農民の生活を体験してから、仕事にかかるべきだ、そうすれば、人間の原点からもちょうんと考えるようになるはずだ、という村人の言葉はすつと胸に落ちた。

貴子 それにしても、土地を荒せば先祖に対して申しわけがないし、子孫に対して環境を守っていく責任がある、という自覚はどうやってできて、世代を越えて伝えられてきたのか、そこが知りたい。

遊地 先祖代々住んでさえいけば、自然にそういう生き方になるというわけではない。よそ者は、いつまでたってもよそ者にすぎないのだろうか。たとえよそで生まれても、その土地に世代を越えて伝えられてきた智慧の世界に触れることは許されているということをお山の麓で学んだ気がする。実は僕たちが住んだ村は、一八世紀の半ばごろ、なんらかの理由で在来の村人のほとんどが追い払われる、という事件が起きたと伝えられている。その時に、数戸の家だけは追い払われずに残された。田への水をどう引くか、それぞれの田の必要とする水はどのくらいか、といった水利についての知識のある人たちが追いついたのでは、稲作も不可能になるからだった。そして、あちこちからの移住者によって村は再びに再建されて、それが今に連なっていると聞いた。

貴子 つまり、その土地の自然とつきあう方法がきちんと伝えられていくことさえ保証されるならば、地域の環境を守ってゆく智慧と知識はよそ者にも開かれていたわけ。

遊地 そして、その伝承をわがものとした者はすでによそ者ではなく、「地の者」への道を歩み始めている。これが、一九九三年のサムサノナツに大山の麓で初めてのお手伝いではない稲作を経験した僕らが到達した結論だった。

貴子 今は、山口市の山の中の村で土地を分けてもらって家を建て（安溪遊地・貴子、一九九六、一九九八a、一九九八b）、田畑を耕したりしながら暮らしているわけだけど（安溪遊地・貴子、一九九七）、家が完成したら風景が急に逆転して見え始めた。それまでは山を降りることが「帰る」だったのに、「行く」になった。

遊地 僕らが地の者になったと言い切れる日はおそらく永遠に来ないのだけれど、それでも、それまでのどこかへ出かけて行くフィールドワークとその結果を持ち帰ってする学問が中心の暮らしから大きな曲がり角を回ったことは確かだ。

六、手わざの世界

屋久島最後の鍛冶屋として

上屋久町宮之浦・永野憲一さん

屋久島では最後の鍛冶屋さんであった、永野憲一さんの登場です。一九九四年の一月五日と、一九九六年の八月一三日から一九日にかけて、宮之浦・脇町の御自宅でお話をうかがったり、上屋久町の歴史民俗資料館に展示してあるふいごや製品の実物などを見に行つて説明をしていただいたり、自宅の鍛冶場跡に保管しておられる鍛冶道具のいろいろを見せていただきました。

鍛冶屋の家系に生まれて

わたしは、大正一一（一九二二）年八月二六日に宮之浦で生まれました。戌年の生まれです。八人兄弟で、そのうち五人が男です。家には両親と、ばあちゃんひとりおりました。

父はカジヤ（鍛冶屋）でした。うちは代々続いた鍛冶屋の家で、わたしで四代目になります。わたしの父は太一といひます。祖父は太次助、曾祖父は太次郎で、この代までが鍛冶屋です。そのまた父の太八は鍛冶屋ではありませんでした。おやじのころには、宮之浦には鍛冶屋が三軒ありました。長男と次男家の父とそれから、竹之内さんという名前のよそからの人がやっていました。鹿児島あたりから来た人だったかもしれせん。

わたしは、宮之浦尋常高等小学校に八年間通つて、卒業するとすぐに鍛冶屋の仕事に入りました。一六歳でしたね。わたしは三男ですが、うちでは長男がひとり、長く兵隊に行っていました。帰つてからすぐ鍛冶屋の仕事をちよつとしていました。次男も安房の営林署に入って、そこで鍛冶屋をしていました。うちの兄弟で鍛冶屋をしなかつたのは、東京に行っているいちばん下の五男だけでしたね。

一八歳から火床に入りました。先手に対して火床に入るんですから、まあ師匠になつたようなものです。小さい時からしょつちゅう見ている仕事だから、上達が早いです。小さいころは鉄のかけらをつかんで、よう火傷するもんでした。

若いころの仕事ですか。田んぼが少々、畑も少しありましたが、農業はだいたいは女の仕事でした。海にもあまり行きませんでしたね。

わたしは、三つの時に小兒麻痺にかかりましてね、東京の大病院まで行つたんです。片足が少し悪いので、洋裁のミシンを踏んだり、自転車の修理をするような仕事にあこがれていたんです。わたしの足が不自由なので皆が鍛冶屋の跡を取らそうと支えてくれて、父の跡をつぐことになりました。ありがとうございましたと思っています。

屋久島の鍛冶屋

本家が志戸子（しとこ）から永田まで注文を受け、自分は宮之浦から小瀬田までを分担するという方式でやっていました。その他エラブ（口永良部島）や下屋久（現在の屋久町）からも注文がありました。

本家では蹄鉄も造っていました。木の山出しに使う馬と荷馬車が多かったので需要があったんです。もともとは、屋久島にはあちこちに鍛冶屋がありました。永田（白坂さん）、一湊、小瀬田（藤原さん）、下屋久では、原、安房、湯泊、尾之間、栗尾（斉藤邦彦さん）にもありました。うちなんかは最後まで残った方ですね。

石工と鍛冶屋

石工の中には自分でも鍛冶屋をする人がありました。営林署なんかの仕事で山の中へ行く時なんかいちいち鍛冶屋までもつてくることはできませんでしょうが。鍋の修理屋が使うのと同じ、長さ二尺ぐらいの小さなふいごと、打つところが掌くらいのもので、先が細くなっている材木に打ちこんで使う式の金敷をもっていて、鈍ったタガネの先の焼き入れをしていました。宮之浦に桑原さん、阿部さん、田中さん、本溜さんなど、石工は何人もおられました。ほとんどは他所から来た人でした。

他所で修業をするならわし

父は、鹿児島県の横山というところへ鍛冶屋の修業に出ていました。父は子供ができてから、二八歳ごろに修業に出たそうです。

わたしも、宮崎県の飯野（現在えびの市内）へ修業に行きました。わたしはこっちではもう一人前でしたから、見ればわかるんですよ。屋久島は半農半漁で、主に農器具を造っていました。向こうで山仕事専用を使うノコを造るノコ鍛冶の技術を習いにというか、盗みに行ったんですよ。行ってみたら幅が二〇センチもあるノコを打ったりしていました。これを打つ時は、両足の間にはさんで普通の倍ぐらいの大きさのハンマーで打ちます。二貫目ぐらいあったかなあ。屋久島では、ノコの歯先に焼き入れする程度でしたから驚きました。折れた刃を継ぐ技術もね。それと、山本さんという鍛冶屋さんで、重い木を動かすツルのシタデというて、下の方が割れていて、そこに刃を立てる打出し方とか、トビという木に打ちこんで引く道具の作り方なんかも、ちょっと習いました。

飯野では、まず水くみ、炭割り、それから火口の塗りをやらされました。鋳物になる以前の火口は、長さ一尺余りの竹筒でした。ワラを混ぜた窯土を練って、筒に塗り付けて、焼けないように、溶けて詰らないようにしよっちゅう水を打ったものです。飯野では焼き物を割ってきれいに粉にして、火口に塗り付けて窯土と混ぜて耐火性を与えていました。しかし、朝なんか水をくんだり冷たい仕事が多くてなあ。飯野は山から吹きおろす風が強くてものすごい寒い所じゃもんなあ。一年ちよっとぐらいおっただけです。

屋久島へ小松さんという山師が来ておって、その人が飯野へ注文して山仕事の道具をとっていたのでこの人に紹介してもらって行ったんです。師匠は大崎大平という人でしたが、わたしが帰ってきたらすぐ、刀鍛冶の修業に行つて、刀鍛冶になられたそうです。

本家の長男坊が土佐へ修業にいったこともありましたが、この子は「俊光」という名をもらって帰ってきました。

年季あけ

大工六年、鍛冶屋は八年といいよったんですよ。一人前になるまでの年をいうたものです。弟子にはいつてから、このぐらいは勤めるものでした。

弟子入りさせてもらっても給金はありません。食べさせてもらっただけです。まずは農器具づくりを専門にやらされました。

鍛冶屋の仕事の見習いでまずやらされるのは、家では炭割りです。大きい炭をまず五分割りしておいて、さらに小さく割っていきます。それから、焼き入れをする湯槽の水を入れておくことなにかです。

弟子の年季が明けると、師匠は鍛冶屋道具の一切をそろえて持たせてやります。ふいごと金敷とバイス（万力）だけは鹿兒島に注文してやりますが、あとは、弟子と造るんですよ。ハンマーが大小合せて六本。タガネも四本は要ります。タガネは、赤く焼けた鉄を切っても先が焼き戻らない特別の材料のものと生の鉄を切る普通の鋼のタガネと区別があります。それから、ハサミの種類が多いんです。例えば、クワを上下から挟むものと横から挟むもの、石屋さんの大ハンマーを挟めるような大型のもの、先が平たいもの、とがったもの、ノコの焼き入れ用のハサミも二本は要るし、全部でかなりの数が必要です。焼けた鉄にあてて、上からハンマーで叩いて成型する道具もあつて、あてビスとかあてビスとか言っています。

わたしの所に五年いた弟子が今、種子島の西之表にいますが、ときどき遊びに来ますよ。

戦後一時尾之間へ

戦争がすんですぐ、宮之浦では父が健在だったので、尾之間へ行きました。弟をつれて二人で鍛冶屋の仕事をしていました。一年二か月たったところで、父、太一が肺炎で死にました。たしか五九歳でした。それで、宮之浦の仕事が大変なので戻ることになりました。母はチエといつて、六九歳まで生きました。

尾之間にいた時は、殿様みたいなものやった。個人から雇われた時は、ちゃんとお膳に御馳走を並べてもらってなあ。そのころ医者か鍛冶屋かと言われたんです。あの頃の事が懐かしく思い出されません。

宮之浦の営林署つとめ

昭和二八年に営林署に入って、この仕事を昭和五三年まで続けました。

官行（官行斫伐所、かんこうせきばつしよ）と呼ばれた営林署の事業所は、宮之浦から八キロ上にあったので、営林署につとめている時は、雨の日も風の日も二年間歩いて通いました。雪の日は行きやならんから自宅で待機ですよ。長女が二年生になった時、降りて来ました。

営林署に入って最初の仕事は、鉄板をガス溶接してストーブをつくるというものでした。溶接の免

許を取ると良かったんでしようが、営林署ではそれを取らせませんでしたね。道具を造っていると、営林署にいても山師が頼みにきました。

一日の仕事

一日の仕事の手順ですか。食事をすませて夜があけたら、工場に入ります。住み込みの弟子が一人おりましたから弟子が来ればすぐに始めます。家から火種を持って行って、焼き入れの水をくみ、火床を整えます。前の日に灰をかぶせてありますから、その中から小炭をかき起こし火をおこすんですが、火口の方は窯土を塗ってありますからいいんですが、そのほかの所は、こまかい炭をハンマーでたたいて堅く絞めて簡単に火が燃えつかないようにしてから真ん中に穴を開けて種火を移します。

昼になれば、火に水をパツパツと打って、家に御飯を食べに帰ります。だいたい、夕方には仕事を終わります。

そうそう、ただの一度だけ、夜まで仕事をしたことがあります。おやじが健在のころで、兄貴が向こう樵でした。ツルハシとヤマグワの注文がたくさん来ていたんです。宮之浦の道ができる工事があった時でした。

長い丸棒を打って四角く仕上げていくんですが、重いハンマーを下から後へぐるっと回すようにする振りハンマーで、良か音がしよったもんです。しまいには、指が固まって動かなくなりましてよ。当時は材料がないので、丸鋼を四角く加工して薪割りなんかも造りましたが、手間が大変でした。

昼は鍛冶屋の仕事をしますから、たまには夜、海に魚とりにいったりしましたよ。これはまあ、遊びですが。

金敷

先が鋭った形の金敷をツノドコといいますが、あれは仕上げに使うので上の面だけ焼き入れをしてありました。普通の金敷は、軟鉄のままです。傷がついてもすぐ消えて都合がいいんです。そのかわり、周りに鉄が垂れ下がったような力エリがついてきますから、時々タガネで切り取ってやる手間がかかります。

高度の技術

腰が抜けるといって、パコパコになったノコのひずみを取る仕事があります。これはたたいて腰を入れていきます。ノコの刃の折れたのも継ぎます。

ノコづくりは、まあ、たいした技術だと思いました。柄の部分はナマ、つまり軟鉄で造って継ぎよったわけです。

砂鉄を流して鉄を取るワカスという方法が屋久島にも元々はあったんですね。わたしのおやじもそうやって造った鉄をもっていて、やって見せるといっていました。とうとう見せてくれませんでした。あれだけは残ったな。わたしが鍛冶屋になった当時はもうどこでも鉄板を材料にやっていま

したから。

島で鉄はとれませんか。

楠川の我神散（がしんさん、漢方の胃腸薬）の工場のあるあたりのすぐ下の、海岸よりは上の所に砂鉄がたくさん出ます。一時はこれを取る人もありましたが、わたしが知ってからの屋久島の鍛冶屋は、全部鹿児島から材料を取り寄せて、製鉄はしませんでした。

青酸カリと塩で堅くする

特に堅く焼き入れをしたい時は、おやじは青酸カリを使いました。青酸カリは、昔はハンコひとつでいくらでも買えましたよ。砂糖のカロ（氷砂糖）みたいな青酸カリを細かくくだいて、鉄にかけて焼き入れをするのよ。使えば手の皮が溶けて、指がつるつるになるし、おやじも青酸カリはめったに使わなかったな。わたしはやったことはありません。

それから、焼いて熱くしておいた塩の中に赤くした鉄を入れると、表面だけが堅くしまるんです。五〇トンの船の焼き玉エンジンのピストンを固定するピンに塩焼き入れたことがありますが、ひとかかえもあるかなり大きな物なので、井戸の枠ひとつ分をつかった水槽（約三〇〇リットル入る）に水をいっぱい入れての焼き入れです。罎が小さいとお湯になってしまつて十分冷えません。

空気銃の弾

こまかい仕事では、空気銃の玉があるでしょう、あれを鉛で造るための型の注文を受けたことがあります。この型を使ってバイスで挟んでつくるんですが、普通の鉄砲の玉なんかは、各自でつくれます。適当な太さの竹筒に溶けた鉛を入れ、取り出して一定の長さで切り、それを板の上のせて別の板で押さえてぐるぐる回していると、丸い弾ができ上がります。

柄づくりは材料選びから

クワの柄なんかは、頼まれば造りましたが、普通は包丁やカマなんかの小物の場合だけ柄を付けました。それにはまず材料えらびからです。カマの柄はシイの木がいいです。クワの場合はカシが丈夫です。包丁の柄はマツの木です。濡れても腐らないから。ナタやヨキは各自で付けます。

鍛冶屋の炭はマツ、シイ、サクラ

鍛冶屋の炭には、普通いいとされるカシやユス（イスノキ）の堅木の炭はだめです。カシの炭ははじいて粉になってしまいます。炭素分が多すぎるんですね。マツの炭が一番で、シイやサクラなんかの柔らかい炭もいいです。こういう炭を焼く時は、下は狭く、上は広くなるように土を一メートルぐらい掘り下げて、細い枝に火を付けて、だんだん太いものに火を移して、あとは空気に触れさせないように次々に木や枝を乗せて行って、赤く焼いたら砂でもなんでもかけてその上に土やらカヤやらを乗せて空気が漏らんように踏みつけます。これをフンツケズミ（踏みつけ炭）とよんでいます、きれ

いな炭ができたものです。あなた方も機会があったら試してごらん下さい。

炭は一日に二俵ずつ使いました。自分でも焼きましたよ。切るのは人に頼んで、火を入れて二、三日で火を止めます。二〇から三〇俵とれますが、四〇俵とったこともあります。リヤカーと自転車で運びました。おやじなんかは背中にカルイよったですが。

季節によって注文が変わる

鍛冶屋の仕事は、季節によっていろいろな注文が来ます。例えば、山を払い下げて薪を切る時には、ナタの注文とか修理がたくさんあります。

うちの山は、今の牛乳工場のところにあって、祖父の名をつけて、太次助野（タジスケノ）と呼んでいました。ここから二尺に切りそろえて束ねた薪を、川に落とすんです。川に縄を張っておいて、下に流れていかんようにして、舟で集めました。

夏場になると、飛魚捕りの季節です。そうすると、飛魚を背開きする、刃が丸く出っ張った小さい包丁の注文がたくさん来ました。出っ張ったところに引っ掛けてすっと切るんですよ。

それから、稲刈り時分には、カマでしょう。クワにも農地鍬と山鍬があって、百姓仕事の道具も注文は多かったです。

山鍬と土方の道具は大量に注文が来ることが多かったです。宮之浦の橋がかかった時は、わたしは小学校の三年生でしたが、足場を止めるカスガイづくりの仕事がたくさんありました。

続きが聞きたい

おちついた、ゆうゆうたる語りの中から、あたたかな人間味がたちこめる。そんな感じの永野さんとの会話を、おいしい屋久島の焼酎をいただきながら楽しむことができました。

息子さんの憲二さんと、『季刊生命の島』の編集部からの花嫁となられた裕子さんといっしょにお話をうかがった一時は、裕子さんのこまやかな手料理の数々とともに、忘れがたいものになりそうです。

聞き手の方も例えば、こんな具合です。

憲一 ツルハシとヤマゲワの注文がたくさん来て……。

裕子 いやあ、「つるはし」てなつかしいわあ。

遊地 鶴橋！そら、大阪の地名やんか、裕子はん。

とまるで漫才のような雰囲気をもじらしたりして、なごやかでした。永野さんご一家の皆様、またご一緒させてくださいね。楽しみにしています。

今日の仕事に満足するな 上屋久町宮之浦・永野憲一さん

引き続き、屋久島では最後の鍛冶屋さんであった、永野憲一さんのゆうゆう迫らぬ語りの魅力をお送りします。前半と同じく屋久島滞在中に原稿を準備して目を通していただき、訂正と追加の原稿をいただきました。お土産に飛魚の背びらきをする包丁などの原寸大型紙を作ってくださいましたので、これをもとに種子島で復元してもらおうと、楽しみにしています。

サメヨキなどの道具の種類

方言で、はつることをサメルといいますから、サメヨキというのは、はつりヨキのことです。まあ、ナタから、ヨキから、クワから、ヤマグワから、ヒラグワ、改良グワ、カマ、ホウチョウ、それこそなんでも造りましたよ。

改良グワは、鍛接でなく、鋳でとめていくクワも造りました。

台が木で、それに鋼の刃をつけた鋏もつくったことがあります。フクログワというたか。あれは、長い鉄に切込みを入れて二枚に開くようにして台にはまるように加工するところが難しいです。

大工道具は、つくらんかったですが、チョウナの刃が減ってつぶれたのを先がけ（鋼の付け直し）して元通りに戻したりというようなことはしていました。

皮剥きには二種類ありますよ。引くのと押すのと。引くのはカワカキとよんでいます。どっちも造りました。

ヨキには片側に三つと反対側に四つの筋があります。そのわけは、火と水を供えて木の精に祈るという意味だと聞きました。営林署に勤めていましたが、木を伐る時の儀式はしなかったです。

舟釘とカスガイ

舟釘は、めんどろな仕事でね、舟釘造りは余り好きな仕事ではありませんでした。舟釘を造るには、鉄を焼くふいご係と、火床の人（この役目を横座ともいいます）と先手と、それこそ次から次への休む間もなく打つので、大変な仕事でした。ですから、余り喜んで注文は受けませんでした。

宮之浦の舟大工さんは、松清さん、児玉さん。この人らは他所から来た人でした。宮之浦の人で石田尾末吉という人もおりました。楠川にもいましたし、楠川にも何人かいましたよ。何人か舟釘の注文を受けたことを記憶しております。

舟釘にはだいたい三種類あって、船のいちばん底の部分をカワラと言いますが、そのカワラと根板を合せる釘がカワラクギです。これは六寸ぐらいの長さです。それから、板と板を合せるのがハギクギで、長さは四寸から四寸五分ほど。頭をちよつと曲げた形に造ります。舟ばたの部分は何とよいったか、あそこを止める釘は形がちよつと違います。たしかトリークギといいたが。舟によつて、板の幅によって必要な舟釘の数は全然違いますよ。例えば、カワラを一本の木でなくて合せて造

る場合は、ハギクギの大きく造ったものが重要です。一艘の飛魚舟を造るのに、だいたい五〇〇本から六〇〇本要りよったですね。

舟釘は軟鉄で造りますが、木の中にしっかり食い込んでいる部分は強いもんです。風に吹かす（空気にふれる）とたちまち腐ります。アンカーなんかでも、ずっと水に付けておけば腐らなくても、陸にあげておけばすぐに駄目になります。

カスガイなんかもよく造りましたよ。家のはこまい（小さい）けれど、木挽（こびき）さんが材木を固定するのに使うのは大きかったですよ。

海の道具づくり

オオツキはほとんどは先が三つ又ですが、サワラ突きを使うものは四つ又でした。その後改良型で、又の先だけが取れるようになって、ワイヤーで本体とつながっているツバメモリというのが出て、これも造ったことがあります。

そのほかに、海で使うものとしては、漁師が大きい魚を引き上げるのに使うカケバリ（掛け針）。カエシがついていなくて、柄があります。それから、ドライバーみたいな形の小型のクシ。これは貝を岩から外したりするのに使います。また、その脇に引つ掛けるものを付けたクシもあります。クシは、それこそ何百本と造りましたよ。船のアンカーも、木を通す穴が破れたらその下に新しく鍛接したり、うしろの方のロープが入る穴を切って造りなおしたり、修理はよくしました。

夜の楽しみは魚とり

昔は、イザイといって、ガス灯をつけて歩いてオオツキで魚を突いたものです。太さが一升ビンほどあって、長さは一メートル余りしかないうなぎは点々や虎のような模様があるのでゴマと書いていますが、一晩にあんなのを五つも六つも突きよつたのに、今はまったく見えなくなってしまいました。一五、六年前まではそれでも捕れましたが……。夜突いてきて、家の横のひとかかえぐらいの椎の木の枝に下げると、カワアラシという川からの風が通るから朝まで腐らんのよ。家の中は暑かでしょう。あんな木が三本あって、暑い時には、近所の人を下で涼みよつたものです。ゴマのかば焼きなんかは、幅が四〇センチもあって、焼けば油は下に落ちてシャキシャキしてうまかもんじやった。ああ本当に食べたいなあ。

ゴマをオオツキで突いた時に、腹が破けて中からネズミが出たことがあったな。川を渡るとしてスンド（水に潜って）おるネズミを食べたでしょう。それからゴマは、護岸にある蟹をしっぽを立ててすり落として食べるのが専門です。夜になるとあっちでもこっちでも、しっぽが水を打つパターンという音がしたもんです。

普通のウナギは、マウナギと言いますが、戸板より長い、二メートルはあるものを（営林署の）事業所の上の所で捕った人があります。

タコは、宮之浦から楠川にさしかかる所の海には多かったです、瀬に頭を立てておることがあ

るもんです。それを横からオオツキでさらってやると取れます。石を抱いてしまつとなかなか取れなくなります。

種子島へ物々交換に

潜りの人が使う二又のオオツキを持って種子島へ物々交換に行ったことがあります。戦争中の話です。順風丸という船がある時でしたが、島間に行つて、牛野（うしの）に泊り、上中の農協へ行って農器具とイモを物々交換しました。牛野の石田尾さんのところへ泊つて、そこではオオツキを物々交換しました。石について火花を出して、品質がいいことを見せました。米どころの荳永へも行きました。こつちは食料が欲しいですから。屋久島の中でも、楠川から小瀬田のへんに物々交換に行きました。換えるものはイモがほとんどでしたが、クワ一丁にどのくらいのイモやつたか、それは覚えておりませんね。

戦争当時や停戦後、クワの注文が多くて、表にお客が並びよつたものです。支払いは、物々交換です。イモが主ですが、麦のことも、まれにお米のこともありました。疎開小屋にいた人にこつちから製品を届けることもありました。材料は、鍛冶屋の組合が西之表にありましたから、種子島まで取りに行きました。まあ、戦後のことです。肩の鉄ですが、汽車のレールなんかの鋼もありました。

最近でもクワの壊れたのをただで修理してあげたら、お礼に焼酎をもらつたということもありました。

不浄を嫌う

鍛冶場には、注連縄を張り渡して、ぴしゃつとしてありました。ここに入つてはいけない人は、忌中の人と生理中の女の人です。それぞれ黒不浄と赤不浄と呼んでいます。そういう不浄の人が鍛冶場に踏み込もうとすると、すぐに分りました。胸がしめつけられるような感じがするんです。そして、鉄と鉄がどうしても付かなかつたりします。一度、吉田の人が兄弟を亡くして一週間もたたないのに来たことがありました。その時は、仕事を中断して塩と米を仕事場に撒いて清めて、また仕事を続けました。

だいたいは、女の人は外から見える所までは入れても、作業場には入れんようにしていたな。生理がないおばあさんなら入つてきてもいいが、そういう人はもう鍛冶屋に用がなかでしょう。そうそう、うちの自家のスナばあちゃんという人は、女であつたけれども相つちをやつていたですよ。

うちのばあちゃんが亡くなった時には、うちが黒不浄になるから、神社に神様をあずけました。しばらくは、一日十五日の米と塩は、氏神様へあげていました。

初仕事には奉剣を打つ（永野さんの原稿）

正月二日の初仕事の儀式のことを申し上げましょう。

この日は、朝、日の出前に身体を清め、仕事場を塩、米、焼酎で清め、火を起こし、奉剣を打ちま

す。奉剣ができ上がったら、ふいこの脇の柱にユズリハとシダの葉を供えて飾ります。神棚にはおみきや、お吸物つきのお膳を供えて礼拝をします。それから家族一同がお膳につき、おみきをいただいて初仕事を祝ったものでした。

年に三度山仕事を休む

彼岸の中日には野止め、山止めというて、山仕事は完全に休みます。その他に山仕事を休む日は、正月の十六日と、九月の十六日です。正月、五月、九月ですから、ショーコーク（正五九）は山仕事は休みと唱えていました。

ある人が、山に行ってナタで足を切り、それが腐ってしまったんです。反対側からも穴をあけて膿を出すという大変なことになりました。ちょうど彼岸の中日だったので、そのせいだと言われたことがあります。

旧九月十六日はヤマノカミマツリ（山の神祭）です。事業所の奥に山の神をまつる神社が作ってあって、神社の下の事業所の広場が雨の場合は集会場でやるんですが、神官さんが祝詞をあげて、それからノンカタ（宴会）です。官公庁の職員も招いて、そりや盛大でしたよ。相撲があったりもしよかったです。

十一月八日はふいこの祭

旧暦の霜月八日は朝からふいこの祭です。神官を呼んで、祝詞をあげます。それから吸い物のついたお膳の御馳走をつくって、来た人には誰にでも振舞います。この日はかりは、呼ばれなくても来ていいんです。私の小さい時は、自分の家で御馳走を食べたら、すぐ本家へまわって二度食べよったもんでした。

ふいこの神様のことを、なぜカナヤマサマ（金山様）といいます。ふいご祭りのことを、金山様の祭ともいうんですよ。この日は、五つ組みや七つ組みの御馳走をつくってお供えして盛大に祝いますよ。

ふいごは、尾之間にいる時に焼けたので、新しく三つつくりました。工大を出た藤村さんという人に頼んで、屋久杉を材料にした品物で、良かったよう、あれは。長さは三尺八寸で、わたしがもっていたうちの一つは宮之浦の民俗資料館に寄贈してあります。

火傷したり目を痛めたり

大やけどをしたことがあります。戦争当時の軍靴をしばらくにはいていて、その中に切った真つ赤な鉄片が飛込んで、右足の肉がゴツトリ取れました。小っちゃい火傷はしょちゅうです。赤く焼けた鉄はジュツとくっつきますから、深い傷になります。

また、鍬などを仕上げる前に、表面についた炭素のさびを落とすために焼けた鉄を載せた金敷に水をうちます、そのときにバーンとすごい音がして、目に入ったり、まぶたを焼いたり。

これは笑い話みたいなのですが、近所の小さい男の子どもがしょっつちゅう入りこんできていて、あるとき飛んだ鉄片をつまんで火傷して泣いて帰ったことがありました。黒くなっていてつい油断するんですね。しばらくしたら、その子のお母さんが「なんで焼けとつとを握らしたか！」とせきこんで怒鳴り込んでこられたことがありました。この子が自分で火傷したと証明したら、黙って帰っていきました。

目と段取りが大事

鍛冶屋の仕事で大切なのは、鉄の色の微妙な違いを見わかる「目」でしょうね。焼き入れの場合で色で見ます。鉄と鉄をくつつける時の色もあります。ちよつとのことです仕上りは全然違ってきます。カンもいりますが、目が大事です。

もうひとつ大事なことは段取りです。夜のうちに明日は何をどうしよう、ということをよく考えておくんですよ。酒を呑んでも、床に入ってからそれもそれは考えます。朝になって材料を探しているようなことでは仕事にはなりませんから。

今日の仕事に満足するな

父から口癖のように教えられた言葉は、「今日の仕事に満足するな。一生研究、修業せよ」というものでした。

相うちをしていて父からよう叱られたことは、「調子ばかり取つとるな！」ということでした。気が合いが入っておらんで、打つリズムを取っているだけのような打ち方では駄目だということ。向こうハンマーが二つの時は気が合いが入りよつたですよ。ほめられたことですか。仕事の上でおやじにほめられたことはなかったなあ。「ようできた」とは言わなかったもんな。

楽しいこと嬉しいこと

鍛冶屋の仕事で楽しみなのは、でき上がったものをすぐには渡さないで、一晩でもいいからしばらく手元においてながめることです。

一番嬉しいのは、使い切つて刃先がなくなったものをお客さんがもつて来た時、それが、自分が打つたものと気づいた時です。自分の入れた銘が消えていても、形で自分の手というのはわかりますから、あれからこんなに減るまで何年使つてもろつたやろかと思ひ出しながら、先がけをしてまた使えるようにして渡すんです。

たまに、途中から折れたとか、外れたといつて持つて来られることがあります。その時は、お金をもらわんで直しますが、「なんで」と考えこみます。材料同士が合はん時は、くつついていたものが剥がれることがあるんです。

手仕事の時代

鍛冶屋は誰でもできる仕事ではないですから。舟造りの祝いでも御馳走の席で鍛冶屋が上座の方に座らされたらしいと聞いています。そんなに大事にされた仕事でしたが、戦後の時代がきてしばらくすると、機械で造った道具がほとんど店に出るようになり、それに追い討ちをかけるように、百姓をする人もどんどん減って、弟子も跡をつがないようになり、とつとつ廃業することになりました。

本当を言えばまだやめたくなかったです。妻が倒れて看病のため、どうもならんで、営林署をやめました。五六歳やったか。

その後も、道具の修理ぐらいは頼まれればやっていました。木炭もなかなか手にはいらんようになってなあ。とつとつ、火床を四、五年前にこわしました。工場をつぶして物置きにしました。今では工場の跡の煙突が残っているだけです。

仕事をやめて鍛冶屋の神様を守っていくのは大変です。霜月八日の祭もあるし、毎朝、水のお初をあげて、ろうそくを点けてかしわ手をうつんです。どうにかして昇天させてあげんといかんと悩んでおつたが、鹿児島へ行つた本家がもらいに来てくれたので、ひと安心しました。これを嫁にきた裕子ちゃんに預けるといふことになれば大変だがと悩んでおつたわけです。それにしても、もう一度、鍛冶屋みたいな手仕事が見直される時代がくるでしょうかねえ。

「人間は人間のような機械を造り、機械は機械のような人間を造る」といわれる、こんな時代ですけれど、どんな機械も結局は人間の手仕事のもとになっています。その職人のわざが失われてしまえば、取り返しのつかないことになるでしょうね。例えば時代の最先端と言われた原発が今では大学院生も進学しない斜陽産業になって、現場でもきちんとした溶接ができる職人が集らなくなってしまつて、大変危機的な状況にあるんだそうです。どんなにすばらしい設計も、現場の施工がまずければ何にもなりませんよ。

昨年一年間、我が家の建築をとおして、いろいろな業種の職人さんに学ぶ機会がありました。落成の祝いの席で宮大工の三好元幸棟梁が「この家の仕事に職人として悔いはありません。これは、ここに集つた職人みなが思っていることでしょう」と言ってお下さいました(安溪遊地・貴子、一九九八b)。なんとか、職人のすばらしい手わざが毎日の暮しの中に生き延びる道をさぐっていかないといけないと思つています。どうもありがとうございます。

お話を聞き終えて

「ああ、なつかしい！」といいながら、資料館に寄贈したふいごを動かしてみる永野さんの目は少年の目のように輝いて見えました。全部まとまつて自宅に保管しておられる鍛冶道具類は実に貴重なものです。これらが散逸しないように、時々油も塗つて大切に保管していただきたいなあ、と強く思つたと思います。もし、永野さんの了解と指示のもとに、例えば民俗資料館の中に鍛冶屋の仕事場の復元ができれば、上屋久町としても展示の目玉ができると思つのですが。

なお、現在民宿「晴耕雨読」を経営しておられる長井三郎さん(一九九四)が書かれた記事も参考にさせていただきます。

ありがとうございました。

屋久島の木で種子島の舟をつくる 上屋久町楠川・河野胤重さん

わたしたちが屋久島に家族でひと夏をすごす機会を得たのは、一九九一年のことでした。宮之浦の東の楠川に空家をお借りして、毎日すばらしく美味しい山からの水をいただきながらすごしました。息子は、この水があるからジュースはいらないと言っていました。のんびりとすごした島の暮しの最後の日の八月二五日、楠川の長老である河野胤重（かわの・たねしげ）さんのお話を、降るような蝉の声の中でうかがいました。河野さんは、楠川きつての伝承者のおひとりであり、船大工の長い経験があります。

一七歳まで九州各地をまわりました

私は、大正元（一九一〇）年に楠川で生まれました。小学校低学年の大正八年のころから、五、六年間は鹿児島にいました。一七、三歳になるまで向こうにいて、それからここへ帰ってきて学校へ出ました。学校では、手工と唱歌、地理・歴史は好きやった。高等科というて、今の中学校やな、それを卒業してまた島を出ました。私が一七歳の時まで、土木請負いの仕事をしていたおやじと一緒に九州をずうっと回りよったわけ。長崎にもながくいたし、山口県の萩までも仕事に行ったことがあります。

昭和三（一九二八）年にこっちに帰ってきた。今残っている宮之浦の橋が昭和三年に着工して四年に完成したけれど、私のおやじもその工事に参加しておったから、間違いない。

島に帰ったわけ

島にずつつといて、よそに行かないということになったのは、一八歳の時やな。おやじが私を屋久島に帰したわけ。こういうことを続けているよりも、島の間人は、島に帰って、鰹釣りとか飛魚とりとかの海の仕事や、いろいろな山仕事をするべきだ、と。その頃は時季の飛魚も、よう捕れていたから。

夏休みには、島に帰ってきて年に六日の奉仕作業をしない、と言われて毎年しよった。部落の山の造林作業なんかの仕事な。

ウイルソン博士と大株

今、「ウイルソン株」じゃというのは、大正年間になってからのことよ。楠川の牧次郎助という人は、そのアメリカ人の飯たきにやとわれていっしょに山に登ったことがあるそうです。二〇畳敷ぐらいの屋久杉の大株で、昔から鳥居があって、石がまつてあって、地元では大株神社といいますが、あのアメリカ人が来てから「ウイルソン株」になってしもった。

大正一四年頃、安房から石塚のところまで木を伐り出すためのトロッコ道ができよって、私の従兄の牧という人が営林署に勤めていたので、そのレールをかつく仕事に出たことがありました。忘れません、その重たかったこと。

舟大工になる

屋久島に帰ってから、薩摩型の舟をつくる練習をしてな。牧貞次郎という楠川の人の弟子について、舟造りを覚えた。この人に一年半ついていたら、「おまえ、自分でやれ」と牧さんに言われた。それから、種子島からの注文で舟を請け負ったりして自分で造りはじめました。

それは、もう一人前の技術ができてきたからという意味でしょうか。

今考えれば、そうやったろうと思うな。舟大工はまた、屋久島中点々と楠川でも一湊でも多かったわけやがな、数は楠川が一番多かった。私が出ていた頃は、三人ぐらいおったな。若い舟大工が居ればいいと言われ、おやじもやれと言つので舟大工をしたわけ。

木を倒すところから始める

舟造りは、山の木を倒すところからはじまる。木を伐つてこにや、舟にやらんから。昔は牛とか馬で木を出しよったなあ。

舟を造るには、一本の木を伐れば舟になるから。六尺六寸まわりの木が一本あれば、幅が六尺六寸の舟が造れる、とこう言いよったからな。木を出す時は、人を雇つて、オオノコをもつちよる人にあ

あせえ、こうせえ、というて伐ってもらったわけ。

木を伐る前には、特別の願いごとかがあるんでしょうか。

それはな、塩を少しと米を少しもっていったら、山の中には必ず水があるから、水を準備します。水がちょっと遠か時は、里芋みたいな葉（クワズイモ）があるわな、あの中に水を汲んできて、その中へ米を入れて振るわけ。それとお酒をカンビンに入れていって、「山の神からこの木はもらいます」という届けの意味で、祈願すると、山師どんが、いいよ、いいよと山の神の代りに返事をして、それからノコをいれよったわけ。

沖繩の西表という島に行くとき面白いですよ。大きな、神様がおられるような木を伐る時にね、どうしても伐りたいときには、素裸になって、シャコガイという大きな貝をもって行って、その鋸のようなきざぎざの所を木にあててね、山々におられる、神様たちの名前を出して、こう言っんですよ。「私は、貧乏で、着る物もない、鋸も買えないので、貝がらをもってきました。かわいそうと思ってどうぞ伐らしてください」と。そうすれば、障りがないうてね（竹富島の上瀬戸亭さんの伝承。なお、第五章「木にもいのちがある」参照）。

ははは、そりゃ、神様に嘘をついとるようなもんじゃな。

山で不思議なことに会われたことはありませんか。

いやいや、全然ひとつもなか。

奥杉で造った舟は弱い

舟の材料は島の杉。ほとんど杉や。椎の木か、檜の木かを舟の底のカワラという所に使って、それに杉の板をば付けよったわけや。それから上は全部は杉やから。

カワラにその木を使うのは、堅かからな。今の舟は機械で揚げられるけど、昔の舟は人間で揚げたり下げたりよったでしょう。杉の木は柔らかかから、ジン（台）にくいついて転び難かじゃから。椎の木なら傾斜さえあれば、ツーツと滑っていきよったから。

フナムシが付かんように、年に一回焼きよったからな。ちょっと予防ばしよったわけ。造って四年もすると虫が付くから、底を見て「ああ、フナムシがつきよつ」といって焼いてやれば、炭のついたところには入らん。

屋久杉でも舟はできんことはないけれど、普通は小杉で造ったな。屋久杉で造った舟は磯にあたりとボコツと崩（く）えやすいわけ。里の山ん木は、地杉といいますが、奥杉とちがつて（年輪の）筋がたつてるでしょうが、あれがあるので当たっても強いです。屋久杉は、大工をする人は使い良かですが、本当の舟になした場合には、舟を降ろして仕事をする場合には、舟は瀬へ当たったり、ドシ（舟同士）に当たったりすることがあつから、ボタンとはじくわけ。じゃから、昔の人は、奥杉を舟に使わんかったわけ。屋久杉のことを、奥杉といよったからな。

私は、舟の木は全部、個人の山から伐りよつた。営林署の山を払い下げて舟を造ったちゆうことはひとつもなか。山の奥からは、とても人間にやもつて来やならんな、遠すぎて。里から見える山は、

だいたい個人の山やからな、そこに生えている地杉を利用したわけ。

種子島からの注文

それから、昭和二四、五年から三四、五年までは、いつも種子島へ飛んでいきよった。種子島の人
が舟の櫓というて手で押すやつよ、あれを造ってくれ、舟を修理してくれというてきたり。新しく造
るよりも修理に来てくれ、来てくれというて頼まれることが多かったな。

屋久島での注文もちろんなあって、この近辺ずっと、親戚の人やらが頼んできました。屋久島は、
舟を造る人は昔からおったから。

種子島の舟は、こっちで造ってもっていくのよ。あっちには大きな木がないから。ここで木を出し
て、板にわいて（挽いて）楠川の浜で造ってもっていったものよ。そうでないと、船を頼んで、それ
に材料を積んでもって行ってこらん。余分な手間でしょう。それよか、こっちで造って舟にして乗っ
ていった方が良かでしょう。

種子島に修理に行くときは、材料はこっちからもって行く。向こうから注文がきよったからな。あ
のころは電話がなかったから、手紙できよったわけ。急ぐ時は西之表から電報打ったりな。

注文をつけたのは、ほとんど南種子やったな。地名でいうと、牛野、大川、砂坂、中西目、下西目、
それから裏にまわって下中、今ロケット基地のある莖永、あれから下（しも、南の方）やったな。修
理に行ったりするのは、帆船でいきよったわけやから、南種子の方は近から行きやすいからな。そ
れでも中種子の浜津脇（はまつわき）までは行ったことがある。造った舟は、ポンポン船でひっぱり
にきて、ここから中種子や西之表にももっていきよったけどな。種子島からこっちに注文に来るとき
は、木がないからな。あっちにも木はあるけど、せいぜい太さが一尺ぐらいでしょう。悪いわな。何
本も木を伐らにや、舟はでけんし。そういう木を使えば、手間も要るし、釘も要るしでな。型もきれ
いにあがらんで狂いやすい。

舟造りの実際

浜で舟を造るときは、舟の下になる台をつくって、その上で造る。その台を方言でジンといいまし
た。

舟の大きさはな、幅が六尺六寸。今の数え方ならちょうど二メートル。長さは、三五尺やから、約
一〇メートル半か。まあ、だいたいこんなもの。これは、飛魚舟です。ここに人間が一四、五人乗り
組んでな。飛魚がこれに二万載る。二隻で組んで三万五千から四万とれれば豊漁やった。もう少し小
さい舟もあつたけれど、型は薩摩型で同じよ。そのころの屋久島の舟は、薩摩型ばかりでな。

昔の舟は櫓が四メートルも五メートルもあつたから、家で櫓をつくるにもけっこう大きな場所がい
った。

舟の値段はいくらぐらいだったんですか。

私が二四、五歳の時には、一日八〇銭の計算で雇われていました。三五日分の手間賃で舟を一そ

分として請け負ったわけ。手間賃だけで二八円になるかな。土地の人は「最低四〇日かけんとろくな舟はできん」といよいよたけれど、今のようにならなくて時間で止めるといことがなかったから、だいたい三五日でできよった。だいたい、仕事は夕方が能率が上がるのよ。段取りがちゃんと決まってきたから。朝のうちはな、こつやつたり、ああやつたり、いろいろ考えたりで能率が上がらんわけ。その頃は一人で造りよったけれど、あとで、（私より二〇歳ぐらい若い）今六〇歳ぐらいになつとる人を使つたりしたけれどな。「家造りの方がいい」と言つてやめていったりしよったな。

一〇〇そつも造つた

舟の注文の数が。ちよつと多い時で、六そつぐらいやつたかな。種子島へ行つたり、ここへも来たりしてな。その仕事の間中に、舟の修理の仕事もいろいろあつたし。

他の人は、日にちでいくらという計算やつたが、私は、一そついくらと請け負うようにしたから、結局、割安になると思われたのか、わりあいいつも注文がありよつたな。

舟は数で一〇〇ばつか造つたけどな。修理する方はもつと数が多かもんな。

舟の寿命か。なおして使えば新しい舟から二〇年もつ。早い舟は一八年で寿命がくるな。

一そつ三五日かかる舟を六そつ造るといえば、それだけでもう半年以上でしょう。その間に修理に歩けばもう、暇がないですね。

それはな、晩に夜仕事でやつたりしよつたから。

舟は、昭和五一年のころまでは造つたな。やめて、もう一〇年くらいになるな。

他の仕事と両立させる

農業は、何でもやつた。何でも（笑い）。舟の木工の仕事は、雨の時はできませんが、その時には、田んぼの仕事ができるでしょう。畑や山仕事は、雨の時には合羽がじゃまになってなかなかできませんが。馬も飼うし、牛も飼う。漁師もやつて、鯖釣り、鰹釣りに行きました。鎌田吉助という人が舟をもつて、鰹釣りをいっしょにしたりしたけれど、それはあんまり長続きせんかつたな。

戦争中は、どうしておられましたか？

戦争中も同じ仕事。飛魚もとるし、田んぼで米、畑でカライモ。仕事は変らんやつた。

物々交換のこと

物々交換はされたことないですか。

全部現金です。そうそう、戦後、刻みタバコ一袋で四銭でしたかな、これを店で大きいサバ一匹と換えたことがあります。

戦争中、町の人はよく着物をもつていって米やイモと換えたりしたそうですが……

ええ、そんなとは、私は家の壁板、あんなものを種子島へもつていったりしました。厚さは、四分（一三ミリ）あればいいです。一間、約二メートルの長さの板をひと坪、つまり六尺四方の広さを単位に

して、それをもっていつてイモと換えてきてくれ、ということもあった。それは戦時中じゃから。米と換える人もあるし。船に積んで板をもって行けば、よろこんで換えてくれた。向こうはお金は少なかったけれど、自分でつくる田んぼの米とか、カライモとか自由につくれて多かつたから。

向こうからも来ましたか。

種子島から家の修理に使う木材とか、櫓に使う木で櫓木という櫓の木を取りにくる人もあった。向こうには、使えるような櫓の木がなかったわけ。屋久島ほど山が深うなからな。

南種子町の西之や立石、砂坂の人たちとお話していたら、屋久島と物々交換したり、屋久島からいろんな物を売りにきたり、そういうつきあいがあったもんじゃった、ということでしたが。

それは、種子島から殿様がいなくなつてからのことじゃと。種子島はひとつの国になつちよつたわけやけどな、ここは、大隅の国になつちよつた。隣りじゃつたけど、種子島とくに仲がよいということはなかつた。種子島の方は取り締まりがきびしくて、南種子の方だけが、材木なんかをこそこそと取り引きしよつたという話を明治の時代のじいさんがそつじいよつたから。

昔のしきたりを習つた

私は、この部落の副戸長　今でいえば区長ですな　をしていた三角徳市（みすみ・とくいち）というじいさんに、昔のことをいろいろ聞いてな。このじいさんにほとんど習いました。

人生五〇年だった時代に、七〇という年まで生きれば、お祝いをした。ここではトカキ祝いというてな。トカキというのは、米を量つた枡を平らにならす斗掻きのこと。そういう長命をした人と、自殺とか馬鹿な死に方をした人では、葬り方がちがうよ。墓に穴を掘つて棺を埋める時に、棺の上に門のようになるようにそこらにある植物を立てる。それこそチンチクダケでも、カヤでもいいのよ。それを二本結ぶ時に、馬鹿な死に方をした人の場合だけ、普通と逆の結び方をする。こういう結び方を方言でトージン結び（唐人結びか。たて結びのこと）といいます。

永田では、ダチク（ダンチク）を使うと聞きましたか。

楠川では、ダチクを使わん。あれは、ツノマキ（ちまきの一種）なんかを包む時に使う、めでたいものやから、葬式に使つたりすればじいさんから叱られた。

正月には、ワカキガラというて、ダラノキとタブノキとを長さ五寸くらいに切つてきて、ダラノキのとげはきれいに取つてから、半分に割つて、墓から屋敷から神仏からあちこちに二本ずつ飾つた。あれは、今の人はせんとなあ。

天神祭の余興の芝居

私は、昔の変体仮名、あんたたちは読めないかもしれないけれど、それで書いた芝居の草子を厚さにすれば一〇センチぐらいもつておつた。「二十四孝」とかな、十何幕の芝居の台本よ。あれを天神様の祭の余興にしよつたわけ。一〇月の二五日の祭にな。

これは、若い人が中心になつてやつたんですか。

そうそう。さっきの三角徳市というじいさんが教えよったけどな。また私のおじさんの三角徳重という人も、なんでも教えてくれよった。

人間は元気が第一

三角徳重というこのおじさんが私にこう言つて教えてくれた。

「人間は学校だけじゃなかぞ。たとえ馬鹿でも元気が大事。太平洋の海の中に出たときには、元気が第一や。社会に出たら必ず実力が物をいう。良か学校出たつて、それだけじゃだめ。」

学校の教員が一〇人おるとすると、そのうち七人までは、世間の人とのつきあいがなか。人と交わることもない、そういう人が教員に多かばつて。人間としてのあり方の問題やがな、これは。おじさんの言つとおりやつたと思う。

でたらめを広めないように

今日は突然でしたが、よいお話をうかがつてありがとうございました。私は、いま学生五、六〇〇人に教えているんですが、こういう若い人たちに伝えたいというお言葉がありましたら、教えていただけませんか。

役所から紹介されて、いろんな話してくれということがあつたけれど、事実とちがつことをまるで事実のように広めるような人があつるから、腹がたつことがあるよ。でたらめな事を広めるようなことがないように、気をつけてほしいと思います。

十五夜のつな引きの時に、昔からの歌があるが、ぜひ出してくれ、出してくれんと誰も歌えんからといわれて出たことがあつた。昔の人が教えたことを知らんで、型をなくしていくのは、今の人の責任です。

このあいだ、大学の先生につれられて、十何人か学生や外国の人なんかも来て、昔の話をききよつたから、「私はあなたらと違つ昔の大学を出ておる」と言つたら、「なんという大学ですか」と聞くから、「無学大学よ」と言つて笑つたよ。それを、通訳して聞かせよつたよ。

おわりに

河野さんは、男三人と女四人のみんなで七人の子供さんがあつて、孫とひ孫を合せると二四人になつておられました。

お話を聞かせて下さいとお願ひした時「無学大学を出ておるもんじゃから」と冗談のように言われましたが、たとえ誰が来ようとも、豊かな伝承とりつばな古文書を残してきた楠川のような地域とそれに密着した智慧がないがしろにされるようなことがあつてはならない、という島びとの誇り高い宣言のように私たちには響きました。

まとめるにあつて、「ご子息の河野文康さんに目を通していただきました。

食べ物は何でも自分でつくっていた 上屋久町永田・牧一徳さんとハル工さん

上屋久町の西南の端にあたる永田集落の牧一徳（かずのり）さん、ハル工さんご夫妻のお話をうかがうことにしました。

私どもが初めて永田に牧さんのお宅を訪ねたのは、一九九一年の八月一三日のことでした。はじめは里芋とその仲間について、教えていただくということでおうかがいしたのですが、それから現在まで、家族で時々おじゃましていろいろと教えていただく機会を得るようになりました。今では多くの人が忘れてしまった生活の知恵を今もお二人は生き生きと伝えておられました。

初めてお訪ねした時、おばあちゃんは、折からお盆の供え物にするために、マキというちまきをつくっておいででした。それからは、訪れる度に、年越しそばを打ったり、飛魚をさばく手伝いをして下さっていたいています。ここでは、手を動かしながら教わった牧ハル工さんのお話を中心に、主として手仕事のこと、食べ物のことなどをつづってみたいと思います。下原稿は、お二人とご家族のみなさんが目を通して訂正してくださいました。

島から一歩も出ないで結婚しました

私たちは明治四三年に永田に生まれました。私（ハル工）はその後もずっと永田育ちで、島から出たことはありません。

尋常小学校高等科の時に、学校をやめて紡績工場に働きに行くのがはやってね、同級生からもたくさん岐阜県なんかに出ました。でもたったひとり、私は結婚するまで鹿児島にさえ出ませんでした。紡績に行った人が、小さな桐の箱に入って帰ってくるのを見て、初めて死んだら箱に入ると知りました。そのころ、ここは土葬だったですからね。母はそれを見て、私が紡績に行くのを許してくれなかったんです。募る人が来て、わたしも希望したけど。そんなわけで私は都会を知らずに結婚しました。紡績なんかに行った同級生が一年半から二年くらいで帰ってきました。「もう、あんなところ行くもんじゃない」と言いました。帰ってきた人が家に来て、あぐらをかいてすわっているのを母が見て、「紡績という所は、そうやって座るもの？」と聞きました。紡績では自由な生活をしていたんですよ。永田では女性は正座するもの、火鉢にあたる時も正座して、いい姿勢してないといけない。だから手をかざすだけで、火の上に背をかかめてもいけないと。

私たちが一三、四才のころは、永田では鯉節造りが盛んでした。紡績から帰ってきた人もみな鯉節製造に行くけど、夜になれば「もう私帰ります」といって帰ってしまうんです。魚が残っていてもね。紡績には、そういうところの「自由」があって、途中で帰ってはみんなが困ってしまうという気持ちかわからないようでした。

私は高等科の二学期で学校をやめて鯉節製造のために働きました。わたしは父の片腕になって、家計を支えなければと思っていました。

鯉節製造のころ（牧一徳さんのお話）

鯉節製造の時は、永田には三〇軒余りも工場があったですよ。自分の持ち金で鯉を買うのでなくて、みな鹿兒島に親方を持っていて、借金してね。そうやって、造った鯉を親方に送ったんです。鯉節製造した人たちは、こちらでは資産家と言われたような人たちも含めて皆、後になってみれば、借金はかりで手元にはなにも残らなかったですね。おじいさんの代にはなんとかやれても、お父さん、息子そして孫の代になってみれば何も残らんです。

昔は、地元の人が鯉船を出していて、屋久島の近くで釣りよったんです。そのころは帆船の時代で、帆船で本土まで行きよつたらしいですね。そうこうするうちに、発動機船が来だしたわけ。本土、とくに鹿兒島の枕崎辺りから鯉釣りの船が来ました。そしてこの人が気がついた時には、自分たちの船では鯉は釣れんことになってしもつたわけ。むこうの船の方が設備も何も絶対いいから。例えば、鯉の群を見つけると、餌をまきつつ船の周りに雨が降ったように水を撒いて鯉を寄せるんですよ。この漁師はもう指をくわえて見物しているしかなかったですね。魚というのは、なんでも捕れる時は一瞬です。

「これではあかん、あのマネをせんと」というので、船を造りました。部落で共同して資金を鹿兒島から借りました。ところがねえ、船をいざ仕立ててみたらいろんなことがあったんです。流行りばなので、機械に故障がでたりして……。

西部林道のあたりの山林は、もともとは永田の所有地だったんです。けれど、鯉でこしらえた借金の抵当としてそつくりとられてしまいました。点々と他人の手に渡ってね……。そして、抵当権が証券会社の手に渡りました。だから証券会社から管理を依頼されたという弁護士が何回も来ましたよ。山の上にある高い塔を建てた時でしたか。ある弁護士なんかは、「私は屋久島へ来るのは九回目です」「なんと言っていました。大川（おおこ）の滝から西部林道あたりは私有地がけっこうあります。」

機械船（発動機船）つくったのは明治の時代で。私らは事実としては記憶にありません。鯉節の事業に失敗して、船ももうなくなってしまいました。土地もとられてしまつて……。土地をとられた時の記念碑だけが残っています。公民館の前の川の所です。廃藩置県の時の問題がまだつづいているわけですよ。

センジで味をつけました（再び牧ハル工さんのお話）

永田で鯉節を造っていたころの話ですよ。鯉節を造る時に、鯉を炊いた汁が出ます。この汁を煎じていくと、脂があつて餡みたいなものになり、味付けに使います。センジとよんで、だしの素を大さじ二杯入れるところをせんじ小さじ一杯使えば足りるくらいだしがあります。これはサブシでもとりました。

センジを作るには、まず鯉を炊いた汁を砂で漉します。直径九〇センチくらいの竹のざるに木綿の風呂敷を敷き、その上にきれいに洗った浜の砂をつめて、鯉の身のかけらとかを取り除きます。こつ

やって漉したものを煮詰めて煎じあげたんですね。

鯉節のセンジは、むかし医者がいなかったころは、怪我をしたら切り口に赤チンの代りにつけて治したりもしました。

「センジミソ」といってセンジと味噌をまぶしたものを、山や畑で御飯を食べる時のお弁当のおかずに使いました。これはまたおいしいものでしたねえ。また、ごまを煎って、摺り鉢ですって、砂糖を少し入れてからセンジと味噌を入れてこねます。なるべく味噌を乾燥して、細かくして入れると、これは香りがよかったですね。

今も私はセンジで味をつけていますよ。

味噌も麹も手作りでした

味噌も自分で造っていました。昔は麹から自分でつくっていました。自分で麦を作って、釜で炊き、臼に入れて豎杵（たてぎね）でよく搗きます。そう、お月様のつさぎの餅搗きの杵ですよ。味噌には大麦がおいしいですね。

麹をたてるには、もろぶたにふかしたお米を広げ、方言でコウジクサといっているシラ（しだ）の一種を一面にかぶせます。これは、畑の周りに生える種類で、青々として柔らかいのです。いまでも方言でコージグサといいますよ。その葉をヤッサンヤッサンというて畑からたくさん背負ってくるんです。むしろにそのシラの裏側の白い方を見せて並べます。それにふかしたご飯を広げる方法もあり

ました。麹は、もろぶたに何枚も造りました。もろぶたに二〇枚ほど造れば家で食べるだけはありません。できた味噌は高さ一メートルくらいの屋久杉で作った樽に入れましたが、樽を民俗資料館に出したので、その後は甕に入れるようになりました。

麹は三日でたちます。大豆を炊いた時の色に近い色で、味噌麹の色は、売っているものと変わりません。味噌は麹が手で、麹が上手にできればおいしい味噌だといよいよったものです。

餅に生えたかびでも麹がとれます

昔はばあさんたちが、お正月のお餅からも麹をとっていましたよ。お鏡餅を五つ重ねるんですけど、しばらくすると餅と餅との間にかび生えてきます。そうしたらかびの黒いのは捨てて、黄色い菌だけを包丁でむいて集めます。それを紙に包んで口の大きな瓶に入れて保存しました。麹を造る時は、餅を入れるもろぶたにご飯を入れて、色をよく見て選んだかびをふりかけ、外や土間ではなくて別に座敷に置いたものです。こうして作った麹でいったん味噌をつくったら、麹を一部分残しておいてまた次に使いました。残すときは麹を焼酎の一台瓶に入れておきます。こうすれば雑菌がはいらないから。また味噌をつくる時取り出して使いました。味噌の菌にいいからとっておいいたんです。

ソマはいちばんつくりやすい

ソマ（そば）は蒔きやすいといつか、一番つくりやすいですね。年二回とれるから量が殖えます。

春ソマは二、三月に蒔き六月ごろ収穫、秋ソマは同じ種で、必要に応じて蒔いて、そう、旧二月、今の三月ごろ収穫しました。ソマは肥料がいらないといいました。ソマがあまり大きくなると実が柔らかくなってしまいます。昔はソマを各家庭でつくっていました。冬のこの寒い時には、「ソマのねいぶ」といって、芋の御飯を炊いた時、ソマをかけて食べました。血圧にいいし、ソマの栄養がたっぷりあります。年末は、きのう餅搗き、今日は蕎麦打ちという具合です。このソマは私が畑でつくった。さあ、あなたたちも打ってみて、ソマを食べなさい。(年越しそばを打ちながらのお話)

アワもつくりやすい

アワもつくりやすいです。アワはひと穂あればそれを種にして二畝(アール)蒔きます。畦を切って蒔いて二〇センチくらいの丈になってから、厚蒔きのところは移植します。アワの背を大きく育てると穂も大きくなりますね。

昔はヒエも蒔きました

ばあさんがヒエも蒔きよったのを覚えています。私は自分で食べてみないから料理の仕方がわからないですが、昔はヒエを団子にひきよったと聞いています。ヒエの穂の形はいろいろあったそうです。

田んぼの雑草のヒエは抜かなければ稲のじゃまをします。駆除したヒエは田から取ってきたら焼いて、その灰をまた田へ戻したんです。ですから昔の人は難儀のしどおしかったんですよ。

ビール麦をつくっていました

ビール麦をつくっていました。ごはん麦(大麦)よりも少し粘り気があったておいしかったです。大きさはちがわないけど、粒に丸みがあります。収量は別に気にしなかったですね。収穫がありさえすれば、あとは自分たちが困らないようにやりくりすればいいだけの話ですから。農協へ四斗カマスに入れて供出して残りは自分の家で食べていました。

種子島の農業の先生が一週間くらい泊って奨励してくれました。わたしが四十代よりもあとのことです。ビール麦は婦人会でつくる人が作って出ただけです。ビール麦を作ってもわたしなんかの手にはビールは入らんでしょうというて、やがて止めました。

お茶も作っていました

小さいころは、お茶も自分の家で作っていました。お茶の葉は薄い鍋で蒸します。葉が柔らかくなったら、バラ(丸い箕)の上に移して手で揉みます。朝から晩まで揉まされてね(笑い)。

タイモは食糧の主役、夏野菜の王様

ここらでタイモと呼んでおられる里芋についてお聞きしたいんですが。

ゆづペタイモのクキ(ずいき)の料理を作って食べましたよ。油であげて(炒めて)から、味付け

して、メリケン粉でとろみをつけたのを食べました。「くずかけ」といいます。おいしいもので、残念ですけどみんな食べてしまって残っていません。

味にくせがないタイモは幾とうりにも料理ができて、タイモは食糧の主役、夏野菜の王様でした。みそ汁に入れても糖分のような味が出てとろっとしてきます。稲ができる所は稲田のすみっこにタイモを植えるんです。タイモは水を好むからです。乾いたら味がえぐくなりますよ。田の反別が少ないから、米は食べたいわ、イモンコ（芋の子）はとりたいわ……。当時は今と違って時季ごとの野菜しかできないでしょう。でも、タイモをもつてれば安心でした。

戦中戦後の食糧不足の時にはタイモの茎のイモガラで食べつないだんですよ。戦後はタイモを、芋よりは野菜として利用していました。人によってはさつま芋のつるを食べてしのいだ話を聞きますが、私は食べたことがないですね。

タイモやトイモンクチ（ハスイモ）があるから今でも夏に大根を買わなくてすみます。私は本当に野菜を買ったことがないです。若い人たちは車で売りにくるのを買っています……。今は永田で二軒しかタイモを植えていませんね。野菜はスーパーに行けば不自由せんようになりましたから。

スナダテ

鯉節の仕事が終わった時、作業をして裸足で歩いていた所を、庭箒で掃いて、鯉の血の汁を吸った砂を集めました。これを捨てないで入れ物に溜めていました。これが「スナダテ」で、砂の肥料という意味です。これをサトイモやカライモ（さつま芋）の畑にばらばらと撒いてやると、芋がよくできました。

有機肥料の作り方

昔は鯉節を造りましたから、鯉の汁や血が出ます。この汁や血を人糞をいっしょに甕に入れて肥やしを作って使いました。今では鯉節を造りませんけれど、食べた魚の骨を溜めておいて、魚の血も混ぜて、肥やしを作っています。畑にタゴ（おけ）がおいてありますから骨や血を持って行ってその中に入れます。木灰を入れて腐らすのは同じです。私は野菜つくりには化学肥料はいい使いません。草をむしったらそのままにしないで乾かして焼きます。焼いたらその灰を集めておいて、作った肥料と混ぜ合わせて撒きます。これがいちばんいいですよ。昔のばあさんたちは、木灰に叶うものはないと言っていました。

魚を食べたら普通は骨を捨てますが、その骨を容器に入れておいて、水を半分入れて、灰も入れて置いておきます。これが肥料になり、貝殻も入れておくとそのうち溶けます。畑の土壌を作る時には、作物はそういうものを必要と待っているわけだから、そこを自分で考えてやります。

おしっこも、無駄にしないでタゴに溜めておいて、石灰や木灰を入れゆすっておきます。

こついったことは、ムダなお金を使わないで頭を使いなさいということです。

私の母はサトイモなんかの収穫の時、皮を剥いたら、その皮を捨てないで畑のそばに置いていまし

た。これもやがては肥やしになります。食べるほどには大きく育っていない芋も捨てないで置いておき、芋の苗床を作る時に入れれば種芋になります。

御飯の残り、豚骨、魚の骨なんかを、大きい桶を決めておいてそこに入れます。今ならポリバケツでもいいですね。半分ほどまでは雨水を溜めておいて、そこに投げ込みます。ひとつも捨てないですよ、みな肥料なのよ。腐ってきたらこの水を作物にかけます。残った骨の滓も畑に穴をあけて入れてしまいます。「あんたは手荒いことをするのんね」という人がいますが、私は「これが上等」と答えています。石灰や木灰を桶のなかに振りこみます。

昔は、タゴのかわりに畑に穴を掘って、内のりに小石を並べて、粘土をたたきつけて水が漏らないようにしたものを利用していました。さっきも申し上げましたけど、人糞にも石灰を入れたんです。石灰が入ればカミキリが速いんです。つまり腐りがはやい。はやく効いて、作物の物になり方が早いわけ。

マキとツノマキ

お盆につくるちまきをマキといいますが、それをくるむのは、マキノハ（アオノクマタケラン）です。マキを昔の人は「先の世にいく杖」といいました。死んでから先の世に旅するために杖がいるんですよ。

旧四月八日のお釈迦様の命日にはツノマキを作ります。ツノマキに使うササは、方言でダチク（和名ダンチク）といってね。母が言うには、ダチクは出た葉が北から南に向いていて、お釈迦様はその下で修業をなさったということです。四月八日にはトビウオ招きの歌と踊りもしました。

食べ物自分

いろいろ申し上げましたけれど、食べるものを何でも自分でやってきたし、今でもできるだけやっているということを言いたかっただけです。食べるものは自給でした。自分が働いたからこそ戦後の食糧不足の時代を越してこれたんですよ。

「もう、あういう時代はこないものかなあ」とじいちゃん（一徳さん）は心配して言いますよ。食糧難のことです。こういう心配が孫たちにはわかるでしょうか。今は警沢すぎて……。

大切なお話をありがとうございます。ところで、薪が取ってきてありますね。

この薪は私がかかん山から二荷しよってきたものです。何でもしておかんな。暑い時はみかん山へは行かんから、家で綿入れふたつ仕上げたのよ。メガネはかけて縫うけど、目は大丈夫。わたしぐらいの年の人で集まって話し合って「あれはこうだった、これはこうだった」と言い合って訂正しています。思い出し合っているんです。そうしないと忘れるからね。何かしておかんとぼけるから、何でもしています。

対談6 経験の広がり

遊地 体を動かして学ぶというのは、参与観察といってフィールドワークの基本だけれど、西表島で稲作の研究をして以来もう二〇年もたつのに、いまだに田植えはうまくならない。目が悪いのか手がついて行かないのか、西表島の人のように真っ直ぐに速くなるとても植えられない。

貴子 西表島での稲作体験は、今自分たちが食べてる米づくりに確実に役立っていると思う。あなたは稲作から入ったけれど、私は、染め織りを西表島の友達にやらせてもらったのが始まりだった。余った糸があるかた織ってごらん、と誘われて織ってみたら、自分の手から糸が布になって出てきた！しかも思いがけない色や柄が生まれてくる。その不思議に心から感動した。研究とかフィールドワークとかとはまったく別のものとして、そこにすごい感動があった。学問中心に生きてきたと思っていた自分の別の面を見つけたような……。もし、「西表島の伝統的染織の研究」とかいうテーマで入っていたら、あの感動はなかっただろうと思う。

遊地 あなたが、アフリカで始めたスケッチも、民族誌的な記述のうえで大変役にたっているけれど、描き始めたきっかけは、学問的なものではなかった。

貴子 スワヒリ語でマチヨ・マチヨ（たくさん目の目）というけれど、初めて訪ねた村なんかでは、子どもたちの、珍しい動物を見るような遠慮のない視線が辛かった。始めは言葉もわからないし、手持ちぶさただだったので、身近にあるものをスケッチしてみたら、みんなの注意が、「私という人間」から「私の描いた絵」にパツと移った。そして、私の粗末なスケッチに大変に感心してくれて、あれも描けこれも描け、といって次々に民具を持ってきてくれた。そういうするうちにだんだん細かく精密に描けるようになっていった。だから、わたしの絵はアフリカが育ててくれたと思うている。

遊地 僕の養父の家族なんかは、あなたのスケッチブックが自慢で、来客があるたびに持っていつては見せてたっけ。

貴子 「やってみるごと」のもつ意味のひとつは、一度でも自分で体験してみると、落ち付いてできるようになること。人の話を聞いた時にも、臨場感をもって聞けるし、本当にといつか深い所まで理解が及ぶようになる。

遊地 そういう意味で、屋久島のおばあちゃんが語ってくれる、畑や料理をめぐるお話はずいぶん共感をもって聞けるようになったし、おばあちゃんも本気でいろいろ教えて下さる。鍛冶や船造りの話は、興味深くはあるけれど自分が手を染めたことがない世界なので、本当のところは分っていないから、大きな誤りがあるのではないかと恐れている。

貴子 自分の家づくりの時に、宮大工の棟梁に言われて礎石探しからはじまって、石や金属や土や木や竹やガラスの加工をちよつとずつ体験させてもらったから、体でわかる世界が徐々に広がっているかもしれない。

遊地 未経験といえ、初めてアフリカに着いた時、それまで持ったことのないドル札の束をどこ

にしまったらいいかうろろしていたら、そのぐらいの額でおどするなと伊谷先生に叱られた。そして「人類学者というのは、最低の所でも最高の所でも、これが当たり前だという顔をして過ごせなければいけないよ」と諭された。いつでもどこでもビビるな、そして偉ぶるなという教えだったろう。ケニアのナイロビのスリー・ベルズというレストランで御一緒したときに、カレーとチャパティを注文してスプーンなしの手で食べておられた。御本人は楽しんでおられたけれど、あれは同時に伊谷流生活術の手法を示されたのかもしれない。

貴子 アフリカで伊谷先生のこの言葉を思い出したことが何度もあったし、この言葉に支えられたことがたびたびあった。

遊地 政府の大臣級の人たちと交渉したり、招かれたり招いたり、川辺の村で壁のない未完成の家に寝させられたり……。

貴子 ハンセン氏病で指のない人と握手をしたり……。

遊地 それは、研究室の先輩の掛谷誠さん（現在アフリカ地域研究資料センター教授）と英子さん夫妻に同行してもらって、住む村を探して歩いていた旅でのこと。僕が一番記憶に残っているのは、幅が六〇メートルもある夜のルアラバ川の真ん中で脅された時の掛谷さんの対応。

貴子 あの時は、キャンプ用の荷物一式を担いで四〇キロほど森の中を歩いて、町のホテルの対岸まで来たけれど、日が暮れて渡し舟がもうなかった。

遊地 ようやく見つけた丸木舟の船頭が、舟を漕ぎ出してから約束の四倍（昼間の公定料金の一〇〇倍）もの法外な値段を請求してきた。そして、真っ暗な中洲に漕ぎ寄せて「払うのがいやなら、ここで一晩寝てみるかい？ここのワニはお腹が大きいよお」という。その時、僕はすごく腹がたって、伊谷先生がタンザニアで強盗に襲われた時にスワヒリ語で「ウナジュア カラテ？」（空手を知ってるか）とほったりをかまして相手を退散させたことなどを思い出して、大声でどなってやるうかと思っただ。

貴子 ところが、掛谷さんは猫なで声を出して

遊地 「トウタクバリアーナ（折れ合おうじゃないか、スワヒリ語）」と値引き交渉。結局言い値の三分の一ほどにまけさせたんだけど、これは短気な僕にとっては、常に平常心を失わないようにといういい訓練になった。

直感と想像力

貴子 そして、経験があると本当の想像力というか洞察する力が育っていくことがある。私、鳥取大学の農学部長だった津野幸人（ゆきんど）先生から『小農本論 誰が地球を守ったか』（津野、一九九一）を贈っていただいて、とても感動して読んだのだけれど、まず印象的だったのは津野先生のおじいちゃんの話だった。

昭和一九年の冬、中学二年生の愛国少年だった津野先生は特攻隊を志望して予科連に合格。その時、「片田舎の一介の老農夫」であっただおじいちゃんが、かわいいお孫さんを兵隊に行かせまいとしてい

った言葉がこんなものだったというの。「日本は負ける。お前らみたいな子供までが死ぬことはない。明日これで小指を切れ。小指がのうても百姓はできる」そして牛のかいばを切る押し切りを指さした。当時、国際的な情報を一切もたないおじいちゃんよ。大本営発表なんかの圧倒的な世論工作にもかかわらず、日本は負けるということが的確に判断できた根拠というのが、なんと古いアメリカ製の剪定鋏だった。もらって二〇年にもなるのに、バネはびくともしないし、切れ味も新品同様。「百姓道具にこれだけのええ鋼鉄を使う国なら、兵器も日本のものとは較べもんにならんぞな」とおっしゃった。ひとつの土地にしがみついて、その土地を本当によく見つめて暮らし続けてきた「地の者」といえる人は、その自分の土地を深くみつめたという「地の者」としての物差で世界がちゃんと測れるということ。今、何が世の中に起きているのかがわかる。自分の土地を深くみつめ続けてきた厳しい目、それが実は世界を本当に測る物差だと思う。

豊かさを問いなおす

貴子 アフリカの森にしばらく住んでみて、人間がじつに巧みに自然の懐のなかに抱かれて豊かに生きていける、という事実の重みに圧倒された。そして、西表島にもそういう世界があったことを知り、もしかしたら、九州以北の島々にもそういう智慧の体系があったのではないかと思い始めていた。

遊地 屋久島へ通ううちに、それが確信になってきた。

貴子 滅んだように見えていても、それは表面的なこと。ちょっとした間、忘れられているに過ぎない。丹念に探せば思い出すこともできるし、工夫次第で復活させることも不可能ではないと思えるようになった。

遊地 「復活」といっても、江戸時代や飛鳥時代に戻るなんてことはありえない。昔の人々の智慧や言葉を自分たちの財産として、新しい時代の希望をいかに見つけていくか、という冒険精神に満ちたチャレンジ（挑戦）の話なんだ。

貴子 「江戸時代に戻れと言っのか」と叫ぶ人たちが、江戸時代の暮らしを知っているかという点、実際には何も知らないに等しいことが多い。

遊地 別の例だけれど、狩猟採集民は食べ物も乏しく、生きるか死ぬかの不安定な生活を送っているという考えがある。しかし、それはわれわれの農耕民的な偏見に過ぎないのだというのが、伊谷先生の指導で実際にアフリカの狩猟採集民のところに滞在させてもらった研究者たちの結論だった。

貴子 『2050年は江戸時代』（石川、一九九八）という面白いSFを読んだのよ。それまでに『大江戸生活事情』（石川、一九九七）などの何冊もの本で緻密に繰り広げて見せた詳細な江戸時代の生活研究を下敷にして、これから予測される科学技術文明が直面する破局を、いかにして回避できるかの希望を物語ったものだから、説得力がある。

遊地 貿易の時代が終わって、食糧を始めとして自給が原則になるといって、自給革命が起こるといって設定だね。うちも自分の家で食べるほどのお米を自分で栽培するという変化を経てもう七年。実際にやってみると次第に体も慣れて、いろいろできるようになってくる。とついでいできないと思ってい

たのが嘘のようだ。暖房用の薪作りもだいぶ上達した。もちろん我が家の農林業は、例えばゴルフをするかわりに、趣味としてやっていること。米や炭を売ってそれで生活費をかせぐという意味ではない。

貴子 それと、フィールドワークで学んだことを、実際に自分の生活の現場で試してみるという気持ちもあるわね（安溪遊地、一九九四）。

おはなしがごちそう 上屋久町宮之浦・中島キヨさんと本溜ケサさん

屋久島の「きんさんぎんさん」

これまでどちらかというとなりの男の話が多かったのですが、屋久島のとてもすてきなお二人の女性の登場です。自由で生き生きとした語りの雰囲気をお届けしたいと思います。お一人には、『季刊生命の島』の編集長だった長井三郎さんが引きあわせてくださいました。お二人は宮之浦の長井さんの家のすぐそばにお住いなのです。

銀色の髪がきれいなお二人はとても仲良しのお隣りどうしで、縁側に座っていたりすると、道を通る人が、「あっ！きんさん、ぎんさんだ」と叫んだりするそうです。

一九九三年の一月二日に初めて本溜ケサさんに紹介していただくことができました。一月三日と四日は、本溜さんと中島キヨさんの昔語りに加わらせていただきました。丸二日間にわたって昼過ぎから午後遅くまで話に花が咲き、晩御飯やビールまでごちそうになってしまいました。

話し手のみなさんに下原稿を見ていただくにあたって、中島セツ子さんにお世話をいただきました。ありがとうございました。

わたしたちの年になるまでには間があるよ

遊地 こんにちは。わたしたちは、昔の話を聞いて楽しむのが好きなんです、今日は気軽に、できれば歌なんかもまじえながら（笑い）、昔の、とくに女の人の暮らしなどを教えていただきたいと思っとうかがいました。

貴子 お話しいただいたことは、できれば将来、若い人達にも話してやれたらいいなあと思っっています。

中島キヨ わたしたちの年になるまでには、だいぶ間があるよ（笑い）。

遊地 おばあちゃんたちは何年のお生まれですか。

中島 明治三十六年の四月の二〇日で、今年九〇歳になります。

本溜ケサ わたしは、明治四〇年の一月二〇日生まれで、八六歳。モトダマリとは屋久島にない変わった姓やが、もとは川崎ケサといました。

キヨ わたしの元の名前は藤村キヨです。実家は益救神社の近くです。宮之浦の下の果てから上の果ての脇町まで、何にも知らないところへ来て同じ家族になるとは大変ですよ。

ケサ えらいよ、このおばあさんは。だんなさんもない所に嫁に来てるのよ。学校時代には顔ぐらい知っとったやろうけれど。この人は働く人やったから、だんなさんの親が見込んで、だんなさんが兵隊へいたていないのに嫁にきてくれというたわけよ。二年してからだんなさんが兵隊から帰ってきたって。その間に非常に難儀をした人や。

遊地 それもめずらしい結婚ですね。

キヨ ですよなあ。ワキ（周囲）から見たときゃバカのごとあつたつてなあ（笑い）。主人の親が、

わたしを働かすためにもろうたわけ。

ケサ この人は評判の働き者やったからな。

キヨ わたしは長女で、一番年上だから男の仕事もしましたからね。

毎日食べるものがあれば分限者ドンでした

遊地 お嫁に行かれてどんな仕事をされたんですか。

キヨ 馬を飼ったり、豚を飼ったり。その家は、宮之浦では一番働き手の家でね、田んぼが人並以上あるし、畑も人並以上あるし。それにオオジユウトが四人。オオジユウトいうたってわからんでしょうね。

ケサ コジユウトがだんなさんの兄弟でしょう。だんなさんの親のまた親がオオジユウト。

キヨ それからコジユウトが七、八人なあ。

ケサ このおばあさんは、正直一本の人で、口も無口で、わたしのようじゃべらん人やの。そじゃからそいでつとまったのよ（笑い）。

キヨ ですからね、毎日毎日仕事で忙しいでしょう。病気なんかしたことはなかですよ。なあんにも。風邪もひかん。

ケサ この人は、履き物でも買ってもらっても、一年中履くちゆう機会がないのよ。朝起きた時には、裸足で仕事に出る。アシナカいうてつま先だけのぞうりがあればいい方やったもん。

キヨ 朝ごはん食べたたら、もう畑に出る用意よ。

遊地 牛はいなかったんですか。

キヨ 牛もいましたよ。いつもはいなかったけれどね。ただ自分の肥料取りに飼っていただけ。豚は、肉屋に売るのがよ。

遊地 田んぼはどのくらいの面積で、どのあたりにあったんですか。

キヨ 田んぼは、今の都会の人に聞かせれば恥かしいくらいの面積やが、それでも二反歩以上やったから。川向こうのガンダ、ワセダ、サコギ、今民芸品を売っている所のタジイ、川のそばのハマダなんか、点々に離れちよつからね。

ケサ 田んぼもつちよう人は、お米があるけれど、ほとんど主食はカライモ（さつま芋）やったから。カライモの畑が一〇あるとして、野菜の畑が五あれば、それが一番ブゲンシャドン（分限者殿）、つまり金持ちやというのがわたしらの考えやった。

キヨ 毎日食べるのが潤沢にありさえすればブゲンシャドン。子供が多くて働き手が少なければ、子供の数シコ（ほど）働きがならんでしょう。わたしが嫁にいった家は、食べる分には不自由がなかったな。そうして食べた余りは売っていましたよ。米俵はねずみが入らんように家の上の方に置いてありました。

遊地 本溜のおばあちゃんの結婚の場合はどうだったんですか。

ケサ わたしは両親の反対をふりきって、鹿児島から来ていた、何の財産もない人と結婚したんで

す。親に勘当までされたその大恋愛の話は、奥さんには言っても先生にはしません（笑い）。

遊地 中島のおばあちゃんに聞こうかなあ……。

キヨ わたしは人のことは知っておっても言わん。昔の本にこう書いてありますよ。「人の恋路をじゃまする人は、馬に蹴られて死ね」とね。

遊地 はあ。あのお、それで本溜のおばあちゃんのお連れあいは何をする人だったんですか。

ケサ だんなさんは、井戸を掘る人でな、宮之浦の井戸を二二〇箇所も掘ったんです。一四年前になくなりました。

今は昔の半分以下しか雨が降らんですよ

遊地 昔と違ってきたことはいろいろあるでしょうね。

ケサ 昔、営林局の人がいうていましたけれど、月に一八日働けば屋久島では大将やった。

キヨ 雨が多くて仕事ができないからね。でも今は昔の半分、いや三分の一ぐらいしか雨は降らんですよ。

ケサ それに、冬は霰がよう降って、軒の下に五寸（一五センチ）も積もったことがありましたよ。まあ、霰だから、日が照ればすーっと消えていきよったですけどね。今は、冬でも手がかじかむということがないでしょう。昔は手がヒッカガミよったものです。

キヨ 雨が降っても、照っても、雪がガラガラ降っても、一里あまり先へ毎日、馬の草切りに行きよりました。

ケサ それと、昔は山奥でも猿なんか見えんかったのに、今は里までもおりてきます。山の木を全部切った関係でしょう。山に食べる木の实なんかもないのに。

キヨ 人間に慣れてねえ、朝なんかすぐその唐船淵のところにも猿が出てきますよ。

泊りこんで薪を採りに行っただですよ

ケサ 毎年一回、旧の一月中には、一里ほど離れた山へ一週間か二週間ずつ泊りこんで薪を採りに行っただですよ。午前二時ころに起きて、赤ん坊もつれて……。

桑原ヒル（本溜さんの娘さん。宮之浦にお住いです） わたしは六七歳になりますけど、それは、わたしなんかは経験ありません。

ケサ 学校に通う子供なんかも泊り込みで、朝は小さい赤ん坊の世話をし宮之浦まで背負ってきて、おじいさん、おばあさんに預けて、夕方学校が終わったらまた、その子をつれて一里あるところへ歩いてきたのよ。

ケサ 泊川から向こうは、ツモエの谷までが宮之浦の区域でした。

キヨ それから向こうは志戸子になるのよ。

貴子 昨日、志戸子まで歩いたんですよ。六キロぐらいですね。

ケサ そうそう。でも昔の道は、今のきれいな道とは全然ちがいますよ。昔の人は難儀をしよった

ですよ。

キヨ ちようちんつけて、人の通るだけの一尺幅しかない昔の道を行きよったねえ。小さい時に湊まで歩いたとき、初めて自転車の通ったあとが道についているのを見て、蛇の跡かと思ったりもしました。「この蛇、ずつつとずつつと先まで行っている」とね（笑い）。

ケサ 薪は、営林署の目があつて、人里から見える所では採れんかったですよ。担いで帰る途中で会つても、現場を押さえられんかぎりには、「自分の山から切つてきました」といえば通りました。

営林署の官行の事務所の上のつり橋のある所の山をとつたけれど、ずつつと遠くて一日に二カエしかかついで降るせいですよ。割つた薪を太さ一尺（三〇センチ）ぐらい、長さは二尺ほどにそろえます。それが二つで一カエですが、長ければ道の両側にひつかかるでしょう。それを二把ずつ担うて積みます。弱い人は一把しかかつきませんよ。

キヨ そんな山を切る時は、払い下げてもらつたんですね。一軒の家の採る分は、一八工と決められておつたですよ。幅三尋に高さは五尺。これが一八工です。

ケサ これ以上採ると、青年（団）から没収されてしまふ。それ以上は切つちやならんということですよ。戦時中には食糧がないので、山の木の葉でもとつてきて肥やしにせにやならん、ということで大目にもるようになったんです。いまでも大きい木を切るのだから以前のようにはやかましくありません。

キヨ 切つた薪はね、六月までそこに置いておいて、ポンポン船になる前は、手漕ぎの櫓船で取りにいくもんでした。

ケサ それでも足らんですよ。冬の間のタキモン（焚きもの）は畑の仕事をするかたわらで切ります。御飯を炊く薪、風呂をたてる薪、豚の餌用と薪はたくさんいりました。

桑原 床の下に薪が積んでなくて空いておれば見苦しいもんでした。

ケサ 年がら年中、薪のサバクイ（やりくり）をしてなあ。

キヨ 台風で木が海辺に打ち上げられると、それを採りに行きました。ただ、兵隊を出している家では、川から流れてきた木を薪に焚くとよくないといいました。

ケサ 川に流れた木やらかな。子供の中から薪では苦勞をしています。学校から帰つてくると、どこそこ薪がとつてあるから、かるうてこい、と親が紙に書いておいてあつたもんでした。

それから、水がめに水をいっぱい汲んでおくのも、女の子の仕事でした。忘れると父親に「今まで何しよつた！」と叱られました。

キヨ 水も少なくてな、脇町には井戸が二つしかなかったのよ。

女の子のしつけはいろいろありました

遊地 ほかに叱られたことはありませんか。

ケサ わたしらの小さいころは、裸はみせなかつたよ。おかあさんはそうじゃなかつたけど、うちのおばあさんはやかましい人で。

キヨ 膝から下はみせても、それから上の白かところをいっさい見せんもんじゃった。もし見せると親に打たれよったですよ。

ケサ うちらの時代には、タバコ盆の出しかたの作法とか、うるさかった。その他には、畳のへりを踏むとか。女は洗い髪で家の外へ出るなと言いました。ちょっと油をつければそれでいいんですよ。洗い髪のまま外へ出るとマモノがつくと言われます。

便所では決して唾をはくなどいいます

本溜盛男（本溜ケサさんの息子さんです） 昔流というのがはやらんことになったんでしょ。例えばよ、昔は玄関にトイレのある家はなかったが、今の家はほとんど玄関にトイレがあるもんな。今はトイレがいちばいい場所になつとる。

遊地 あのね、沖繩の西表島ではね、便所の神様が一番強い力のある神様だといっています。道で驚いたりしたときはまず便所へいってお払います。昔はそこで豚を飼っておりましたから、その豚をブーブーと言わせてから家に入ったもんだそうです。便所の神様はたいへん美しい女の神様だから、便所は大事にきれいにせい、とこういいます（第二章「南のはて波照間島から」参照）。

キヨ そういう伝説があるのやな。ですから、屋久島では、便所で倒れた病気は、治りにくいといえます。便所の神様はな……。

ケサ 便所の神様を特にまつりはせんけれど、便所の神様と火の神様は大事ですよ。それから、ばあさんにむつかしく言われよったけど、便所では決して唾をはくなど言われよった。昔の人は、こういうわけじゃということはいってかせんで、ただああするな、といいよったな。

遊地 便所の女神は片手で小便を、もう片手で大便を受けて下さるので、そこで唾を吐けば、受けられなくなってお怒りになるといふことは、西表島でも聞きました。

ケサ なるほどな。うちのおばあさんがいう話やが、ある夜中、女が髪を洗いよったって。「どげんしたか」というと、「便所の上から唾を吐かれて汚いから髪を洗っている」というたそうです。だから、今の人はせんけれど、女は洗い髪で外を歩くな、油でもちよつとつけなさい、ということをおたしは守っています。

キヨ ばけもとの間違えらるつからな。

今でも流れ川には絶対おしっこしません

遊地 北海道にアイヌ民族という人達がいて、川にはカムイというて神さんがおるから、絶対に川に小便をしなかつたそうですよ。

盛男 ここでは今でもせんよ。流れ川や溝にはしません。昔から教えられてきたことです。それと、ミミズに小便をかけません。ミミズの毒というのは早いよ。すぐちんちんの先が腫れてかゆくになりますよ。何度も経験があります。毒といつても、小便をかける時だけの話で、手でもつても、殺してもなんとありません。

ケサ 流れ川におしっこをしたら、熱を出したり、ちんちんの先が腫れたり（笑い）するので、絶対にいけません。

盛男 川とか溝には、おしっこやうんこは絶対にしません。小さい時、おしっこをしてから、しまった、あそこは水が流れとったと考えたものです。

ケサ 熱が出たりするような難しいときは「水神様にさわっている」と言われて、お寺でお払いをしてもらいました。

昔の人は感心ですなあ 産婆さんの話

遊地 ところで、お子さんは何人おられますか。

キヨ 六人いました。長男が欠けているばかりで、あとは健在ですよ。

ケサ うちの長男は戦死しました。次男は東京、三男が滋賀県、四男がいまここに来ている盛男で、いつもは宮崎県に住んでいます。宮之浦に残っているのが、長女の桑原ヒルです。

遊地 子供を産む時は、自宅でされたんですか。

キヨ 初めての子供はわがふるさとで産むもんでした。二番目からは嫁にいった所でね。

ケサ 産婆さんがおりましたよ。まあ、昔の人は感心ですなあ、学問もなし、そういうことも習わんじおって。

キヨ 習わんじおって自分で子供を産ませてね。年寄りの産婆さんで。

ケサ あと（後産）もちゃんとしてやってってくれてなあ。

貴子 産婆さんは、宮之浦に何人もいらっしやっただんですか。

ケサ いやいや一人。その産婆さんは、昼間っから焼酎をものすごい飲む人やった。でも子供の生まるつときになったらしっかりしとったもんや。

キヨ タネという名前でみんながタネンボウ、タネンボウと呼んでね。やり損のうたがないとこので評判の産婆さんやった。

ケサ いま元気なら一四〇歳か一五〇歳になる人や。

キヨ わたしたちは、お腹大きくても肥タンゴも馬ン草もかついでやっさやっさ歩みよったよ。今の人はそんなことせんけどもね。

ケサ 産婆さんへのお礼はお金を少しです。その払いもいつでもよかつたんです。遅くなって払えんよつであれば、産婆さんの畑仕事を二日か三日手伝って、それで払いのかわりにすることもありました。

子供のカミハソミの祝いで長寿を願います

ケサ 子供が生まれたら、カミハソミ（髪はさみ）の祝いというのをやります。親戚みんなを呼んでお祝いするんです。健康な夫婦の髪をもらってきてね、自分の子供の髪も切って混ぜあわせて、お供えます。神様に「黒い髪が白くなるまで、白い髪が赤くなるまで」と三回となえます。長生きさ

せてくださいと祈る気持ちですよ。そのあと、酒の盃と吸い物を、口をつけるまねだけでいいからその子供にあげます。

遊地 子供はどこから来ると教わりましたか。

ケサ 子供は木の又から生まれるという人もおった。へそからとも言いまして。

九つになると子供の厄払いでした

ケサ 子供が九つになると、オビトキといって帯をしめるようになります。小正月になったらその時に九つになる子供がみないっしょに神社で厄払いしてもらいます。その時は新しい餅をついて、お鏡もかざります。家の四隅と家の真ん中のテスバシラ（大黒柱）に、よその衆は、柳の木に大判小判をつけたものといって、かざりつけをしますが、屋久島には柳がひよつとないので、メーノキ（和名エゴノキ）を使いますが、小さい粟餅を金、白餅を銀としてメーノキの枝に挿します。

キヨ お餅は丸いのも切り餅でもいいのよ。

ケサ 翌日の一六日の朝メーノモチは全部下げます。子供たちは、親戚の家でもらって「メーノモチもうけいった」と肩に背負って帰りよった。これが大判小判という意味になるのよ。

キヨ そんなことももう今ではしないもんね。

女は一七歳になればカネツケしたらしいです

遊地 一番変つたのはなんですか。おばあちゃんたちが小さかったころ、また一人前の女になって、今の時代までで……。

キヨ 昔の一七、カネツケ。

ケサ わたしの親たちまでは、女が一七歳になればカネツケとってお歯黒をしたらしいです。歯を黒く染めるんですが、わたしたちはもうそんな事はしませんでした。

キヨ カネツケベンジヨといういい着物をきせて、神社まいりとお寺まいりしよたらしいです。

「テツチャ、誰かおるよ！」 よばいの思い出

ケサ 姉によばいをかけてきた男がおりました。姉が人の気配に気付いて、父親に おとうさんということをごらではテツチャといいますが、「テツチャ、誰かおるよ！」と言いました。父親はその男を追いかけて首筋をつかんだんですが、雨だったので足もとがすべって逃がしてしまいました。桐の下駄が残ってあったので、父親は夜中というのにそれをヨキ（斧）で割ってしまいました。

ところが、朝起きてみたら、魚捕りの網と縄がめちゃくちゃに切られていたんです。トイヤバイという上等の傘なんかも切られていました。いったい誰がやったかわからなかったですけど、一〇年ほどしてわかりました。よそから来ていた旅の人だったんですよ。

よばいのことを夜語りともいいますが、一〇歳年上のわたしの姉のころまでは盛んでした。それで結ばれた人もおりました。でも、わたしたちの処女会時代にはもうなかった……。

機織りもしました

キヨ うちの母は、木綿織りをしよつたです。今でも大島紬の機をたててあるおばあちゃんが二人ほどいます。わたしも織物をしました。若いころ鹿兒島の大島紬の工場へ入つたことがあります。鹿兒島見物があるから……といつて行つたきり、紬工場へ行つて半年くらいおつたんですよ。わたしが二〇歳のころに種子島の桜井という医者さんのおじさんが宮之浦で紬織りをはじめた時には、忙しいけれど親にも「行かして行かして」といって、雨の時だけ行かせてもらいました。天気の日はその仕事がありますが、それでも夜二時間ほど行つたりしていました。

サバと黒砂糖の交換をしたことがあります

ケサ 嫁に行く前、前の町長さんの家の近くに製糖用の水車がありました。めいめいの家でキビを作つて、自分の家で食べる分は絞つて製糖していたんですね。嫁にいつた後からは、製糖をする人がなかつたです。下屋久（現在の屋久町）の方は、砂糖製造が盛んで、あつちの砂糖とこちらの物を物々交換したことがあります。網でキビダコ（和名キビナゴ）を捕つて、砂糖と換えたりね。ある時、麦生の知りあいのところへサバを担いでいったことがあります。船をつくつたのでお祝いをするのに魚がいるというんです。塩してからからに干したサバビンタ（頭）に、やっぱり塩して干した身も少し入れたものを一斗缶に入れて担いで行きました。身はだいたいフシ（サバ節）製造に使つんです。

それにビンタの方がうまいです。食べるときはゆがいて食べます。麦生までいく途中には、橋なし川もあるし、恐ろしい一本橋も渡つて……。朝こつちを出て向こうに泊るんです。帰りには、その缶に三分の一ぐらい黒砂糖を入れてくれました。

遊地 物々交換ということを方言で言つとどうなりますか。

ケサ カエルというな。「ワンネノモント ノガンノモント カエテクレンカ（わたしのものとあんたのものと 換えてくれんか）」というふうに。

女でも飛魚捕りに行きました

ケサ 女でもトツビヨ捕りに行きました。一網千両というて、たくさん捕れる時のトツビヨは楽しみなものでした。

キヨ ここらは本当の漁師でないから、水夫がいないですよ。だから、おなご衆が櫓漕ぎにつれていかれたんですね。ヒヨーン、ヒヨーンといいながら、おもかじ、とりかじの調子を合せます。それが合わなければ船が進みません。座つちよつて竿が届くところになれば、方言でミザオといいますけど、竿を押しします。そうすれば、一人で五人分進むといいました。わたしは小学五年生の頃から櫓で漕ぐ漁に行きよつたんです。

トツビヨの金を全部貯金する家もありました

ケサ うちの実家では、トツビヨを捕って入ったお金は全部貯金しました。キビダコなんかの残りの魚は食べますよ。鹿児島銀行に貯金していました。こういうことはよっぽどの人でないとやらんかったですよ。宮之浦でも商売する人とか二人か三人の人がやっただけですな。

キヨ そうかと思うと学校のお金を持って行けずに泣く子供がいました。サバのお金が入らないと払えなかつたんですよ。

新築の家に入る時は塩、焼酎、米、味噌を飾ります

ケサ 家を建てるときは、棟上げのお祝いが大事です。シトギの餅を投げて、家の中は神様に花とお灯明と酒をあげます。そして、いよいよできあがって今夜からここへ住むという時は、人をよんで儀式をします。その時に持込むものは、塩と米と焼酎とお味噌。これが家の一生の所帯でしょうが。

キヨ 所帯の頭(かしら)になるもの。

ケサ これだけをちゃんと床にシコツテ(準備して)お祝いするのよ。昆布も「よるこぶ」やから飾ります。

六月は味噌搗き祝いです

遊地 それじゃあ、それだけの「所帯の頭」を用意する時に、女の仕事として大切なのは何でしょうか。

ケサ いろいろあるけれど、味噌作りの話をしましょう。味噌を作るのは、年に一回、六月でした。ほかの仕事がゆつくりでそんなに忙しくないから。四、五人で結いをして作ったもんやった。まず、大豆を六斗買ってきます。自分で作った麦を八分搗きほどにして、三斗ほどの麦こつじを立てます。正月餅に付いた青いカビをとって置いて味噌のこつじに使いますよ。六斗の大豆を煮たら、臼を二丁そなえておいて、長さ二尺ぐらいの手杵で三人くらいで搗きました。できあがりは一抱えほどの壺に二つか三つあって、うちでは、六斗の大豆で作ると、一年中食べて残るほどありましたよ。

キヨ 味噌搗き祝いのために、お金に余裕がある家は、豆腐を豆腐箱に一つ豆腐屋に頼みます。これは醤油をちよつとたらしで食べました。

ケサ その準備ができない家ではかんとたんにおソウメンをゆがいてもいいです。それを皿に盛って上から暖かいシタジをかけて食べます。豚の肉かクジラの煎じがらに小さく切ったネギを載せます。お米の白か御飯に、砂糖と醤油味で炊いた大豆まめが付きますよ。これは味噌の豆ですが、少し堅い方が美味しいので、途中で釜から出しておきます。魚があれば魚を付けます。今は何にもとれんけれど昔はたくさん捕れたから。

キヨ チヨンボ(里芋)があれば煮しめにして出してもいいけれど、六月になればチヨンボも少なくなるからね。チヨンボもカライモも屋久島のもが一番おいしいと言われておるよ。その中でも宮之浦のがまた一番おいしい。

遊地 はあ、なるほど。

ケサ 味噌が搗きあがった晩は、親戚一同、子供もみんな三、四人でもつれて、味噌搗き祝いに行きます。味噌搗き祝いをしないと、良か味噌はできません。

醤油は皆買いよったです

キヨ 醤油は皆買いよったです。作る人は二軒か三軒だけだったでしょう。長井三郎さんのお母さんが作りよったかな。

ケサ ショコハチ（和名シャリンバイ）の実というのを入れて醤油の色を付けているのを見ました。
が。

焼酎づくり

ケサ 七つで小学校へ出たころは、家で焼酎を作って、一合、二合と量って売っていました。そのころは税務署もやかましゅうなかつたんでしょう。停戦のあとは、みんな巡査に見つからんようにそつと作りました。

味噌を作る六月は生活が苦しかったですね

ケサ 六月は、味噌を作るためにお金を貯めておかんといけません。大豆の他に、麦を作らん人は、麦を一俵も買つんですから。ですから、六月は生活苦しかったですね。

一度、うちのだんなさんが道路工事の土方に出いたら、その親方が逃げたお金がもらえんとても困ったことがあります。その時は、母がおやじに隠れて差し入れてくれました。三五年前、親子五人、月々五千円でどうやって暮しますか？

茶碗一杯でいいから味噌を貸してくださいよ、と知りあいの所へ言うて来る人がありました。味噌を少し貸してという人は、親戚ならたいてい返さんですけど、「はいはい、持って行かんか、戻さんでもいいから」といつもあげる家もあれば、たとえ親戚でも全然貸さないという家もありましたよ。実際すれば金がかかるという考えでしょう。

転んで肥やしを頭からガブツとかぶったこともあります

ケサ よう働く女は、一年中コエタンゴ（肥えたこ）を手から放さんもんでした。肥やしを野菜もんにかけるんですが、肥やしをかついで、うさぎの道みたいな細い坂道を通って、畑へ一日に一〇回も一三回も往復する女の人もありました。このおばあさんの畑なんかは近いもんですが、わたしら財産がないので畑が遠いんです。

キヨ 学校の日曜には、親が待つておって、麦にまく肥やしを担わせよったよ。

桑原 わたしたちまで一斗カンにふたつずつ担いよったですよ。

ケサ この子には、学校の四年生から担わせました。

桑原 わたしなんか、坂でこけてね、肥やしを頭からガブツとかぶったこともありました（笑い）。

遊地 ひえええ！

ケサ 都会の人には聞かせたらそのおばあさんたちは嘘を言っているというかもしらんが、本当のことよ。

遊地 肥やしは便所から汲んで薄めないでそのまま掛けるんですか。

桑原 きれいに溶けたのをそのまま行って行って掛けるのよ。

ケサ 濃い時にはな、炊事場の流しの水の出るところへ壺をつくって溜めたもので薄めました。また、そうせんと一面の畑へかける肥やしが足りませんよ。

キヨ その壺をシヨイナゲというのよね。

遊地 あれ、強くないですか、人糞そのままでは。

ケサ 昔はそれでよかつたのよ。今はな肝臓とかなんとか病気があるから危ないかもしれんでしょう。昔なんかそんな病気の名前を聞いたことはなかったですよ。ただ、十二指腸（虫）とかシラガムシ（蟻虫か）というて、糸くずよか小さい虫なんかが出よつた。はだして泥に入るし、掛けて一週間もしたらもう食べたしなあ。

キヨ 肥しをまいても、雨を一雨降らせば、それでももう食べたもんな。

ケサ 他の人はもう、こんな話をしないよ、恥かしいつちゅうて。先生たちにこんな話を聞かすというて、部落の恥になるという人もおる。

貴子 そんなことはないです。現在、山口でもまいているのを見ますよ。

遊地 うちも汲み取りですから、二畝（六〇坪）の畑に撒きたいんですが、近所の方が顔をしかめるかなと思つてなかなか撒けません。

ケサ 「街中におつて、人の臭いということ知らんじ」というて文句をいう人もありましたが、食つていかにやならんもの……。

遊地 他人のは臭かもんなあ（一同爆笑）。

ケサ 今はもう恥じやないから、あんたたちがこういうことを聞きにくるでしょう。それじゃからわたしなんかは事実のことを話しますよ。

キヨ 自分のことでも他人のことでも、言っただけ言つてみゃんかい！（笑い）

壺を早く上げると家が飛ばされます 台風の心得

ケサ ここは、川に近いから、よう水をつく所だな。昔は毎年七つも八つも台風がくるし、そのうち、三つか四つぐらいは大きいもんです。だいたい壺の上一尺近くは上がるもんやつた。二軒隣の長井三郎さんの家なら、まあ、ほとんど壺の上まで水が上がることはなかったけれどもな。今は、工事をして川が低うなつておるからここでも水は上がらんですが。潮が上がって来る時はな、壺を上げんといかんけれど、こつちの人は、潮の上がり具合を見て上げて行きます。早く上げ過ぎると下から風が入って家が飛ばされてしまいますよ。そうやって毎年四回もやっておつたけれど、ある時、急な増水でとうとう壺を全部濡らして駄目にしたことがあつたな。子供らも慣れたもんで、首まで水につか

って避難するのを面白そうにやっています。

夜中に砂を運んでガーツパドンと間違われました

ケサ 昔は、この家の敷地の半分くらいまでは川やった。それで、川原の砂をかついでは、家にもってきて入れては少しでも地盤が高くなるようにしておった。

キヨ わたしは嫁に来てから少しでも屋敷の地盤を高くしようと、人もたのみましたが、馬小屋と豚小屋の土を高くしようと思うて、川から一斗缶に砂を担ってきて屋敷に入れましたよ。三晩、潮の引いた真夜中に三時間ずつ砂を運びましたが、知らん人が橋の上から見て「ガーツパドン（かっぱ）」かといわれました。

ケサ 夜中に潮引いた時に土をはこびよるから、そう思われたわけよ。

キヨ その時は、月が冴えとらんかったから、犬が吠えるでしょう。

ケサ 千人の人がおれば幽霊は出てききらんから好きなようにしていいけれど、宮之浦に千人もないのに、幽霊と間違われるようなことをするもんじゃないと、うちのばあさんはいいました。

おはなしがごちそうやから

遊地 いやあ、ガーツパドンですか。ますます面白くなってきましたね。おばけとか幽霊の話をもう少し聞かせていただけませんか。

ケサ それじゃ、いつぶくしてみんなでいっしょに御飯を食べましょう。ビールも飲みなさい。なあんにも食べるものはないけれど、おはなしがごちそうやから。

キヨ 昔のことは書き取らんようにいくらでも出てきます。

野も山も海も川も神々の住い 上屋久町宮之浦・中島キヨさんと本溜ケサさん

見えない世界との出会い

引き続き、宮之浦の脇町の仲良しのお二人の女性のお話に耳を傾けましょう。心おどるお話がたしかに一番のもてなしであり、豊かなごちそうであるということをしつかり教えていただいたのですが、お二人のお話もいよいよ佳境に入ります。

屋久島の川や山に住む妖怪たちが遊びまわる時空を、面白がってほっつき歩いていると、急に背筋が寒くなります。お二人のお話に相槌をうちながら、うかがっているうちに、わたしは魂がふるえるような屋久島の精神世界にゆきあたり、いつしか深みにはまりこみました。

そこには『遠野物語』で柳田國男が「願はくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ」と待ち望んだものが幾重にも降り積もっています。

そして、大いなる自然に守られて慎み深く生きてきた、日本のそして世界の先住者たちの宇宙観と同じ泉から湧きだす智恵の水脈が、少なくとも屋久島ではまだ涸れていないこともはっきりと感じとれましょう。

話し手の皆様に下原稿を見ていただくにあたって、前回に引き続き、中島セツ子さんのご助力をいただきました。植物の和名はトヨタ財団の助成で「植物の宝庫と言われる屋久島で人々は植物とどうつきあってきたか」を地元の人たちが中心になって調査した「おいわーねっか屋久島」の研究成果に負っています。ありがとうございます。

ガーツパドンに尻を抜かれる

遊地 中島さんが、家の敷地を高くするために川の砂を真夜中に運んでガーツパ（ガラツパ）ドンと間違われたという話でしたが……。

本溜ケサ ガーツパドンにつかまれば尻からシーゴというて、はらわたを抜かれるというんで怖がったわけですよ。シーゴというのは、普通は肛門のことですがな、川で溺れて死んだ子供なんかの体を調べてみるとわかります。ガーツパドンにやられて死ぬと、尻の穴がツバキの花のようになってるらしいです。わたしなんか目で見たわけじゃないけれど。

遊地 こんな家の近くの川にもガーツパドンはいるんでしょうか。

ケサ ガーツパドンは、川があれば、どこにもおるっていいですよ。

中島キヨ 伝説では、鹿児島島の川内川と屋久島の安房川は兄弟川といわれています。じゃから、こっちの川で抜かなくても、あっちの川でシーゴを抜かれるということがあるんです。

人をおどかすヤマワロ

遊地 あと、どんな種類のおばけがいますが、この屋久島には（笑い）。

キヨ 見たことはないけど、ヤマワロ。

遊地 ヤマワロはどんなところにいるんですか。

ケサ 田のやぶでも山の中にもおられます。

キヨ 高い山に竹の子を取りに行った人がね、向こうの山で竹の子をガクンガクン折る音がするのよ。

ケサ こっちは、「ああ、向こうの方に人が来ちよつとや」と思って、あとで見ると誰もおらん。竹の子を折ったあともない。これはヤマワロのおどかしよ。昔は、世が開けなかったからばけものが多かったとでしょう。

生魚の目を抜かれる

遊地 奄美や沖縄の、ガジュマルなんかの大木には、ケンムンとかキジムナーという名前の木がいることがあります。これとうまく友だちになると魚捕りを手伝ってくれたりするんですが、そのかわりに、捕れた魚の片目をみんな抜かれても文句が言えませぬ。

ケサ 屋久島でも魚を外に持ってあるくとき、生のままやと必ず目を抜かれるから、ちよつとでも塩をつけて持って行けといいます。うちの父なんか、停戦後までいいよつたですよ。

キヨ そんなことが実際にあったから、そんなようにいうたんでしょうね。魚をツンヌイテ（ひも等で貫いて）背負うて歩けば、知らんうちに必ずやられるといいました。

遊地 捕った魚を海から持ってくる時ですか。

ケサ いや、その時はいいのよ。夜だけのことで昼間は心配ないのよ。そのかわり夜なら、まねことても塩をちよつとつけてもっていけよ、といわれました。

遊地 なんとという者が魚の目をとるんですか。

ケサ それもガーツパドンのしわざよ。

貴子 屋久島の人が山仕事に行く時の弁当には必ず塩をした魚をもつていったそうですね（第五章「探しあてた縄文杉」参照）。

キヨ 山仕事する人が、山に小屋を作って泊ったりするときは、おうちから魚をもつていくでしょう。夜になった時、塩をしちよらんによそんなようなことがあるわけ。

サンボンマチのヨメジヨ

ケサ 今、上屋久町の役場があるあたりは、サンボンマチという所で、以前は「メン」が出るといいよつたのよ。

キヨ メンというのは、ばけものことですよ。

ケサ サンボンマチは、ビー（和名サンカクイ）とヨシが茂っている泥沼の谷間でした。女が髪に何もつけずきびらんでそこへ行けばかならずサンボンマチのヨメジヨが出てきて、そこに生えているビーで頭をきびろつとするといわれました。だから子供のころからあまりあそこへは行かんかったで

す。子供らは、節をつけて「サンボンマチノ ヨメジヨ アタマユーテ クーレンカ」というように歌ったりもしましたよ。

キヨ ビーは強いから、アクマキ（灰汁で炊いたチマキ）なんかもきびります。

ケサ 子供には、ボタンコ（豚の仔）がでるぞ、というておどかしました。あそこは潮が満ちてくることも知らんで子供が遊んでいると危ない場所やからね。

キヨ 水路があつて、ヨシがユツサユツサしてたくさん生えていたのに、埋め立てて、今はきれいに離島総合センターができていますよ。あのヨシは、馬に食べさせたり、トツビヨ（飛魚）を干す時は下に敷いたりして使いました。

ケサ 島を出たうちの子供たちは、たまに帰ってくると「自分たちがウナギをとったり、エビをとったりしたあのサンボンマチをなんで埋立てたのか」と、いいますが。

遊地 サンボンマチというのは、どういう意味ですか。なにかが二本あったんですか。

ケサ 松があることはありよつたけれど、松は方言ではマツやから、サンボンマチの意味はわからんですね。

春の彼岸に山から降りてくるヒヨコンヒヨコン

キヨ ヒヨコンヒヨコンというのもおります。

ケサ ヒヨコンヒヨコンは、春の彼岸に山から川に下がってきて、秋の彼岸になると川から山へ戻っていくという伝説があります。脇町にタンノコーという川があつて、そこに鍛冶屋があつた。そこのおばさんが、夜寝られなくて、軒下の大きなシイの木の所に夜中座つておつたそうや。そうすると春の彼岸になると、ガールパ とはいわんで、ヤマンモン（山のもの）といいますが それが下がってきて、ヒヨン、ヒヨン、ヒヨン、というのを聞いたという話です。

キヨ ヒヨコンヒヨコンは、秋になると、脇町に流れておるタンノコーという川を上がつて山に行つて、冬の間は山におる。

ケサ あっちもヒヨン、こっちもヒヨンとたくさん鳴くの聞いたといえますよ。ヒヨコン、ヒヨコンとも聞こえる、鳥の声のような鳴き声がなあ。

遊地 沖縄の西表島のおじいちゃんの話では、夜の海辺でバシャバシャやりながらヒヒヒヒッ、ヒヒヒヒッ、と甲高い声で鳴くものに二度出くわしたそうです。いっしょに歩いていた先輩が「ガラッパだ、あれと相撲をとらされて負けると」「三年しか命がもたん」といので、命からがら走つて逃げました。大正時代のことだそうですが、これは、わたしがご本人から直接つかつたお話しです。

命びろいした志戸子の人の話

ケサ 志戸子にイカを捕る人があつて、いつもは二時過ぎてから漁にでるのやが、ある晩のことです。この人の甥がいっしょに漁に出ようと誘いに行つたら、なかなかそのおじさんが外に出てこん

のです。「ちょっと待て。ワー（おまえ）も上がって茶を飲まんかい」というので、上がって話をしておると、「今夜、海に出て行くと大変なことが起きるから、もう少し待て待て」というんです。そうしているうちに、とうとう夜が明けて、その日は海には行かんということになりました。外に出てみたら、唾の濃いいのを軒下に吐いてありました。これは、海で捕ってやるうと待ち構えていたガーッパドンが、いつまで待ってもおじさんが出てこんので、怒って唾を吐いて行ったらいいですね。そのおじさんは胸騒ぎがあったので、あやうく命びろいをしたという話です。

キヨ 昔はこういう話があったと伝えてきたことですよ。

水の出ない井戸

ケサ わたしの旦那さんは、井戸を掘る人でな、前にも言ったように宮之浦の井戸を一二〇箇所も掘りました。そのうち、水が出なかつたのは、たった一箇所だけ。ひとつ二尺の高さの輪をはめていくのやけれど、その五つ分くらいで水が出るやろつと請け負つたんです。それで二つ分くらい掘つたところで、もう水が五寸くらい湧いていたので、もう少し本当の水になるようにと掘つたけれど、掘つても掘つても水が溜まらん。とうとう、一六も（つまり三二尺〃約一〇メートルも）掘つたけれど、だめでした。まわりの人が、もう危ないからやめてくれというて、やめました。始めの予定のお金だけはもろつたけれど、えらい欠損やつた。

さあ、その後、これは何かの神様が関わっているのではないかなと心配しました。でも、仮にサワリがあつたとしても、これは頼んだ人の方で、頼まれて掘つた人には、何も関係がなか、ということでした。

井戸を埋める時は人形を入れる

ケサ この家はシラムシ（白蟻）が入つたんで、二年前に建て替えたんです。その時に井戸を埋めたけれど、ただでは埋められんです。人形を底に入れてから埋めたからなあ。そしてお坊さんと呼んで読経してもらつたけれど、家を建てるときの読経よりは相当長い念入りなものやつた。つまり、井戸を埋めるといふのはそれほど大変なことというわけや。

本溜盛男 井戸は、なるべくパイプでも出して埋めんようにするんですが、このうちは、敷地のつごつでもうしても埋めんわけにはいかんかつたんです。宮之浦でも、埋めた家は少ないんじゃないですか。どんな人形でもいいから人形を埋めるのというのは、人柱という意味らしいですが。

わたしが今住んでいる、宮崎県の小林市でも家を建てる時は神主を呼んで地鎮祭をしますが、屋久島のお坊さんのやり方はそれよりもつんと念入りで感心します。

神風にあっていますから

ケサ 東京に出て一〇年ほど働いていた屋久島の女の人があります。ちよつと島に戻ってきて、東京へまた行くというので、発つ前日に会うたら、いつもはあんまりしゃべらん娘がべらべらしゃべるん

ですよ。それでわたしは、一、二、三日出発を見合せてみなさい、というたのよ。翌日、わたしがお墓まわりに行ったら、その娘がお寺さんから帰ってくる所に会いました。「おまえ、どうしたの」と聞いたら、「今日行くから、お寺さんにお参りしてきたのよ。今から神様の方へ行く」というから、「そりゃ反対やが。神様の方に先に参るのがあたりまえや」とわたしは言いました。

キヨ 家の中でお灯明をあげるときもその順序やもんな。

ケサ その娘が東京に行ってから、どうも調子がひどく悪くて、足もたたなくなつたので、わたしに電話で頼んできました。そついうのを見る人をここの方言ではカミサマといいますが、そこへわたしがかわりに行って、調べてもらつてほしい、というのよ。カミサマがいうには、「出発前に相談に来たから、見合せなさいというたのに……。神風にあつていますから、こつちでお払いをしておきます」ということでした。お払いをしたらまもなく良くなって、今は島にもどつて大元気でみかん山で仕事をしています。

キヨ 「神風にあつている」というのは、神様が通るところへ、その本人が通りがかった、ということですね。

シジン様にさわっている

ケサ タ方なんか、あんまり川に長いことつかつてっていると、川にはシジン（水神）様がおるからといます。子供が熱を出せばお寺さんに行つたんです。すると、この子はシジン様にさわつちよる、

ということが多かつたです。みみずにおしっこかけてなるのと同じような具合やつた。

キヨ ちょっとヘンゴツがあれば、シジン様に触つたとか、神風に会つたといつてでしょう。

ケサ ヘンゴツというのは、「何か変なこと」という意味です。

キヨ 毎日、畑に行くにも田んぼにも行くにも、川を渡ることが多いでしょう。ですからね、シジン様のことは気をつけるですよ。

若水汲み

ケサ 年の晩は、除夜の鐘が鳴るでしょう。一番鶏が歌うときに、若水を汲みに行って、それでお茶をいれるのよ。脇町は井戸が少なかつたから、一〇人も二〇人も待つてな。待つうちには夜が明けてきます。

キヨ ろうそく燃やして、神様にも仏様にもお茶をあげます。その茶の葉は、八十八夜に摘んで、その日のうちに仕上げたものでないといかんの。

ケサ 元日の朝、そのお茶と梅干をいただきます。

キヨ かたい家というけれど、年寄りのおる家は、難しかナラワセ（習慣）をしよつたの。若い者だけの家では「エエイ、そんなこと、カンモタゴツカイ（かまうものか）」というてやらんかつたかもしれんが、若水汲みをやらん家はなかつたでしょう。

トイノカンサマ(年の神様)

遊地 このあいだ、大晦日に、脇町にもトイノカンサマ(年の神様)が四人ばかりいらっしやって「泣く子はおらんかあ」と大声で探しておられました。昔はどうでしたか。

ケサ 一〇人ばかりで来たこともあるよ。「うちの子供がひとつもいうことを聞かん、勉強もせんから来てくれんか」というて青年の衆に頼むのよ。

キヨ 岳の山から下がってきて、子供に魂を入れてくれるの。

ケサ ヤイシヤマへんを通って下がってくる、と言いよった。孫は四年生やが、あれが来ると震えちよるよ。

キヨ 昔は、今のように白装束に太鼓といういでたちやなくて、そのままの姿やから、障子を開けんで、子供には姿を見せんよ。

ケサ 「いうこと聞かにはこのカイトンゴに入れてヤイシヤマへ連れていくぞ」といいました。

キヨ カイトンゴというのはイモの蔓を入れるひとかかえもある籠よ。

遊地 カイトンゴに入れられた子はいないんですか。

ケサ いやいや、もう、怖がって親にしがみついたらね。

キヨ うちの孫なんか、三つするときタマガツテ(驚いて)熱だしたこともあるよ。熱さましの薬を飲ませました。

御岳の神様は潮水のついたものがお好き

ケサ 青年の衆が四月八日に日帰りで岳参りに行きます。岳参りはもう一回あって、九月か一〇月、新米を穫った時分に、三日泊まりで行くのよ。鍋、羽釜も何もかも持って。

キヨ その時に、ダチク(和名ダンチク)の葉で作ったツノマキに浜辺の波打ち際の砂を入れて、御岳の神様へもって上がるの。御岳の神様は三所やから三つきびってもっていく。宮之浦、永田、栗生と三つな。

遊地 山の神様が海の砂をお好きというのはどういことですか。

キヨ これは、昔からのナラワセやからね。今は手ぶらで行く人もおるらしいが、それではせつかく行っても行つたかいがなかな。

ケサ 田んぼの水口に、ツノマキと飛魚の生か、干したのと焼酎をもっていくこともあつたみたいな。

キヨ 田の神様にあげるものは、たしか生米を入れたツノマキやった。

本溜 今は、宮之浦は浜辺が埋まって降りて行かれません。うちの子供らが学校時代には、きれいな砂浜でしたが。

キヨ 旧の一月二三日には、カンビン(徳利)にシュエー(潮水)を汲んで、ササシバ(和名シノメダケ)をとってきて神棚にあげて。

ケサ 翌日は、そのシュエーを清めに撒いて、子供も元気に、家内中みんな怪我もないように、家

も栄えるようにというて、願うのよ。

オセンを引く

ケサ 昼間はけるっとしているのに、夜になると高い熱がでて、一二時ころになってもいつころ熱が引かん。それが三晩も続くとかいうときには、何かのサワリ、祟(たた)りがあるのじゃないか、と考えるもんでした。そういう時は、お寺さんに行きます。そして、オセン(御籤)を引いてもらって仏さんに尋ねます。当たるも八卦当たらずも八卦といえますわなあ。そのあと、お坊さんは、お題目を唱えてお払いをしてくれます。

うちの婿の時には、二回オセンを引いてもらいました。

夜明けの夢は正夢

ケサ 三三年ぐらい前のことです。わたしはたまたま大阪の娘の所に行っておったんですが、ちょうど年の晩(大晦日)のことでしたが、妙な夢を見ました。うちの上の娘の夢です。

その夢で、わたしと娘が渡し舟で川を渡ろうとしようたら、いつころに舟が来んもんで、むこうに神社がありますから、そっちへ二人で行って見たんです。娘は赤ちゃんを抱いて、わたしは舟に乗った。後を見てみたら、うちの娘が乗っちゃらん。もとの役場はその川の口の方にありましたから、そこで舟を降りたんですが、うちの娘はどうしたやろつか、と心配で泣く泣くうちに帰ってきました。

そうしたら、隣のおばさんがいうには、「ああ、心配せんでも良かが。ワンの娘はアメリカ人にかまりそうになっただけけど、つかまらんで、頭を少し打っただけやから、じきに戻ってくる。」

とこついう夢やったのよ。「変な夢やったが」と思つて時計を見たら、四時が打ちました。「あら、四時じゃよう。変な夢やねえ。」

そろそろ夜もしじらと明けてきますが、さあ、心配になります。それから午前一〇時と午後三時の郵便配達で、手紙が来てないかのぞきますが、何にもきません。とうとう二、三日してわたしは大阪の娘に嘘を言いました。「どうも血圧があがって、調子が悪いから、島に戻らしてくれんか、じいさんもおつてから」と。

婿が大怪我をしていたのです

ケサ 島に帰ってきて、まだ宮之浦港は築港されていませんから、通い船(はしけ)に乗りました。その通い船の櫓をこぐ人が、わたしの顔を見て「あら、おばさん、おばさんは、心配して帰って来たの」といふんです。「誰か怪我でもしたのと違つもの」と尋ねたら、「ワー知らんやっとな」というて口をつぐんだんです。

こりゃあ、何かあったがと思つて、まっさきに港へ降りました。そしたら、近所の娘さんが誰かを迎えに来ていて、「おばさん、わざわざ心配して戻ってきたな」といふんです。婿が工事現場で大怪我をしたけれど、もう一週間すぎたから大丈夫やということでした。あの夢を見たのが四日前になる

んです。

聞いてみたら、腎臓を取らんといかん大怪我で、七人の人から血をもらって手術をしたんですよ。翌朝、入院先の安房へ向かうまでの一晚の待ち遠い事。行って会ってみたら、もう自分で立って便所にもいけるくらい元気になっていました。娘は一歳の子供を抱いて病室にいました。小さい三人の子供をかかえて、稼ぐ人は入院。手術代もかかるし、頼れるのはわたしだけということ、娘はとても心配をしていたんです。そして、教えてくれた人が隣のおばさんだったというの、夢のあたっていたところでした。

うちのおばさんは、「夜明けの夢は正夢」といつもいいよりましたから、わたしは心配したわけです。

キヨ わたしのおばさんにもなるのよ。川崎インという名前です。

「野も山も海も川もわがもの」という考え

ケサ ところがそのあと、婿が風邪を引いて、保養をすることもできないでしょうが、なかなか元気になるんです。そして、「親子五人イケンシテ（どうして）食べばいいか」と、夜中までそればかり口走るのよ。お医者さんに見てもらったら、「肺炎になりかかってるから、決して動いてはいかん」といわれます。表の間で寝ておったので、お医者さんにいわれてそこで小便を採らせようとしたら、婿が「こんなところでおしっこを採れば神様にはちがあたる」というて、絶対採らせんとよ。

それで、カミサマに見てもらったことにしました。ここの地の人で、女の人でした。

キヨ カミサマする時は、白い着物を着るもんじゃった。

ケサ 尋ねて行ったカミサマ役のおばさんがいわくには「ワネの婿はよ、昔も腰が痛い、足が立たんというので、うちの弟がオセンを取ってきてあげたことがある。その時は、この人は、「野も山も海も川もおがもんじゃ」という考えで、時も日も嫌わんで……というオセンやった。神様たちがその人にバチをかぶせんにゃかぶせる人がおらんというオセンがおりた」と。

そうしたら、婿は「それ以上聞かせんで、おばさん、あとで聞きます」というて尻込みして、背負われて帰っていったというのやが。そのおばさんがかわりに神様たちにお詫びをいうておいてくれたら、その日の夕方には婿はもうシャンシャーンと歩けるようになったって。

キヨ あの人の詫びが通るわけやね。

ケサ 怪我をしたようすを説明したら、一週間の間、自分は人のオセンを引けない事情があるというて、別のよくあたる人を紹介してくれました。それで、こんどは紹介された女の人のところへ行きましました。

そうしたら、「腎臓を取って体が弱って風邪をひきこんでいるだけで、心配ないが、ひとつだけ、あなたの所は忘れておる法事はないか。帰ったらすぐに仏壇の花をあげかえて、お菓子でも果物なんでもあげてお茶を飲みなさいよ。かどかどの掃除は明日でもあさってでもいいから……」というんです。

ところが、婿の母親が、今朝花もかえたし、お茶もあげたところやから、そんなことはせんでもいい、というのや。そこへ次男がきて、はっと思いだしたのよ。そこのおばあちゃんの二三年忌をすっかり忘れておったことを。それで、あらためて花を換えて、お茶もお菓子もあげました。そして、あげたものは川にもって行って流しました。言われたとおり、途中人に会わんようにしてもっていきます。会ったとしても知らん顔をするんです。

流して帰ってきたら、「神様のばちがあたるから、おしっこを採らせん」というていた婿がその部屋でおしっこを採ってもらっているのよ。それから熱もずんずん下がってきよった。その後、元氣になつて二〇年も小学校の用務員を勤めたからな。

そうじゃから、当たるも八卦当たらぬも八卦というのはそのことやと思つて、わたしは信じきつちよつど。

昼は人間のもの、夜は神がみのもの

遊地 「野も山も海も川もおがもんじゃ」といつごとについて、もう少し教えていただけませんか。

ケサ それはな、野も山も海も川も自分のものだという気持ちで、所きらわず仕事をするというこよ。無精な人はそんなに夜も昼も仕事をしないでしよう。婿は馬と牛を飼うちよつたから、馬ん草や牛ん草は、夜になつてからも切ってくるし、お母さんは百姓しつづ豆腐を作つていましたから、昼も夜も親から使われて、海も山も時もきらわず、畑を打つたりもしたんです。昔の衆は、「夜がいつてからタン（谷）など行くな」というたのに。そうせんとシジンサマ（水神様）にさわるといふ。

キヨ 川の中には川の神さまがおられるから。

ケサ まあ、言えばガーッパドンといっしょやけれど……、水神様のことや。田にいけば、どつしでも上がるときに流れの水で手や足を洗つたりせにやならんでしよう。

キヨ 月の夜でも畑を作つたりする人のところには、神様たちが出られるといひます。「夜はこつちのモン、昼はそつちのモンじゃから、夜までこんな所で働くな」と言われるそうです。そんなにいうて聞かされたよ、年寄りなんかから。

ケサ 「昼は人間のモン、夜はわたしたちのモンじゃ」という神様たちの言葉よ。

シユエーを汲む神々に出会つた話

ケサ うちの母がいつも聞かせよつた話です。

お正月にお餅にスタとユズリハをのせてそなえるでしよう。昔は、たくさん飾つたんですよ。米、味噌、鏡、タンズ、テレビがあればテレビにも、祝つところが多かったです。今は昔の三分の一も飾りません。

大昔のこと、ある家で、年の晩になつてお餅を飾るんですが、スタが足らなかつた。そこで、じいさんが「暗くなつてきたけれど、ちよつと取つてくるから」といつてスタを益救神社の所へ取りに行きました。今でこそ神社はあんなに晴ればれとしておるけれど、昔は、暗くて恐ろしいところでした。

ところが、そのじいさんが帰ってきても物も言わない。「こんなに遅うまでかかって、スダもとつてこんで、いけんしちよったか」と家族が尋ねても、何もいわずに寝込んでしもうたんです。家族が心配して、お寺へ行ってオセンを引いたところが、「ものを言つなということと言わされておる」と出ました。それから祈願をしてもらって、徐々に口がきけてきたじいさんがいうには、「自分はスダを神様山に採りに行った時、ちょうど白装束をした神様たちが浜辺に降りて、ハナタンゴという小さい水桶にシユエー（海の潮）を汲んで、上がってこられるところへ行きおつた」というのよ。神様たちがいうには、「自分たちと会つたということ絶対にな。言つたらあんたは命はないよ」と言われた。

「それからというものは、床に寝ておつても、便所へ行っても上から槍が来る、下からも槍が来る、刀が来る。恐ろしゅうて言つことができなかった」という返事やつたが、それで、お寺に、鐘を奉納してようやく許されたということでした。その鐘は、戦争中に供出するまで、一二時と六時に鳴らしていました。

キヨ このじいさんは、マツモオジイというおじいさんの先祖にあたるらしいな。

道を見失う

遊地 沖縄のある島でも、ついこの間、こんなことがありました。ある女の人が、お宮のある丘の森でピロウ（神木のヤシの類）の葉を燃料にしようと拾っていたら、昼なのにあたりが急に暗くなつて、降りる道がわからない。すぐ下でヤギの鳴く声や自動車の音が聞こえているのに、道が見えない。普通なら五分くらいで降りられるところを三時間ぐらい迷いました。そのあと、とっても恐ろしいことになるんですが……。

ケサ 道はそこにあつても、道がわからなくて出られん。そんな時には、やっぱりヤマワロか……。

キヨ 何かツキモンが憑いちよつたでしょう。

本溜盛男 わしは、木挽の仕事をずつとしているけれど、神社の木だけは、いくらお祓いがしてあつても、絶対に切ろうと思わんもんな。

ケサ ここでもなあ、わたしたちの学校時代にこんなことがありました。ある女の人が、初めての子を産んで、朝早く、人が起きたさないうちに、おしめを川に洗いにいったまま、帰らないんですよ。家族が尋ね尋ねて見つけに行ったら、深川という遠いところの海岸に出て、浜に座って柴をかついで海を見ておつたのを助けた。

キヨ わたしたちが見に行った時は坊さんがお祓いをしておりました。

朝日にかしわ手をうつ

遊地 去年、北海道にいきましてね、利尻島というところに渡って、こんな話をきいて感心したんですよ。以前、その島のおばあちゃんが、毎朝起きると、「まず、おてんと様のおかげがありやこそ」といって、東をおがみ、あとは、「海の神様のおかげがありやこそ、山の神様のおかげがありやこそ」

と続けて、大自然の神々への感謝を欠かさなかったといふんです（安溪遊地、一九九二e）。

ケサ わたしは、二十何年、みかん山の二反五畝の畑はじいさんとふたりでするし、薪は手折ってくるし、一晩もぐっすりと寝た晩はなかったけれど。もうじいさんが亡くなってひとり暮らしになって、六年位前に自分の健康のためやと思つて始めたことがあります。それは、朝五時に起きて、着替えをして、お賽銭をもつて川向かいの神社にお参りをするんです。それから浜辺の方に行けば、浜辺の曲ったところにエビス様がまつつてありますから、そのもう少し先の方へ行って、お日様の出て来やつとを待ちます。時にはカセットで歌をふかしながら。

あれをみたことのない人は、全然みないし、すばらしさもわからんでしよう。わたしは毎朝、そこで日の出に向いて、かしわ手を打って、「自分も健康にあるように、元溜家一同、東京・大阪・滋賀県・小林・鹿児島・屋久島、孫たち子供たちもみんな元気にあって、わが家も栄えますように」とそこでまたかしわ手うって二拜、頭をさげます。それからこんどは山を向いて、御岳の神様に同じことばで願います。でも、おどし足を悪くしてな、それからほとんど行っていません。

咳払いで神様に知らせる

遊地 沖縄の与那国という島ではね、トウガラシがあるでしょ、あれを畑で取る時に、いきなり取るなといひます。いちおう咳払いをするか、歌をうたうか、石をポンと投げてもいいから、それから取りなさいといふんです。

キヨ ちょっと、しるしをね。

遊地 これは、神様が眠っておられるから、ゆっくり起きてただかんとよくないという意味だと聞きましたね。染物用の藍や苧麻なんかも同じことだと言います。

ケサ そうそうそう。

キヨ わたしらもね、どんなに小さくても、水の流れている所をまたいで越えるときは、「エヘン」と息づかいしてから渡るもんや。村の中ではせんでもいいけれど。

ケサ 小川でも神様がおるものやから、息づかいすれば、神様がよけていくでしょうが。

キヨ シジン（水神）様がおるから。

ケサ 山に行く時は、山の入り口で「ゴメンゴメン」というのよ。神様が驚いたらバチが当たるから、川でも山でも黙つて通るなと、昔の人は教えたもんですが、今の人にそんなことを言つと、「そんなバカなことがあるもんか」というだけでしょ。

キヨ 信じてきたのにねえ。

遊地 そういふ気持ちをなくしたら、水が汚れ、川が汚れ、海も、人間の食べるものも汚れて、またサルも山に住めなくなつて里に降りてくるようになってしまったと思うんですよ。古くから大切にされてきた智慧を若い人にも知つてもらいたいと思つて、ここに勉強にきています。

ケサ そうよなあ。ノートもつてきて、聞いた方言を書いていく島の若い人もおるけれど、あとはどうなるか知らんよ（笑い）。先生、ビールでもやるか。わたしは遠慮することは好かん。

遊地 はい、いただきまーす（笑い）。

キヨ この話はね、今から一〇年先には、必ず本につづって確かに出てくる、とわたしは思う。わたしたちが名前も写真も出てくる……。その本が出てくるまで、わたしはこの世から動かん。

貴子 とつても面白くて、大切なお話しですから、この島のものだけにしておかないで、いろんな人に知ってほしいですし……。

遊地 中島のおばあちゃんの一〇〇歳の祝いには、もっと詳しくまとめて出したいですね。お二人のご健康とご長寿にあやからせていただきたいと思います。ありがとございしました。

小さい花に生まれない 上屋久町楠川・大石浩さん

一九九一年の夏、上屋久町楠川で過ごした一月余りの休暇もそろそろ終わりに近付くころ、はじめて大石浩さんにお会いしました。貴子が勉強しているチョンボ（里芋の方言）のことを教えていたことがうっかりとお訪ねしたのがきっかけでした。

チョンボの勉強も一段落し、集めておられる民具などを拝見するうちに、歴史や自然についての含蓄のあるお話をいくつかうかがいました。ちょうど小さな台風がやってきました。そこで翌日の八月二〇日は丸一日を大石さん宅ですこし、たっぷりとお話をしていただくことができました。

ここではほんの少しだけ引用させていただきましたが、大石さんは、楠川を中心として屋久島の歴史をほりおこしていくために、たくさんの記録を作っておられます。共感法ともいうべき独特の方法によって描きだされたその内容や絵はすばらしいものだと思います。現在とりくんでおられる歴史のほりおこしのお仕事が実って、広く多くの方々に知られる日が来ることを期待します。

次に掲げるのは、一九九二年の元旦に、家族とともに年頭の挨拶にうかがった時、大石さんが開口一番におっしゃった言葉です。「花」とはなんでしょうか。そして、「人」とは……。

人類は、地球の害菌である。

しかし、思いやりあれば、
花を見ることが出来る。

これから何億年先の人たちが、
花と交流できるか、
それとも一〇年で滅亡するか、
これは人間の心ひとつにある。

祖父は指物師でした

僕はね、大正一一年に楠川で生まれました。母はクラといいます。父は、大石喜平といました。祖父は、作八ですが、本当は作左衛門をなのっていたようです。祖父は指物師で、宮大工もやっていました。

喜平という人は、昭和一六年の暮れに五三歳で亡くなりました。晩年の父は、屋久島の奥山から材木を運び出す仕事をしていました。材木の売り買いの商人だったんですよ。

僕は高等小学校を出たあと、焼畑をしてカライモをつくる仕事を手伝っていました。焼畑というのは、楽ですよ。自然の肥料でできているから、虫もつかないのです。今のように化学肥料で作ると、トビイロウンカがついたり、イナゴが食べたり、イモチ病が出たりして全滅しやすいんですね。

昭和一四年、僕が一七歳のときから丸二年間父の仕事の手伝いをしました。その時は、父は大阪方面に出す板を白谷雲水峡（しらたにうんすいきょう）で鋸で挽いたものを木挽四人を雇って、かついで降ろすという仕事をしていましたね。

板木という杉の板を背中に担いで降ろすんです。長さは六尺ぐらい、重さは僕でもだいたい五〇キロぐらいは担ぎましたよ。

この板木は、薄くて穴があいていないので大阪でセリにかけると高い値がついたものです。貴重品だったんですよ。昭和一四年ころに、いい値がつけば一枚一〇円にも売れました。最高の品質の木なら一〇〇円という値段で売れることもありましたね。当時、一〇円といえば大きなお金で、労賃は、僕なんかサバ節の製造に一日働いてやっと五〇銭。砂鉄とりも同じ賃金です。馬を持って運搬をする人でも一日一円五〇銭でしたから。

水のありがたさも失われてしまいました

すこし、僕が小さかったころの楠川の生活の話をしましよう。
洗濯は川に行きました。洗濯する時には歌があるんですよ。（歌う）

上の川（かみのこゝ）の ちゃぶちやぶ
いっちょう に ちやぶ に

というてね、一つあがった、また一つあがった、というて洗濯したんですね。赤ちゃんのお守りをしながら、世間話をし、歌もうたいながらの洗濯でした。こういう触れあう光景は今は見られなくなりました。

上の川というのは、村の中を流れる小川の水源でもありました。僕が若い当時は水道がなくて、家々の前の小さい溝を流れる水を洗いものなんかに利用していました。ここは、青年たちが毎週きれいに掃除をして、雑巾とかああいう汚れものは洗えません。洗っていいのは野菜なんかですね。今、神社があるでしょう、あんな下の所までも水はとつてもきれいで、その水で魚を洗って、刺身を切る風景が見られましたよ。

この生活用水の上は、臼木（うすき）の大木の下から湧き水が小川となって流れ出していました。複式授業の小学校の水もそこから汲みよったんですね。

その後、楠川地区の水道ができ、簡易水道もできて、ニネギ（担い木）で水を運ぶことがなくなりました。衛生的で便利になったものの、水に対する感謝の気持ちが薄れて、水のありがたさも失われてしまいました。

屋久島が自分の庭であり、家であるという気持ちで

今、屋久島の自然を守る話があるいろいろ出ていますが、屋久島が自分の庭である、自分の家である、という気持ちで歩いて行かなければいけませんね。

植物の立場から言えば、森林伐採をすると、高さ、地形、風向き、湿度もみんなかわります。そうすると、種子木として一本だけ残すのでは不十分ですね。周囲に最低一ヘクタールは残すやり方であれば本当には残せないのです。そして、杉ばかりを植えるのではなくて、実のなるものも植えて、鳥や獣たちの食べることも考えてほしいですよ。動物も人間も花のさす（咲く）ときはお互いに楽しみながら生きていかんといけません。

植物どうしも助けあいをしています。台風の通路にある屋久島では、木に巻き着いている蔓は、木に害をするものではありません。この蔓が両方に引き合って台風で木が倒れるのを防いでいるんです。屋久島に多い、杉と雑木の合体木は、ともに倒れるのを防ぎあっています。それで、長寿の屋久杉も多いんです。

植物をでたらめには取らないで、なるべく屋久の山を増やすようにしてもらいたいですね。そして、植物を採らずに放っておけばそれで自然保護というものでもありません。山は崖くずれするし、台風がくれば花は吹き飛ばされる。だから、そういう所は人間が手助けをする必要があるんです。

山のなかで不思議な声を聞いたことがありました

楠川の東の村の楠川には、村から三〇〇〜四〇〇メートルのところ三、四本の屋久杉がありました。屋久杉も昔は平地にあったんですね。

それから、今はウイルソン株とっている屋久杉の株のようですが、あれは、僕たちは、戦前までは「大株神社」と呼んでいたものです。

屋久杉にかぎりませんが、神木を見ると、こっちは人は「トイサンがいる」といいます。「鳥居さん」という意味でしょうね。これは神さまのことです。

小学生だったころ、親の仕事の手伝いで、夏休みなんか、シオサバを一〇本とか、キュウリやミガシキ（里芋の品種のひとつでずいきが食べられます）なんかの野菜を山に担いで上がるという仕事をして小遣いを稼いでいました。白谷雲水峽に登っていつかの帰り、山のなかで不思議な神々しい声を聞いたことがあります。一三歳の時、登山大会の時に、ちようちんをつけて石塚山の権現様まで登りました。昔は、梯子をかけて登ったその上に神様がおられます。絶壁のような岩が向かいあう中を神の参道が通り、はるかに種子島や口永良部島が見える様子は、まさにほんとうにりっぱなものです。五月に登ると川桜がいっぱい咲いています。一本一本の木々の異なる香りが僕に届いてくるような気がします。今、僕の庭の池の所に再現しようとしているのは、その時石塚山で見た神々しい光景なんです。

歴史ある生活の宝の民具を集めてあります

父が材木の商売をしていた時の記念の大きな鋸が　ここではワキノコとっていますが　残してあります。その他にも私が、歴史生活民具と呼んでいるいろんな民具を集めてありますから、ちょっとご覧になりますか。昭和四一年一月一日に高松の宮様が屋久島においてになって、何か島のものをお見せするように言われて、珍しい形の岩や山野草なんかを用意したんです。それが、歴史生活民具を集め始めるきっかけになったと思います。

この楠川には、五〇〇種類もの古文書が伝わっています。これは、昔の人が代々文化財を大切にしてきたからだと思えますね。

満州ではじめて都会の生活というものを知りました

僕が一七、八歳のころは、満州（中国東北地区）へ渡って一旗あげよう、という国の宣伝がさかんで、僕もそれに乗って、昭和一六年に満州へ行ってみることにしたんです。兄もその三年前から満鉄（南満州鉄道）に入社して奉天にいました。僕は、日満商事という軍用化学薬品の発送や通関の仕事をする会社に入りました。

就職したのは僕の方が三年も遅いのに、給料は月二〇〇円で兄の倍ありました。ボーナスは年に二回、六か月分ずつなんです。当時五円あれば、正月のいろんな準備がみんなできたころですよ。飛行機ひとつが一〇万円で買ったころの話です。

ここではじめて都会の生活というものを知りました。電話ひとつとっても、僕の事務机の上にはダイヤル式の電話機が二つ乗っていて、一つは市内用、もうひとつは市外用でした。当時の屋久島の電話は、役場、警察、郵便局ぐらいにしかなくて、電話の受話器なんかにぎったこともなかったので、

たいへん驚きましたね。

満州について一年目は、屋久島の方言しかしゃべれませんでした。でも、すぐに中国語もおぼえて、引き揚げてきて三年はなにかと中国語が出ましたね。

僕は満州で日本人のものすごい仕打ちを見てきたんですから

日本人と満州の人たちは兄弟のようなものだと思われて、満州に行きました。しかし実際に歩いてみると、自分と中国人や朝鮮人との間の差別はものすごいものでした。たとえば、中国人は鎖で両側をはさまれて、ふんどし一つで工場まで歩かされます。着替えるのも吹きっさらしの戸外です。そして言うことを聞かんとムチで叩くんです。

会社までいく途中に、そういうひどい目にあわされている人を毎日のように見るんです。老人から子供までも、木枯しでおちたアカシアの葉を集めて背負っていました。これが暖房につかう燃料だといふんです。一方、こちらはスチームでしょう。そのころ詠んだ歌です。まだ一七歳でしたから言葉が少し変なところもありますが……。

からころと 木枯し吹けば アカシアの 落葉背負いし 中国の人

りんごを大箱にひとつ丸ごと中国人の店先からとって、お金をぜんぜん払わない日本人もいました。

そういう人は、マーチューという馬車に乗っても、ただ乗りするんですね。

僕は、中国人とも満人とも人間として同じようにつきあうように努力していました。中国人や満人に食べさせていたものは、お米といったら一日一回だけ。それもチョコ(盃)一杯ぐらいのお米にゆがいた大豆と大根を入れて、どんぶり一杯にしたものしかあげないんです。僕らはお昼は、とうもろこしで作るトツピキというものや、マントウなんかをスチームの上で焼いて食べるんですが、ひどいめにあっている中国人に何度も食べさせてあげました。育ちざかりの太りざかりに屋久島では食べるものがなくて、僕もそういう苦しみはよくわかっていましたから。

当時僕が満州で見た日本人のうち、中国人や満人に対して正直にやさしくしていた人は、さあ、一〇人のうち四人いたかな……。僕は、ターシー(大石の中国読み)さんと呼ばれ、自分としては、一生懸命やさしく正直にしていたけれど、その仕方が足らんかったかな、と今になって反省しています。

ロシア兵が入ってきた時、日本人でもつねびごろ中国人にやさしくしていた人は中国人に隠してもらっています。その逆に、いつもひどい目にあわせてきた日本人の場合は、中国人たちがロシア兵に渡す前に自分たちで銃殺しましたね。

いくら日本人が頭を下げてても、僕なんかの時代を生きた中国の人たちは、日本人が中国でしたあの仕打ちを死ぬまで忘れんですよ。

人種差別をなくして、将来は世界をひとつの家庭のようにしないとけません。僕は、満州

で日本人のものすごい仕打ちを見てきたんですから。

「取り欲」が先に立てばだめですね

商売でも同じことだと思っんですが、「取り欲」が先に立てばだめですね。相手から信頼されるような品物を出していかと続きません。相手を支えてやって、お互いに進んでいくというふうでないといかんですよ。たとえ話でいえば、器に水を入れて自分の方に引けば水はあっちの方に行き、人に向けて押せば、結局自分の方に戻ってくるじゃないですか。

漂流したら女や子供たちはもう泣き出しているんです

「敗戦をのりこえて。国破れて涙のむ。

昭和二〇年八月は、日本人として悲しくも大東亜戦に破れた。私は世界人類の平和を願い、地球のあるかぎり人類は栄えてほしい、私たち日本人は世界の人類を背負い行かなければと思っ。

敗戦のきびしい火の手が日本中にあがる。全土に食べるものは底をついていた。村々には引揚者が満州・台湾から着のみのまま。目は馬の目のようにして、歩くのが精一杯である」(大石さんの手記から)

僕が満州から引き揚げてきた時、イモ一つが本当に輝く金のように見えたものですよ。さて、昭和二一年の五月のことです。引揚者も多く、食べるものにも事欠くようになったので、楠川地区の各戸からお金を集めて、地区を代表して種子島にさつま芋を買いにでかけました。

種子島へ行くために仕立てた船の船主は僕のおじで、三角吉助でした。おじの他に乗り組んでいた人としては、当時の区長の川崎作蔵さん、下野満雄さん、本田筆助さん、それと僕がいました。このほかに、六、七人の女や子供が屋久島から種子島へ帰ろうと便乗していました。

当時の船の機関ですが、炭を焼き玉エンジンの上に並べておいて、火吹き竹で吹いて始動していました。赤くなるまで三〇分から一時間もかかったものです。バーナーが使えれば五分もかからんですが。

ところがおじさんの船は焼き玉エンジンの調子が良くなかったんです。屋久島と種子島の中海で機関が故障してしまいました。機関士は本田筆助さんでしたが、修理しようとしてどうしてもなおせず、船はいよいよ漂流しました。

その時、僕は石やいかりをロープに結び付けてぶら下げました。これは、船が流れるのが遅くなるようにしたことでした。そうしたら、種子島へ向かう女や子供たちは、もう泣き出しているんですね。次にマネキを上げました。助けマネキというてな、赤い布切れや白い布切れを長い孟宗竹の上に高くあげて、その棒を揺さぶって遠くから見えるように振るんです。

安房の南へずつと流れて、半日ぐらい漂流しました。屋久島はとうに見えなくなっていました。やがて、遠い所に船が見えました。でも、船は私たちのマネキには気が付かなかった。そして、見えなくなっていくんです。でも、本当はマネキにも気付いておったんですよ。その時は、神の引

合せと思いましたが、消えかけていた船が急にもどってきて、迎えに来てくれました。これで私たちは助かったんです。船にロープを投げてくれて、種子島の浜津脇まで曳航してくれました。この時、助けてくれた船にはお礼に、燃料の重油とお金をあげました。

その晩は、種子島の港に船をつないで、四人で助かった祝いのノンカタ（酒もり）をしました。飲めや歌えで大声をだして踊っていたら、気のあらい漁師の青年たちが棒をもってやってきて、安眠妨害だから「打ち殺してくれる！」と言われました。せつかく命びろいのノンカタをしようたのに……。

種子島の港で機関を修理して、カライモの六〇キロ入りを五〇俵積み込んで、屋久島に帰りました。それも、畑に植え終わった苗床の芋まで掘り取ってきたものですから、養分があらかた抜けたようなものもあつたのです。島に着いたその日のうちに楠川地区のみんなにこのイモを配給しました。それからは、地区民が一致して五戸組合というのを作り、五戸の家につき、馬二頭ずつの配分をしました。稲の植え付けをして、水田稲作をすることになりました。楠川では馬二〇頭を飼っていました。おかげで、昭和二年には、二五町歩の水田が黄金色に輝きました。

こんなに郷土というのは美しかったんだなあ！

今でもはつきり思い出します。満州から引き揚げてきて、ようやく屋久島に帰るときのことです。当時、橋丸、八重岳丸とふたつの船がありましたが、橋丸に乗って鹿児島港を出て、宮之浦が見えてきた時、「こんなに郷土というのは美しかったんだなあ！」とつくづく考えました。

自分のいる里を大切にしなければいけません。そこに伝わっているものの見方を大事にしていかなければいけません。古いもの、埋もれているものを掘り起こして、そこに今の力をもっと注ぐべきです。

だから、この楠川の里の歴史と文化の掘り起こしをしたいんです。掘り起こしをしていくべきだなあ、というのは二〇年来の僕の考え。自分たちで、先生方の力も借りて綿密にやっていきたいと思っています。

屋久島は、北は北海道から南は台湾に匹敵する寒暖の差があります。万物の富が一望にして見える屋久島は、まさに生きた博物館なんです。

東京に住んでいる甥や姪や子ども達には、いつ屋久島に帰って生活することになるかもしれないのだから、その時のために今から心づもりをしながら生活しなさい、といつも言っています。

ともに歴史を掘り起こす喜びがこみあげてきます

この間も、私が集めた民具を調べに学生さんたちがいらっしやってきましたが、ああして学生たちが来られると、こつちの喜びになってくるんです。いっしょになって少しでも新しい発見をした喜びですね。うれしさがこみあげてきます。

僕はね、ある場所の歴史を知りたいと思ったたら、その場所に行つて、すわつて、目をつぶつて土に手をあててみる、そこに生えているコケに手をあててみるんです。一時間か二時間、ひよっとすると

半日ぐらい座っていることがあります。すると、だんだん祖先の人たちの気持ちになっってくるんです。そして、そこでどんな暮しかたがあったのかが、わかってきます。これは、実際の歴史とは別の僕の推測ですけど、実際とまったくかけはなれたものでもないと思います。

楠川城の跡へ通って、座っているうちに見えてきた世界を書いたのがこの絵です。焼畑農業をして生活しながら、城をつくっている場面です。

食べものはお金では買えない物でしょう

僕は、昭和三五年には農業表彰を受けていますが、昭和三九年の暮れに農業をやめました。それまでは、田が六反、畑が八反に、鶏八〇羽と豚八頭を飼い、精米所をやり、朝は豆腐までつくって宮之浦へ売りに行くという毎日だったんですが。

「昭和の夜明け」というものがあるとすれば、それは昭和三〇年ころにようやく始まったと思います。それまで送ってもらっていたスペイン米に頼らなくてもやっていけるようになったからです。そして、それは昭和三九年からかけり始めました。水田の減反奨励が始まったからです。減反していくと、やがてはきつと食糧戦争になります。

今の日本のように世界中から物が来ることを、いつまでもあてにしていけないと思います。

食べものは、いのちを支えるものでしょう。もとお金では買えないはずの物なんです。だから、すべての生物に感謝しなければいけないと思います。食べるものに手を合せます。これは、この方が私を支えてくれているんだなあという実感からきていると思います。

花を飾ることに努めてきたんですよ

生物とふれあうことには本当に大きな喜びがありますね。ともに生きたいなあ、といつも思っています。いつもそういう気持ちをもっているせいか、蜜蜂なんか、僕の体にとまっても刺しませんよ。

たとえば、犬と猫は仲が悪いといいますが、そうと決まったことではありません。うちにチビタという犬がいました。この名前は、東京薬大の学生三人が相談して付けてくれたんです。チビタは猫が育てた犬でした。親代わりの猫は蚤もとってやるし、飯も先に食べさせてかわいがっていました。チビタもよくなっていましたよ。

僕はね、お酒を飲むかわり、映画を見るかわりと思って、お金を貯めてね、そのお金で花を飾ることに努めてきたんですよ。昭和二八年から町の美化に努めています。稲を鉢に作って、学校の生徒たちが見られるように持っていたりね。

鯉の人工呼吸をします

僕は、メダカから飼いはじめて、やがて鯉を飼いました。鯉といっても賢いもので、こちらが餌をもっている時の足音と、持っていない時の足音をちゃんと聞き分けます。そして、猫のように、足もとにすりよってくるんです。このくらいになついたら鯉ですから、これを食べるなんてとんでもないこと

だと思っています。

ある日の夕方、集りから帰ってくると、僕の庭の池の金鯉が、陸に上がっています。虫を取ろうとして陸に上がってしまったのでしょうか。もつアリがたかり、上の方のウロコはパリンパリンに乾き始めていました。一メートルほど離れて、うちの猫が番をしていました。変なものが捕らないように鯉を守っていたようでした。

鯉の体を持ち上げてみたら、下の方はまだかすかに湿り気がのこっています。僕は、すぐに鯉といっしょに池の中に飛込んで、人工呼吸（と心臓マッサージ）をはじめました。両手のてのひらの間にはさんで押してやるんですよ。時々、ゴムホースを口の中に入れてやって、水を注ぎ込みながら、腮からの排出がちゃんといっているかどうか注意しながら、押すのを繰り返すんです。始めたのは夕方五時でしたが、やがて金鯉の片方のエラがピクンと動いたんです。時計を見たら夜中の二時でした。そして、夜が明けるまで池の中で人工呼吸をつづけたら、しだいに元気になって、少しずつ自力で動きはじめたんです。こんなことが二回ありました。

一九九〇年のことですが、青年たちが消毒といって薬剤散布をしました。それが池に入って、鯉があっけなく死んでしまいました。

自分たちも自然の人であり、生きものたちは大切な人たち

なぜ、自分というのが生まれたのか……。そして、自分はなぜ、いまここにいるのか？いまボカッと生まれたものじゃないですよね。

地球が生まれ、いろんな生命が生まれ、人類が生まれ、そして自分が生まれ、いまここに生きています。そこには血の流れというか、ひとつのつながりがあります。

この地球ができて四五億年になるといいますね。してみれば僕のいのちも四五億年のものだなあ、僕もそれだけ生きてきたんだなあ、と思います。肉体はわずか七〇年しか生きていないけれども、祖先のたましいが私に流れているのを実感するんです。

この地球の中に、いろいろな生物とともに助けあってきて、いま現在の自分があるんだということ。それが本当にわかったら、そこから「思いやり」ということが出てくるんです。

僕が「思いやり」というのは、「いのちを大事にしあって、すべての生物から喜ばれるように」ということです。これ以上壊してはいけません。これから、人間の生きかたを考えていかんといかなあ……。ということを考えています。

人間として生きていく以上は、虫もけだものも、いのちあるものだから、大事にせんといかなあ、と思います。植物も何も、すべての生き物は、お互いに人であると思っんです。そして、互いに愛しあっていかんといかん。自分たちも自然の人であり、生きものたちは、大切な人たちなんです。

そしてまた、この自分というものは二度とは出てこないんだということに気付くわけです。他人もそうでしょうけどね。だから、働くだけではものたりません。何かを残さないと……。自分らは四五億年生きているけれども、のちの人たちは生きて行けるか。そのことを自分で反省しながら進んでい

かにはいけんと思っています。これから生まれてくる人たちは本当に大変です。

あと何年生きるかわからないけれども、それへ向かって少しでも人の役に立ちたいと思っています。どこの人が来られてもそういう気持ちで接しています。

生まれ変わるなら人間に食べられるものになつたらいいなあ

そうですね、もしも僕が生まれ変わるなら、けだものとか、魚とか、人間に食べられるものになつたらいいなあと思います。

それはね、僕は、人間として食べる側の立場で生きてきたから、逆に食べられる、その苦しさを感じてみないと……と思うんですよ。

うーん。なるほど。(独り言。ああ、それはじつさい賢治の「よだかの星」とひとつの世界です。)大石さん、宮沢賢治という人の作品をご存知ですか、法華経に心酔してすばらしい童話や詩を書いた人ですが。

いいえ、知りません。僕は、人の書いたものを読んでいないんです。人からは受けません。自分で研究して、何もかも体当たりです。人のものを見てやるのはマネになるし、ウソになるでしょう。自分で体験して「すごいなあ」と感動するんです。そしてそこから推し進めていくんです。自分で造り上げていかにかいかん、と思っています。

それと、大石家は、二〇〇年ほど前の明和年間から日蓮宗に入っています。だけど、僕自身は特定の仏さまとかお経だけを大事にするという立場ではありません。

万物が神さまだと思っているんですよ、僕は。宗教はいろいろあるけれども、自分としては、仏さまも含めて、万物が神さまだと思っている。神さまがみんなを幸せにいらつしやると思っています。そして、そのことを基礎にして、どうしたら人を幸せにできるか、と曰ころ考えているんです。

人間が生活のために勧めたり、欲得で広めたりしている「宗教」がありますが、あれは職業ですから、僕の立場とは関係ありません。いろんな神さまを、時代に応じて人が作って、そして「これを信じなさい」といつて与えてきた。僕は、そんな神さまなら要らないと思っています。

毎朝、万物の神さまに祝詞をあげています

僕の庭は、入口に看板がかけてありますが、「精浩園(現在は精浩庭)」と名付けてあります。そこに、僕が手製でこしらえた神様がまつつてあるんです。「万物の神」とお呼びしていますけれど……。自分ひとりの神さまで、人が何といおうとも、他の神さまは僕にはいらん、と思っています。毎朝、この万物の神に祝詞をあげています。そのたびに、皆が万物から恩恵を受けていることをしみじみ感じます。僕には、人間だけでなく万物の神が必要なんです。

気持ちの花の世界にスーッと引き込まれていくんです

人間に食べられるようなものに生まれかわりたい、というような考えをお持ちになったきっかけといったものはあったのでしょうか。

はい、それは僕が二二、三歳のころ、満州に行く前の、まだ高等小学校の生徒だった時のことです。一人で深山に登って行ったんです。野菜と塩サバを二〇匹ほどかるうて、山で仕事をしている人たちに売るんです。

山道の途中で荷物を降ろして、汗を拭いていると、大木の苔むした肌に小さなくぼみがあって、そこに目にも止らんような小さい小さい花がりっぱに咲いています。それを見たとき、「ああ、すばらしいなあ！」と思ったんです。人が目にもかけないような、そんな小さい花だけれど、それを見ると、気持ちの花の世界にスーッと引き込まれていくんです。疲れもなにもふっとんでしまします。身も心も一新されるんです。なぜ自分がそうなるのか分らないんですけれど、あれを見た時スーッとなくなっていきました。

その時から、人知れず深山に咲く、目にも止らんような小さい花に生まれてみたいなあ、と思っています。

おわりに

屋久島の深山に咲く小さな花が大石さんの口を借りてしゃべっている そんな感じをもちながら、これらのお言葉をうかがいました。

こうしたお話は、屋久島でしか聞けず、また大石さんしか語れないものでしょう。それなのに、ああ、底に流れているものは何か似ているなあと感じる事が不思議に多くなりました。

大石さんにひき会わせて下さった屋久島のチョンボ（里芋）の神さまに感謝いたします。

「欲ではありませんが」 屋久島の祈りのことは

見えない世界へ

九〇年代は、私たちと屋久島の方々との縁がしだいに深まってくる年月でした。と同時に、私たちが小さな畑を耕すようになり、田植えをおぼえ、山口市の山の中の村に家を建てて、しだいに深く山口の地に根をおろしていく「自然に学ぶ」日々でもあったのでした。そして、屋久島で習ったことが、山口でもしだいに輝きを増してくるなあ実感することが多くなりました。それは普段は目に見えない世界へのごあいさつの仕方です。

何年も通っているいろいろなお話を聞かせていただくうちに、「これは他の衆には言わん話やが……」と声をひそめられることがあります。特に、若い世代が馬鹿にするからと心配されます。例えば、屋久島にすまわれる自然の神々への語りかけの言葉などがそうです。屋久島のあるおばあちゃんが、誰と名前を出さなければ活字にしてもいいのよ、といって教えて下さったお祈りの仕方を紹介しましょう。お母さんがしておられた通り、今日まで続けておられるそうですから、少なくとも一〇〇年以上続けられてきたものです。

天知る、地知る、人知る

山に入ったり、川を渡ったりする時は、そこに山の神様や水神様がおられるから「ごめんなさい、ごめんなさい」と言うた方がいいですよ。声をかければきつと良いことがあります。そして良いことがあつたら、こんどは、塩と酒をもって行って、それをまいてお礼をします。

反対に悪いことをすれば、いつかは 子や孫のころかも知らないけれど 償いは来る、といわれています。「天知る、地知る、人知る」という教えをいつも母から受けてきました。

「神も仏も訳さえ立てば坂に車を押しやせん」これは、母の言葉ですが、訳が通るように心をこめてお願いすれば、神仏は坂道に車を押し登らせるような無理なことをなさいません。これは、母の生きてきた姿です。私も本当に母の姿をそのままに習って生きてきました。

欲ではありませんが

畑に行ったら、いきなり仕事をしないのよ。今日は、草取りをするとうましようか。そうしたら、両手を合わせてごういいます。こうやって祈ってから仕事に入れば、草で手を切ることもなく、蜂に刺されることもなく無事終えられるのよ。

「三宝荒神様（さんぼうこうじんさま、畑の神様）、ご苦労様です。いつもありがとうございます。今日は、草取りをさせていただきます。煙を出したりしてお騒がせしますが、お許し下さい。無事に終わらせていただけるように、どうかお守りください。」

仕事が終わったら、ごういいます。

「畑の神様、今日はありがとうございます。お騒がせいたしました。おかげさまで無事草取りも

させていただきました。欲ではありませんが、作物が育つようにお守りください。」

翌日畑に行ったら、こついいいます。

「山の神様、畑の神様、昨日はご苦労さまでした。ありがとうございます。今日は大根を蒔かせて下さい。怪我のないようにお守り下さい。欲は言いません。人並みでけっこつです。どうか収穫までお守りください。ありがとうございます。」

外で用が足したくなったら、手を合わせて、どこからどこまでと手で指してからこついいいます。

「地神様、申しわけございません。ここからここまでの土地を貸して下さい。今から汚い物を流しますから。どうぞお許し下さい。」

夜の祈り

私は朝は忙しくてとてもお祈りはできませんから、いつも夜してきました。夕御飯を食べたら、布団に入る前に外に出て、こついいいます。

「天地の神様、お岳の権現様、今日の日を生き延びさせていただき、ありがとうございます。欲ではありませんが、明日も元気に迎えさせてください。」

それから、本家の方歩いて行って手を合わせ、お嫁さんと息子の名前を出してこついいいます。

「お嫁さんも息子も、二人とも今日一日ご苦労さまでした。ご先祖様、氏神様、ありがとうございます

ました。おかげで今日も無事すごさせていただきました。欲ではありませんが、明日もまたお世話をさせていただきます。」

仏壇の前では「いつまでもお供物を上げたり下げたりできるように元気でいさせて下さい」とお願いするのよ。

月と星への祈り

十五夜の月が出たら、両手を合わせてこついいいます。

「お月様、毎晩ご苦労様です。ありがとうございます。おかげ様で元気に暮らしております。欲ではありませんが、来年もまた元気で拝ませてください。」

お星様がきれいに出していたら、手のひらを合わせて高くあげて、こついいいます。

「お星様、ご苦労様です。ありがとうございます。……」

お日様でも拝む時は、「なむあみだぶつ」といいながら拝めば、まぶしいこともなくて拝まれるのよ。

診療所の祈り

診療所へ行くときも、「欲ではありませんが、けがないように、無事帰らせて下さい」とお願いをして、何事もなく帰れたらまた、お礼をいいます。

病氣した時でも、医者ばかりにかからずに、神仏と医者と両方から攻めなさいよ、と母に言われました。そうすれば治りも早いのに、今の若い衆は、笑いごとのようにしか聞きませんね。五〇、六〇歳くらいの人は、「迷信を言うな」というのよねえ。

いただきます

食事の時にはどう言いますか？

それはね、私はおじいちゃんと二人で食べているから、「おじいちゃん、ありがとうございます。ご苦労様です。いただきます」というと、おじいちゃんも同じように「おばあちゃん、畑仕事お疲れ様。ありがとう。いただきます」と言ってくれるから、二人でいただきます。うちのおじいちゃんは、これまで苦労をかけたのが今ごろわかったというて、このころは布団も引いてくれるし、扇風機が回っているのに私を団扇であおいでくれるのよ。

ぜいたく病

今の日本は、「ぜいたく病」という病気にかかっているのよ。ゴミの中を見れば発泡スチロールのトレイが多いでしょう。昔の豆腐かごもまだ元気で使えるのに。焼酎も瓶を持って行って計り売りで買うようにしむけたらどうでしょう。お墓には、自分で育てた作物や花を供えなさい。それが本当の信仰です。

ぜいたく病は自分でなおすしかないのよ。何ことも自分。楽をするのも、幸せになるのも、不幸になるのも自分よ。それと、人のいうのを耳に入れないから不幸になるのよ。人のいうことを聞けば、なるほどなあ、という感が湧いてくるのよ。人間は、人対人の仲をよくするのが一番幸せと思います。いつも感謝の気持ちがあれば……。お互いに感謝をしあうこと、祈る気持ちが大事です。

受け継ぐ若者たち

一九九九年の夏は屋久島に全国から一五人の大学生を迎え、八人の講師がボランティアとともに一週間合宿をして屋久島フィールドワーク講座を開催しました（安溪遊地、一九九九年）。私たちも講師として参加して、若者たちとともに高齢者のお話をうかがう、というこれまでにない経験ができました。受講生の最終日の感想から抜粋して、若者たちが、ふとこる深い屋久島の魅力に触れ、島の方々の世界を受け継いでいこうとしていることをお伝えしておきたいと思います。

「植物を見たり鳥を見たり、雨がやんだら海にきれいな虹がかかっていて、自然が大きなひとつの輪のような気がしました。」

「……映画とかでなく、直接人の話を聞いて感動したのは初めてでした。欲ではありますが、この屋久島にまたご縁がありますように。」

「これまで植物しか見ていなかったんですが、植物は植物だけで生きていけないし、動物も動物だけでは生きていけない、もちろん人も自然の中の一部なんだということを感じることができてよ

かったです。」

「後期は糞虫ばかりでしたが、しだいにその生物のいる大切さが感じられてきて、始めはピンセツトではさんでいた糞虫を、終わりごろには素手でつかむようになってきました。同じ目の高さでみるようになって、植物ともどんな生物とも同じ高さでいたいなあ、と思う一方、いろんなことに興味をもてる自分、それが拡がってきたことをうれしく思います。」

「島の人々の自然への接し方を知って人と自然とのかわりの大切さを学びました。実は、私は初日、川で用をたしてしまっただけです。いろいろお話をうかがっているうちにとっても悪いことをしな、どうすればいいの？と思うんですが、かしわ手を打ってお詫びをして、川に焼酎を流して、塩をまいてくるといいんだよと言われて翌日さっそくやってみました。そうしたら、木を踏んだら木が痛いんじゃないかなと思えてきて、踏まないように歩こうとしました。そして、今まで見えていなかった自然の姿が見えてきて、森が私を受け入れてくれたような気がしました。」

「屋久島には神秘的な感じがあって、宇宙がずっつと拡がっているような感じがしました。この講座で何とは言いませんが、自分が生まれ変わったような気がします。」

「何千年もの命の流れが続いているのが、欲望のためにこの何十年かでなくされてしまっているということを実感できたのが印象的でした。過去に培ってきたものを大事に守って、それを未来にどう生かすかを考えておられる方々がいらっしやることに感銘をうけました。生命の連なりを生かすために、自分がどんな役割を見つけて果たしていくのかを考えるようになりました。」

貴子 伊谷純一郎先生は、アフリカ調査隊を率いて、いつも肩で風を切って先頭を歩きながら、サファリ(旅)にサファリをつづけ、研究拠点の建設に建設を続けてこられた。

遊地 彼は、サファリの途中で坂道を上がる時に煙草をどんどんふかすので、アフリカの人たちがガリラモシ(蒸気機関車)とあだ名したというけれど、その馬力はたいしたものだった。

貴子 伊谷先生のアフリカの旅の記録としては最初期の本『ユリラとピグミーの森』(伊谷、一九六一)は、ずいぶん長く読み継がれてきた。

遊地 あれは僕の母の愛読書で、我が家では僕が小学生のころから、ドウトウオビヨオビヨ(害虫スワヒリ語)なんて言葉が飛び交っていた。生活は貧しくても、夢がいっぱいあった時代。将来、僕がその言葉話をしたり、教えたりするようになるのは母も思ってもみなかったらしいけれど。

貴子 その後に続く私たちの時代になると、現代科学文明の後始末を雑巾(！)をもって走り回らなくちゃいけないというめぐりあわせ。それでも、あきらめずに研究を続けてきたことによって、例えば環境アセスメント委員として社会に向かって働きかけ、耳を傾けてもらえる声を発信できるというのは、これはひとつの幸せだと強く思う。ことに、地道に研究を続けてきた友たちの、それぞれの地からのそれぞれの分野からの発信と交流に支えられていると感じている今。

遊地 研究やフィールドワークという営みも、社会の動きと無関係ではありえないし、たとえ無関係なふりをしようとしても、それは通らないんだ、ということには誰しも感じているはずだ。そして、それを実際の論文や研究発表に結び付けていく勇氣のある学者があちこちに生まれてきていることはうれしいことだ。なかなか道は遠いと感じることも多いけれど。

越境する

貴子 今、アフリカ研究でも熱帯研究でも、実際に現地で直面している大きな問題にどんどん挑戦して、その成果を発信することによって、あらたな学問の地平を拓こうとする研究者が出てきている。

遊地 この本に紹介しているような僕らの聞き書きの試みに対して「あれで学問なのか」という声も聞いたことがある。しかし、僕は、フィールドワークに行つて、人の話を聞いてそれを題材に論文を書くというこれまでの自分たちの学問の営みの根本を反省してみよう、という意図で始めた。

貴子 人に話を聞いて作ってきたこれまでの野外科学が、本当に再現性があるものなのだろうか、という問いに対して、私たちは二通りのとりくみをしてきた。ひとつは人の話に対応する自然科学的な世界をきちんとつかみたいという志向。もうひとつは、しばらくして気づいたことだけでも、一人の人の中にぎっしりつまっている人生の中のほんの一部を、私たちは自分の研究の都合で適当にちよんぎつて、つまみ食いしているだけではないのか、という自省にたつ研究。

遊地 一番目について補足しておく、例えば植物の名前を方言で聞いたら、なるべく実物を探し

て、それを前にしてつかがい、さらに標本を作って学名を調べ、いつでも科学的な位置付けや分析ができる所に自分を置いておく、という文化系と理科系の両方のアプローチをきちんとかまえた研究。

貴子 伊谷先生は、僕は理学部だけれど、研究の必要にせまられて教えを乞いに行くのは、農学部だったり、薬学部だったり、医学部や文学部だったり、理学部以外の研究者に習うことがきわめて多い、といつもおっしゃっていたし、私たちをそういう研究者に結びつけて下さった。

遊地 僕も、動物学教室に所属しながら、西表島の廃村研究の時には、文学部の考古学教室で実測の方法を習ったし、稲作の研究の時には、農学部について渡部忠世先生にあれこれ教わったもの。学部間の敷居が低くて、どこに越境していても一応ウエルカム、というあの雰囲気こそが、京都大学が伝えてきた力の根源だった。

貴子 だから、今でも「御専門はなんですか？」と聞かれると、ひとことでは答えにくくて困ることが多い。

遊地 あなたも、微生物学、植物生態学、人間の暮らしと自然という三足のわらじを中心に、里芋の来た道だの、それまでの専門のすべてを総合して、アフリカでカビでつくる酒を見つけたりと雑学専門なもの。

貴子 それもいふなら、境界領域とか、越境学とか。

遊地 僕は、雑学という方がワイルドな感じがあって好き。伊谷先生は、それまでの研究者が気づいていなかった大きな隙間に気づいて、そこに橋をかけるのにたけておられる。例えば、僕が西表島

の文献目録を作った時、千を越える文献があることがわかった(安溪遊地、一九八六c、一九八七b)。そして、みんながオリソピックみたいな競争で研究しようとしている課題もあるけれど、行間を読めば、あんなこともされていない、こんなことも手着かずだ、という捉え方も可能だと気づいた。それは、伊谷先生に教えられたものの見方そのものではなかったかと思う。

貴子 こんなものが研究の題材になるのか、というものをちゃんとした研究に仕上げていくためには、一見素朴な最初の発想が大事ということを教わった。

遊地 自然人類学研究室のゼミでは、伊谷先生がときおり実に素人っぽい質問をされて、僕等もそれが恥ずかしいことでなく、大事なことなんだということをも身につけた。

貴子 ほんとうに素朴な質問を天真爛漫に出せるような雰囲気をつくるかというのは、どんな集まりをもっても、それが創造的なものになるために大切なことだと思つ。

遊地 そういう雰囲気からこそ、肩に力が入りすぎて忘れていたようなものの見方、考え方が生まれてくる。

私たちの忘れ物

貴子 研究の話は少し離れるけれど、私たちは、戦後に生まれて高度経済成長を経て、バブル経済が崩壊した今、何かとつても大事なことを忘れていたんじゃないかな、という反省がある(例えば、宇根、一九九六)。

遊地 忘れていたこと。例えば質の問題。質が違つと置き換えや交換は本来できない。それを交換可能であるという幻想を共有することでわれわれの貨幣経済は成り立っている。アフリカの村で、何かを欲しくても、お金ではほとんど何も手に入らなかったという体験は、頭をなぐられたような衝撃だった。

貴子 みかんとりんごは違うものなのに、みかん三つとりんご二つが足せて、答えが五つになるって、考えてみたら不思議。

遊地 小学校で習った鶴亀算なんかその典型だ。頭を数えた時に、もうそれぞれ鶴が何羽と亀が何匹かわかるに決っているのに……。

貴子 もうひとつは、時間の問題。ミヒヤエル・エンデさんが『モモ』（エンデ、一九七六）の中で明らかにしたように、時の流れは一人一人違う。例えば、アフリカではいついつ会おうと約束しても、めつたに会えなかった。

遊地 カレンダーなんでもつている人がいない村で一月後の約束をして、迎えに来ないのは約束違反だと怒つたりしていた（笑い）。

貴子 昼の星や冬のたんぼのように「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものであるんだよ」というのは、金子みすゞさん（一九八四）の詩の一節だけれど、学校では「目に見えないものは、存在していません」といわんばかりの教育をずっと受けてきたような気がする。

遊地 あさはかな科学技術真理教というべきか。

貴子 子どもの頃は、木も花も虫も鳥も人間と同じように生きていくという感覚があつたけれど、大人になるにつれて、それらにも生命はあるにしても人間とは別のもの、という世界に入ってしまった。

遊地 思えば上がりそのもの人間中心思想がはびこってしまった。

貴子 私たちの親たちの世代でも、もうそれは色濃いものになってしまっていて、木や花とお話ができる大人というのは、もはや例外。

遊地 というか変人。子どもだってそういうことを言うと馬鹿にした態度をとる子がいる。でも、本当は忘れてはいけない世界だということを、南の島々を歩いてゆっくりお話を聞いているうちに気づかされてきた。

貴子 私は、屋久島の森の中を歩いていて、直かに木の声を聞いた気がした時、初めて気づいて、それからどんどんそんな世界に入ってしまったという方が実感に近い。

遊地 あなたのような人は特別かと思っていたら、けっこう今の若者たちにもそういう感性をもっている人がいる。

貴子 屋久島でのフィールドワーク講座がそのことを知る良い機会になった。

遊地 高齢者のお話を感動の涙を流して聞いたり、その教えに沿って森や川に挨拶を送る若者たち。出合いの場をセツトした僕らとしても、島からのことづてが僕らで止まるのでなく、生きたものとして伝えられていく現場に立ち合えてとてもうれしかった（安溪遊地、一九九九a）。

小さい花に生まれたい

遊地 里芋の研究（安溪貴子、一九九六）がきっかけで大石さんに出合って、ずいぶん長い時間お話をうかがったうちのほんの一部をここにまとめてみた。それでもここには、自分たちが一番だと思いが上がった日本人の姿と、すべての生物を滅ぼしかねない人間のありかたへの自覚がわかりやすい言葉で述べられている。

貴子 日本人は、自分たちがしてきたことを本当に知ろうとしていないことは常に感じる。戦争の責任を本当にはとらないで来た国の国民であることもそのひとつ。去年は四か月ケニアで暮らしたのだけれど、アフリカに行くとき毎日の食べ物にも事欠く大変な暮らしをしている人たちがいる。それが日本を始めとする北の国に住む者たちの贅沢な暮らしと裏腹なんだ、という事実には思いが及びにくい（安溪貴子、一九九九）。このままでは、私たちも再びアジアの隣人たちを踏みつけにすることになるのではないかと恐怖を感じることもある。

遊地 「過去に目を閉ざす者は未来にも盲目となる」とドイツの大統領のヴァイツェッカーさん（一九八六）は言ったけれど、若い人たちの中には、そういう点についてもよく考え、悩み、そして行動している人たちがいるのに出会う。こんな今だからこそ、教育のもつ意味が大きいと思う。僕は、大学の授業では、環境問題と文化人類学を主に担当しているけれど、大石さんと出合ってから、それぞれ「イバルナ人間」、「イバルナ日本人」という反省を中心に据えて講義を展開している。

貴子 どちらも、直接的には大石さんとの出会いからの贈り物ね。その他に、両方に関連して「イバルナ学者」という自省もある。

遊地 それは、西表島の人々や冒頭に載せた「される側の声」のP子さんに叱られたことが大きい。ここでは詳しくは触れられなかったけれど、アフリカでの経験の影響もずいぶんある（安溪遊地、一九九八b、一九九九b、安溪遊地・貴子、一九九八c）。

貴子 さまざまな経験を豊かに語ってくださる宝物のようなお年寄りが、どんどん年をとっていかれたり、亡くなってしまわれたりする。聞く私たちの方も年をとっていく。一〇年ほど前までは、教えていただくことが間に合わないのではないかと焦りを感じることがあった。でもね、このころでは私たちと同じ世代の人たちからも話を聞くことができるようになってきた。そして、おお、すばらしい生き方をしている仲間たちが、次々にきちんと生まれているという感動。そういう機会がだいに増えてきた。これは限りなく嬉しいこと。ともに聞き手にまわった若者たちのなかにも、素晴らしい感性をもっている人たちがいる。これはこんな危うい時代の中での大きな希望だと思って、私はいまを生きている。

おはなしがごちそう

遊地 幸田文さん（一九九五）はこう言っておられる。「いい話をきかせてもらうことは、いつ迄も減らない福を贈られたと同じである」と。この本は、私たちが島めぐりの旅の中で贈られた、いつまでも減らない福をおすそわけしたい、という気持ちでまとめた。

貴子 屋久島のおばあちゃんたちにかかると、これが「おはなしがごちそう」になる。こっちは食べさせてもらって満腹してもしばらくするとお腹がすいてきて、また聞きたいという世界（笑い）。

遊地 「いつ迄も減らない福」じゃなくて、「すぐに減る腹（ふく）」か。こっちの方が人間くさい感じがする。

貴子 その中でも、おばあちゃんたちが「とっておきの御馳走」として若い人たちに、そして世の中の人たちに伝えたいと願っておられるのは、目には見えない世界の広さと深さ、その恐ろしさとすばらしさ。

遊地 遠い八重山に伝わる自然や超自然世界とのつきあいの仕方をこちらが紹介すると、おばあちゃんたちには、その意味がすぐに理解できる。そして、屋久島独自の表現で、その同じ世界を語ってください。また、最後に載せた屋久島のおばあちゃんの日々の祈りは、僕らにも共感できるものだった。これをどう受け止めたらいいたろう。

貴子 ああ、八重山と屋久島は地理的には遠くても、実はとっても近い世界なんだ、という印象。ということは、私たちが住んでいる西日本の人々の生活世界も案外、南の島々とそう遠くないんじゃないかな、と思えてきた。私たちが気づかなかっただけで、こうした生き方をしてきた人たちは、日本のあちこちにいらっしやるのではないかな……ということ。

遊地 そういう意味で、欲ではありませんが、この「島からのことづて」が、南の島々からの贈り物として、北に住む人々に伝えられていくなら、こんなにつれしいことはないね。

あとがき

私たちの、島めぐりの旅とそこで出会った人たちの語りの世界の一端を紹介してきました。御本人あるいは御遺族の了解のもとで、ここに発表させていただいていますが、ごく一部、匿名にさせていただきます部分もあります。

こういう形でこれまでの聞き書きをまとめてみて、家族で旅をし、行く先々で暮らしてしまうという、私たちの生き方のもつ意味を再確認したような気がします。また、聞き書きに触発されてあらたに二人で語り合ってみて、いろんな人たちが惜しげなく与えてくださった宝物を、未来につなぐものとして生かしていけるという確信のようなものをもつことができました。とてもありがたいことだと思っています。

ここまでには、数え切れないほど多くの方々のお世話になっています。私たちをフィールドワーカーとして鍛えてくださった伊谷純一郎先生。琉球弧の島々で、暖かく、あるいは厳しく私たちを受入れてくださった方々。屋久島のころを探求し続けている『季刊生命の島』のみなさん。とくに連載を始めることを勧めてくださった長井三郎・前編集長と日吉眞夫・現編集長。島に暮らしてきた人たちの生の声を伝えることの大切さを深く理解して単行本にすることに同意して下さった葦書房の三原浩良さん。これらすべての方々にからのお礼を申し上げたいと思います。

山口の山村において自給的な農林業の世界を模索しつつ、これからも聞き書きの旅を続けたいと願っています。

一九九九年の稲を刈り終えた日に

安溪 遊地

安溪 貴子

初出一覧

- ・される側の声 聞き書き・調査地被害 『民族学研究』五六巻三号、一九九一年
- ・カシの木に救われる 西表島の洪水 『季刊シルバン』七号、一九九六年秋
- ・木にもいのちがある 西表島祖納 『季刊生命の島』三三号、一九九五年初春
- ・南のはて波照間島から 西表島崎山 『季刊生命の島』三五号、一九九五年夏
- ・お金がいらなかったあの頃 宮古郡多良間島と水納島 『季刊生命の島』三六号、一九九五年秋・冬
- ・木のない島の家づくり 与論島麦屋 『季刊生命の島』三八号、一九九六年夏
- ・屋久島へ魚を捕りに 南種子町下立石 『季刊生命の島』三〇号、一九九四年春
- ・種子島への魚の行商 上屋久町一湊 『季刊生命の島』二二号、一九九一年秋
- ・小さい時から牛や馬が好き 上屋久町楠川 『季刊生命の島』二七号、一九九三年夏
- ・屋久島の白川山に住まないか トカラ列島中之島 『季刊生命の島』四九号、一九九九年夏
- ・島々を結ぶオヤコ トカラ列島中之島 『季刊生命の島』三二号、一九九四年秋
- ・嫁にいくなら島間の町に 南種子町島間 『季刊生命の島』二六号、一九九二年冬
- ・おじいちゃんの民宿 南種子町平野 『季刊生命の島』二四号、一九九二年春・夏

- ・探しあてた縄文杉 上屋久町宮之浦 『季刊生命の島』二三号、一九九一年冬
- ・心の深いところをたずねれば 屋久町原 『季刊生命の島』四二号、一九九七年夏
- ・屋久島の地名に思う 屋久町原 『季刊生命の島』四三号、一九九七年秋
- ・屋久島最後の鍛冶屋として 上屋久町宮之浦 『季刊生命の島』四〇号、一九九六年冬
- ・今日の仕事に満足するな 上屋久町宮之浦 『季刊生命の島』四一号、一九九七年春
- ・屋久島の木で種子島の舟をつくる 上屋久町楠川 『季刊生命の島』三九号、一九九六年秋
- ・食べ物は何でも自分でつくっていた 上屋久町永田 『季刊生命の島』四六号、一九九八年夏
- ・おはなしがごちそう 上屋久町宮之浦 『季刊生命の島』二八号、一九九三年秋
- ・野も山も海も川も神々の住い 上屋久町宮之浦 『季刊生命の島』二九号、一九九三年冬
- ・小さい花に生まれない 上屋久町楠川 『季刊生命の島』二五号、一九九二年秋
- ・「欲ではありませんが」 屋久島の祈りのことば 『季刊生命の島』五〇号、一九九九年秋
- 『季刊生命の島』へのお問い合せは、有限会社・生命の島（せいめいのしま）まで。住所、〒89
1・4207 上屋久町小瀬田八二六番地三一、電話09974(3)5533、ファックス099
74(3)5534

引用文献

- 安溪貴子、一九八七、「中央アフリカ・ソンゴラ族の酒づくり」その技術誌と生活誌」和田正平
編著『アフリカ 民族学的研究』同朋社出版
- 安溪貴子、一九九六、「サトイモの来た道」劉茂源編『ヒト・モノ・コトバの人類学 國分直一博
士米寿記念論文集』慶友社
- 安溪貴子、一九九九、「子どもと出かける『自分探し』の旅」『笑つ不登校 ことごと楽しむそれ
ぞれの日々』教育史料出版会
- 安溪遊地、一九七七、「八重山群島西表島鹿村鹿川の生活復元」『人類の自然誌』雄山閣
- 安溪遊地、一九七九、「西表島の稲作 自然・ヒト・イネ 伝統的生業とその変容をめぐって」『季
刊人類学』九巻三号、講談社
- 安溪遊地、一九八四、「原始貨幣」としての魚 中央アフリカ・ソンゴラ族の物々交換市」『ア
フリカ文化の研究』アカデミア出版会
- 安溪遊地、一九八六 a、「西表島の農耕文化と海上の道」『稲のアジア史 3』小学館
- 安溪遊地、一九八六 b、「西表島で農薬散布が始まった 人にもヤマメコにも体内蓄積のおそれ」
『エコノミスト』九月一六日号、毎日新聞社

安溪遊地、一九八六 c、「西表島関係文献目録（前編）」『南島文化』八号、沖縄国際大学南島文化研
究所

安溪遊地、一九八七 a、「ものものの交換市 バーター経済」米山俊直編『アフリカ人間読本』
河出書房新社

安溪遊地、一九八七 b、「西表島関係文献目録（後編）」『南島文化』九号、沖縄国際大学南島文化研
究所

安溪遊地、一九八八 a、「高い島と低い島の交流 大正期八重山の稲束と灰の物々交換」『民族学
研究』五三巻一号、日本民族学会

安溪遊地、一九八八 b、「自然利用の歴史 西表をみなおすために」『地域と文化』五三・五四合
併号、ひるぎ社

安溪遊地、一九八九 a、「西表島の農耕文化 在来作物はどこからきたか」『季刊民族学』四九号、
千里文化財団

安溪遊地、一九八九 b、「西表島における生活と自然に関する総合的研究」『季刊環境研究』七五号、
環境調査センター

安溪遊地、一九八九 c、「西表の地域づくりと沖縄の課題」『沖縄問題研究シリーズ第一〇四号、沖縄
協会

安溪遊地、一九九一、「自然への畏怖と信頼 西表島生活誌」『FRONT』七月号

安溪遊地、一九九二a、「バカセなら毎年何十人もくるぞ」、『新沖縄文学』九四号、沖縄タイムス社
安溪遊地、一九九二b、『研究成果の還元』はどこまで可能か、『民族学研究』五七巻一号
安溪遊地、一九九二c、「西表島の稲作と畑作 南島農耕文化の源流を求めて」、『海と列島文化
第六巻 琉球弧の世界』小学館

安溪遊地、一九九二d、「無農薬米の産直が始った 島を出た若者への手紙」、『エコノミスト』七
月二一日号、毎日新聞社

安溪遊地、一九九二e、「橋をかける・番外編」、『季刊生命の島』二五号

安溪遊地、一九九三a、「取材される側の人権は？ 立松和平氏に問う」、『八重山日報』十一月十
六日号

安溪遊地、一九九三b、「立松和平氏、沖縄で筆の暴力」、『週刊金曜日』第六号

安溪遊地、一九九四a、「立松和平氏の『まれびとの立場』の盲点」、『週刊金曜日』第九号

安溪遊地、一九九四b、「橋をかける・番外編 大山のふもとで屋久島を想う」、『季刊生命の島』三
一号

安溪遊地、一九九四c、「野外調査(フィールドワーク)から野良仕事(アウトワーク)へ」、『地平線』一七号、
広島KJ法研究会

安溪遊地、一九九五、「島は誰のもの ヤマネコの島からの問いかけ」、『月刊地理』九月号、古今
書院

安溪遊地、一九九六、『くだ』の力と『つつ』の力 西表島のふたつの稲作具をめぐって「劉茂
源編『ヒト・モノ・コトバの人類学 國分直一博士米寿記念論文集』慶友社

安溪遊地、一九九八a、「西表島の焼畑 島びとの語りによる復元研究をめざして」、『沖縄文化』
三三巻二号

安溪遊地、一九九八b、「あなたがたは差別しようとするのです あるコンゴ女性の声」、『ふくた
いな(日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター通信)』四号

安溪遊地、一九九九a、「生命の森に遊ぶ 屋久島オープンフィールド博物館の夢」、『エコソフィ
ア』四号、昭和堂

安溪遊地、一九九九b、「市場が畑だ コンゴ漁民の生活」川田順造編『アフリカ入門』新書館

安溪遊地・安溪貴子、一九九六、「島からのごとつて番外編 百三十年もつ住まいを わが家づくり
奮戦記」、『季刊生命の島』二五号

安溪遊地・安溪貴子、一九九七、『日曜百姓のまねごと』から 第二種兼業の可能性をめぐって「
『農耕の技術と文化』二〇号

安溪遊地・貴子、一九九八a、「島からのごとつて番外編 棟梁は宮大工 わが家づくり奮戦記」
『季刊生命の島』四四号

安溪遊地・貴子、一九九八b、「島からのごとつて番外編 古い智慧を今に生かす わが家づくり奮
戦記」、『季刊生命の島』四五号

安溪遊地・安溪貴子、一九九八c「島からのごとつて番外編 木にもいのちがある 西ケニア・カカメガの森の守り手・オケカさん聞き書き」、『季刊生命の島』四八号
石川英輔、一九九七（一九九三初版）『大江戸生活事情』講談社文庫
石川英輔、一九九八（一九九四初版）『2050年は江戸時代 衝撃のシミュレーション』講談社文庫

石原昌家編、一九八三『もうひとつの沖縄戦 マラリア地獄の波照間島』ひるぎ社
石牟礼道子、一九八二『神は秋を装う』常世の樹』葦書房
泉靖一、一九六九『フィールドワークの記録 文化人類学の実態』講談社現代新書
伊谷純一郎、一九六一『ゴリラとピグミーの森』岩波新書
伊谷純一郎、一九九一『サル・ヒト・アフリカ 私の履歴書』日本経済新聞社
ヴァイツェッカー、リヒャルト・フォン、一九八六『荒れ野の40年 ヴァイツェッカー大統領演説全文』岩波ブックレット

上勢頭亨、一九七六『竹富島誌 民話・民俗篇』法政大学出版会
宇根豊、一九九六『田んぼの忘れ物』葦書房
エンデ、ミヒヤエル、一九七六『モモ 時間どろぼうとぬすまれた時間を人間にかえしてくれた女の子のふしぎな物語』岩波書店
金子みすゞ、一九八四『星とたんばば』わたしと小鳥とすずと』山口県教育会

鹿野政直、一九八八『鳥島は入っているか』岩波書店

川平永美述、安溪遊地・安溪貴子編、一九九〇『崎山節のふるさと』ひるぎ社

川平永美述、安溪遊地編、一九九六a「西表島にワニの足跡を追う（下）話者が筆をとる時」、『沖縄タイムス（夕刊）』一〇月四日号、沖縄タイムス社

川平永美、一九九六b「崎山村での戦争中の暮らし」、『竹富町史』第二二巻、竹富町

幸田文、一九九五（一九九二初版）『木』新潮文庫

島尾敏雄、一九九二『新編・琉球弧の視点から』朝日文庫

津野幸人、一九九一『小農本論 誰が地球を守ったか』農文協

長井三郎、一九九四『最後の鍛冶屋・永野憲一さん』伝馬船 宮之浦区広報』上屋久町

野口武徳、一九七二『沖縄池間島民俗誌』未来社

宮本常一、一九七二『調査地被書 される側のさまざまな迷惑』朝日講座・探検と冒険』七、

朝日新聞社（一九七五）『現代日本民俗学』三一書房に再録（

山田武男著、安溪遊地・安溪貴子編、一九八六『わが故郷（シマ）アントウリ 西表・網取村の民俗と古謡』ひるぎ社

山田雪子述、安溪貴子・安溪遊地編、一九九二『西表島に生きる おばあちゃんの自然生活誌』ひるぎ社

ANKEI Takako, 1990 "Cookbook of the Songola: an anthropological study on the cooking technology

among a Bantu-speaking people of the Zaire forest." African Study Monographs, Supplementary Issue 13, Kyoto University, Kyoto

BUTTON, John, 1988, A Dictionary of Green Ideas: Vocabulary for a sane and sustainable future, Routledge, London

索引

著者略歴